

## SK04177(遺構:図1156、遺物:図1157)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB265完掘後に検出し、SK4178に切られる。

**形状** 長軸長約1.1m、深さ約0.2mであり、不整円形を呈する。断面形は皿状である。

**埋土** 4層に分層した。ブロック土が混入し、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器354点、石器類1点が出土した。遺物は埋土中から散在して出土し、底面のやや上位でまとめて出土した。底面付近の土器は比較的残りが良く、横位のものが多いものの、縦位の破片もある。

**出土遺物** 3146はVII期斐C1類。口縁部がわずかに内湾し、内外面にハケが認められる。3147、3148はVI期斐D1類。口縁部が短く直立し、端部は外上方へ引き出され凹面を形成する。3149はVII期鉢D類脚部。3150はVII期高环G3c類。3帯の多条沈線間に山形文を施文する。3151はVII期土製品。羽状文が認められる。壺A類の口縁端部が剥離した破片の可能性があるが、壺口縁部より小型で上下端が弧状となることから、土製品の可能性が高いと考えられる。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

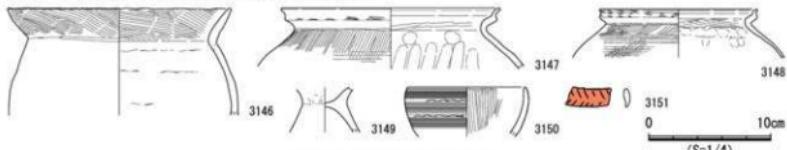


図1157 SK04177 遺物実測図

## SK04178(遺構:図1158、遺物:図1159)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB264を完掘後に検出した。本遺構付近は遺構の重複が著しく、その関係はSB264>SK4178>SB265>SK4177である。

**形状** 長軸長約1.4m、深さ約0.4mであり、不整円形を呈する。断面形は三角形状で、底面は丸みを帯び、壁面は直線的に開く。

**埋土** 5層に分層した。ブロック土の混入や層界の凹凸が顕著であることなどから、人為堆積と考えられる。なお、1・2層は再掘削後の堆積の可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土器334点が出土し、特に2層下からの出土が目立った。

**出土遺物** 3152、3153はVI期鉢A1類。口縁部が短く直立し、端部は内傾面を形成する。頸部直下に直線文を施文す

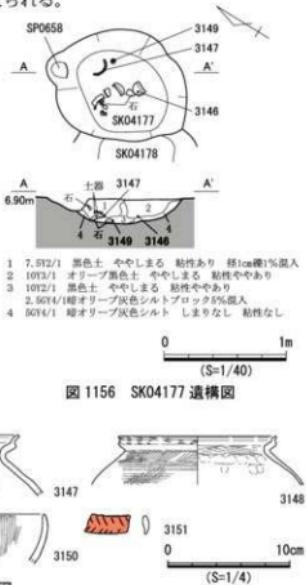


図1156 SK04177 遺構図

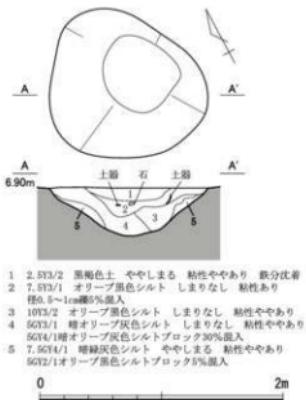


図1158 SK04178 遺構図

る。3152は胸部が強く膨らみ、偏平である。

**時期** 出土遺物の時期はVI期であるが、VII期のSB265とSK4177を切り、VIII期のSB264に切られることから、VII期と考えられる。

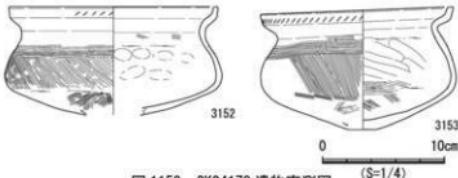


図 1159 SK04178 遺物実測図

#### SK04185（遺構：図 1160、遺物：図 1161）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB269を完掘後に検出した。

**形状** 長軸長約1.9m、深さ約0.6mであり、東側が調査区域外のため平面形は不明である。底面は平坦で、壁面の傾斜はほぼ垂直であり、上方に平坦面を有する。

**埋土** 9層に分層した。7・8層は再掘削後の堆積である。埋土下層にはブロック土が混入し、再掘削後の堆積土には土器がまとまって出土している。そのため、埋土はいずれも人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器124点、石器類13点が出土した。遺物は埋土中から散在して出土しているが、特に7・8層で大きな破片が出土した。

**出土遺物** 3154はV期壺A類。直線文と波状文が交互に施文される。3155はV期甕B2類。口縁部が短くくの字形に屈折する。端部は平坦である。3156、3157はV期甕A類底部。底部から胴部が直線的に立ち上がる。3158はV期高环I類脚部。裾部が強く外反し、端部に強い平坦面を形成する。3159はV期器台A類脚部。3160は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁部がやや外反する。3161は砥石。長楕円礫を素材とし、その平坦面を砥面として使用している。砥面から欠損面にかけて煤が付着している。

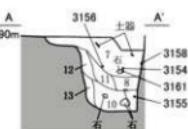
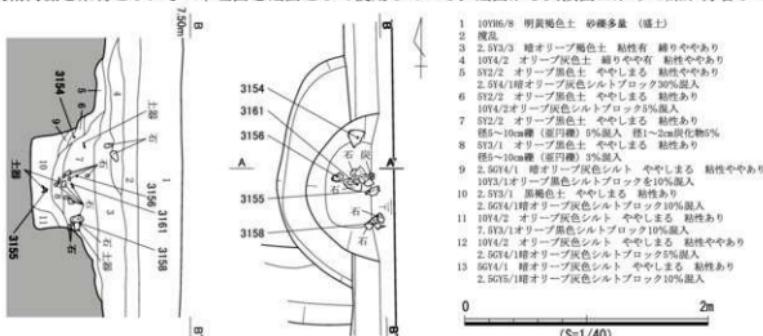


図 1160 SK04185 遺構図

- 1 10Y6/8 明眞褐色土 砂質多量 (3段)
- 2 黏性あり
- 3 2. SY3/3 線オリーブ褐色土 黏性有 繊りややあり
- 4 2. 10Y4/2 オリーブ褐色土 繊りやや有 黏性ややあり
- 5 SY2/2 オリーブ褐色土 ややしまる 黏性あり
- 6 2. 10Y4/1暗オリーブ灰色シルトブロック10%混入
- 7 SY2/2 オリーブ褐色土 ややしまる 黏性あり
- 8 10Y4/1 暗オリーブ褐色土 ややしまる 黏性あり
- 9 10Y4/1 暗オリーブ灰色シルト ややしまる 黏性ややあり
- 10 3/1オリーブ黒色シルトブロックを10%混入
- 11 2. SY3/1 黒褐色土 ややしまる 黏性あり
- 12 2. 10Y4/2 暗オリーブ灰色シルトブロック10%混入
- 13 10Y4/1 暗オリーブ灰色シルト ややしまる 黏性ややあり
- 14 2. 10Y4/1 暗オリーブ灰色シルトブロック5%混入
- 15 10Y4/1 暗オリーブ灰色シルトブロック10%混入

0  
(S=1/40)  
2m

おり、欠損面は底面に対してほぼ垂直である。

**時期** 出土遺物の時期から、V期と考えられる。

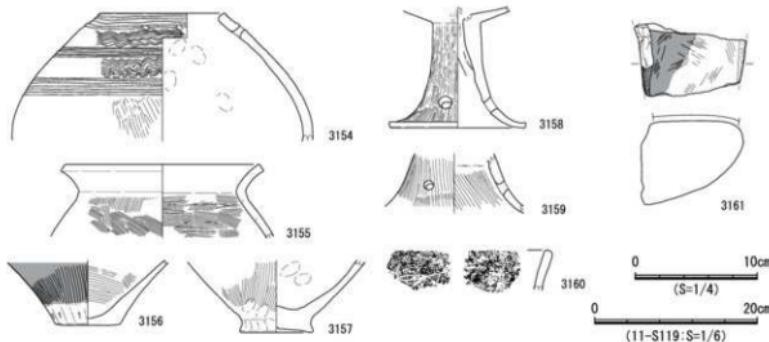


図 1161 SK04185 遺物実測図

SK04197 (遺構: 図 1162、遺物: 図 1163)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側は搅乱により失われ、SB271 と SB272 を切る。本遺構の検出時には土器片が多数出土した。

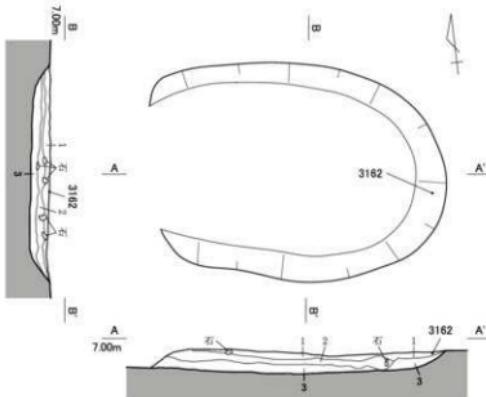
**形状** 残存長軸長約 2.4m、深さ約 0.2m であり、楕円形を呈する。底面はわずかに丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 3 層に分層した。炭化物や礫の混入が顕著であり、2 層下間に約 0.5cm の厚さで炭化物が層状に堆積していたが焼土は確認できていない。層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 428 点が出土した。その多くは上層からの出土である。

**出土遺物** 3162 は VI 期～VII 期壺 A 類。直線文と刺突文を交互に施す。最下段の直線文の直下には、小ぶりな刺突文を施す。3163 は VI 期甕 A2b 類。口縁部が直立し、端部は平坦である。3164 は VI 期甕 D1b 類。3165 は VI 期高杯 C3b 類。多条沈線が認められる。

**時期** 出土遺物の時期と VII 期の SB271 より後出することから、VII 期と考えられる。



1 2SY3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 厚0.2～0.5cm炭化物3%混入 径1～2cm礫3%混入  
2 SY3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性なし 下層に炭化物が層状に堆積 西部に限る  
3 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あり 厚0.2～0.5cm炭化物5%混入 径1cm礫1%混入

図 1162 SK04197 遺構図

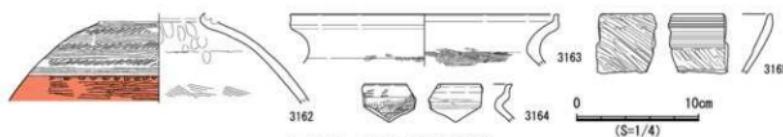


図 1163 SK04197 遺物実測図

## SK04201 (遺構: 図 1164、遺物: 図 1165)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置するが、遺構の重複はない。本遺構の検出時には土器（3166）が底部外面を西側に向けて横位で出土し、その標高よりも下位で土坑状の平面形を確認した。周辺の遺構よりも下位での検出となったため、土器（3166）は本遺構の出土遺物とした。

**形状** 東側が調査区外のため平面形は不明だが、残存長約0.6m、深さ約0.2mである。底面は平坦だが、東側が円形に窪む。なお、西側壁面はほぼ垂直である。

**埋土** 磨が混入する単層の埋土であり、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器72点が出土したが、その大半は検出面での出土である。

**出土遺物** 3166はV期甕A類。小さな底部から胴部が直線的に立ち上がる。胴部最大径付近に波状文が一部認められ、その上には直線文が認められる。

**時期** 出土遺物の時期から、V期と考えられる。

## SK04207 (遺構: 図 1167、遺物: 図 1166)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側をSK04912に切られる。

**形状** 長軸長約0.38m、深さ約0.2mであり、平面形は不整形を呈する。底面は平坦で、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 2層に分層した。炭化物や磨の混入があり、層界の凹凸が認められるため、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器408点が出土した。

**出土遺物** 3167はVII期壺H1b類。口頸部が直線的に外傾し、上半に多条沈線を施文する。3168はVII期高杯C4d類。多条沈線間に山形文を施文する。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

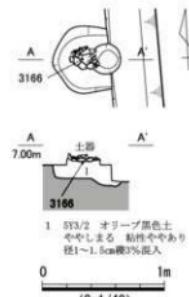


図 1164 SK04201 遺構図

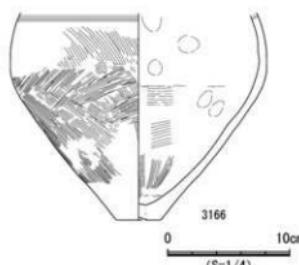
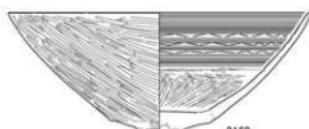


図 1165 SK04201 遺物実測図



図 1166 SK04207 遺物実測図



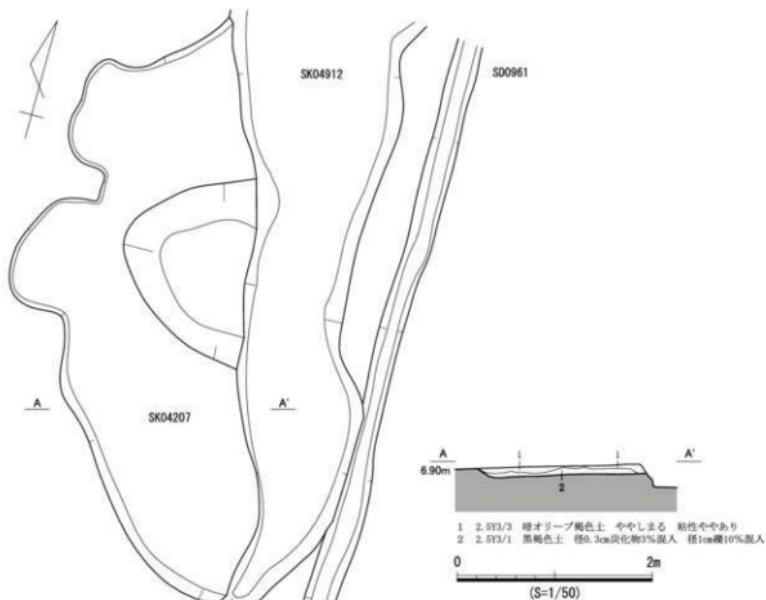


図 1167 SK04207 遺構図

SK04208 (遺構: 図 1168、遺物: 図 1169)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB255 の埋土上面で検出した。

**形状** 長軸長約 1.6m、深さ約 0.3m であり、不整円形を呈する。底面はやや丸みを帯びており、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 5 層に分層した。上層には炭化物、下層には礫が混入する。層界の凹凸が顕著であることと、土器が縦位で出土していることなどから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 620 点、石器類 1 点が出土した。特に埋土上層では VII 期の甕、高杯を含む土器片がまとまっており、甕 (3170) は口縁部を下にして、高杯 (3172, 3173) は杯部内面を上にしてそれぞれ出土した。



図 1168 SK04208 遺構図

**出土遺物** 3169、3170はVII期壺B類。3169は口縁部が短く、胴部の膨らみが強い。外面にはハケが認められる。3170は口縁部が短く外反し、胴部の膨らみが弱い。頸部に指頭圧痕が顕著に残る。3171はVII期壺D2b類。3172はVII期高壺C4c類。口縁部の上半に多条沈線が認められる。3173はVII期高壺D4類。口縁部上半に多条沈線、その下に多条沈線、山形文を交互に施文する。山形文は連弧文状である。3174は凝灰岩製の砥石。断面五角形状を呈し、側面のうち4面を砥面として使用し、1面は刃部幅約7mmの鉄製工具による成形痕が残る。また、下端には敲打痕が観察できる。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

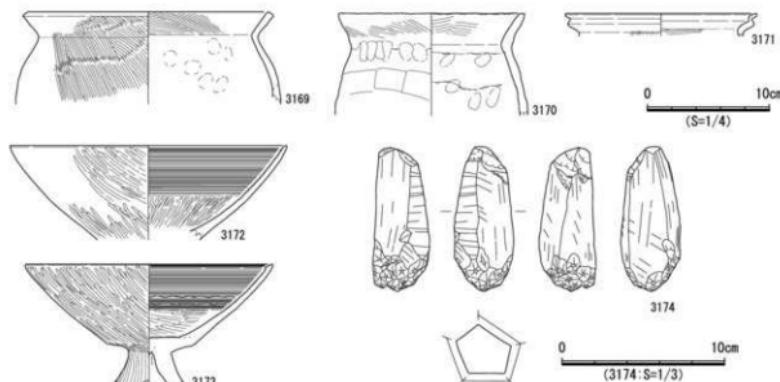


図 1169 SK04208 遺物実測図

SK04211（遺構：図 1171、遺物：図 1170）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB255完掘後に検出した。

**形状** 現存長軸長約3.7m、深さ約0.2mであり、不整長楕円形を呈する。底面はわずかに丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 2層に分層した。上層にブロック土を含み、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器131点、石器類1点が出土した。

**出土遺物** 3175はI期変容壺。口縁部が強く外反し、偏平な素文突帯を貼付する。3176縄文時代晚期後半の深鉢。突带上に○字状の押し引きが認められる。3177はVI期～VII期壺脚部。3178は叩石。長楕円礫を素材とし、上下端部に敲打痕が残る。

**時期** 出土遺物の時期と、VII期SB255より先行することから、VI期～VII期と考えられる。

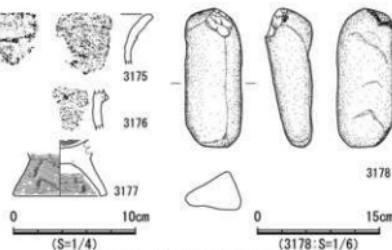


図 1170 SK04211 遺物実測図

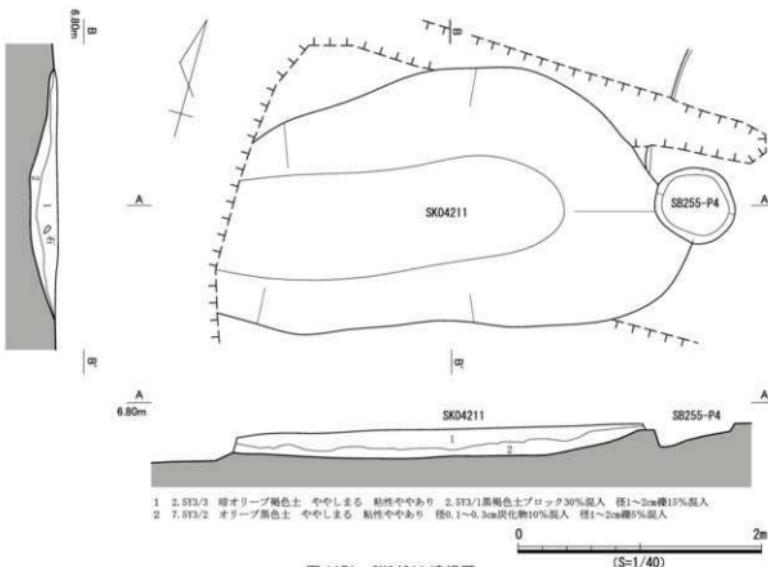


図 1171 SK04211 遺構図

SK04214（遺構：図 1173、遺物：図 1172）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB251～SB253、SK04216に切られる。

形状 残存長約3.3m、深さ約0.2mであり、不整形を呈する。底面はやや凹凸があり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 3層に分層した。礫の混入が多く、層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,310点が散在して出土した。

出土遺物 3179、3180はV期～VI期甕A類。口縁部が短く直立する。3181はVI期～VII期甕脚部。脚部がわずかに内湾する。3182はV期～VI期甕脚部。脚部が短く開き、端部は平坦である。3183はVII期高坏C4d類。多条沈線、山形文を交互に施文する。

時期 出土遺物の時期と、VI期～VII期SB253に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

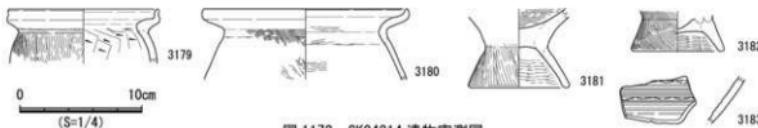


図 1172 SK04214 遺物実測図

SK04218（遺構：図 1175、遺物：図 1174）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SK04219を切る。

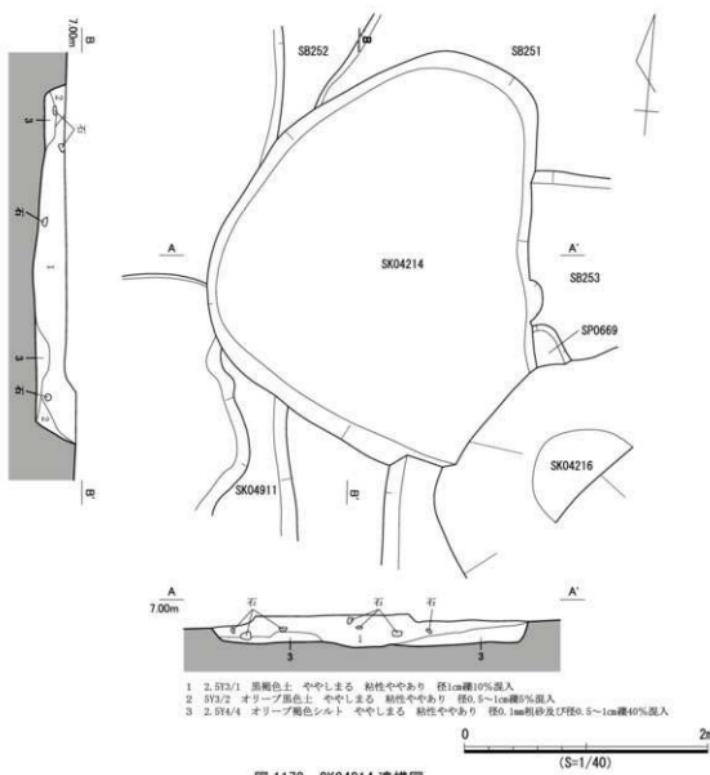


図 1173 SK04214 造構図

**形状** 長軸長約0.4m、深さ約0.1mであり、円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 磨混じりの単層であり、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器3点が出土した。

**出土遺物** 3184はI期壺胴部。無軸木葉文が認められる。

**時期** 出土遺物から時期の推定は困

難であるが、VI～VII期のSK04219を切るので、同様の時期と考えられる。



図 1174 SK04218 遺物実測図

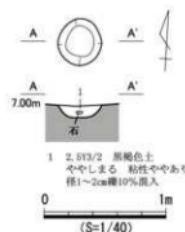


図 1175 SK04218 造構図

## SK04216（遺構：図1178、遺物：図1176）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB251とSB253に切られる。

**形状** 長軸長約3.8m、深さ約0.8mであり、不整形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁面は北西側と南側に平坦面を有する。

**埋土** 3層に分層した。下層はシルトであり、全体的に礫の混入が目立つ。層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器915点が散在して出土した。

**出土遺物** 3185はV期～VI期壺B1類。口縁部が強く外反し、端部に顕著な平坦面を形成する。3186はI期壺の小型品。3187はV期～VI期壺B1類。内面に羽状文2帯、刺突文を施す。3188はVII期甕E類脚部。3189はVII期高杯D1類。口縁部が内湾し、脚部が外反する。口縁部には打ち欠きが認められ、内面には口縁部1/2程度。

弧状に煤が付着する。3190

はI期壺胴部。太い沈線3

条が認められる。3192はI

期深鉢。3191は縄文時代晩

期後半の深鉢。口縁部が短

く外反し、偏平な突起上に

O字状の二枚貝による押圧

が認められる。

**時期** 出土遺物の時期と、

VII期～VIII期SB253に切られ

ることから、VII期と考えら

れる。

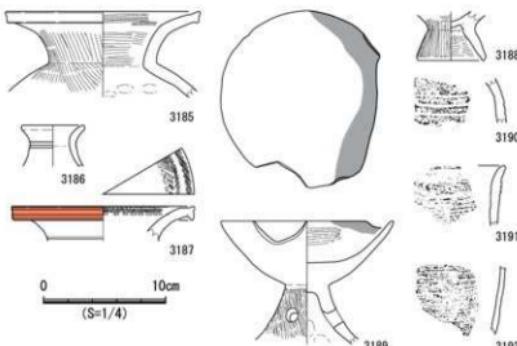


図1176 SK04216 遺物実測図

## SK04219（遺構：図1177、遺物：図1179）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南側と東側は搅乱により失われ、北側でSB253に、西側でSK04218にそれぞれ切られ、北側でSK04216を切る。

**形状** 周縁を他遺構や搅乱により失っているため全形は不明であるが、南北隅は隅丸方形状である。底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 磨混じりの単層であり、その成因は不明である。

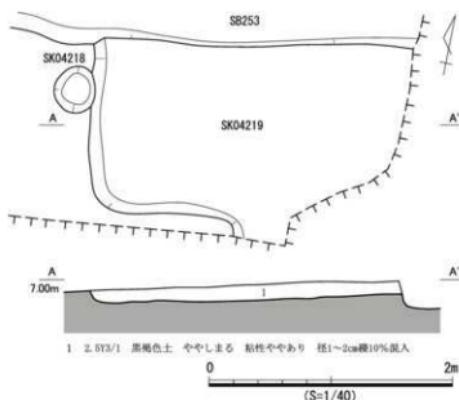


図1177 SK04219 遺構図

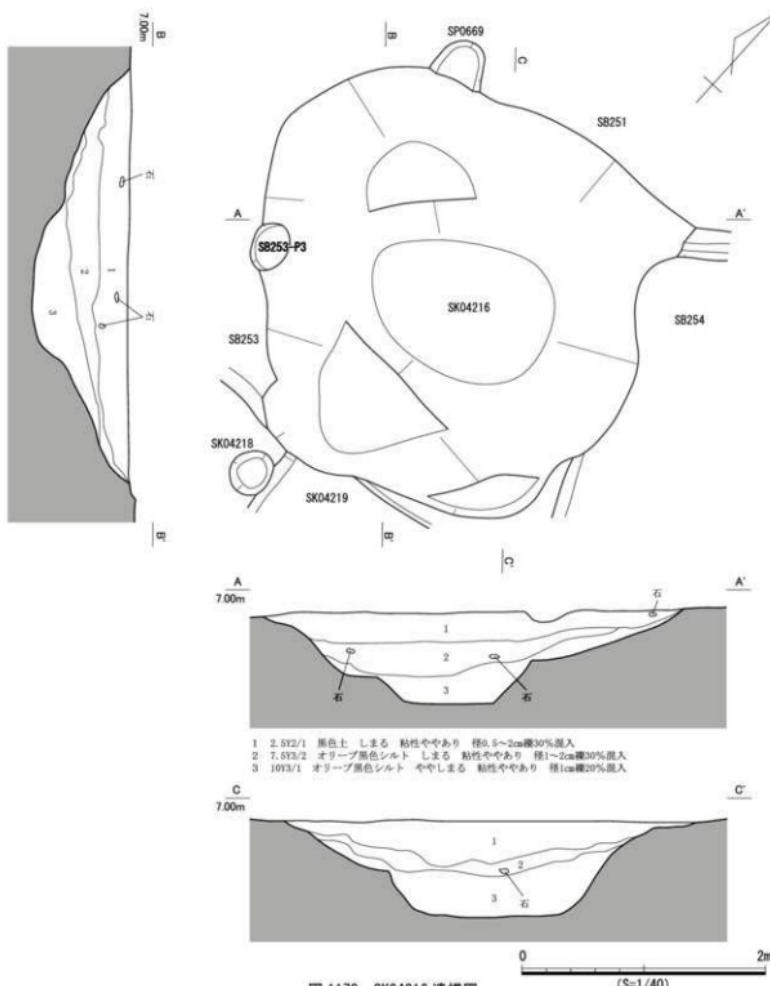


図 1178 SK04216 遺構図

**遺物出土状況** 埋土中から土器275点が散在して出土した。

**出土遺物** 3193はVI～VII期の壺胴部であり、外面に線刻が認められる。

**時期** 出土遺物の時期と、VII期～VIII期のSB253に切られることから、VI期～VIII期と考えられる。

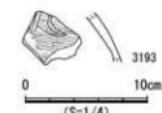


図 1179 SK04219 遺物実測図

## SK04230（遺構：図1180、遺物：図1181）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB284底面で検出した。

形状 長軸長約2.9m、深さ約0.8mであり、不整精円形を呈する。底面は北側が最も深く、北西側の壁面は凹凸がみられ、南西側の傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。やや大きな礫が目立ち、層界の凹凸が認められることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器147点が散在して出土した。土器の大半は小破片である。

出土遺物 3194はIV期斐B2類。口縁部が屈曲して内傾する。端部は内傾面を形成する。3195、3197は縄文時代晩期の深鉢。3196はI期深鉢。三井式に類似する。口縁端部が平坦で、外面にケズリが認められる。3198はI期甕。沈線が認められる。3199は縄文土器深鉢。外面にケズリが認められる。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB284より先行することから、IV期～VII期と考えられる。

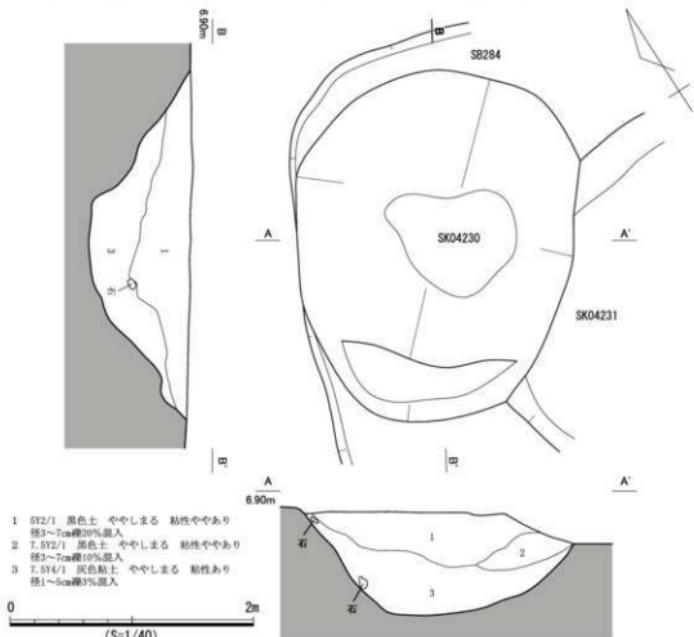


図1180 SK04230 遺構図



図1181 SK04230 遺物実測図

SK04242 (遺構: 図 1183、遺物: 図 1182)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SK4241の底面で検出した。

形状 長軸長約5.1m、深さ約1.1mであり、不整橢円形を呈する。底面は南東側が凹み、壁面は南側に一段の平坦面を有する。

埋土 4層に分層した。埋没当初は東側からの堆積が認められる。

遺物出土状況 埋土中から土器71点、石器類4点が出土した。遺物は上層から下層まで散在して出土しており、e層からVI期～VII期の土器片が出土した。

出土遺物 3200、3202は縄文時代晚期後半の深鉢。3202はミガキが施され、口縁端部に瘤状突起が認められる。3201はI期深鉢。半截竹管の押し引きが認められる。

時期 e層出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

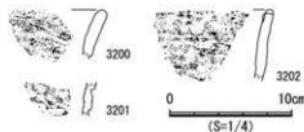


図 1182 SK04242 遺物実測図

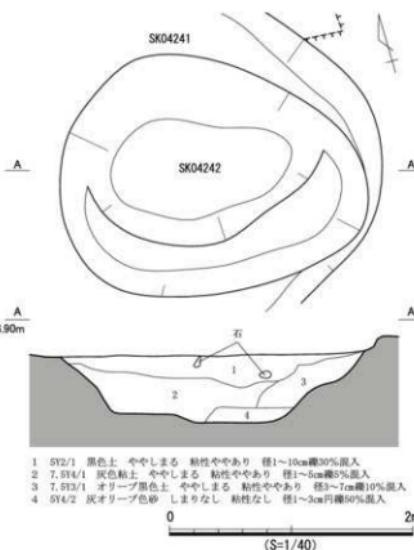


図 1183 SK04242 遺構図

SK04253 (遺構: 図 1185、遺物: 図 1184)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB285に切られる。

形状 短軸長約4.4m、深さ約0.1mであり、隅丸方形状を呈する。底面は平坦で、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 2層に分層したが、大部分は1層である。礫の混入が多いものの、その成因は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器92点が散在して出土した。

出土遺物 3203はV期高杯B2a類。口縁部が短く外反し、端部は外方へ拡張して平坦面を形成する。上半に波状文、下半に直線文を施す。

時期 出土遺物の時期とV期のSB285に切られることから、V期と考えられる。

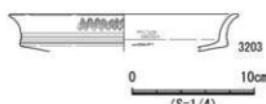


図 1184 SK04253 遺物実測図

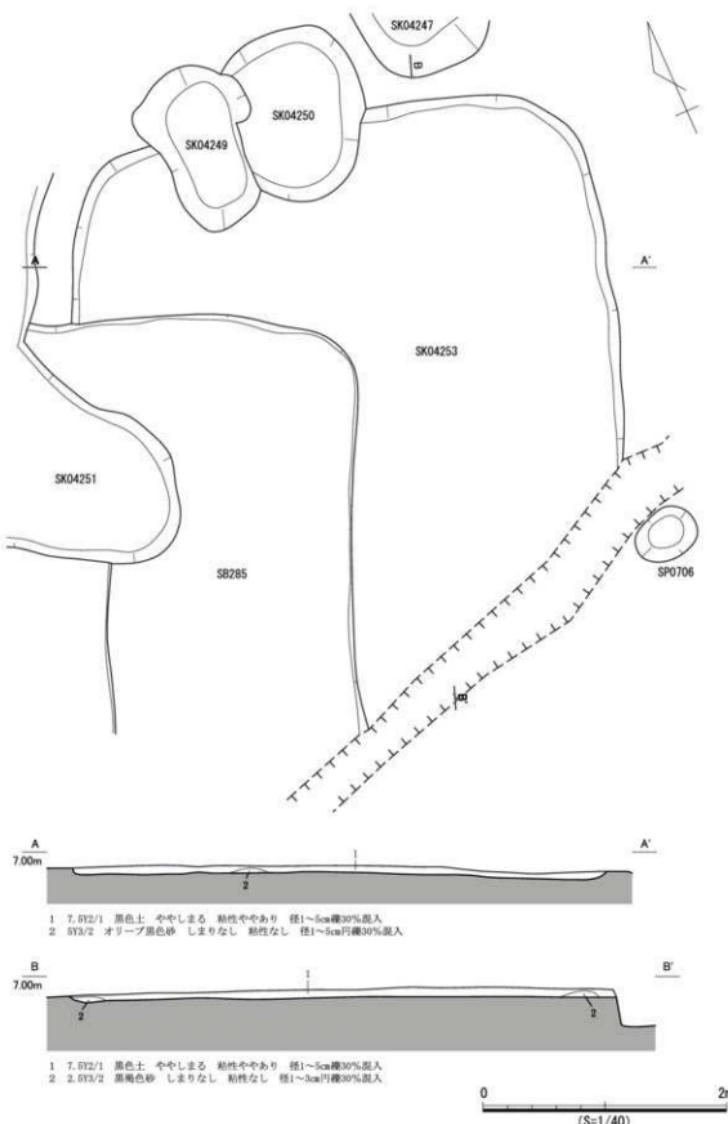


図 1185 SK04253 遺構図

## SK04254（遺構：図1186、遺物：図1187）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB285底面にて、SK04379完掘後の北壁面とSK04231完掘後の東壁面の土を手掛かりに精查し検出した。

**形状** 長軸長約3.2m、深さ約0.9mであり、ほぼ梢円形だが、南部が不整形を呈する。底面は緩やかに丸みを帯び、北東部に平坦面がある。

**埋土** 7層に分層した。底面際の4～7層は壁面崩落土の可能性がある。1層は再掘削後の埋土である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器154点、石器類1点が出土した。小破片が多い。

**出土遺物** 3204、3205は縄文時代晚期後半の深鉢。3204は口縁部が内傾し、端部を肥厚する。突帯を端部からやや下がった位置に貼付し、右下がりの押し引きが認められる。3205は口縁部がやや外反し、偏平な突帯上に二枚貝による押圧が認められる。3206はV期高窓I類。小型品で据部が外反し、付根に直線文が認められる。3207は黒色片岩のMF。

**時期** 出土遺物の時期と、V期のSB285より先行することから、V期と考えられる。

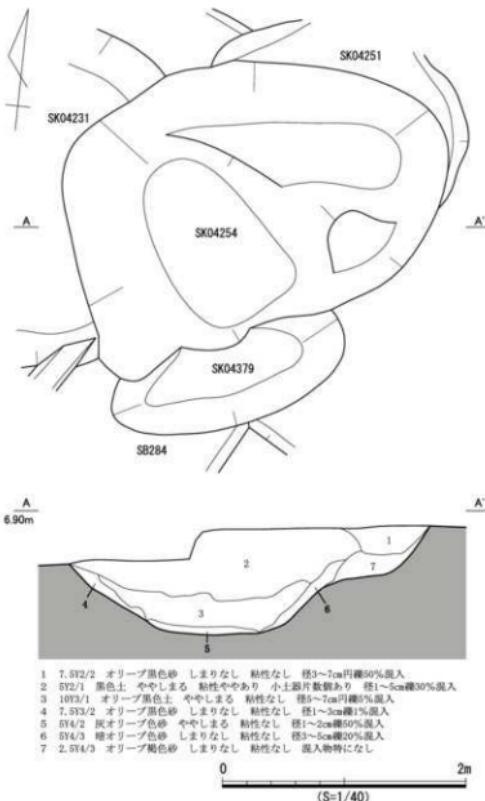


図1186 SK04254 遺構図

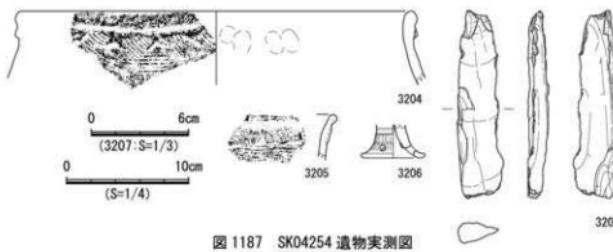


図1187 SK04254 遺物実測図

## SK04259（遺構：図1189、遺物：図1188）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB261完掘後に検出した。

**形状** 長軸長約2.7m、深さ約0.3mであり、不整楕円形を呈する。底面は平坦であり、壁面の傾斜は比較的急である。南側から東側にかけては、壁面に平坦面がある。

**埋土** 4層に分層した。全体的に礫の混入が多く、層界の凹凸もみられることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器103点が出土した。

**出土遺物** 3208はVI期壺H類。

丁寧なミガキが認められ、口頸部が外傾する。

**時期** 出土遺物の時期とVII期

のSB261より先行することから、

VII期と考えられる。

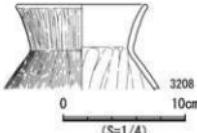


図1188 SK04259 遺物実測図

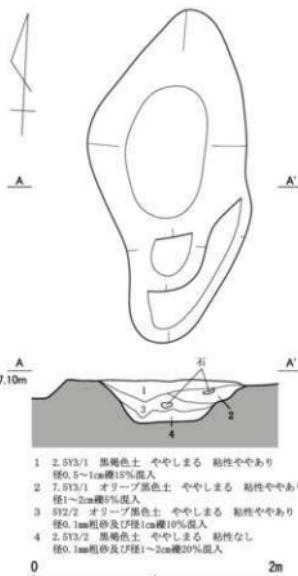


図1189 SK04259 遺構図

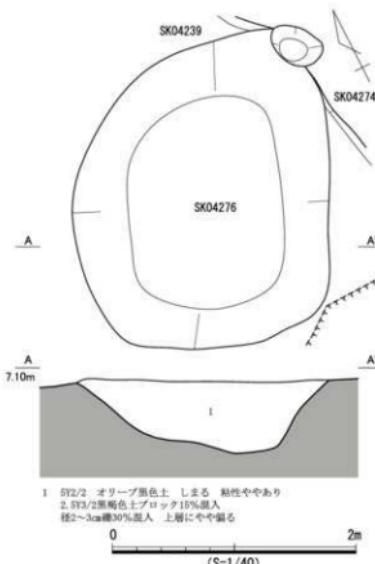


図1190 SK04276 遺構図

## SK04276（遺構：図1190、遺物：図1191）

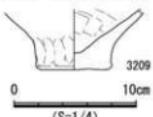
**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SK04278を切る。

**形状** 長軸長約2.5m、深さ約0.6mであり、不整楕円形を呈する。底面はやや凹凸があり、南東側が深い。

**埋土** オリーブ黒色土が単層で堆積する。ブロック土を含むことや、層厚のある土層が単層であることなどから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器119点が散在して出土した。

**出土遺物** 3209はV期～VI期壺で、平底である。



**時期** 出土遺物の時期から、V期～VI期と考えられる。

図1191 SK04276 遺物実測図

SK04302（遺構：図1192、遺物：図1193）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。竪穴住居跡を想定して検出を行ったが、小穴や壁溝を確認できず、土坑とした。中央と西側でSD0973とSD0984に切られ、SB295を切る。

**形状** 長軸長約4.7m、深さ約0.2mであり、不整隅丸方形を呈する。底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平堆積であり、ブロック土が混入していることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,479点、石器類2点が出土した。

**出土遺物** 3210はVI期～VII期の壺C類。3211～3213はVI期～VII期甌脚部。3212には打ち欠きが認められ、3213は短く外反気味に開く。3214はV期～VI期鉢B類底部。3215、3216はV期～VI期高壙B3類。口縁部が強く外反する。3216は暗文状の波状文が認められる。3217、3218はVI期器台B類。

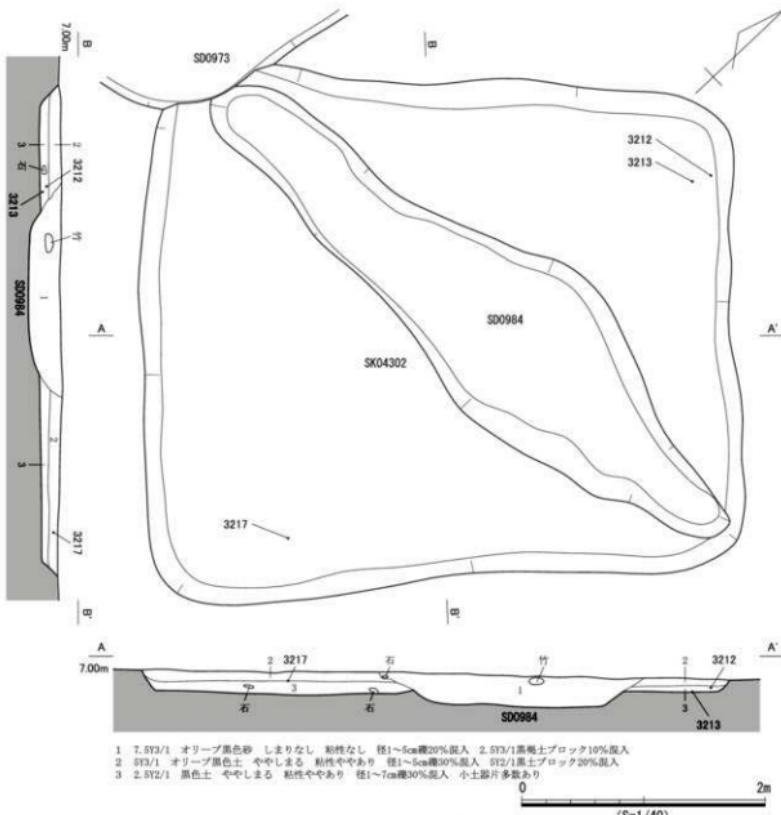


図1192 SK04302遺構図

脚部は柱状気味で据部が強く外反する。3219、3220は砥石。底面は3219が1面、3220が3面確認でき、3220は底面周縁に細かい剥離が観察できる。

**時期** 出土遺物の時期と、VI期のSB295より後出することから、VI期～VII期と考えられる。

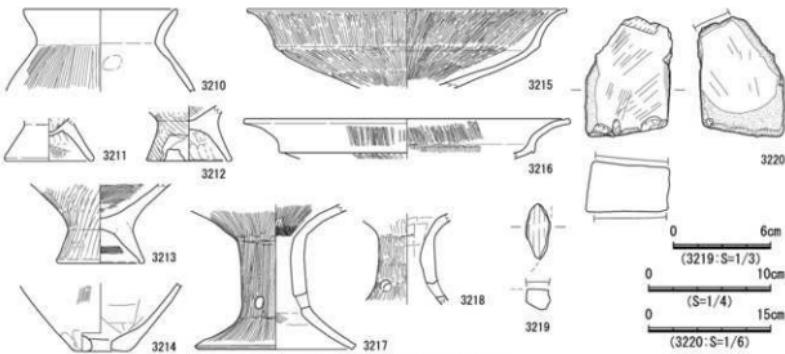


図 1193 SK04302 遺物実測図

SK04308（遺構：図 1195、遺物：図 1194）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SK04309完掘後に検出した。

**形状** 長軸長約0.3m、深さ約0.1mであり、不整円形を呈する。底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。

**埋土** オリーブ黒色土が単層で堆積する。大型土器が中央に位置し、層厚のある土層が単層であることなどから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器4点が出土した。埋土中央にて器台の脚部が横位で出土した。

**出土遺物** 3221はV期器台A類脚部。大型品で丁寧なミガキが認められる。据部は打ち欠きがあり、破損した部分の内外面に煤が付着する。

**時期** 出土遺物の時期から、V期と考えられる。

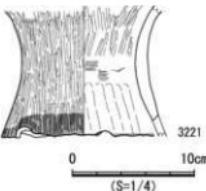


図 1194 SK04308 遺物実測図

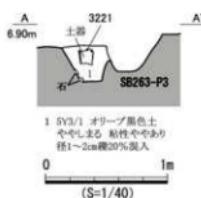
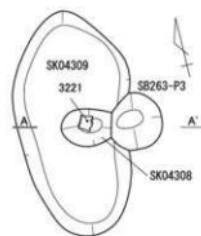
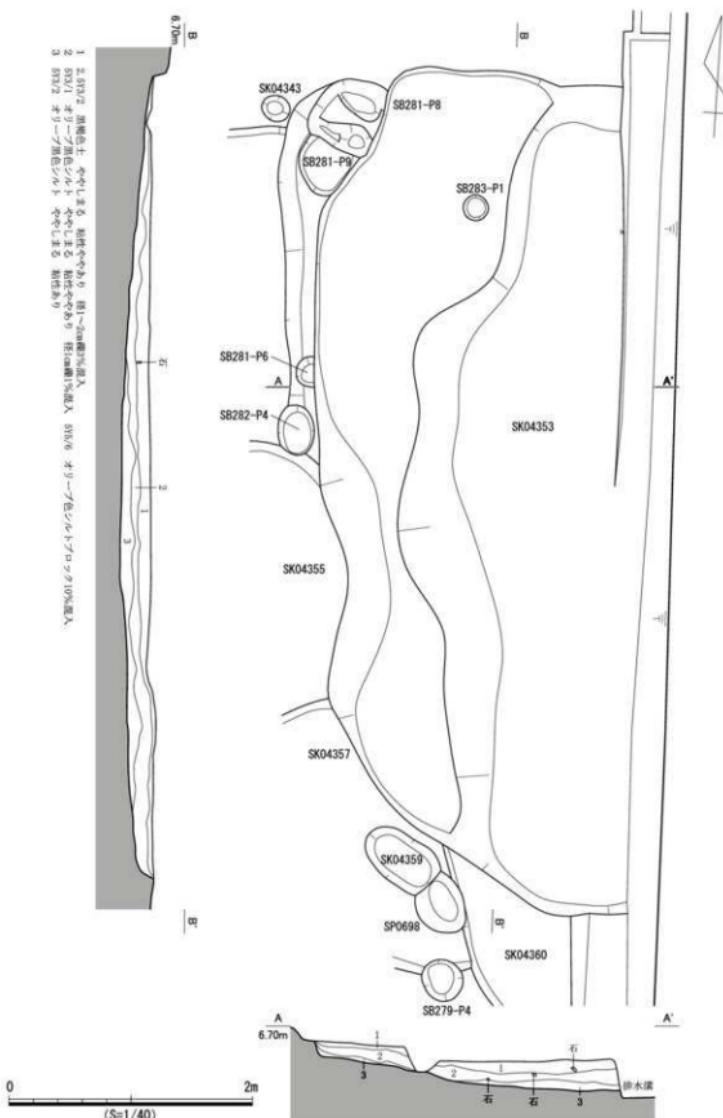


図 1195 SK04308 遺構図

SK04353（遺構：図 1196、遺物：図 1197）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側は調査区域外にある。SB283完掘後に検出した。

**形状** 長軸長約6.6m、深さ約0.2mであり、不整形を呈する。底面中央は丸みを帯び、西側は緩やかな段を有する。壁面の傾斜は急である。



**埋土** 3層に分層した。ブロック土が混入し、層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器88点、石器類4点が出土した。土器の多くはVI期～VII期の小片である。

**出土遺物** 3222はIV期壺A類頸部。クシによる直線文2帯（2本1組

×3）が認められる。

**時期** 出土遺物の時期とVII期SB281より先行することから、VI期～VII

期と考えられる。

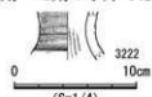


図 1197 SK04353 遺物実測図

#### SK04355（遺構：図 1199、遺物：図 1198）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB282完掘後に検出し、SB280に切られる。

**形状** 短軸長約2.0m、深さ約0.2mで

あり、不整楕円形を呈する。底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。1・2層ともにブロック土が混入するので人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器195点、石器類2点が出土した。土器の多くはVI期～VII期の小片である。

**出土遺物** 3223は泥岩製の縦長剥片、3224は泥岩製の横長剥片を素材としたRFである。

**時期** 出土遺物の時期と、VI期～VII期のSB280に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

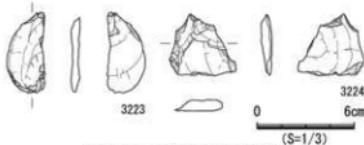


図 1198 SK04355 遺物実測図

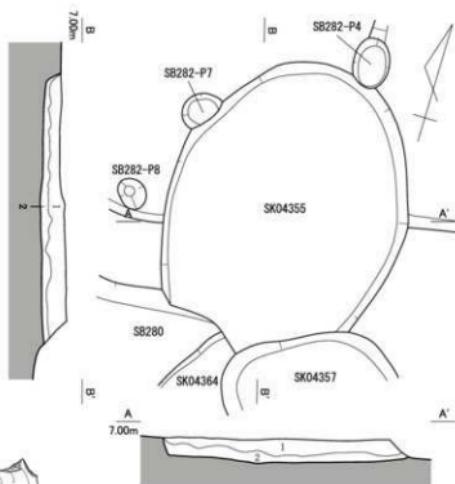


図 1199 SK04355 遺構図

#### SK04364（遺構：図 1201、遺物：図 1200）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB279、SB280、SB300、SB301の床面で検出した。

**形状** 長軸長約6.0m、深さ約0.1mであり、南西隅部が鈍角に開く不整方形を呈する。底面は平坦であり、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 4層に分層した。ブロック土の混入があり、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,134点が出土した。土器の大半はVII期に属し、縄文土器も少量含ま

れていた。

**出土遺物** 3225はVII期壺A3類。内面に羽状文が認められる。3226はVII期甕C2類。口縁端部に内傾面を形成し、多条沈線が認められる。3227はVII期高杯C類脚部。

**時期** 出土遺物の時期からVII期と考えられ、重複する遺構の時期とも矛盾していない。

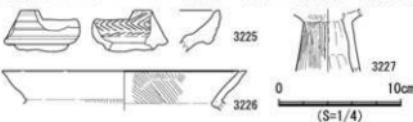


図 1200 SK04364 遺物実測図

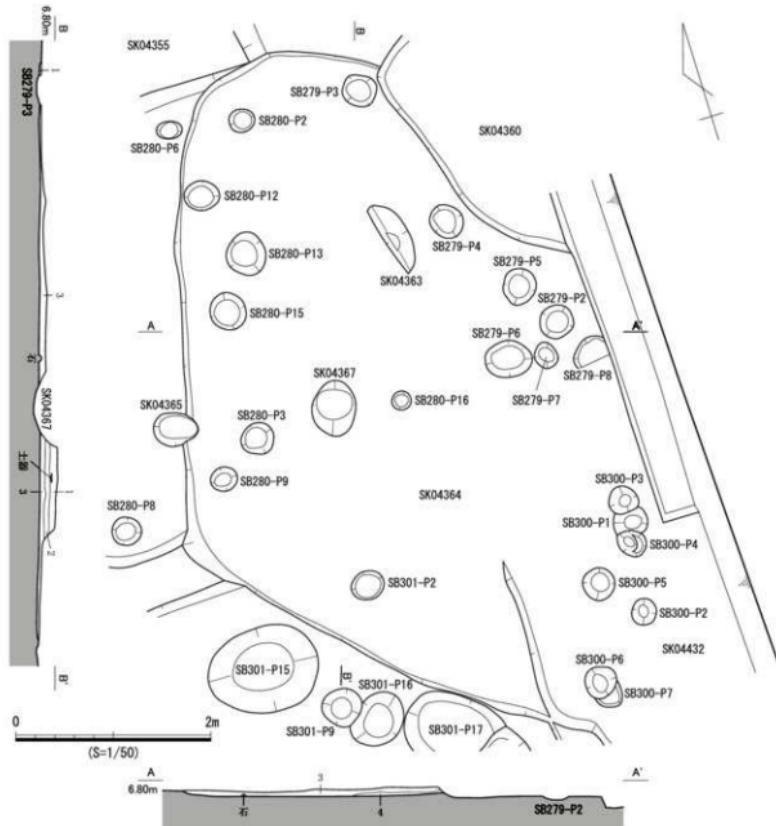


図 1201 SK04364 遺構図

- 1 83/1 オリーブ黒色土、ややしまる、粘性ややあり、径2~5mm炭化物数ヶ所あり、土器片多数含む
- 2 7.83/1 オリーブ黒色土、ややしまる、粘性ややあり、1cm炭化物塊1ヶ所あり、土器片数個含む
- 3 2.83/1 黒色土、ややしまる、粘性ややあり、7.3V4/28Kオリーブ砂質土ブロック10%混入、径1~7cm繊維1%混入、交点より北側に土器片数個含む
- 4 101/1 灰色砂質土、ややしまる、粘性なし、872/1黒色土ブロック10%混入、径1~3cm繊維1%混入

## SK04365（遺構：図1203、遺物：図1202）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB280埋土上面で検出した。

**形状** 長軸長約0.7m、深さ約0.2mであり、梢円形を呈する。

底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 3層に分層した。2層がブロック状に入り込むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器36点が出土した。その多くはVI～VII期の土器で、下層から出土した。

**出土遺物** 3228はVI期～VII期壺D類脚部である。

**時期** 出土遺物の時期とVII期

のSB280より後出することから、

VII期と考えられる。

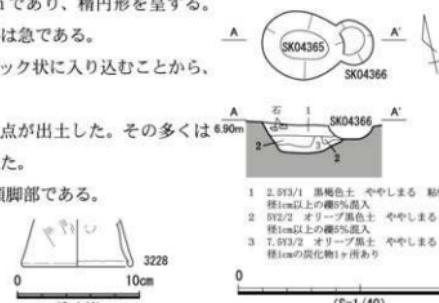


図1202 SK04365 遺物実測図



図1203 SK04365 遺構図

## SK04377（遺構：図1205、遺物：図1204）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の西側に位置する。上方を搅乱により失われているが、他遺構と重複しない。

**形状** 長軸長約2.2m、深さ約0.7mであり、不整円形を呈する。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 3層に分層した。ブロック土の混入が目立ち、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器63点が出土した。器台（3229）は1層と2層の層界付近から横位で出土した。

**出土遺物** 3229はVII期器台C3類。脚部が直線的に開き、口縁端部は尖り気味である。

3230は縄文時代晚期の深鉢。刻みを施した扁平な尖帯を貼付する。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

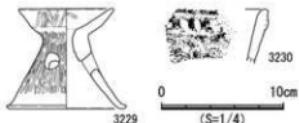


図1204 SK04377 遺物実測図

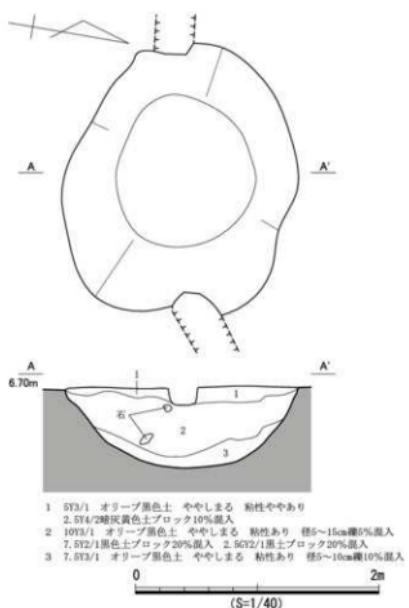


図1205 SK04377 遺構図

## SK04388（遺構：図1207、遺物：図1206）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SK04387とSK04393に切られ、SB286を切る。

**形状** 長軸長約4.1m、深さ約0.2mであり、隅丸方形を呈する。底面は平坦で、壁面は垂直気味である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平堆積であり、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,836点、石器類1点が出土した。

**出土遺物** 3231はVII期壺H2b類。多条沈線間に連弧文的な山形文と刺

突文、上下に刺突文を施す。3232はV期～VI期手培り形土器の覆部。

斜格子文が認められる。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

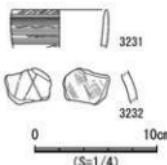


図 1206 SK04388 遺物実測図

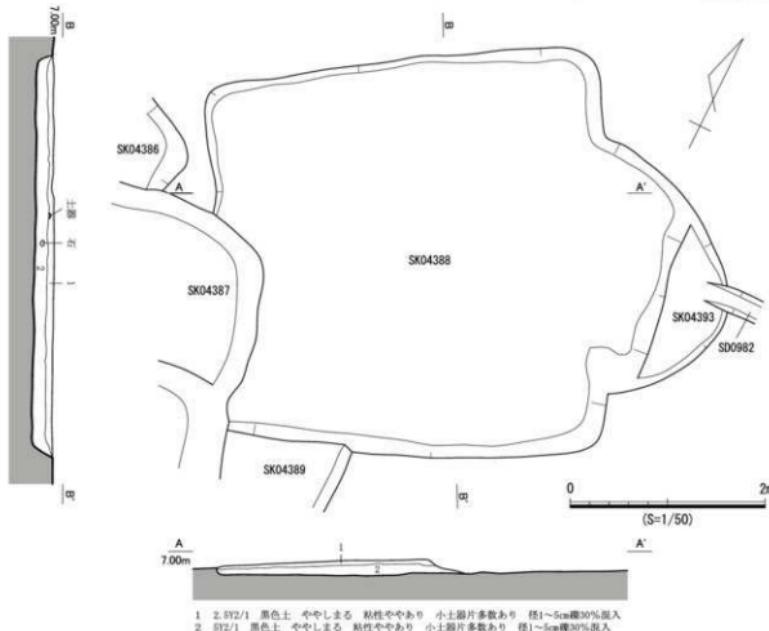


図 1207 SK04388 遺構図

## SK04391（遺構：図1209、遺物：図1208）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB287完掘後に検出した。

**形状** 長軸長約2.4m、深さ約0.6mであり、不整形を呈する。平面は平坦であり、壁面は直線的に開く。

**埋土** 5層に分層した。1層は再掘削後の埋土と考えられ、2層も1層と一連の堆積土かもしれない。

**遺物出土状況** 埋土中から土器63点が出土した。多くは小破片である。なお、3233はb層からの出土である。

**出土遺物** 3233はI期壺胴部。木葉文が認められる。

**時期** 出土遺物から遺構の時期認定は困難であるが、VI期のSB287より先行するためVI期以前と考えられる。



図 1208 SK04391 遺物実測図

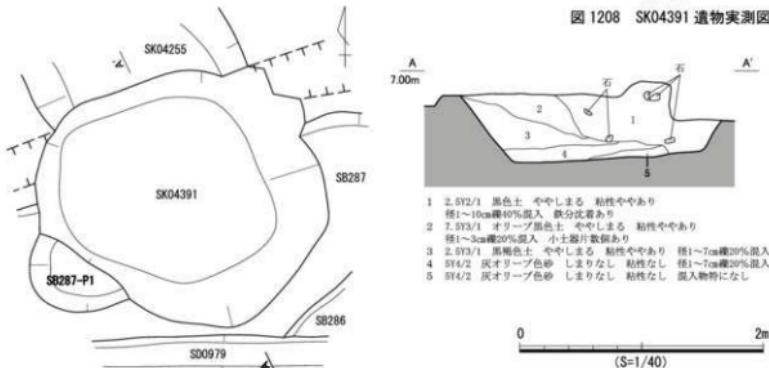


図 1209 SK04391 遺構図

SK04396（遺構：図 1210、遺物：図 1211）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB292に切られる。

**形状** 長軸長約3.5m、深さ約0.1mであり、確認できた部分は隅丸方形を呈する。平面は平坦で、壁面の傾斜は急である。

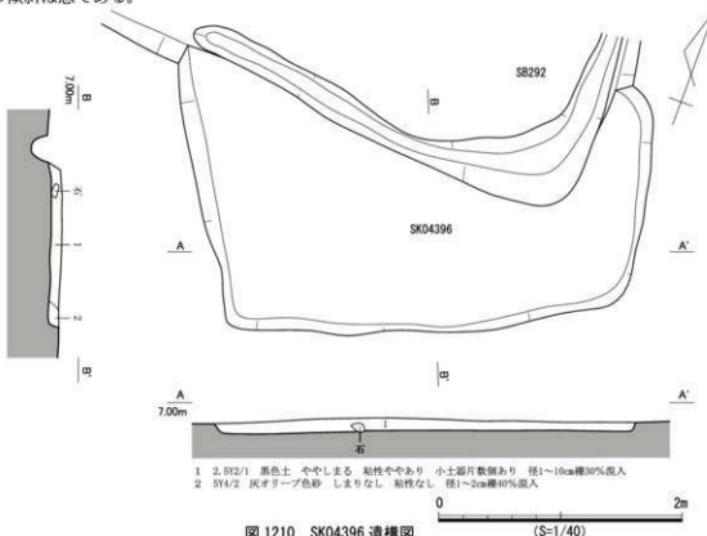


図 1210 SK04396 遺構図

**埋土** 2層に分層した。全体的に礫の混入が多いものの、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器327点、石器類1点が散在して出土した。

**出土遺物** 3234はVI期～VII期窓。線刻が認められる。3235はVII期鉢D類脚部。3236は砥石。断面三角形状を呈する楕円礫を素材とする。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

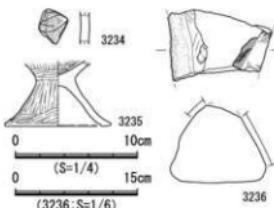


図 1211 SK04396 遺物実測図

SK04400 (遺構: 図 1213、遺物: 図 1212)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SK04302完掘後に検出した。

**形状** 長軸長約1.2m、深さ約0.6mであり、楕円形を呈する。底面は丸みを帯び、壁面はほぼ垂直である。

**埋土** 4層に分層した。最下層に層界の凹凸がみられることと、大小の礫が埋土に均一に散在していることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器48点、石器類1点が出土した。

**出土遺物** 3237はV期高壙B1類。口縁部が短く外反し、端部を外方に拡張した平坦面を形成する。3238は砥石。軟質石材(泥岩)を用いた砥石で、底面は2面観察できる。

**時期** 出土遺物の時期から、V期と考えられる。

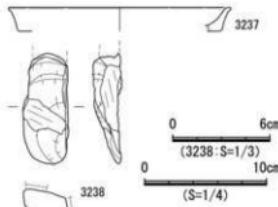


図 1212 SK04400 遺物実測図

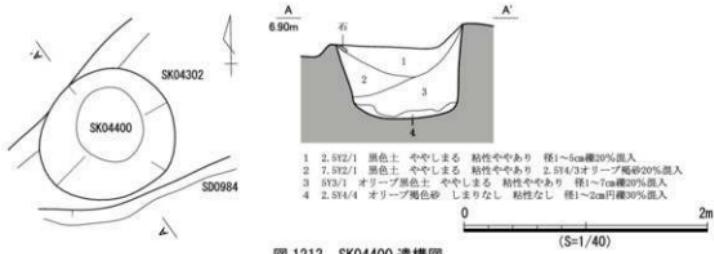


図 1213 SK04400 遺構図

SK04402 (遺構: 図 1215、遺物: 図 1214)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SK04302完掘後に検出した。

**形状** 長軸長約2.2m、深さ約0.8mであり、不整楕円形を呈する。底面はやや凹凸があり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。上下層ともにブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

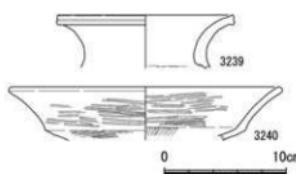


図 1214 SK04402 遺物実測図

**遺物出土状況** 埋土中から土器303点が出土した。

**出土遺物** 3239はVI期壺B1類。口縁部が外反して、端部に直線文が認められる。3240はVI期高坏B4類。口縁部が緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。内外面とも横方向のミガキが認められる。

**時期** 出土遺物の時期とVII期SK04302より先行することから、VI期と考えられる。

**SK04403 (遺構: 図1217、遺物: 図1216)**

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住跡密集域に位置する。

SB295完掘後に検出した。

**形状** 長軸長約2.0m、深さ約0.2mであり、南側がやや膨らむ不整橢円形を呈する。底面はやや丸みを帶び、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 2層に分層した。礫の混入が極めて多く層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器26点が出土した。

**出土遺物** 3241はVI期の壺の胴部。内外面とも丁寧なミガキが施される。

**時期** 出土遺物の時期とVI期のSB295より先行することから、VI期と考えられる。

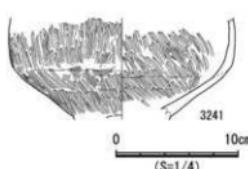


図1216 SK04403 遺物実測図

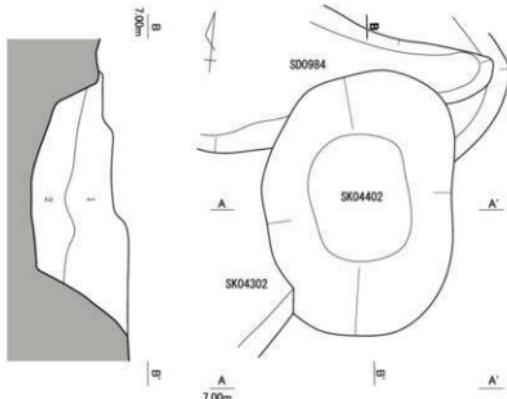


図1215 SK04402 遺構図

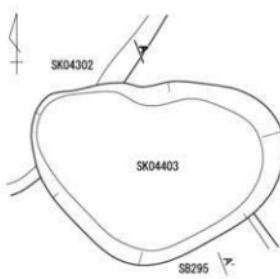


図1217 SK04403 遺構図

1. 2.SV2/1 黒色土、ややしまる 粘性ややあり  
径1～5cmに20%混入
2. 3SV3/1 黒褐色土ブロック10%混入  
小土器片を側面南部にあり

2. 10SV2/1 黒色土、ややしまる 粘性ややあり  
径0.5～3cmに30%混入
2. 3SV4/1 オリーブ褐色砂ブロック10%混入  
やや南北に偏在

(S=1/40)



図1218 SK04403 遺構図

1. 2.SV2/1 黒色土、ややしまる 粘性ややあり  
径1～5cmに20%混入
2. 3SV4/1 黒色土、しまりなし 粘性なし  
径1～5cmに50%混入

(S=1/40)

## SK04404 (遺構: 図 1219、遺物: 図 1218)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB295の埋土上面で検出した。

**形状** 長軸長約 0.6m、深さ約 0.2m であり、円形を呈する。底面はやや丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 炭化物や礫が混入する黒色土の単層であるが、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 17 点が出土したが、いずれも小片である。

**出土遺物** 3242 は VI 期器台 B1 類。口縁端部



はほぼ垂直に面取りされている。

**時期** 出土遺物の時期と VI 期の SB295 より後出することから、VI 期と考えられる。

図 1218 SK04404 遺物実測図

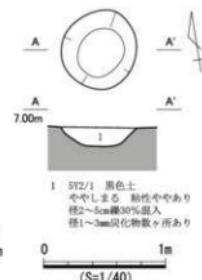


図 1219 SK04404 遺構図

## SK04405 (遺構: 図 1221、遺物: 図 1220)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB295 完掘後に検出した。

**形状** 長軸長約 2.2m、深さ約 0.4m であり、不整楕円形を呈する。底面は平坦であるが、西側に下降している。壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 4 層に分層した。ブロック土を含むことや層界の凹凸が顕著であることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 74 点が出土した。

**出土遺物** 3243 は VI 期器 A3 類。口縁端部がわずかに直立する。3244 は VI 期～VII 期器 D 類脚部。3245 は V 期高杯 I 類。口縁部が直立気味で精緻な刺突文が認められる。内外面に赤彩が認められる。

**時期** 出土遺物の時期と VI 期 SB295 より先行することから、VI 期と考えられる。



図 1220 SK04405 遺物実測図

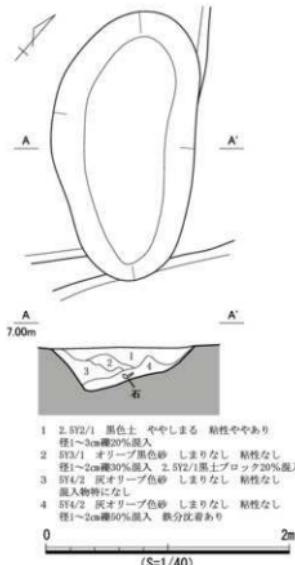


図 1221 SK04405 遺構図

## SK04406 (遺構: 図 1223、遺物: 図 1222)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB295 完掘後に検出し、SK4407 に切られる。

**形状** 長軸長約 3.6m、深さ約 0.5m であり、不整楕円形を呈する。底面の凹凸が顕著で、中央北東寄

りに段差がある。壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 3層に分層した。層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器146点が出土し、中央にて壺胴部片が横位でまとまって出土した。

**出土遺物** 3246はVI期斐B2類。口縁部がやや外反し、端部に凹面を形成する。3247はVI期壺胴部。大型品で下膨れ気味である。

**時期** 出土遺物の時期とVI期SB295より先行することから、VI期と考えられる。

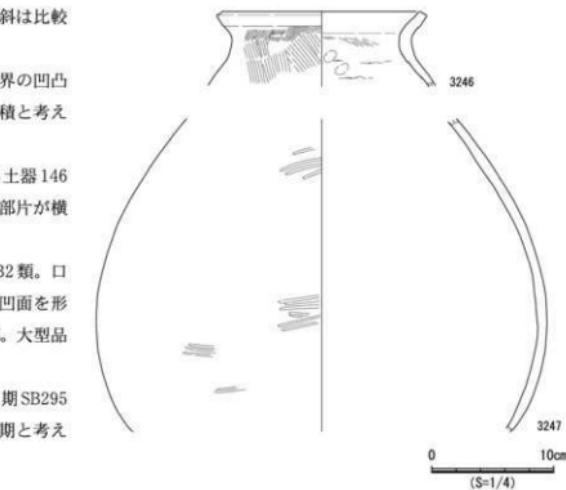


図 1222 SK04406 遺物実測図

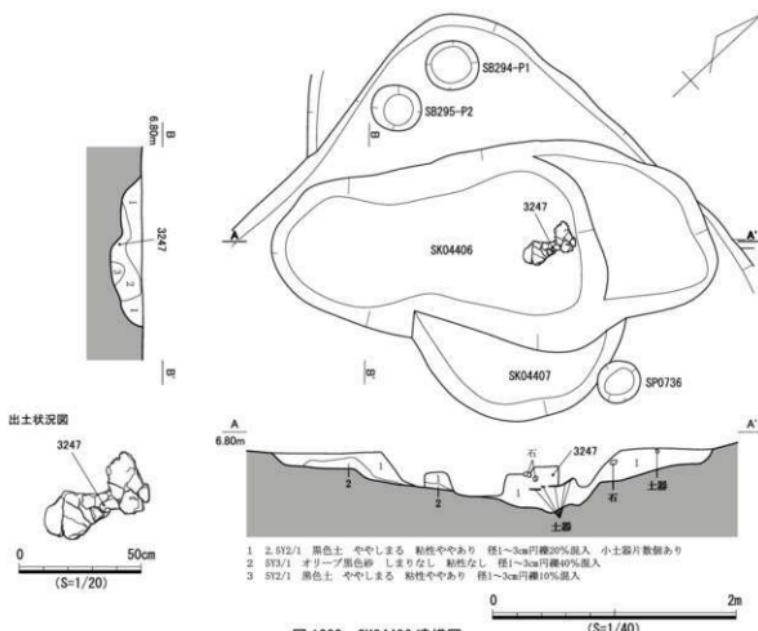


図 1223 SK04406 遺構図

## SK04407 (遺構: 図 1225、遺物: 図 1224)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB294、SB295完掘後に検出し、SK4406を切る。

**形状** 長軸長約2.3m、深さ約0.2mであり、不整梢円形を呈する。底面は凹凸があり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 黒色土が単層で堆積する。礫の混入が多いものの、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器163

点が出土した。

**出土遺物** 3248はV期壺胴部。斜格子文様の文様が認められる。3249はV期高壺I類脚部。脚柱部は中実である。3250はV期甕B2類。口縁部がくの字形である。

**時期** 出土遺物の時期とVI期SB295より先行することから、V期と考えられる。

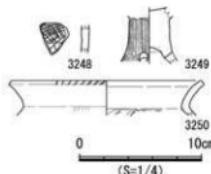


図 1224 SK04407 遺物実測図

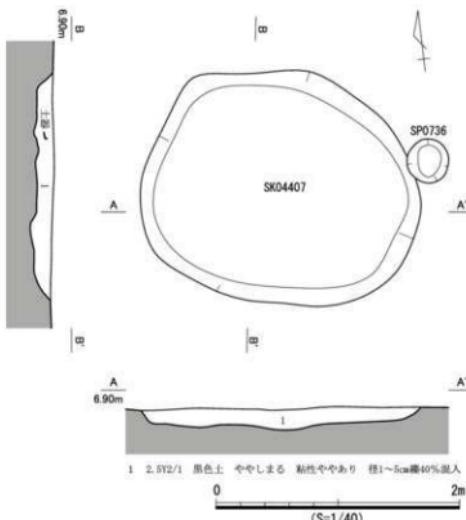


図 1225 SK04407 遺構図

## SK04413 (遺構: 図 1227、遺物: 図 1226)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側をSB302に切られる。

**形状** 長軸長約1.2m、深さ約0.1mである。北西辺と南西辺は比較的直線的であるが、全体形は不明である。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 11層に分層した。多くの土層に分層でき、ブロック状に混入する土も多数あることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器799点が出土した。遺物の大半はVI期～VII期の土器片である。

**出土遺物** 3251はIV期甕B2類。口縁部が屈折して内傾し、端部は内傾面を形成する。

**時期** 出土遺物の時期とVII期SB302に切られることから、VII期と考えられる。

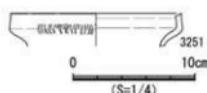


図 1226 SK04413 遺物実測図

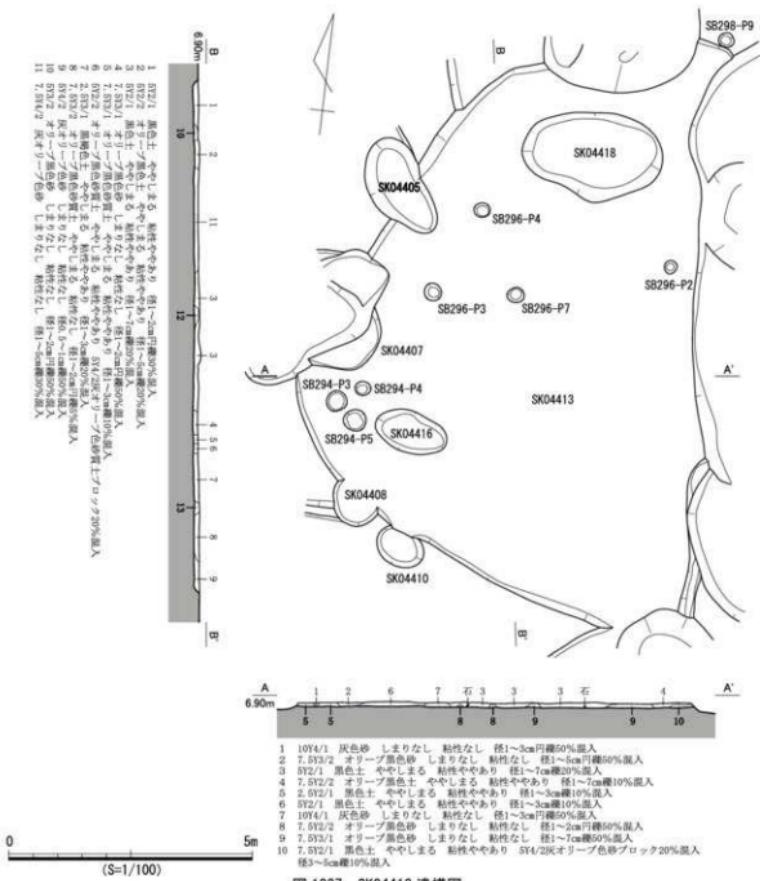


図 1227 SK04413 遺構図

SK04414 (遺構: 図 1228、遺物: 図 1229)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB294 と SB296 を切り、SK04409 と SB312 に切られる。

**形状** 長軸長約 1.9m、深さ約 0.1m であり、南側は不明であるが、全形は方形状を呈すると考えられる。底面はほぼ平坦で、壁面は直立気味である。

**埋土** 2 層に分層した。大半は黑色土であるが、砂層がブロック状に含まれる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 375 点が出土した。

**出土遺物** 3252 は V 期～VI 期壺底部。3253 は V 期壺 A2b 類。口縁部が短く直立する。3254 は V 期壺

A類胴部。直線文間に刺突文を施文する。3255はVII期壺C2類。3256はVII期壺D1b類。

**時期** 出土遺物の時期とVII期のSB312に切られることから、VII期と考えられる。

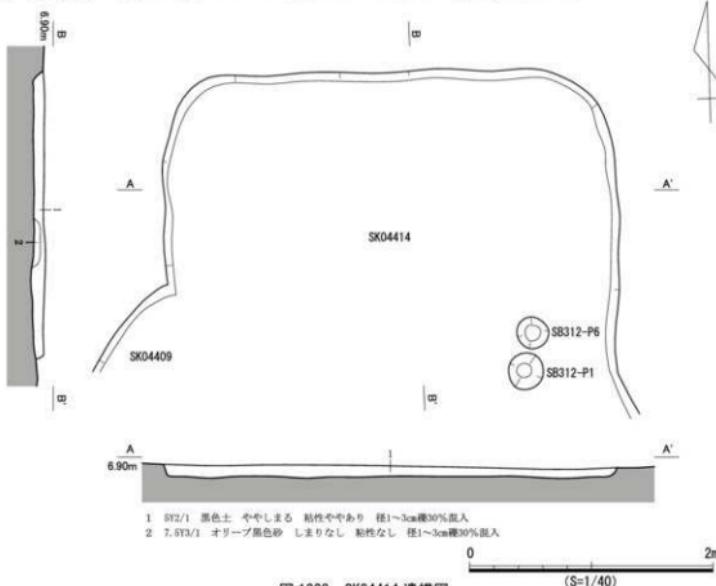


図 1228 SK04414 遺構図

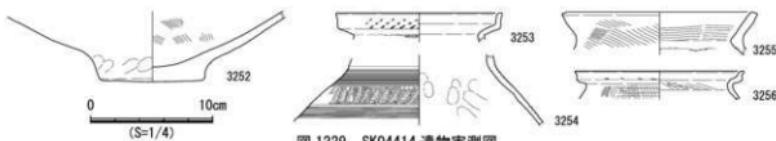


図 1229 SK04414 遺物実測図

SK04418 (遺構: 図 1230、遺物: 図 1231)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB297、SK04413完掘後に検出し、SK04419に切られる。

**形状** 長軸長約3.1m、深さ約0.4mであり、不整楕円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は比較的急で、直線的に立ち上がる。

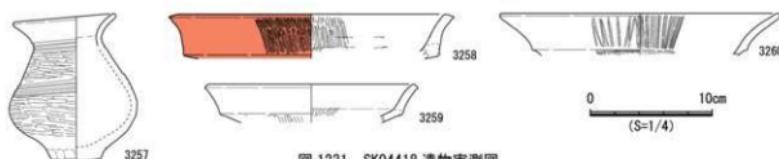
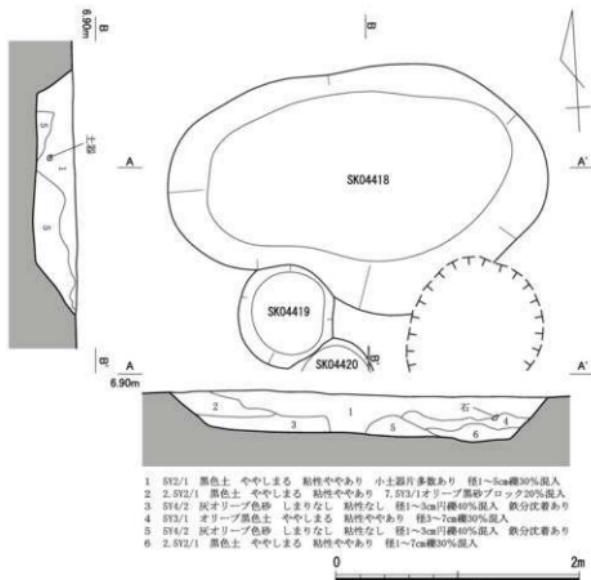
**埋土** 6層に分層した。礫の混入が多く、ブロック土も含まれることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器426点が出土した。

**出土遺物** 3257はI期壺の小型品。ほぼ完存する。口縁部が短く外反し、胴部上半は直線的で最大径が下半に位置する。口頸部境、頸胴部境に太い芯線3条が認められ、頸胴部境は削り出しの段が認められる。3258、3259はV期高杯B2類。3258は口縁部が直立してから外反し、端部は平坦である。

3259は口縁部が強く外反する。3260はV期～VI期高坏B3b類。口縁部が外反し、暗文状の波状文が認められる。

**時期** 出土遺物の時期とVII期SB297、VII期のSK04413より先行することから、V期～VI期と考えられる。



SK04419（遺構：図1233、遺物：図1232）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB296上面で検出し、SK04420に切られる。

**形状** 長軸長約1.0m、深さ約0.2mであり、梢円形を呈する。

**底面** ほぼ平坦で、壁面の傾斜は比較的急である。

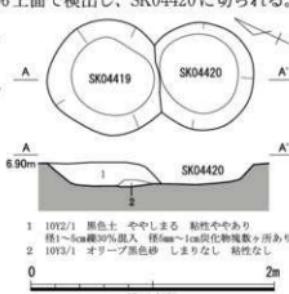
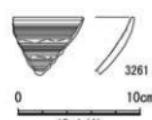
**埋土** 2層に分層した。大部分が黒色土で底面付近に砂層がブロック状に混入する。

**遺物出土状況** 埋土中から土器205点が出土した。

**出土遺物** 3261はVII期高坏

D4d類。多条沈線間に山形文を施す。

**時期** VII期SB296より後出するので、VII期以降である。



## SK04424 (遺構: 図 1235、遺物: 図 1234)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB313完掘後に検出した。

**形状** 長軸長約2.5m、深さ約0.5mであり、不整円形を呈する。底面は丸みを帯びているが、中央付近に段がある。壁面の傾斜は比較的緩やかである。

**埋土** 15層に分層した。中層から下層にかけて砂質土や砂がブロック状に認められ、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器254点、石器類5点が出土した。

**出土遺物** 3262はVII期壺A類。口縁端部上端を拡張する。3263はVI期～VII期壺脚部。脚部が短くハの字に開く。3264、3265はVI期器台B1類。いずれも脚部が柱状気味である。

**時期** 出土遺物の時期と、VII期SB313より先行することから、VII期と考えられる。

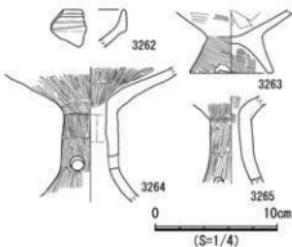


図 1234 SK04424 遺物実測図

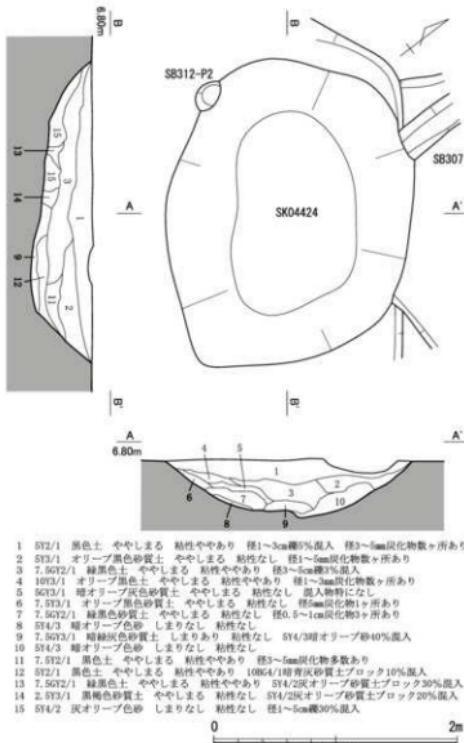


図 1235 SK04424 遺構図

## SK04427 (遺構: 図 1237、遺物: 図 1236)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB306とSB307に切られる。

**形状** 南側をSB307、東側をSB306に切られるので全形は不明だが、およそ方形を呈すると考えられる。底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 単層であり、ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器759点が出土した。土器は繩文土器やV期のものを含む。

**出土遺物** 3266は尖底の底部片。製塙土器に類似する。

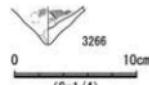
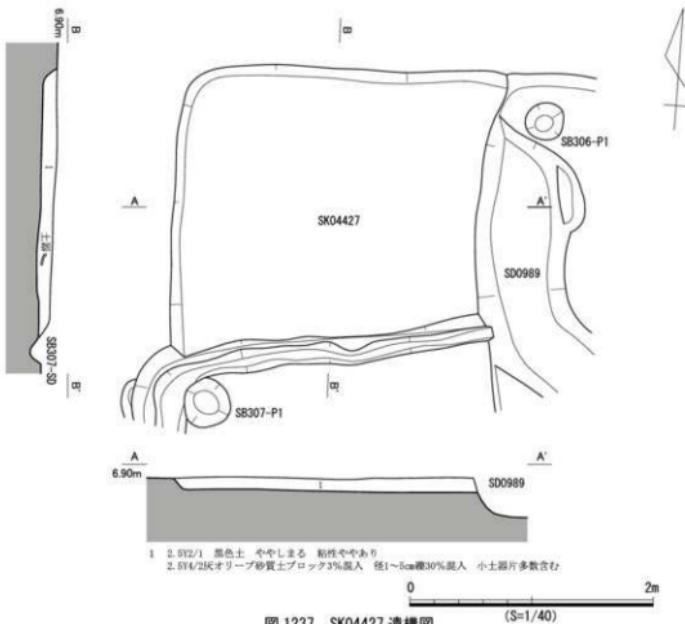


図 1236 SK04427 遺物実測図

時期 V期 SB307より先行するので、V期以前と考えられる。



#### SK04432 (遺構: 図 1239、遺物: 図 1238)

検出状況 西部東側中央の堅穴住居跡密集域に位置し、SB299の埋土上面で検出した。

形状 長軸長約1.6m、深さ約0.3mであり、楕円形を呈する。

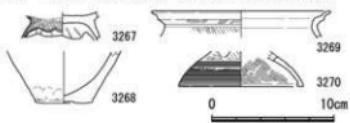
底面はほぼ平坦で、壁面傾斜は比較的急である。

埋土 3層に分層した。3層は底面付近のみで確認でき、1・2層は中央が堆積堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土器463点が出土した。土器片はVI期～VII期のもので、特にVII期～VIII期のものが多い。

出土遺物 3267はVI期～VII期鉢C類脚部。打ち欠きが認められる。3268はVI期～VII期鉢C類底部。3269はVII期甌D3類。

口縁部が外上



方へ屈曲する。

3270はVII期高

坏G3類脚部。

内湾する据部

図 1238 SK04432 遺物実測図

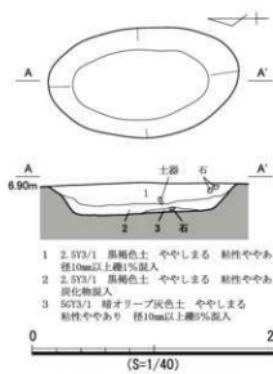


図 1239 SK04432 遺構図

に多条沈線、対向する刺突文を施文する。

**時期** 出土遺物の時期とVII期SB299より後出することから、VII期と考えられる。

#### SK04441 (遺構: 図1240、遺物: 図1241)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB306に切られ、SB0307を切る。

**形状** 長軸長約0.9m、深さ約0.1mであり、円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁面傾斜は比較的急である。底面中央東寄りでやや盛り上がった状態で焼土塊を検出したが、他の底面や壁面に被熱痕跡はみられず、その性格は不明である。

**埋土** 4層に分層した。3層はブロック状に堆積するが、1・2層は水平堆積である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器69点が出土した。

**出土遺物** 3271はVII期壺B3類。口縁端部が平坦で断続的な強いナデ痕跡が認められる。3272はVII期高环G3c類。多条沈線間に山形文、対向する羽状文を施文する。

**時期** 出土遺物の時期とVII期のSB306に切られることから、VII期と考えられる。

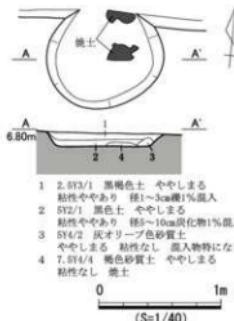


図 1240 SK04441 遺構図

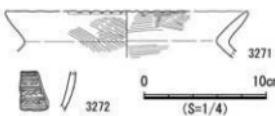


図 1241 SK04441 遺物実測図

#### SK04443 (遺構: 図1242、遺物: 図1243)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB310埋土上面で検出した。

**形状** 長軸長約1.3m、深さ約0.2mであり、不整梢円形を呈する。南西部が最も深く、北側から東側の壁面には平坦面がある。

**埋土** 2層に分層した。上下層ともに炭化物を含み、層界付近で完形の土器3点が出土したことから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器83点が出土した。西側の平坦面上で壺A類の口縁部片(3274)が出土し、東側の層界付近で壺A類の小型品(3273)と手捏ね(3275、3276)が出土した。3273は最深部にてほぼ正位で出土し、3275、3276は南壁沿いで口縁部を下にして出土した。

**出土遺物** 3273、3274はVII期壺A類。3273は小型品。口縁部が短く屈折して、内面に直線文が認められる。頸部に貼付突帯があり、その下に直線文と刺突文が交互に施文される。3274は口縁部が頸部で屈折して開く。端部を上下に拡張し、内面に羽状文が

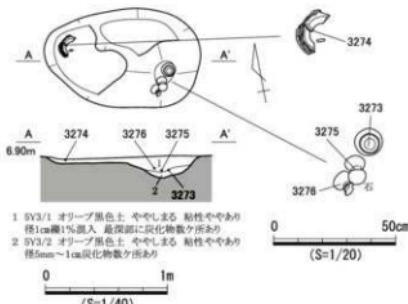


図 1242 SK04443 遺構図

認められる。3275、3276は高杯を模したVII期手捏ねE類。3275は指頭圧痕がそのまま残る粗雑なつくりで、口縁部上半内外面には、多条沈線を模した乱雑な沈線が認められる。3276はミガキのある精緻なつくりである。

**時期** 出土遺物の時期からVII期である。

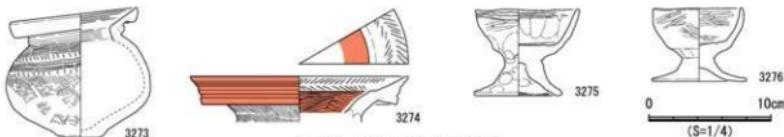


図 1243 SK04443 遺物実測図

**SK04445 (遺構: 図 1245、遺物: 図 1244)**

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB308 埋土上面で検出した。

**形状** 長軸長約0.8m、深さ約0.1mであり、不整円形を呈する。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平堆積であり、礫や炭化物が混入する。

**遺物出土状況** 埋土中から土器127点が出土した。大半がVI期～VII期に含まれる。

**出土遺物** 3277はVI期～VII期斐D類脚部。

**時期** 出土遺物の時期とVII期のSB308より

後出すことから、VII期と考えられる。

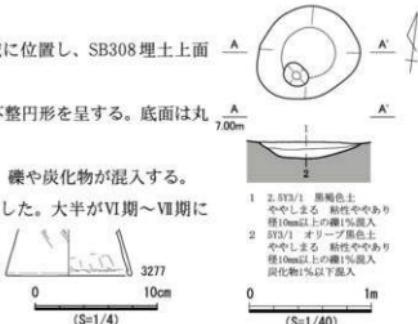


図 1244 SK04445 遺物実測図 図 1245 SK04445 遺構図

**SK04452 (遺構: 図 1246、遺物: 図 1247)**

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SK04910に切られる。本遺構の東側には建物の中央に焼土が検出されたSH15が位置する。

**形状** 長軸長約3.7m、深さ約0.2mであり、長梢円形を呈する。底面は平坦であり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 9層に分層した。底面直上にはオリーブ黒色土である6層が堆積し、その上面から複数回の掘り込みが認められる。その埋土には炭化物の混入が目立ち、焼土も含まれていることから、東側のSH15と何らかの関連性があるかもしれない。

**遺物出土状況** 埋土中から土器837点、石器類2点が出土した。土器の多くはVI期～VII期に属する。

**出土遺物** 3278は長さ48.8cmを測る大型砥石。不整梢円碟の平坦面の一部を底面として使用し、周縁部には敲打痕が多数観察できる。また、全体的に煤が付着している。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

**SK04453 (遺構: 図 1249、遺物: 図 1248)**

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の、SH15とSK04452の間に位置する。

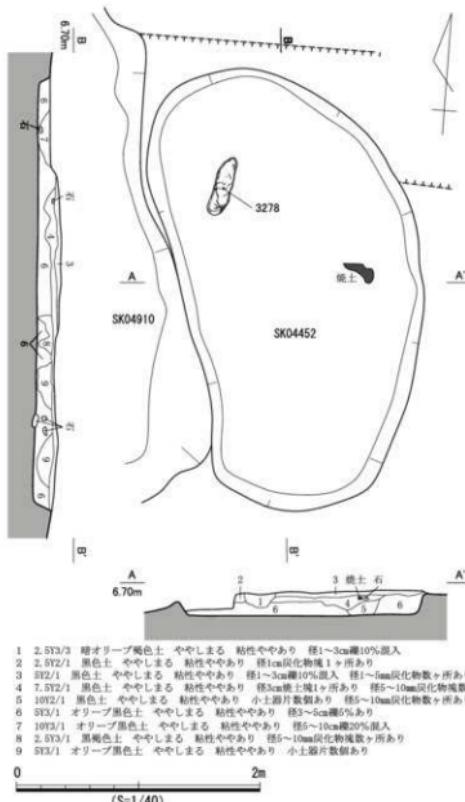


図 1246 SK04452 遺構図

**形状** 長軸長約1.3m、深さ約0.2mであり、不整円形を呈する。

底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 3層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、1・2層に炭化物が含まれる。また、層界に凹凸がみられることから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器93点が出土した。

**出土遺物** 3279はVI期～VII期壺胸部。残存部位の右端に、線刻

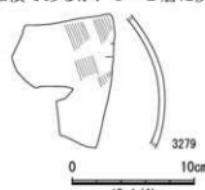


図 1248 SK04453 遺構図

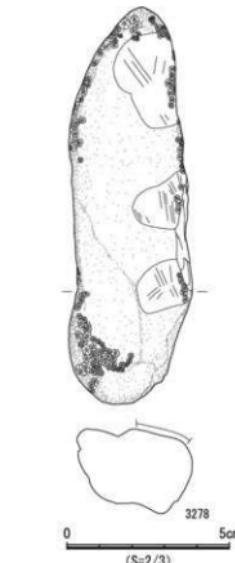


図 1247 SK04452 遺物実測図

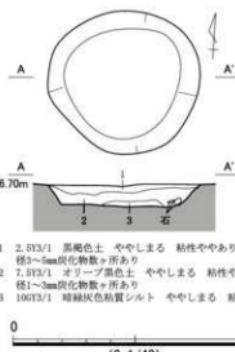


図 1249 SK04453 遺構図

の一部が認められる。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

#### SK04454 (遺構: 図 1251、遺物: 図 1250)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SH15を切る。南側は調査区域外にある。

**形状** 長軸長約1.5m、深さ約0.1mであり、長楕円形を呈する。底面は平坦であり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 6層に分層した。礫の混入が多く、層界の凹凸が顕著であることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器224点が出土した。土器の多くはV期～VII期に属する。

**出土遺物** 3280はV期高环B2a類。口縁部が短く外反する。3281はVI期器台B1a類。ほぼ完存する。

口縁部が直線的に開く。脚部は

柱状を呈し、裾部は外反する。

**時期** VI期の完形の器台が出土

しているが、埋土中にVII期の土器が含まれることと、先行する

SH015がVII期であるため、VII期

と考えられる。

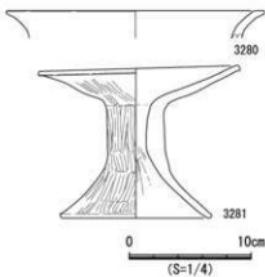


図 1250 SK04454 遺物実測図

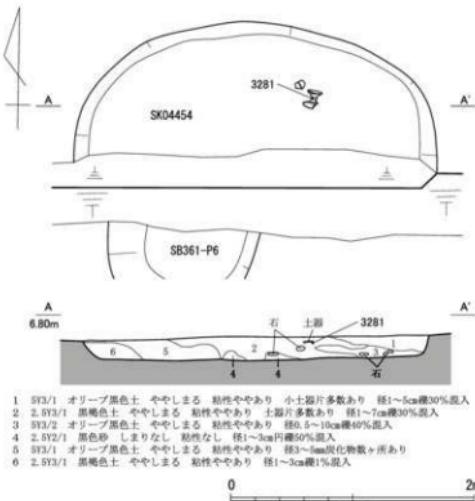


図 1251 SK04454 遺構図

#### SK04458 (遺構: 図 1252、遺物: 図 1253)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB303の埋土上面で検出した。

**形状** 長軸長約1.5m、深さ約0.2mであり、不整形を呈する。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 3層に分層した。下層に炭化物が多く、1層は再掘削後の埋土と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器203点、石器類1点が出土した。

**出土遺物** 3282はIX期の柳ヶ坪型壺。内外面に羽状文が認められる。

**時期** 出土遺物の時期から、IX期と考えられる。

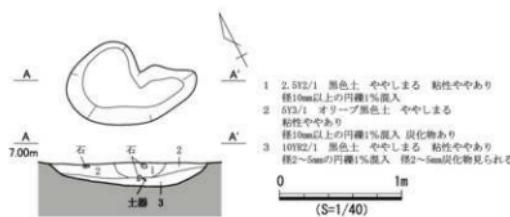


図 1252 SK04458 遺構図

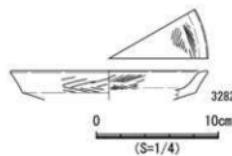


図 1253 SK04458 遺物実測図

SK04459 (遺構: 図 1254、遺物: 図 1255)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。

形状 直径約0.5mの円形を呈する。深さは約0.1mであり、底面は中央部分が円形に凹み、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 灰色砂質土の単層であり、甕がその場で割れて潰れたような状態で出土したことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器43点、

石器類1点が出土した。

出土遺物 3283、3284はV期壺A2b類。

口縁部が短く直立する。3283は胴部上半に直線文が認められる。3284は、胴部上半の直線文間に波状文を施す。

時期 出土遺物の時期から、V期と考えられる。



図 1254 SK04459 遺構図

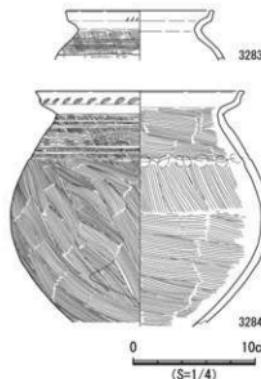


図 1255 SK04459 遺物実測図

SK04485 (遺構: 図 1257、遺物: 図 1256)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SH16-P4に切られる。

形状 南北長約0.5mの不整円形を呈する。深さは約0.2mであり、底面は平坦で、壁面の傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器61点が出土した。

出土遺物 3285はVII期高環G3b類。口縁部外面に多条沈線が認められる。

時期 出土遺物の時期と、VII期～VIII期のSH16に切られることから、VII期と考えられる。

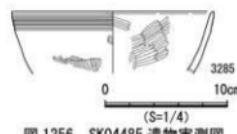


図 1256 SK04485 遺物実測図

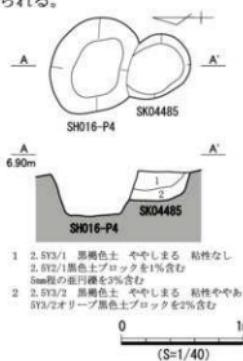


図 1257 SK04485 遺構図

## SK04505 (遺構: 図 1259、遺物: 図 1258)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB335 埋土上面で検出し、SK04506 を切る。

**形状** 長軸長約 0.8 m の不整方形を呈し、深さは約 0.2 m である。

**埋土** 2 層に分層した。ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 86 点が出土した。土器の多くは VII 期のものである。

**出土遺物** 3286 は VII 期高環 D2 類。口縁端部が内傾し、多条沈線を施す。

**時期** 出土遺物の時期と  
VII 期の SB335 を切ること  
から、VII 期と考えられる。



図 1258 SK04505 遺物実測図

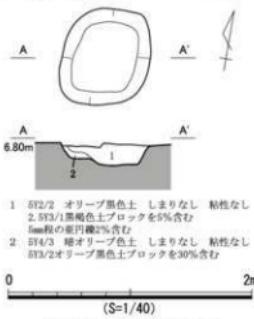


図 1259 SK04505 遺構図

## SK04506 (遺構: 図 1261、遺物: 図 1260)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB335 床面で検出し、SK04505 に切られる。

**形状** 重複する SK04505 によって北半分は失われている。現存長は約 0.5 m で、深さは約 0.1 m である。

**埋土** 黒褐色土の単層であり、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 28 点が出土した。土器の多くは VII 期のものである。

**出土遺物** 3287 は VII 期甕 B3 類。口縁端部に断続的なナデが認められる。

**時期** 出土遺物の時期と、VII 期の  
SB335 と SK04505 に切られること  
から、VII 期と考えられる。

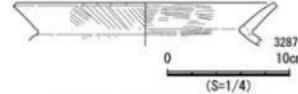


図 1260 SK04506 遺物実測図

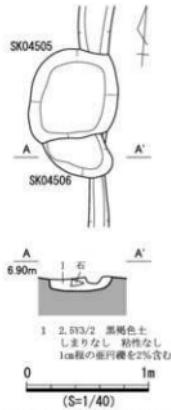


図 1261 SK04506 遺構図

## SK04540 (遺構: 図 1263、遺物: 図 1262)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置するが、住居跡の空閑地にある。

**形状** 直径約 0.4 m の不整円形を呈し、深さは 0.15 m と浅く、底面は丸みを帯びている。

**埋土** 3 層に分層した。中央が窪む堆積であるが、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 11 点が出土した。土器は VI 期～VII 期のものである。

**出土遺物** 3288 は小片のため器形は不明だ。

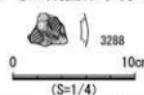


図 1262 SK04540 遺物実測図

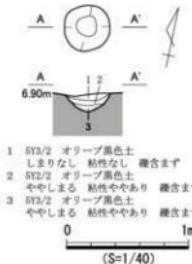


図 1263 SK04540 遺構図

が、おそらくV期～VII期の壺胴部と考えられる。煤が外面に付着し、そのなかに煤が付着しない帯状の部位が平行して2条認められる。煤が付着しない部位は土器表面に何かが覆っていたと考えられる。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期～VII期以降と考えられる。

SK04542（遺構：図1265、遺物：図1264）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB342、SB362、SB367など周囲の竪穴住居跡との重複が著しい。後出する竪穴住居跡によって、掘形の大半が滅失し、埋土の中央のみを確認した。

**形状** 平面形の規模は不明である。深さは埋土上面から底面まで約0.1mを測る。

**埋土** 黒褐色土が単層で堆積するが、その成因は不明である。

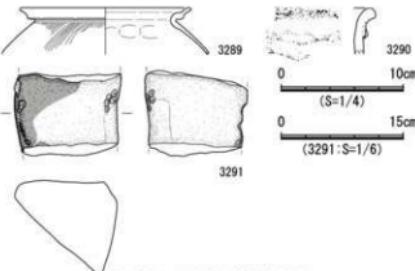


図1264 SK04542 遺物実測図

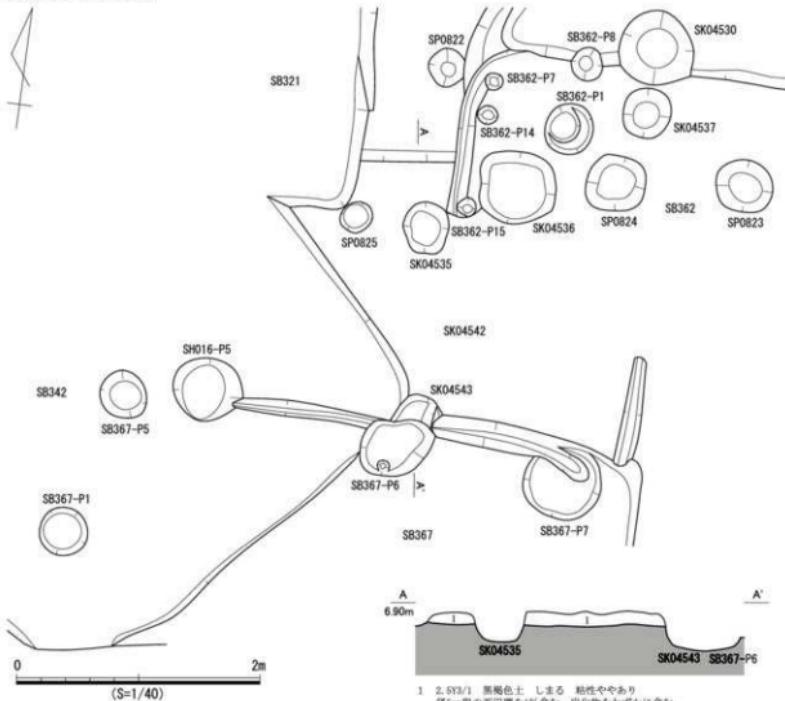


図1265 SK04542 遺構図

**遺物出土状況** 埋土中から土器329点、石器類3点が出土した。土器は主にVI期～VII期のものである。

**出土遺物** 3289はVII期窯D3類。口縁部が弱く屈曲し、頸部に沈線が認められる。3290は繩文時代晩期後半の深鉢。口縁端部が肥厚しながら外反し、直下にO字状の押圧のある突帯を貼付する。3291は叩石。側縁の一部に敲打痕が観察できる。また、表面が被熱しており、上下端部は石の表面に対してほぼ直角方向に割れている。

**時期** 出土遺物の最新時期はVII期であるが、VII期の竪穴住居跡群に切られられており、出土遺物の時期と遺構の重複関係から想定できる時期に矛盾がある。遺構の重複が著しく、検出時に遺構の平面形を誤認した可能性がある。

SK04573（遺構：図1267、遺物：図1266）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB377、SB379、SB381床面で検出した。

**形状** 幅約1.5mで、全体形はL字状に屈曲する。

深さは約0.1mで、底面は平坦である。壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 2層に分層した。層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器714点が出土した。大半がVI期～VII期の土器片である。

**出土遺物** 3292～3294はVII期窯D3類。口縁部が屈曲し、頸部が強く膨らむ。端部をわずかに肥厚し、凹面が認められる。脚部はハの字に開き、端部を折り返す。3295はVII期高壺D類脚部。

**時期** 出土遺物の時期とVII期のSB377に切られることから、VII期～VIII期と考えられる。

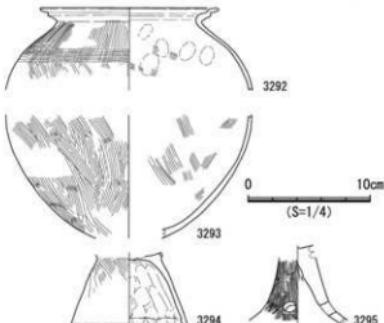


図1266 SK04573 遺物実測図

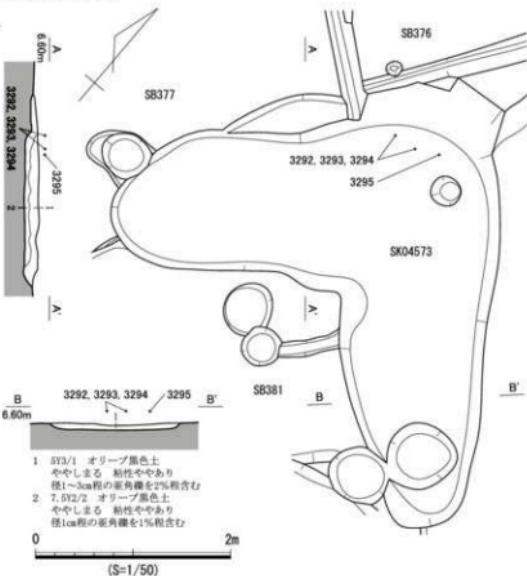


図1267 SK04573 遺構図

1 SB371 オリーブ黒色土  
ややしづる 粘性ややあり  
砂1~3mmの粘土質土を2%程度む

2 SB372 オリーブ褐色土  
ややしづる 粘性ややあり  
砂1mmの粘土質土を1%程度む

3 SB373 黒褐色土  
ややしづる 粘性ややあり  
砂1mmの粘土質土を1%程度む

SK04617 (遺構: 図 1268、遺物: 図 1269)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB356に切られ、SB348、SB349を切る。

**形状** 長軸長約5.5m、短軸長3.6mの不整梢円形を呈する。深さは約0.1m～0.2mで、底面はやや凹凸が認められる。

**埋土** 3層に分層した。上層から土器片や礫、炭化物がまとまって出土し、中層にはブロック土が認められることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,257点、石器類14点が出土した。土器は主に埋土上層から礫や炭化物と混在しており、出土した土器片には断面に煤が付着するものが認められる。破片化した土器片を礫や炭化材とともに、廃棄した可能性がある。

**出土遺物** 3296はVII期壺  
A5類。口縁部に3個1組  
の棒状浮文を貼付し、そ  
の上にキザミが認められる。

2帯の羽状文があり、貝による施文の可能性がある。内外面に赤彩が認められる。3297はⅧ期壺B3類。口縁部が屈折して、直線的に伸びる。端部には断続的な強いナデによって形成された平坦面が認められる。口縁部外面、胴部外面に粗いハケ目が認められる。3298、3299はⅧ期壺C類。3298は口縁部がわずかに内湾しながら直立して、端部は平坦である。胴部の膨らみはなだらかで、ハケ目が認められる。3299は口縁部がわずかに外反しながら直立して、端部は尖り気味である。胴部は球形にちかく、ハケ目が認められる。3300はⅧ期壺の胴部。頸部が細身のため、壺C類の可能性がある。3301はⅦ期壺E3類。口縁部が短く直線的に伸び、頸部での屈曲が弱い。端部は断続的な強い

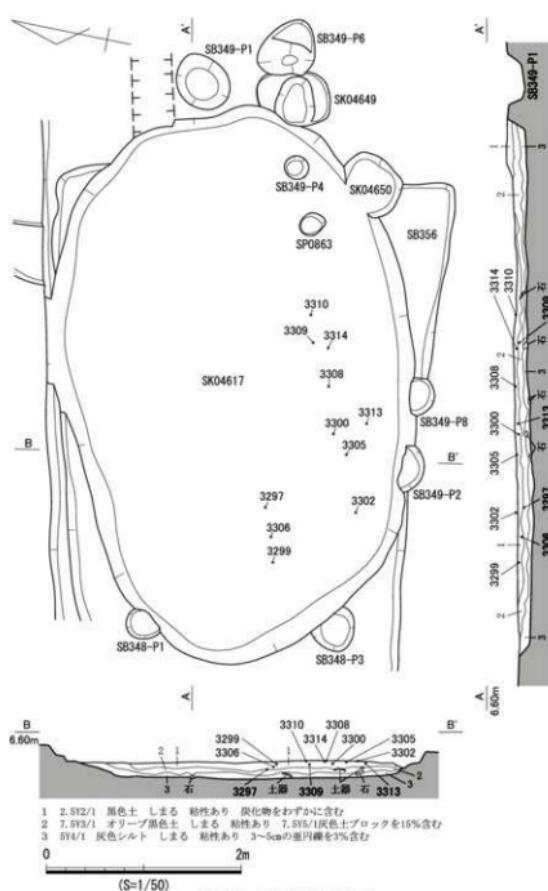


図 1268 SK04617 遺構図

ナデによって、平坦面を形成する。胸部の膨らみはなだらかで、最大径は口径とほぼ同じである。3302はVI期～VII期の甕A3類。口縁端部が直立して、端部には強い平坦面を形成する。3303、3304、3306はVII期甕D2b類。3304は口縁部が短く屈曲する。端部はやや尖り気味で、肩部が強く張る。3303の端部はやや丸みをもつ。3305はVII期～VIII期甕D類脚部。細身の付根から脚部が直線的に伸び、端部を折り返す。3307はVII期高坏G3a類。口縁部がわずかに内湾し、坏底部との屈曲が弱い。3308はVII期高坏D類の坏底部。内外面、破断面に煤が付着する。3309はVII期高坏D類脚部。外面に煤が付着し、裾部を打ち欠いているかもしれない。3310はVII期手捏ねC類。3311は器形が不明で、胎土、

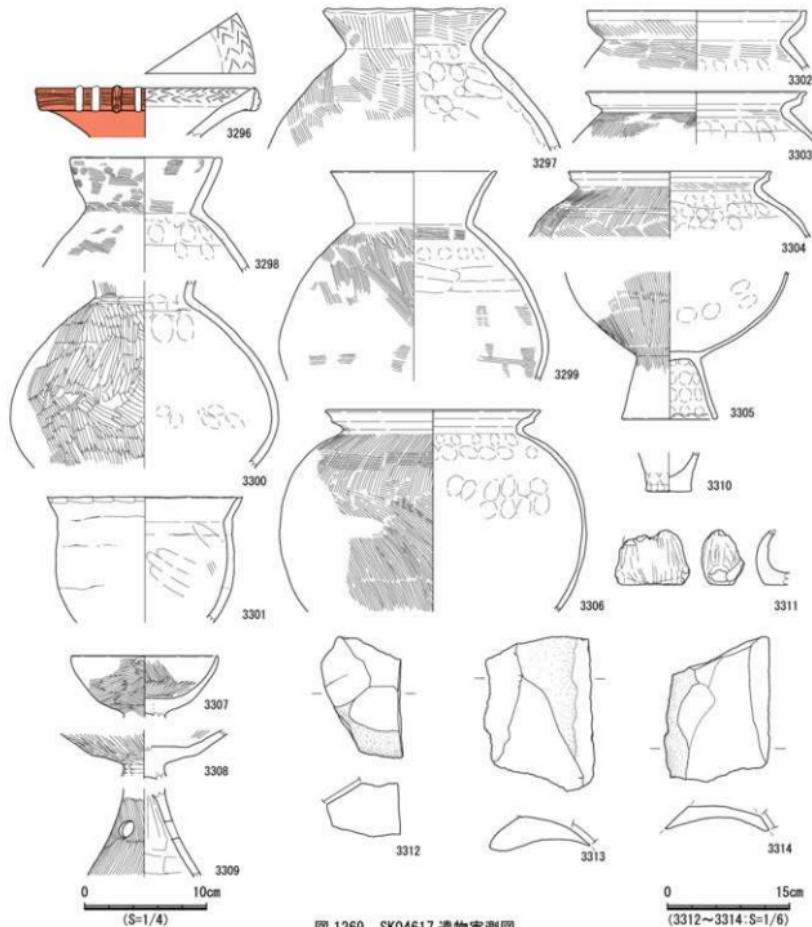


図 1269 SK04617 遺物実測図

調整からVII期と考えられる。底面の形状は梢円形を呈し、胴部はあまり膨らまず上部は強くすぼまる。底部の側縁に突出した部位が認められる。対照となる位置にもわずかに突出する部位を認めることができる。3312～3314は砥石。いずれも大きく割れており、それぞれ砥面がわずかに観察できる。割れた面や自然面の様相から、本来は同一個体であった可能性が指摘できる。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。先行するSB356がVII期、後出するSB345、SB348、SB349がVII期～VIII期であるため、かなりの短期間のうちに掘削し、埋没したと考えられる。

SK04667（遺構：図1270、遺物：図1271）

**検出状況** 西部東側中央の堅穴住居跡域密集域に位置し、SB353、SB357、SB359、SB403、SB407など周囲の遺構との重複が著しい。後出する遺構により掘形の大半が滅失し、埋土の中央部分と南壁の一部のみを確認した。

**形状** 平面形の規模は不明である。深さは埋土上面から底面まで0.15mを測り、南壁の壁面傾斜は急である。

**埋土** 2層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。  
**遺物出土状況** 埋土中から土器1,422点が散在して出土した。

**出土遺物** 3315はほぼ完存するVI期壺F2類。口縁部が短く直立気味で、胴部は肩部が強く張る。胴部下半は直線的に小さな底部に向かう。3316はVI期壺A4類。口縁部がわずかに屈曲して、刺突文、直線文が認められる。3317はVII期壺B3類。口縁部が短く屈折して、端部に強いナデが認められる。

**時期** 出土遺物の時期とVII期の堅穴住居跡群に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

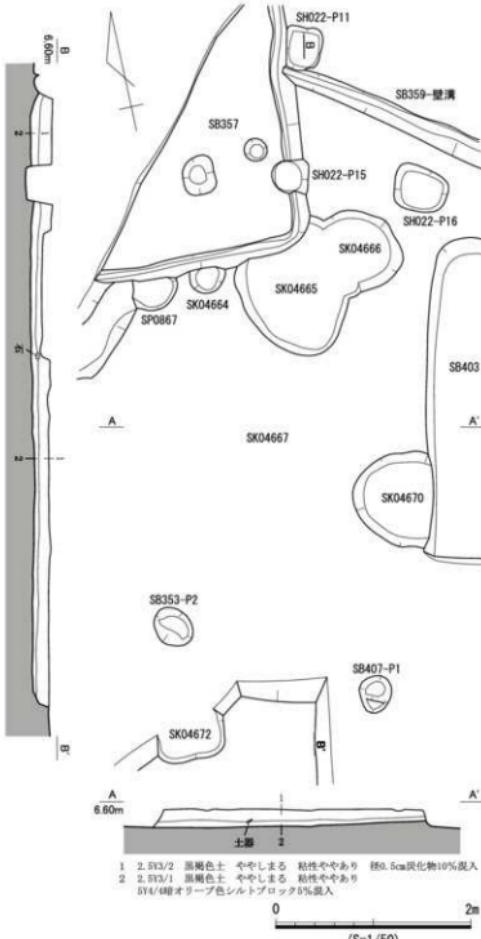


図1270 SK04667 遺構図

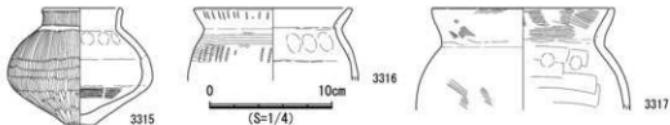


図 1271 SK4667 遺物実測図

SK4673 (遺構: 図 1273、遺物: 図 1272)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB353 と SB407 に切られる。

形状 周囲の遺構との重複が著しく、全形は不明である。深さは最大で約 0.3 m が認められる。

埋土 3 層に分層した。全体的にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器 181 点が出土した。土器はⅦ期～Ⅷ期の小片が含まれている。

出土遺物 3318 はⅧ期高坏。径の小さい坏底部から口縁部が直線的に立ち上がる。坏底部の段が認められる。端部付近の内外面には煤が付着する。脚部を破損するが、断面には被熱が認められる。

時期 出土遺物の最新時期はⅧ期であるが、本遺構はⅦ期の SB353 と SB407 に切られており、出土遺物の時期と、遺構の重複関係から推定できる時期に矛盾がある。周辺との遺構の重複が著しいため、検出時に平面形を誤認した可能性がある。

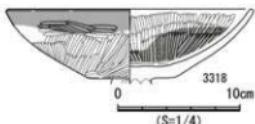
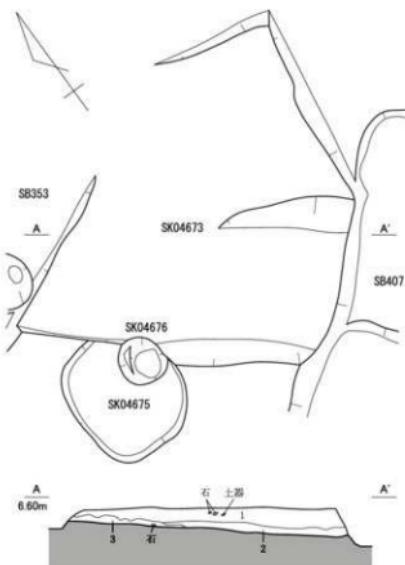


図 1272 SK4673 遺物実測図



1. 2.5m/1 黒褐色土 しまる 黏性やあり 5t/1灰色土ブロック5%含む  
1.25m以下の土層片1%含む  
2. 2.5m/1 黒褐色土 しまる 黏性やあり 5t/1灰色土ブロック20%含む  
1.02mの土層片1%含む  
3. 0.14/1 灰色土 ややしまり強 黏性やあり  
2. 0.03/1黒褐色土ブロック15%含む

0 2m  
(S=1/40)

図 1273 SK4673 遺構図

SK4678 (遺構: 図 1275、遺物: 図 1274)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB403 により東半分を滅失する。

形状 現存で長軸長約 1.1 m、深さ約 0.1 m と浅い。底面は平坦で、壁面の傾斜は北側が急、南側が緩やかである。

埋土 単層で、礫と炭化物をわずかに含む。しかし、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器124点が散在して出土した。

**出土遺物** 3319はVII期壺H類胴部。下膨れ気味となる胴部がほぼ完存する。底部がややくぼむ。

**時期** 出土遺物の時期とVII期のSB403に切られることから、VII期と考えられる。

**SK04680 (遺構: 図1276、遺物: 図1277)**

**検出状況** 西部東側中央の竪穴

住居跡密集域に位置し、後出す  
るSB403の掘場底面で検出した。

**形状** 長軸長約0.7mの不

整円形を呈する。深さは約  
0.4mで、底面は丸みを帯び、  
壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 5層に分層した。1  
～3層は再掘削後の埋土  
と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中か  
ら土器155点、石器類1点、  
木製品2点が出土した。土

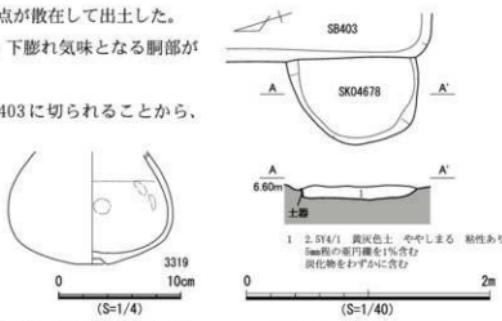


図 1274 SK04678 遺物実測図

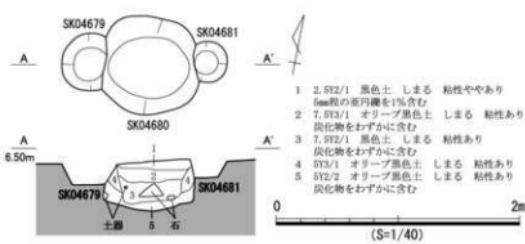


図 1276 SK04680 遺構図

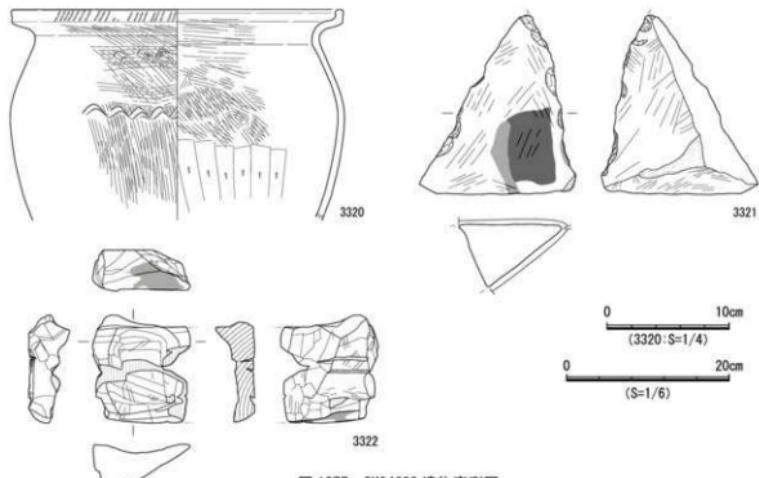


図 1277 SK04680 遺物実測図

器はVI期～VII期のものが多い。IV期壺(3320)も出土したが、これは本遺構の直下にあるSZ148と関連するかもしれない。

**出土遺物** 3320はIV期壺A3類。口縁端部が直立する。胴部には波状文が認められる。3321は砥石。亜円礫の平坦面を砥面として使用している。砥面には固化した炭化物が付着している。3322は板材。中央に方形の削り抜きがあり、表面に多数の線状痕が残る。

**時期** 出土遺物の時期とVII期のSB403に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

#### SK04717 (遺構: 図1279、遺物: 図1278)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB378埋土上面で検出した。

**形状** 長軸長約0.6mの不整円形を呈する。深さは約0.3mで、底面は東側が窪む。なお、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 3層に分層した。東側からの堆積が推定できるものの、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器84点が出土した。

**出土遺物** 3323はV期壺A類脚部。脚部が付根から短く外反して、端部上端をわずかに拡張する。外面には擬凹線が認められる。

**時期** 出土遺物の時期はV期であるが、VI期のSB378を切ることからV期の遺物は混入であり、本遺構の時期はVI期以降と考えられる。

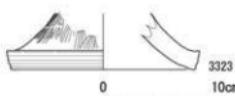


図1278 SK04717 遺物実測図

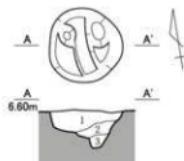


図1279 SK04717 遺構図

#### SK04738 (遺構: 図1281、遺物: 図1280)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB384を切り、SA021-P5に切られる。

**形状** 長軸長約0.9mの不整梢円形を呈する。深さは約0.3mで、底面はほぼ平坦である。壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 4層に分層した。全体的に礫の混入が目立つ。

**遺物出土状況** 埋土中から土器137点が出土した。

**出土遺物** 3324はVI期器台Bla類。脚部が直立気味である。

**時期** 出土遺物の時期はVI期

であるが、VII期～IX期のSB384

を切ることからVI期の遺物は

混入であり、本遺構の時期は

VII期以降と考えられる。

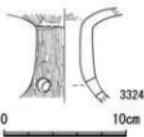


図1280 SK04738 遺物実測図



図1281 SK04738 遺構図

SK04750 (遺構: 図 1282、

遺物: 図 1283)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡域密集域に位置し、SB404の床面で検出した。

**形状** 長軸長約2.8m、短軸長約1.5mであり、不整橢円形を呈する。深さは約0.3mである。断面形状はおよそ逆台形状を呈し、底面は東側へ向かって高くなり、やや凹凸が認められる。壁面の傾斜は急である。

**埋土** 3層に分層した。

層界の凹凸が顕著で、ブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器429点が散在して出土した。

**出土遺物** 3325はVII期窓B3類。口縁部が外反し、端部は外傾する平坦面を有する。3326はVII期～Ⅷ期窓D類脚部。打ち欠きが認められる。3327はV期高窓J類脚部。脚裾部にあたると考えたが、壺胴部の可能性もある。渦巻文状のスタンプ文が認められ、それぞれ円形スタンプ文の間を沈線で連結する。3328はVII期高窓C4d類。口縁部が内湾し、内面に多条沈線と山形文を交互に施文する。3329はVII期高窓G3b類。口縁部が窓底部で屈曲して、内湾しながら立ち上がる。上半には多条沈線が認められる。3330はVII期器台B3類。3331はVI期～VII期の土製品。中央に0.3cmの孔のある土器。

**時期** 出土遺物の時期とVII期のSB404に先行することから、VII期と考えられる。

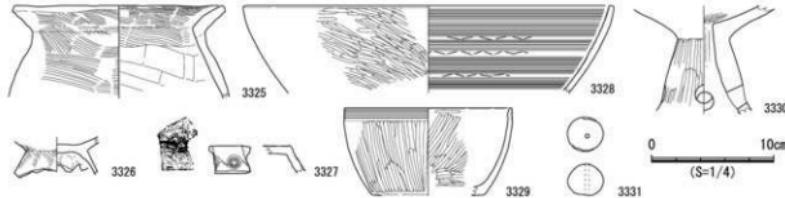


図 1283 SK04750 遺物実測図

SK04751 (遺構: 図 1284、遺物: 図 1285)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡域密集域に位置し、SB404の埋土上面で検出した。

**形状** 長軸長約1.5m、短軸長約0.4mの不整橢円形を呈する。深さは0.35mである。底面は中央部分が深く、南北壁面に一段の平坦面を有する。

**埋土** 4層に分層した。礫をほとんど含まない堆積であるが、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器548点、石器類3点が出土した。

**出土遺物** 3332はVII期～IX期の壺。口縁部が直線的に外傾し、端部は強い平坦面を形成する。頸部に断面三角形の突帯を貼付する。3333はVII期壺D3類。口縁部が外方に屈曲する。上段が強く外反し、端部はわずかに肥厚する。

**時期** 出土遺物の時期と、VII期のSB404を切ることから、VII期以降と考えられる。

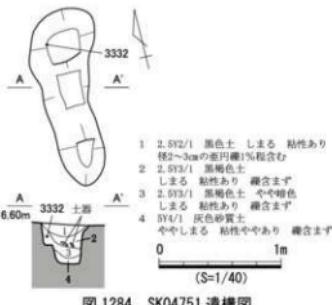


図 1284 SK04751 遺構図

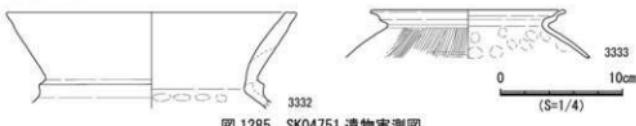


図 1285 SK04751 遺物実測図

#### SK04753 (遺構: 図 1286、遺物: 図 1287)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡域密集域に位置し、東側は調査区域外にある。SB392の床面で検出した。

**形状** 南北長約1.3mで、確認できた範囲は不整梢円形を呈する。深さは約0.4mで、底面は丸みを帯び、壁面は北側が緩やかで、南側が急である。

**埋土** 3層に分層した。ほぼ水平に堆積しているが、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器179点が散在して出土した。

**出土遺物** 3334はVII期壺A5類。内面には振幅の短い波状文が2带認められる。3335はVII期高環G1類。口縁部が直線的に外傾しながら立ち上がる。端部は内傾面が形成され、沈線を施す。脚部は付根から円錐形に広がり、裾部がわずかに内湾する。外面に煤が付着する。3336はVII期高環G3類脚部。多条沈線が施文される。3337はVII期高環D類脚部。

**時期** 出土遺物の時期とVII期のSB392に切られることから、VII期と考えられる。

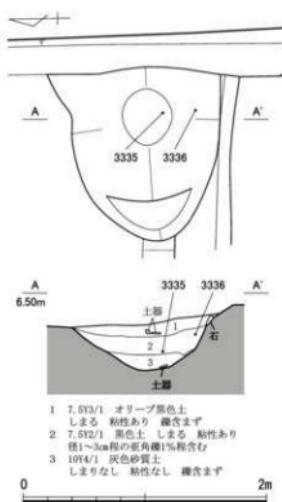


図 1286 SK04753 遺構図

#### SK04849 (遺構: 図 1288、遺物: 図 1289)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡域密集域に位置し、北東側をSB410とSB418に削平されている。

**形状** 平面形の規模は不明である。確認できた西辺と南辺は直線的で、ほぼ直角に屈曲することが



図 1287 SK04753 遺物実測図

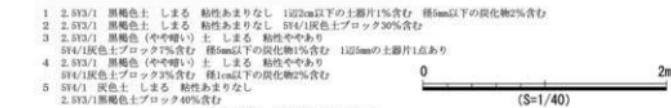
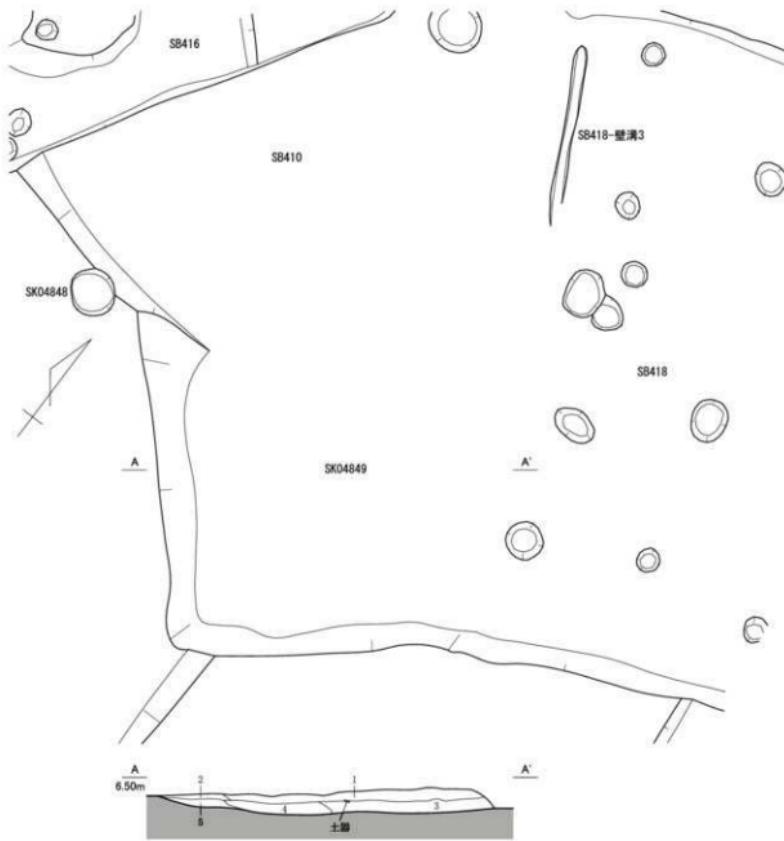


図 1288 SK04849 遺構図

1. 2. SY3/1 黒褐色土 しまる 粘性あまりなし 1面2cm以下の土器片1%含む 程5mm以下の炭化物2%含む  
 2. 2. SY3/1 黒褐色土 しまる 粘性あまりなし SY4/1灰色土ブロック30%含む  
 3. 2. SY3/1 黒褐色(やや暗い) 土 しまる 粘性ややあり  
 SY4/1灰色土ブロック7%含む 程5mm以下の炭化物1%含む 1面5mmの土器片1点あり  
 4. 2. SY3/1 黒褐色(やや暗い) 土 しまる 粘性ややあり  
 SY4/1灰色土ブロック3%含む 程1cm以下の炭化物2%含む  
 5. SY4/1 灰色土 しまる 粘性あまりなし  
 2. SY3/1黒褐色土ブロック40%含む

0  
2m  
(S=1/40)

ら、方形状となる可能性がある。

**埋土** 5層に分層した。ブロック土の混入が多く、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器830点、石器類2点が出土した。

**出土遺物** 3338はVI期～

VII期の壺胴部。線刻らしき文様が認められる。3339はVII期高坏G3c類脚部。多条沈線と連弧文3帯が認められる。連弧文は上半の沈線1～2条の間に施文される。3340は砥石。扁平な亜円礫を素材とし、平坦な表裏面を底面として使用している。また、側縁には敲打痕が残る。

**時期** 出土遺物の時期と、VII期のSB410とSB418に切られることから、VII期と考えられる。

SK04872（遺構：図1290～1292、遺物：図1293～1294）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SP0928に切られ、SB425など複数の竪穴住居

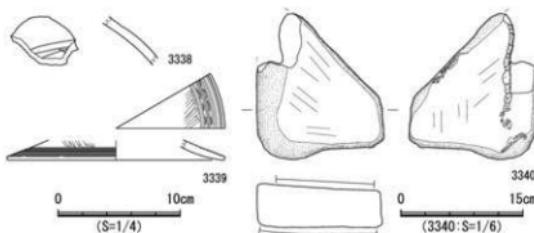


図1289 SK04849 遺物実測図

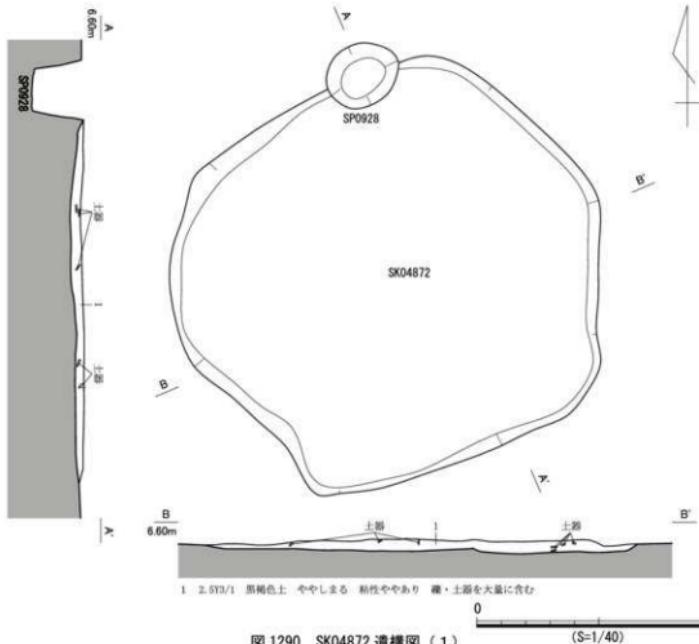


図1290 SK04872 遺構図（1）

跡を切る。

**形状** 長軸長約3.6m、短軸長約3.2mで、不整形を呈する。深さは約0.1m～0.2mである。底面はやや凹凸があり、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 単層であり、礫や土器片を多く含む。土器片が東側でまとまって出土していることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器5,482点、石器類20点が出土した。その多くがVII期～IX期の土器片で

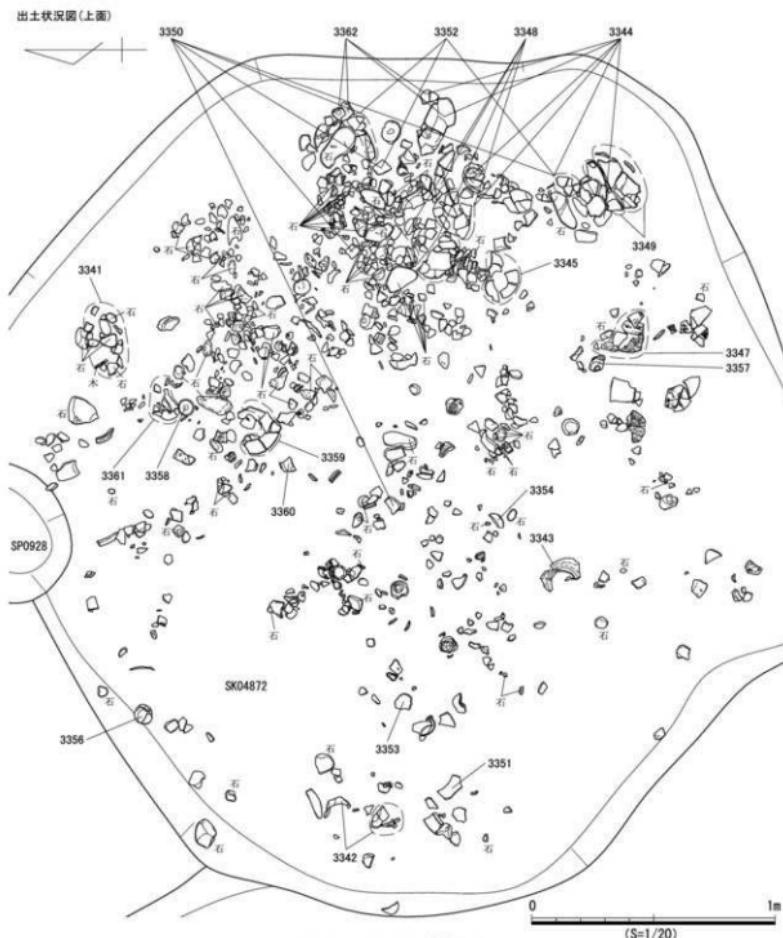


図 1291 SK04872 遺構図(2)

あり、被熱痕や打ち欠きのある土器片も出土した。土器片は主に東側に集中して出土し、壺・甕類の残りがよいものの、数m離れた土器片が接合していることから、この場所に据えられたというよりは廃棄された可能性が高い。また、複数時期の残りのよい個体が出土していることから、竪穴住居跡廃絶後に、長い期間廃棄土坑として使用されたと考えられる。

**出土遺物** 3341はVII期壺A5類。内面に羽状文が認められる。3342はVII期壺C類。口縁部が短く直立して、やや外反する。頸部には突帯を貼付し、その上に刺突文を加える。3343 V期～VI期壺D3a類。頸部が外反し、口縁部が直立する。3344、3345はIX期壺C類。口縁部が外反して、端部を丸くおさめる。3344の胴部は球形にちかく、上半には断面の浅いハケ目、下半はケズリが認められる。底部はやや突出する。3345は頸部直下に断面の浅い波状文が認められる。3346はVII期の壺胴部。頸部から胴部が大きく膨らむ。大型品のわりには器壁が薄く、胴部上半には線刻状の縦位の文様らしきものが認められる。3347はVII期～IX期の壺胴部。上半に文様らしきハケ目が認められる。3348、3349はVII期の壺胴部。突出した底部から胴部が内湾しながら、大きく開く。3348の底部外面にはケズリが認められる。3349の胴部上半には線刻状にもみえる右下がりの沈線が認められる。3350はVII期甕C2類。口縁部がわずかに内湾する。3351、3352はVII期甕D2b類。口縁部が短く屈曲する。上段が直立て、外反する。端部は平坦である。頸部直下にヨコハケが認められる。3352は肩部が強く張り、胴部は倒卵形を呈する。胴部上半にはハケ目が認められ、脚部は直線的に開く。3353～3357はVII期～VIII期甕D類脚部。3354、3356は脚裾部を打ち欠き、平坦に整えている。3353、3355は脚裾部に打ち欠き、破断面には被熱が認められる。3358はVII期E類甕脚部。脚部が短くやや内湾する。3359はVII期高杯D1類。口縁部が杯底部から内湾しながら、大きく開く。杯底部の段がわずかに認められる。3360はVII期高杯C類脚部。3361はVII期高杯D類脚部。脚部が外反しながら開き、穿孔が縦位に2個配置される。3362はVII期高杯G1類。口縁部が杯底部から内湾しながら立ち上がり、その屈曲が弱い。内面の段は認められない。脚部は付根から外反して開く。3363は砥石。楕円礫の表裏面を底面として使用し、底面周縁に敲打痕が残る。

**時期** 出土遺物の時期とVII期のSB425などの竪穴住居跡群を切ることから、VII期～IX期と考えられる。

出土状況図(下面)

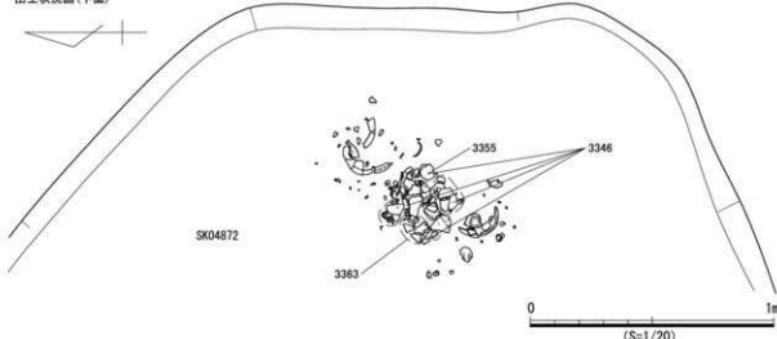


図1292 SK04872 遺構図(3)

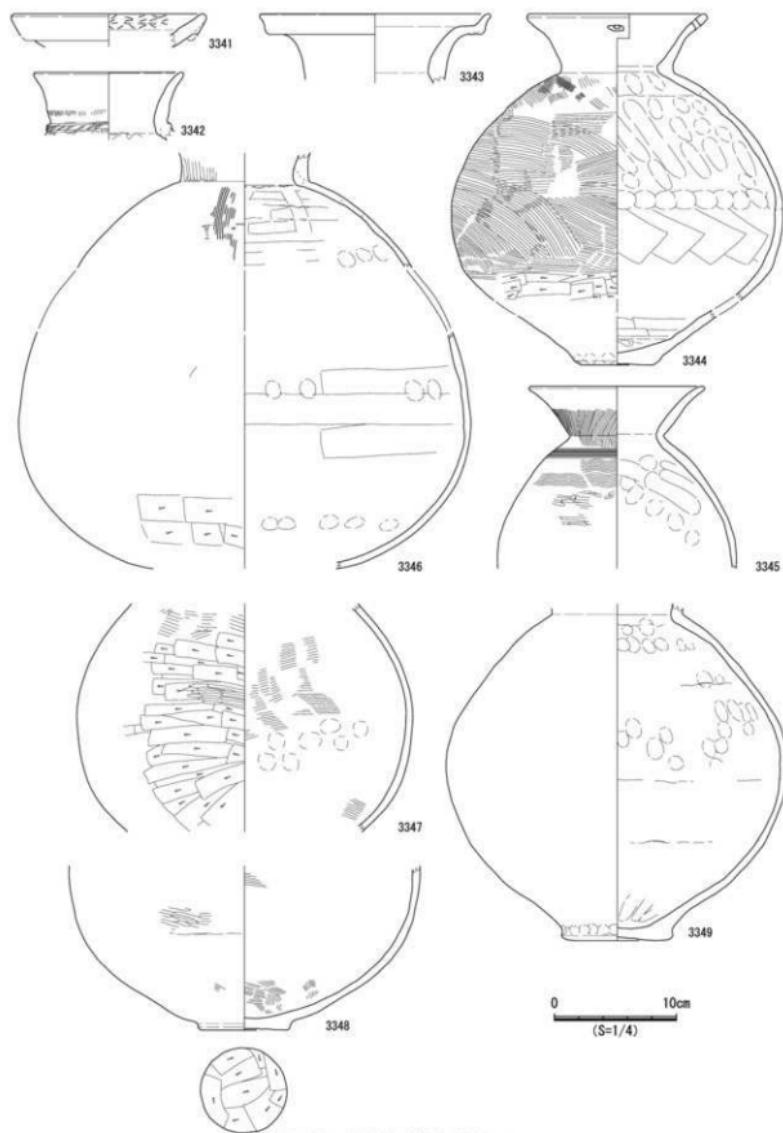


図 1293 SK04872 遺物実測図 (1)

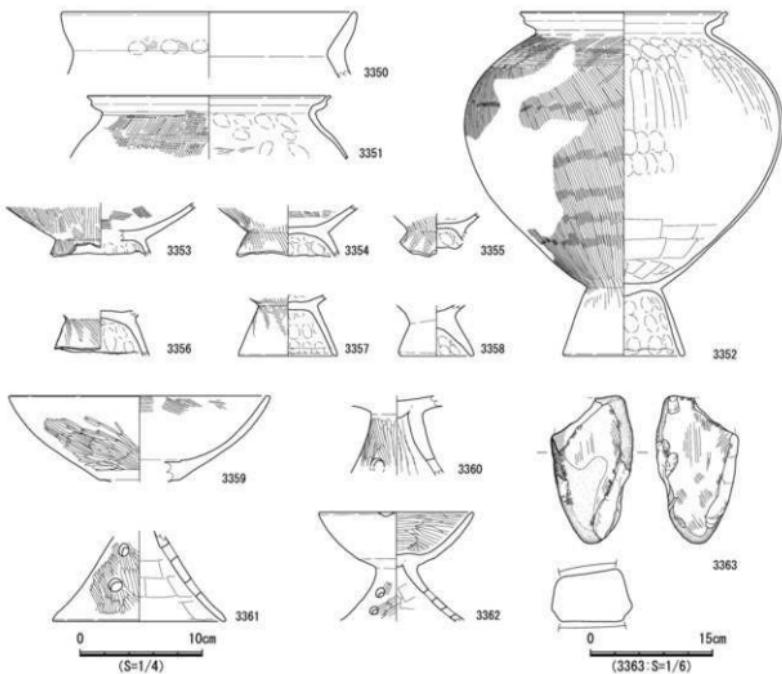


図1294 SK04872 遺物実測図（2）

SK04878（遺構：図1295、遺物：図1296）

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB393とSB433の間にあり、竪穴住居跡との重複はない。遺構の平面形は不明瞭であった。

**形状** 南北長は約2.0mを測る。各辺とも直線的で、平面形は長方形と考えられる。深さは約0.7mで、底面は緩やかに丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 3層に分層した。ブロック土の混入が多いことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,023点、石器類1点が出土した。土器はVII期～VIII期のものが多く、わずかに出土したIX期の土器は混入と考えられる。

**出土遺物** 3364はVII期壺A1b類。口縁端部下端を拡張して、羽状文を施文する。内面にも羽状文が認められる。3365はVII期～VIII期の壺E類。口縁部が頸部で屈折して、強く外反する。内外面に赤彩が認められる。3366はIX期の二重口縁壺。口縁部が屈曲するが、外面の屈曲部は粘土紐を貼付して形成しているため、内面は外面ほど屈曲しない。3367、3368はVII期壺D3類。口縁部が外方に屈曲する。3367の端部は肥厚気味で、平坦面が形成される。内面にはわずかな凹面が認められる。頸部にはやや幅広な沈線が認められる。3368の口縁端部は丸く、胴部は肩部が強く張る。3369はVII期高环D4類。

口縁部が内湾し、多条沈線と山形文で施文する。文様帶最下段の段は認められない。

3370はⅦ期高窓E類脚部。付根が細身で、脚部は付根から強く外反する。透孔は継位2段で千鳥状に配置される。

3371はⅦ期器台C類脚部。脚部下端の高さを揃えるように打ち欠いた可能性があり、断面には被熱が認められる。

3372は砥石。円礫の表裏面を砥面として使用し、砥面は著しく摩滅している。なお、下端は大きく割れている。

**時期** 出土遺物の時期から、  
Ⅶ期～Ⅷ期と考えられる。

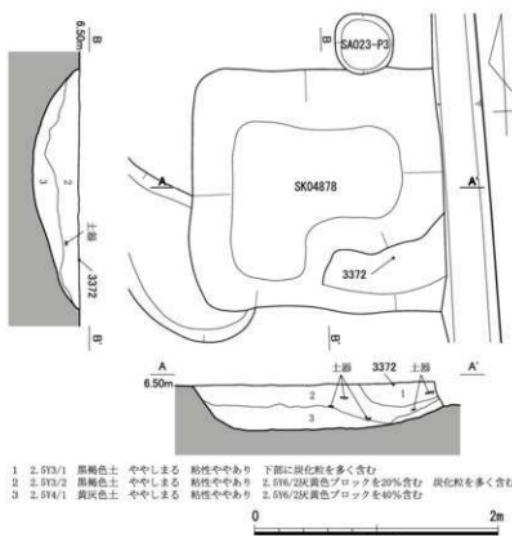


図 1295 SK04878 遺構図

1. 2. 3371 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 下部に炭化粒を多く含む  
2. 2. 3372 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 2. 0% / 2K 黄色ブロックを20%含む 炭化粒を多く含む  
3. 2. 3364 黄灰色土 ややしまる 粘性ややあり 2. 0% / 2K 黄色ブロックを40%含む

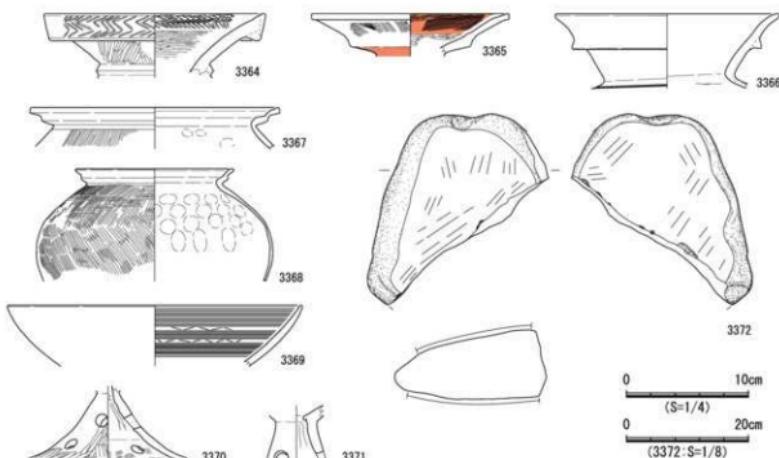


図 1296 SK04878 遺物実測図

SK04886（遺構：図 1297、遺物：図 1298）

**検出状況** 西部東側中央の堅穴住居跡密集域に位置し、SB426を切る。

**形状** 直径約0.7mの不整円形で、深さは約0.3mである。断面形は逆台形で、壁面傾斜は急である。

**埋土** 3層に分層した。中央が緩やかに窪む堆積であり、自然堆積の可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土器135点が出土した。

**出土遺物** 3373はVII期壺G2b類。口縁部が内湾し、上半に少条の多条沈線と山形文を交互に施文する。

3374はVII期壺A3類。口縁端部が屈曲する。3375は

VII期壺B3類。口縁部がくの字に屈折して、端部に断続的な強いナデによる外傾する平坦面を形成する。

3376はVII期器台B3類。口縁部が直線的に伸び、端部は平坦である。脚部は付根から円錐形に広がり、透孔付近でやや屈曲して内湾しながら開く。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

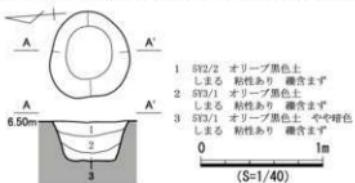


図 1297 SK04886 遺構図

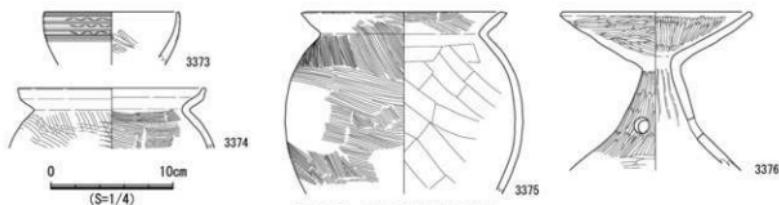


図 1298 SK04886 遺物実測図

SK04889 (遺構: 図 1300、遺物: 図 1299)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB433を切る。

**形状** 直径約1.2mの不整円形を呈する。深さは0.35mであり、底面は平坦で、壁面はほぼ直立する。

**埋土** 4層に分層した。中央が窪む堆積であるが、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器298点、石器類5点が出土した。土器の多くはVII期のものである。埋土2層から管玉(3380)がわずかに斜めに傾いて出土した。

**出土遺物** 3377はVII期壺G2a類。口縁部が内湾して立ち上

がる。3378はVII期壺H2b類。口縁部が内湾し、外面に繊細な文様が認められる。3条の細い多条沈線を基本として、その間に刺突文を施文する。端部直下にクシ状工具による刺突文が3帯、その下にヘラ状工具による刺突文が2帯、さら

にその下にクシ

状工具による刺

突文が認められ

る。刺突文は多

条沈線を抉んで

対向するように

配置されるため、

羽状文風である。

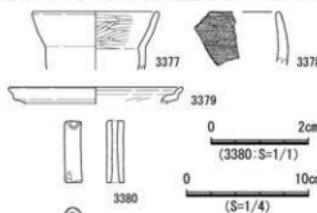


図 1299 SK04889 遺物実測図

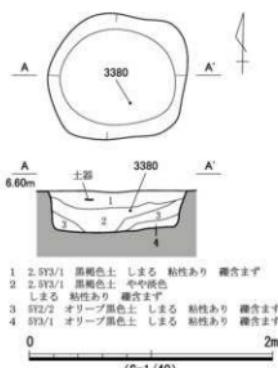


図 1300 SK04889 遺構図

3379はVII期壺D2b類。口縁部が短く屈曲する。3380は管玉。細身であり、上下端部がわずかに欠けている。

**時期** VII期のSB433を切るが、出土遺物の時期からVII期と考えられる。

#### SK04907 (遺構: 図 1302、遺物: 図 1301)

**検出状況** 西部東側中央の自然流路へと続く緩斜面上に位置する。

**形状** 南北に長い不整形を呈する。底面は平坦であり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 2層に分層した。2層は壁面から底面に沿って堆積している。

**遺物出土状況** 埋土中から土器627点が出土した。細片が多い。

**出土遺物** 3381はVI期高壺G1類。口縁部が内湾して、脚部が外反する。3382はVI期高壺C類脚部。

**時期** 出土遺物の時期からVI期と考えられる。

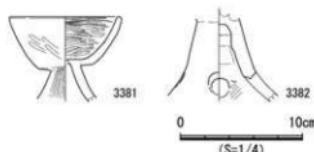


図 1301 SK04907 遺物実測図

#### SK04910 (遺構: 図 1304、遺物: 図 1303)

**検出状況** 西部東側中央の自然流路へと続く緩斜面上に位置する。

**形状** 不整形を呈する。埋土が砂質土であるため、平面形は明瞭であった。

**埋土** 1~2層に分層した。やや大きな礫の混入が目立つものの、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器830点、石器類1点が出土した。土器の多くはVI期~VIII期に属する。

**出土遺物** 3383は砥石。断面四角形を呈し、砥面は1面のみ観察できる。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期~VIII期と考えられる。

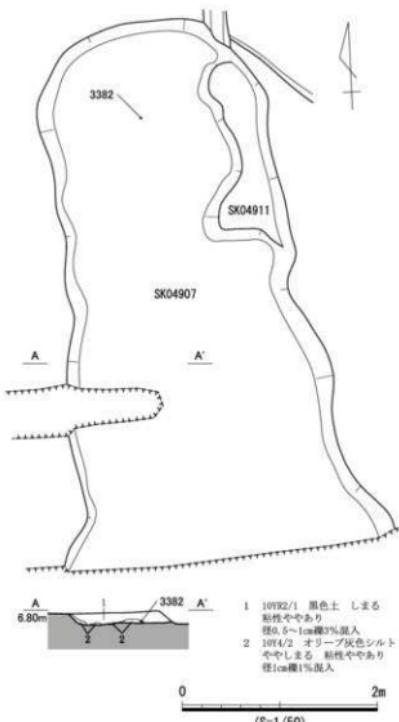


図 1302 SK04907 遺構図

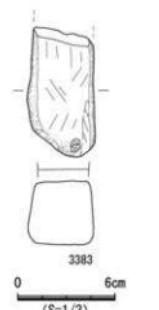


図 1303 SK04910 遺物実測図

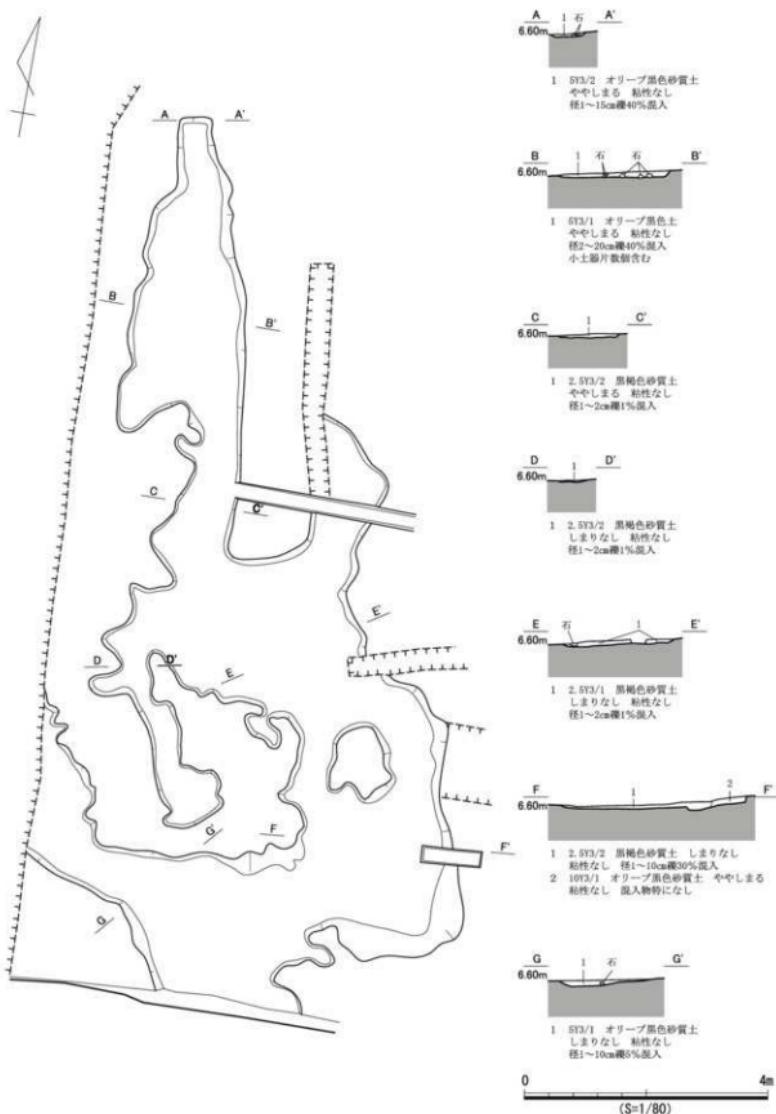


図 1304 SK04910 遺構図

## SK04913（遺構：図1305、遺物：図1306）

**検出状況** 西部東側中央の自然流路へと続く緩斜面上に位置する。検出面の大半はVI層表面で、SK04207、SK4208、SK4907、SK04912に切られる。

**埋土** 2層に分層した。礫や炭化物の混入が認められ、層界の凹凸がみられることから人為堆積と考えられる。埋土の検出状況はSK04910に類似していた。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,354点、金属製品1点が出土した。土器の大半はVII期に属し、金属製品は銅鏡である。

**出土遺物** 3384はVII期壺A5類。口縁端部を上下に拡張し、内面には赤彩を施す。外面には直線文と山形文を施文するが、直線文は間隔が一定でなくやや粗いつくりである。山形文はその内部に赤彩が施される。3385はVI期～VII期壺A類。口縁部が短く、端部がわずかにつまみ上げられる。頸部直下に直線文、刺突文が認められる。3386はVII期～VII期高杯D5類。口縁部が大きく開き、少条の多条沈線と連弧文を交互に施文する。3387はVII期高杯C類。多条沈線間に2重の山形文を施文する。3388は銅鏡。鏡身の断面形は菱形で、基部は鋳型段階の腸抉が明瞭に残る。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期～VII期と考えられる。

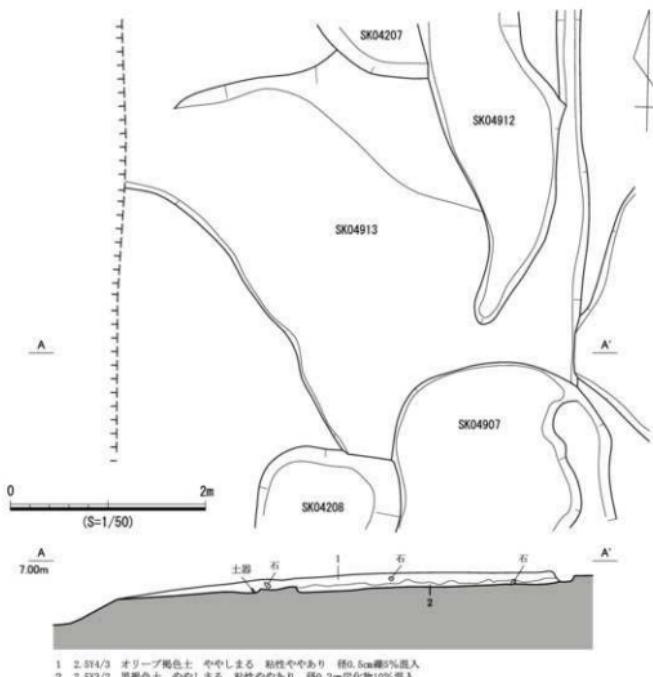


図1305 SK04913 遺構図

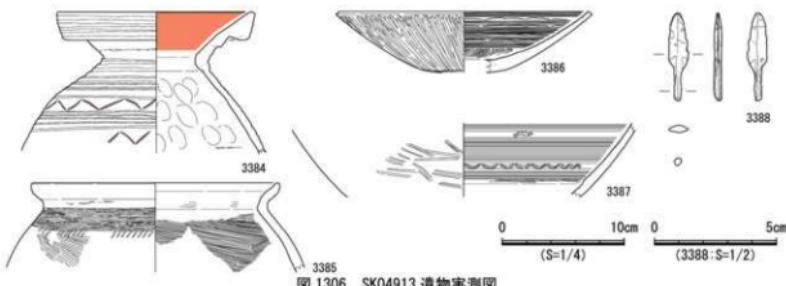


図 1306 SK04913 遺物実測図

SK04916 (遺構: 図 1307、遺物: 図 1308)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡域密集域に位置し、SB333に切られ、SK04479とSK04483を切る。遺構の重複が著しく、その平面形は不明瞭であった。

**形状** 南側をSB333に切られているが、残存している範囲の平面形は隅丸方形である。壁面は高さ 0.2 m が残り、ほぼ直立する。

**埋土** 6 層に分層した。1~3 層と 4~5 層が 6 層を切っており、本来は 2 基の遺構が存在していた可能性がある。

遺構検出時に平面形を誤認したと考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 137 点が出土した。土器は VII 期のものが多い。

**出土遺物** 3389 は VII 期 D2 類の小型品。口縁部外面が直立気味である。3390、3391 は VII 期 D 類脚部。3390 は脚部が完存し、直線的に開く。3392 は VII 期手捏ね C 類。口縁部が内湾する。

**時期** 出土遺物の時期から、VII 期と考えられる。

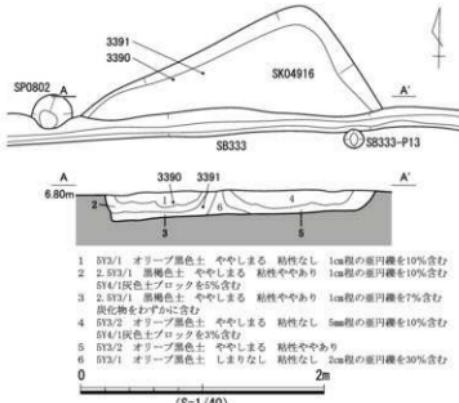


図 1307 SK04916 遺構図

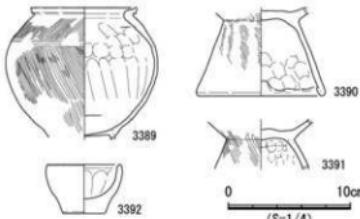


図 1308 SK04916 遺物実測図

SK04918 (遺構: 図 1310、遺物: 図 1309)

**検出状況** 西部西側中央の竪穴住居跡域密集域西側に位置する。北半分は調査区境のため確認できなかた。

**形状** 東西長約 1.2 m であり、平面形は楕円形状と考えられる。深さは約 0.5 m で、壁面の傾斜は比

較的急である。

**埋土** 2層に分層した。中央が窪む堆積であり、下層には炭化物とやや大きな礫が混じる。ほぼ完形に復元できる土器2個体がまとめて出土したことから、人為堆積の可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土器85点が出土し、上層からVI-2期の器台(3394)と鉢(3393)がまとまって出土した。

**出土遺物** 3393は口縁部が直線的に開く平底のVI-2期鉢E類。口縁部はわずかに内湾し、端部は尖り気味である。3394はVI-2期器台B2類。口縁部は直線的に開き、端部には少数例の刺突文が認められる。脚部は付根から円錐状に開き、裾部強く外反する。

**時期** 出土遺物の時期から、VI-2期と考えられる。

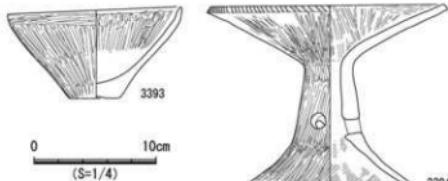


図 1309 SK04918 遺物実測図

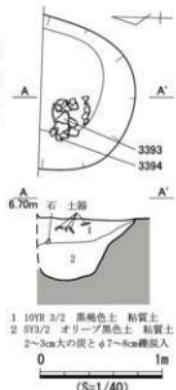


図 1310 SK04918 遺構図

SK04919（遺構：図1312、遺物：図1311）

**検出状況** 西部西側中央の竪穴住居跡密集域西側のSK04918とSK04922の間に位置する。

**形状** 長軸長約1.5mの不整橢円形を呈する。深さは0.15mと浅く、壁面傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

**埋土** 種混じりの黒褐色粘質土が単層で堆積するが、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器77点が出土し、大半がVII期のものであった。

**出土遺物** 3395は口縁部がやや内湾するVII期壺H2b類。外面には少条の多条沈線を3帯施文して、その間に山形文を充填する。3396は口縁部が大きく開くVII期高環D1類。端部はやや尖り気味である。

**時期** 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

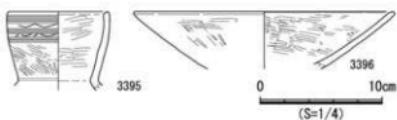


図 1311 SK04919 遺物実測図

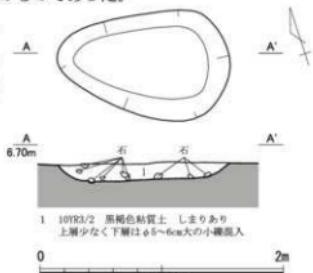


図 1312 SK04919 遺構図

SK04920（遺構：図1314、遺物：図1313）

**検出状況** 西部西側中央に位置し、東側は調査区域外にある。SD1019に切られ、平面形は不明瞭であった。

**形状** 確認範囲での長軸長は約3.0mであり、全形は不明である。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 黒褐色土が単層で堆積するが、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土から土器269点、木製品4点が出土した。土器の多くはVII期のものである。

**出土遺物** 3397はVII期壺G類の頸部。上半には少条の多条沈線と振幅の短い山形文を施文する。3398はVII期甕脚部。

**時期** 出土遺物の時期から、

VII期と考えられる。

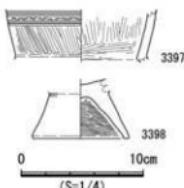


図 1313 SK04920 遺物実測図

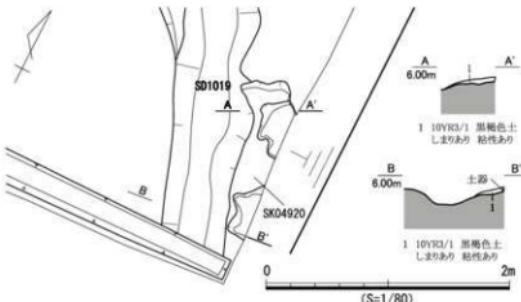


図 1314 SK04920 遺構図

SK04921（遺構：図1315、遺物：図1316・1317）

**検出状況** 西部西側中央の竪穴住居跡密集域の西側に位置し、NR002の3層除去後に検出した。明確な掘り込みが確認できることから、土坑と判断した。

**形状** 直径約1.8mの円形を呈する。深さは約0.4mで、底面は西側に向かって緩やかに傾斜している。東壁面の傾斜は緩やかだが、その他の壁面は比較的急である。

**埋土** 3層に分層した。上層は木質の有機物や炭化物を含む。下層は砂質土で掘削直後からの流入土と考えられる。埋土中から残りのよい土器がまとまって出土したことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土から土器472点、木製品2点が出土した。土器はV期～VII期のものが出土し、特にV期後半の土器の残りがよく、3400や3401などの壺は完形のまま廃棄され、その場で潰れたような状態で出土している。また、3409や3421などは遺構外の破片とも接合している。なお、VI期の土器は甕B類（3411）、鉢G類（3419）、器台B類（3422）で破片であり、VII期の甕D類（3412、3413）は上層出土である。そのため、V期以外の遺物は混入の可能性がある。また、その他の図示した資料はいずれもV期の土器である。

**出土遺物** 3399～3401は壺A1類。3399はA1a類の口縁部。口縁部が強く外反して、端部下端を拡張する。端部は赤彩が認められ、内面には2帯の羽状文を施文する。3400は脚台付でA1b類。口縁端部下端をわずかに肥厚させる。端部は平坦で円形刺突文と円形浮文を施文する。円形浮文は欠損部位のため、何個の組み合わせになるかは不明である。胴部はやや偏平で肩部が強く膨らむ。胴部上半2分の1程度に波状文、円形刺突文を施文する。円形刺突文は半截竹管を相対させて施文する。脚部は裾部が強く外反し、端部が平坦である。高坏1類の脚部に類似する。3401は口縁部が短く外反する。端部下端はわずかに拡張する。胴部が頸部から強く膨らみ、口径を大きく上回る。口縁部形状からA1b類としたが、胴部最大径から底部までは直線的な形状で、かなり腰高の形状でA1b類では例

外的な形状を示す。端部と内面には円形刺突文、頸部から肩部にかけては直線文と振幅の小さな山形文風の波状文を3帯施文する。胴部文様の最下段にはS状の文様を施文する。3402は壺底部。胎土は3399と酷似する。3403は壺B類胴部。無文であることから、B類の可能性がある。3404～3410、3416は甕A類。3404は甕A1類。口縁部が強く屈曲して内傾する。端部は平坦で、刺突文がヨコナデのため上半が消失している。頸部直下には直線文が認められる。3405～3410はA2b類。3406は口縁部がやや外傾して屈曲し、端部に内傾した平坦面が認められる。平坦面より下位には強い凹面を形成する。端部に刺突文、頸部直下に直線文と刺突文が認められる。3405は3406と類似するが、頸部に沈線が認められるが、直線文は認められない。3407は頸部直下に簾状文が認められる。3408は口縁部内面の屈曲がやや弱い。端部に刺突文、頸部直下に直線文と刺突文を施文する。端部の刺突文は列点気味である。3409は頸部がやや外傾して口縁部が強く屈曲する。内面も強く屈曲して、端部は平坦である。胴部は頸部から強く膨らみ、上半に直線文、刺突文、直線文、波状文を施文する。3410はやや小型品で文様は認められない。3416はA3類。口縁部の屈曲が弱くなる。胴部は倒卵形

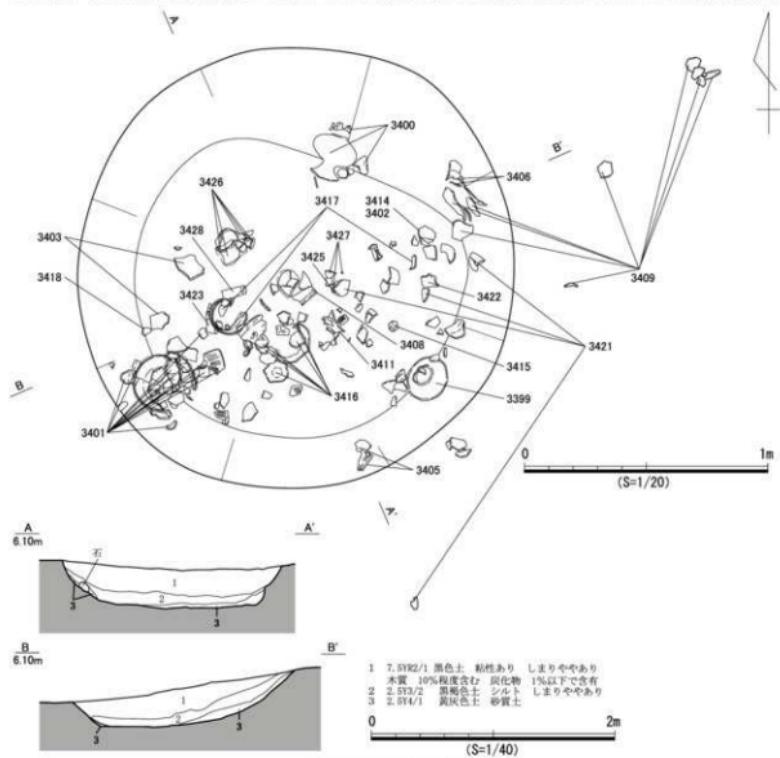


図 1315 SK04921 遺構図

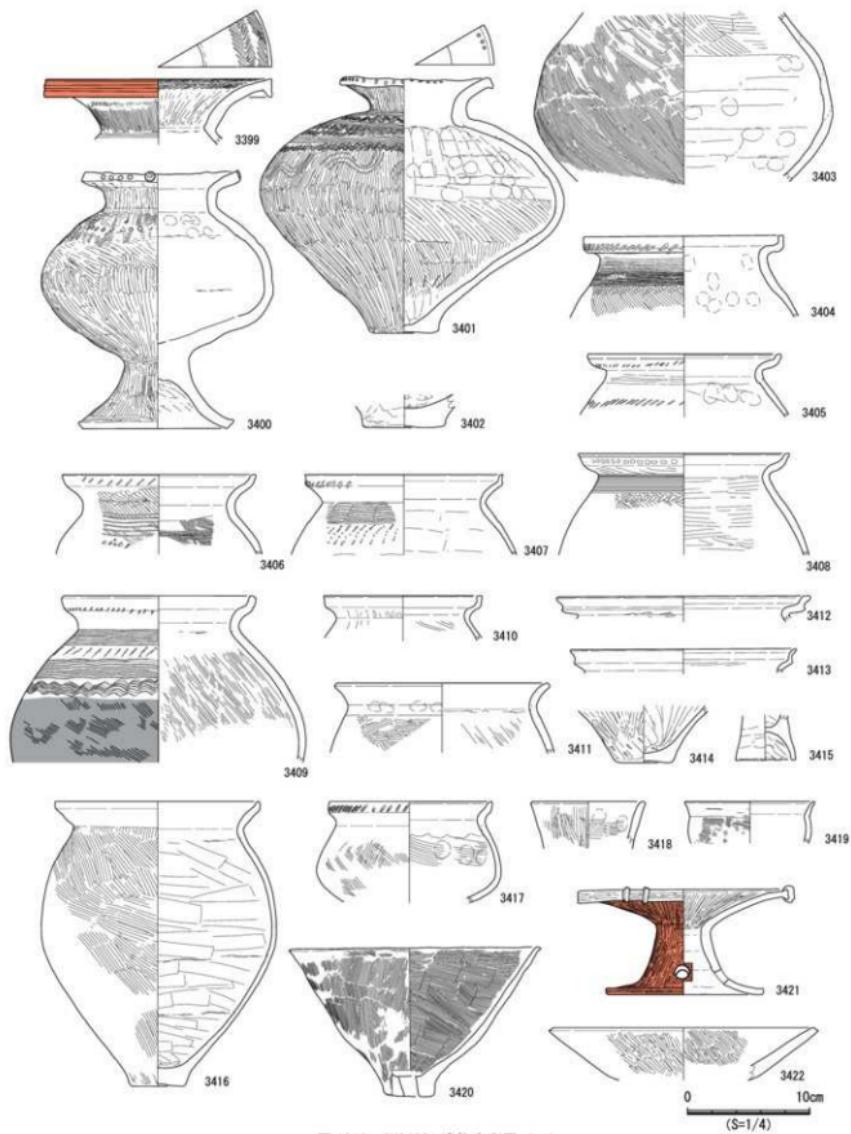


図 1316 SK04921 遺物実測図（1）

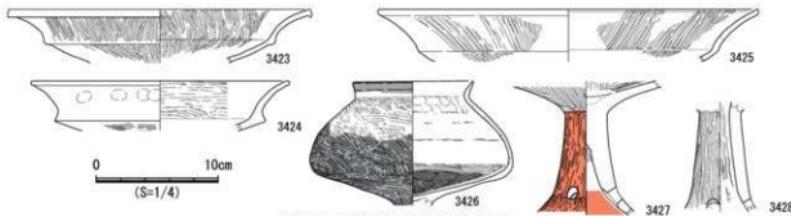


図 1317 SK04921 遺物実測図 (2)

で、底部は小さな平底である。3411はVI期甕B2類。口縁部が短く外反して、端部はやや平坦である。3412、3413はVII期甕D2b類。口縁部が屈曲し、上段にはわずかな凹面が認められる。3414は甕A類底部。わずかに上底気味である。3415は甕E類。小型の脚部である。3417は鉢A2類。口縁部外面は直立するが、内面の屈曲は弱く、ヨコナデによる凹面が認められる。3418、3420は鉢B1類。3418はB1類の口縁部、端部がわずかに外反する。3420は口縁部が直線的に外傾し、端部は平坦だが外面がやや外側へ引き出される。底部は小さく、突出する。外面には輪積み痕が残る。3419は口縁部が軽く外反するVI期鉢G類。3421は器台Alb類。口縁部が強く外反して大きく開き、端部を上下に拡張する。端部には擬凹線と2個1組の棒状浮文を3方向に施文する。脚部は裾部が強く外反して、端部上端を拡張する。外面全体を赤彩した可能性があるが、現状では受部の磨耗が進行して、赤彩は脚部に明瞭に残る。3422はVI期前半の器台B1類。口縁部が直線的に開く。3423～3425、3427、3428は高坏B類。3423、3425はB3a類。口縁部が強く外反し、端部が平坦である。下端が拡張される。口縁部と坏底部との境界が顕著である。3424はB3b類。口縁部は強く外反するが、端部は丸くおさめる。3427、3428は脚部。3427は内外面に部分的に赤彩が認められる。3428は付根から円錐状に脚部が開く。3426は高坏B1b類。口縁部が直立する。坏部は偏平で、煤が付着する。

**時期** 出土遺物の時期からV期後半と考えられる。

#### SK04922 (遺構: 図 1318、遺物: 図 1319)

**検出状況** 西部西側中央の竪穴住居跡密集域西側の、SK04919とSK04923の間に位置する。

**形状** 長軸長約2.2mの不整橢円形を呈し、深さは約0.3mである。壁面の傾斜は緩やかで、底面はやや凹凸がある。

**埋土** 4層に分層した。ブロック状の埋土が認められることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器381点が出土した。土器の多くはVII期のもので、小さな破片が多いものの、破片の一部に打ち欠きのあるもの(3429、3431)が出土している。

**出土遺物** 3429、3430はVII期甕D2b類。口縁部が

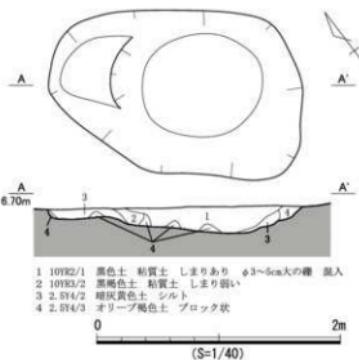


図 1318 SK04922 遺構図

強く屈曲して、上段が強く外反する。端部には凹面が形成される。3431はⅦ期甕脚部。わずかに内湾しながら、脚部が開く。3432はⅦ期高坏D類の脚部。脚部は付根から外反し、坏部内面と口縁部との境界にわずかな段差が認められる。

**時期** 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。



図 1319 SK04922 遺物実測図

SK04923 (遺構: 図 1320、遺物: 図 1321)

**検出状況** 西部西側中央の堅穴住居跡密集域の西端に位置し、NR002に切られる。

**形状** 長軸長約2.0mの不整形を呈し、深さは約0.2mである。底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は南壁と東壁は比較的急で、西壁には一段の平坦面がある。

**埋土** 単層であり、一時期の土器がまとめて出土したことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器659点、石器類1点が出土した。土器の大半はⅦ期のものである。3438の高坏には打ち欠きが認められ、煤が付着する。3436の高坏にも煤が付着し、接合した破片によって煤の付着状況が異なる。また、煤が付着する断面と付着しない断面が接合する場合もある。こうした土器片は図化資料以外でも認められ、破片となってから二次的に被熟し、廃棄されたと考えられる。また、北西端で砥石(3439)が横置で出土した。

**出土遺物** 図化した土器は、いずれもⅦ期後半である。3433は壺A5類。内外面に羽状文を施文する。

3434は甕B3類。口縁部が短く屈折して、

端部に断続的なナデによって形成されたやや凹凸のある平坦面が認められる。

3435は甕E4類。口縁部がゆるやかに外反する。底部はやや上底気味である。

3436は口縁部が大きく開く高坏D1類。坏底部は小さくなるが、口縁部との境界に

ある段差はわずかに残る。3437は高坏D4類。内面に繊細な多条沈線5帯。山形文3帯を施文する。山形文はやや弧状となり連弧文的である。3438は坏部が碗状となる高坏H1類。口縁部が軽く外反する。

3439は砥石で、長辺33.1cmの大型品である。亜円錐の平坦面を砥面として使用し、上面には複数の敲打痕がある。

**時期** 出土遺物の時期から、Ⅶ期後半と考えられる。

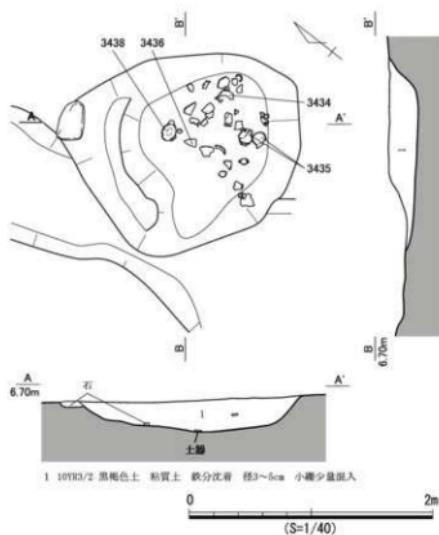


図 1320 SK04923 遺構図

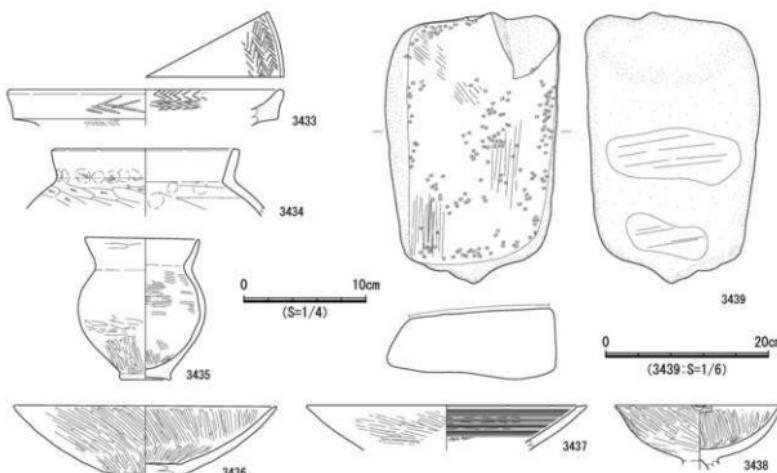


図 1321 SK04923 遺物実測図

SK04931 (遺構: 図 1322、遺物: 図 1323)

**検出状況** 西部西側中央の竪穴住居跡密集域の西端に位置する。

**形状** 長軸長約 2.0 m の不整円形を呈する。深さは約 0.4 m で、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。また、北東側の壁面に平坦面が認められる。

**埋土** 2 層に分層した。暗オリーブ灰砂質土がブロック状に堆積することや、層厚約 0.4 m の埋土が均一であることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 212 点が出土した。土器の多くは V 期であり、底面付近から比較的残りの良い土器 (3440, 3443) が出土した。

**出土遺物** 3440 は V 期壺 I 類。3441 は V 期壺 K 類。胴部が強く屈曲して、その上部に双頭溝文のスタンプ文が認められる。3442 は V 期甕 B1b 類。短く口縁部が屈折し、端部には刺突文を施す。3443 は V 期高坏 B1 類。坏部は盤状を呈し、赤彩が認められる。口縁部は欠損するが、坏部が半分程度遺存する。口縁部は坏底部で屈曲して直立気味に立ち上がる。

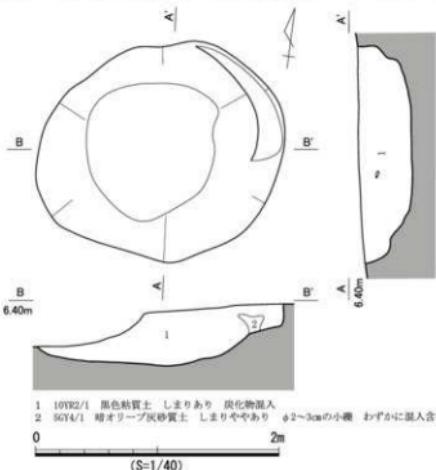


図 1322 SK04931 遺構図

時期 出土遺物の時期から、V期前半と考えられる。

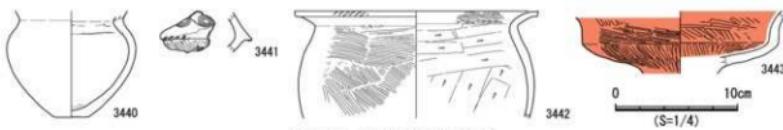


図 1323 SK04931 遺物実測図

SK4935 (遺構: 図 1324、遺物: 図 1325)

検出状況 西部西側中央の竪穴住居跡密集域の西端に位置する。

形状 長軸長約 1.8 m の不整楕円形を呈する大型の土坑である。深さは約 0.2 m で、底面はやや凹凸があり、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 6 層に分層した。2 ~ 4 層がブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器 95 点が出土した。VI-1 期の土器がまとまっており、南から順に高壙 I 類 (3448)、鉢 B 類 (3446)、鉢 A 類 (3445) の 3 個体がほぼ正位で並んで出土した。これらの土器は埋土中からの出土で、底面直上ではない。

出土遺物 3444 は鉢 A2 類。口縁部がわずかに直立し、端部は尖り気味である。直立気味の頭部から胴部は強く膨らむ。底部は小さな平底である。3445 は口縁端部がわずかにつまみ上げられる鉢 A3a 類。口縁部は頭部で強く屈曲して、胴部は偏平である。底部は小さな平底である。3446 は鉢 B3 類。口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部及び端部の内外面には強いヨコナデによって凹面が形成される。3447 は器台 B 類の脚部。脚部は付根から透孔付近まで柱状気味である。3448 は高壙 I 類の脚部。脚部は完存するが、壙部は欠損する。据部は強く外反して、端部は平坦である。

時期 出土遺物の時期から、VI-1 期と考えられる。

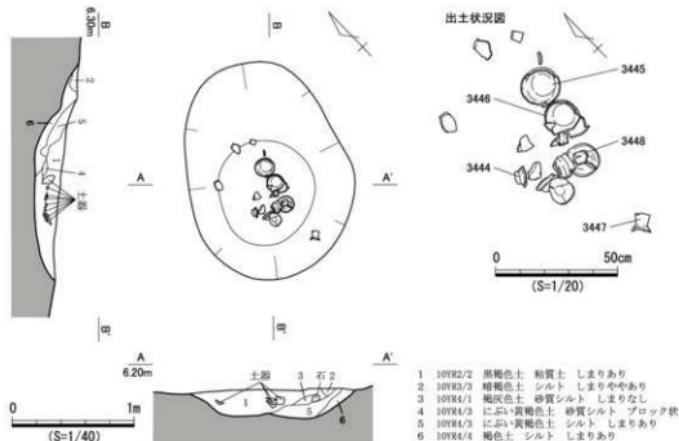


図 1324 SK04935 遺構図

- |   |         |         |       |         |
|---|---------|---------|-------|---------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐色土    | 粘質土   | しまりあり   |
| 2 | 10YR3/3 | 暗褐色土    | シルト   | しまりややあり |
| 3 | 10YR4/1 | 褐灰色土    | 砂質シルト | しまりなし   |
| 4 | 10YR4/3 | にじい黄褐色土 | 砂質シルト | ブロック状   |
| 5 | 10YR4/3 | にじい黄褐色土 | シルト   | しまりあり   |
| 6 | 10YR4/4 | 褐色土     | シルト   | しまりあり   |

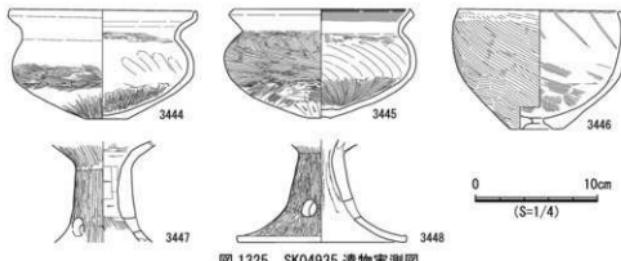


図 1325 SK04935 遺物実測図

SK04946 (遺構: 図 1327、遺物: 図 1326)

**検出状況** 西部西側中央の堅穴住跡密集域の西端に位置する。

**形状** 直径約1.0mの不整円形を呈し、深さは約0.5mである。断面形は逆台形で、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 4層に分層した。4層は砂質土で、掘削直後から流入したものと考えられる。上層は植物遺体を含む黒色～暗褐色土で中央が窪み堆積であり、埋没の進行はゆっくりしたものであったと考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器222点が出土し、埋土3層と4層の層界付近からIX期壺(3449)と甕(3450)が出土した。

**出土遺物** 3449はIX期小型丸底壺。口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がり、ヨコナデによる丁寧な調整が認められる。胴部は偏平で、最大径が中央よりやや上位に位置する。胴部下半は入念なケズリによって調整される。胎土が緻密で、器壁が薄い精緻なつくりであり、他地域からの搬入品と考えられる。打ち欠きは口縁部に5箇所認められる。3450はIX期甕類の胴部片である。

**時期** 出土遺物の時期から、IX期と考えられる。

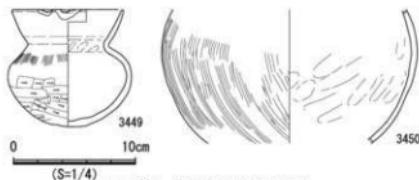


図 1326 SK04946 遺物実測図

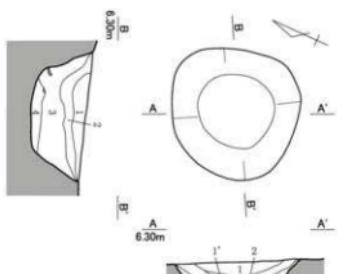


図 1327 SK04946 遺構図

SK04948 (遺構: 図 1328、遺物: 図 1329)

**検出状況** 西部西側中央にて、灰色シルト上面で黒色土の輪郭を検出した。平面形は明瞭であり、検出時には西端に長さ約1.9mの木材、北側に長さ50cmを超える大きな礫が見えていた。

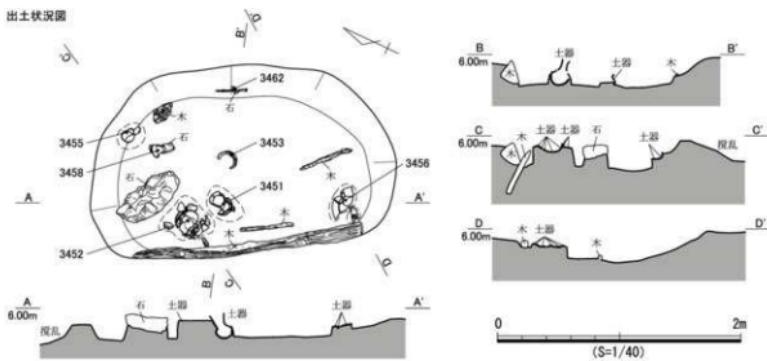
**形状** 平面形は不整梢円形で、長軸長約2.5m、短軸長約1.5mである。壁面の傾斜は緩やかであり、底面は平坦であった。西壁面は比較的直線的であり、壁面に沿って長さ約1.9mの木材が水平に据えられ、杭で留められていた。壁面崩落防止のための簡易的な施設と考えられる。

**埋土** 2層に分層した。中央が窪み堆積であり、上下層とも植物遺体を含む。土器や大きな礫は遺構内に廃棄（もしくは配置）されたものと考えられるが、埋土の成因は不明である。

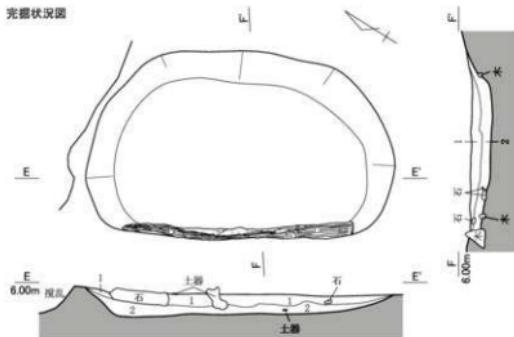
**遺物出土状況** 埋土中から土器311点、木製品13点が出土した。土器はV期～VI～I期のものが多く、3451と3453はほぼ床面直上で、3452と3456は床面よりやや上位でそれぞれ出土した。なお、VII期の鉢（3455）は混入の可能性がある。

**出土遺物** 3451はV期壺H3類。口縁部が緩やかに外反する。大型品で頸部が太く、胸部上半が強く膨らむ。底部は小さく、断面形はドーナツ状を呈し、胸部下半は直線的である。外面全面にハケが認められる。3452はVI期甕A類。胸部がやや下膨れ気味で、粗いハケが認められる。3453、3454はV期鉢A類。頸部直下に直線文、刺突文が認められる。3455はVI期鉢E類。口縁部が直線的に外傾し、

出土状況図



完壠状況図



1 10132/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 植物遺体を多く含む 径3cm以下の円錐をわずかに含む  
2 10133/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 植物遺体をわずかに含む

図 1328 SK04948 遺構図

端部は断続的な強いナデによって凹面を形成する。内外面ともに丁寧なミガキが認められる。3456はV期高坏B3類。直線的に大きく開く坏底部から、口縁部が強く外反する。端部は平坦である。脚部は細身で、裾部で外反する。裾端部は平坦である。3457はV期高坏B類脚部。直線文2帯と赤彩が認められる。3458～3460はV期高坏I類。3458は脚裾部が強く外反し、端部が平坦である。3459は口縁端部がわずかに直立する。3461はVI期器台A類。口縁部が大きく直線的に開き、脚部は裾部が外反する。3462は組物で、縦方向の加工痕が残り、下端は炭化している。

**時期** 出土遺物の時期から、V期～VI-1期と考えられる。

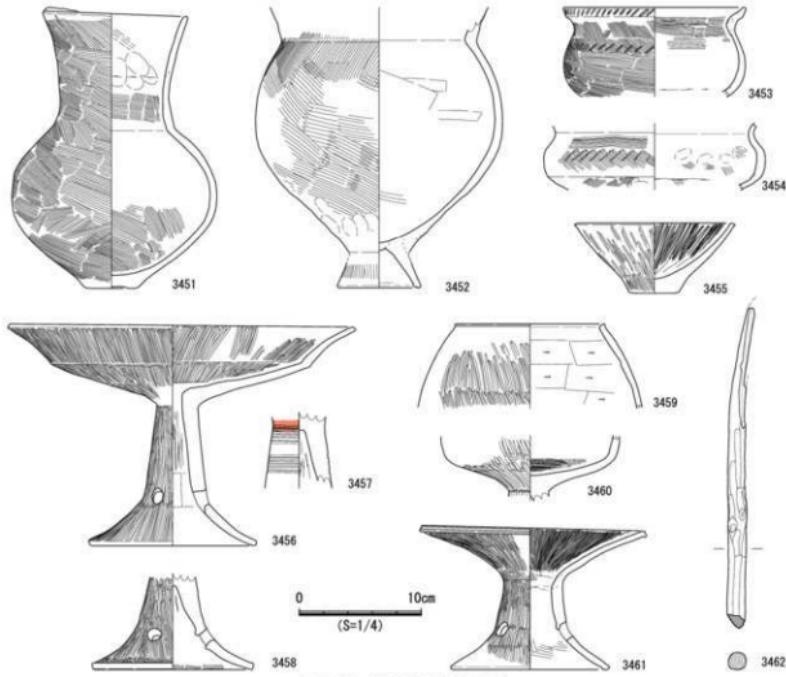


図 1329 SK04948 遺物実測図

SK04950 (遺構: 図 1331、遺物: 図 1330)

**検出状況** 西部西側中央に位置する。遺物包含層掘削後に検出し、平面形は明瞭であった。

**形状** 南北に長い不整形を呈し、長軸長約4.4m、深さ約0.1mである。底面は平坦で、壁面の傾斜は比較的緩やかである。

**埋土** 2層に分層した。円礫や微砂を含むが、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器31点、木製品1点が出土した。土器は大半が小片であるが、胎土からV期～VI期頃と考えられる。

**出土遺物** 3463は棒材である。上面は丸く成形され、上端から約5cm下に幅約1.0cmの溝状の欠き切りがあることから、竿の可能性もある。

**時期** 出土遺物の時期から、V期～VI期頃と考えられる。

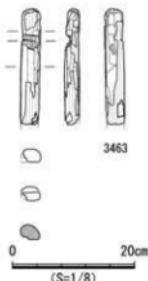


図 1330 SK04950 遺物実測図

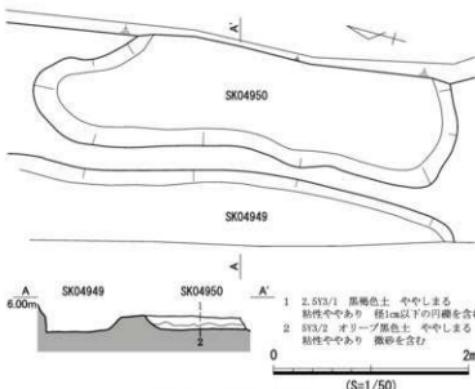


図 1331 SK04950 遺構図

SK04996（遺構：図 1333、遺物：図 1332）

**検出状況** 西部西側南寄りに位置する。遺物包含層掘削後に検出し、平面形は不明瞭であった。なお、西側はNR018に、南側はSB445に切られる。

**形状** 遺構の重複により全形は不明であるが、東辺は直線的にのびている。深さは約0.1mであり、底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 2層に分層した。円礫や微砂を含む。層界の凹凸がみられることから、人為堆積の可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土器158点が散在して出土した。V期～VI期のものが出土している。

**出土遺物** 3464はV期高杯B類である。脚柱部はわずかに外反し、穿孔径が大きい。

**時期** 出土遺物の時期と、VI期のSB445に切られるところから、V期～VI期と考えられる。

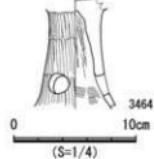


図 1332 SK04996 遺物実測図

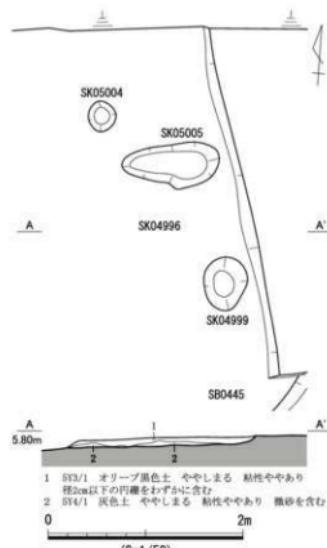


図 1333 SK04996 遺構図

SK5035（遺構：図 1335、遺物：図 1334）

**検出状況** 西部西側南寄りに位置する。遺構の中央をSD1019に切られており、平面形は不明瞭であった。

**形状** 確認した範囲では不整形を呈する。深さ約0.40mであり、底面はやや丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的急で、上端に平坦面を有する。

**埋土** 5層に分層した。砂礫の混入し、崩落土と考えられるブロック土混じりの堆積層も確認できる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器25点、木製品2点が出土した。木製品は底面付近から出土した。

**出土遺物** 3465は板材である。薄い材で表面に細かい加工痕が残る。ヤリガンナなどの工具で整形された可能性がある。

**時期** VI期以前に掘削

されたSD1019に切られ

ることから、VI期以前と

考えられる。

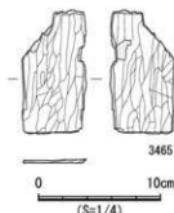


図 1334 SK05035 遺物実測図

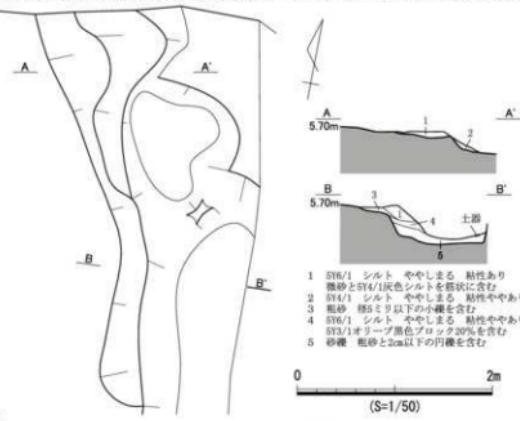


図 1335 SK05035 遺構図

SK5037（遺構：図1336、遺物：図1337）

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、SB443埋土上面で検出した。

**形状** 不整椭円形を呈し、長軸長約0.7m、短軸長約0.6m、深さ約0.2mである。底面は平坦であり、壁面の傾斜は急である。

**埋土** 3層に分層した。ほぼ水平に堆積し礫をわずかに含む。土器が縦位で出土していることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器26点が出土した。埋土1層と2層の境界付近より比較的多く出土した。

**出土遺物** 3466はVI期壺A類胴部。直線文と刺突文が交互に施文される。

3467はVI期～VII期壺B類脚部。端部に打ち欠きが認められ、その断面が被熱している。3468はVI期高杯C3類。口縁端部内面を肥厚して、多条沈線を施文する。3469はVII期高杯D4類。内面に多条沈線と山形文が認められる。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。



図 1337 SK05037 遺物実測図



図 1336 SK05037 遺構図

## SK5045 (遺構: 図 1339、遺物: 図 1338)

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、NR018 の埋土上面で検出した。

**形状** 不整橢円形を呈し、長軸長約 1.3m、短軸長約 1.2m、深さ約 0.1m である。底面はやや丸みを帶び、壁面の傾斜は西側が緩やかで、東側は急である。

**埋土** 2 層に分層した。中央が窪む堆積であり、自然堆積の可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土器

21 点、石器類 1 点が出土した。

**出土遺物** 3470 は砥石である。

橢円礫を素材とし、平坦面に縦から斜め方向の擦痕が認められる。

**時期** 出土遺物から時期を言及することは困難だが、NR018 埋

土上面で検出したことからⅦ期

～Ⅷ期以降と考えられる。

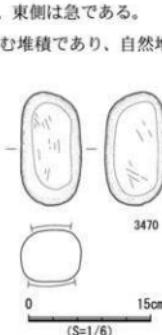


図 1338 SK5045 遺物実測図

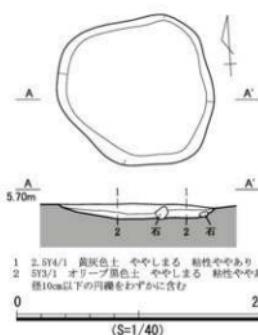


図 1339 SK5045 遺構図

## SK05136 (遺構: 図 1341、遺物: 図 1340)

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、NR018 埋土に被覆されていた。遺構の東側を SD1035 と SK05135 に切られている。平面形は不明瞭であった。

**形状** 長軸長約 2.2m、短軸長約 1.8m で、不整橢円形を呈する。深さは約 0.1m であり、底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 単層であり、礫や粗砂を含む。土器は遺構全体にまとまって廃棄されていることから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器 293 点、木製品が 1 点出土した。遺構のほぼ全域で散在して出土し、土器の間にやや大型の礫も含まれていた。

**出土遺物** 3471 は VI 期壺 11 類。口縁部が短くくの字に伸びる。3472 は VI 期甌 A3 類、口縁端部がわ

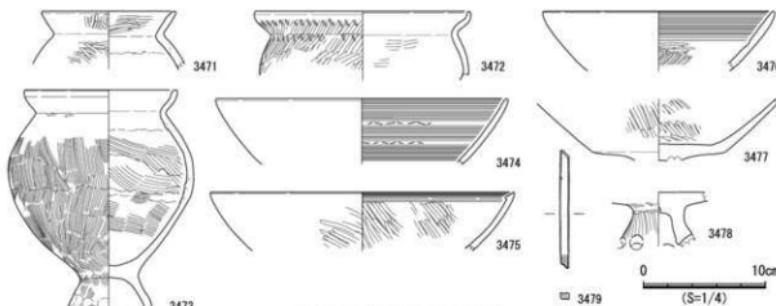


図 1340 SK05136 遺物実測図

すかに直立する。3473はVI期甕E5類。口縁部がわずかに内湾気味に屈曲して、端部を平坦に形成する。胸部はなだらかに膨らむが、最大径は中央より上位に位置する。脚部は短く開き、端部は平坦で打ち欠きが認められる。3474は磨耗の著しいVII期高杯C4類。内湾する口縁部内面に多条沈線3帯、その間に振幅の小さな山形文を施す。3475はVII期高杯D類。3476～3478はVI期高杯C3類。3476は口縁部内面上半に多条沈線が認められる。3479は棒材。上端は斜めに切断され、下端は炭化している。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

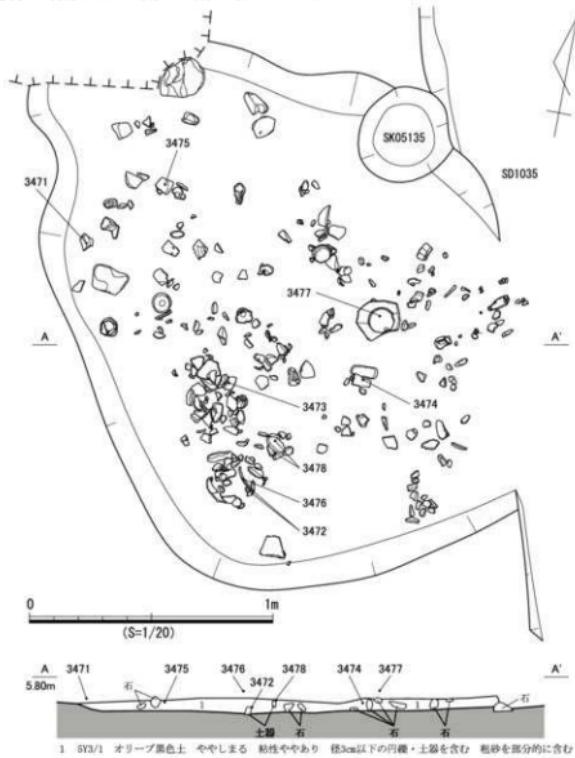


図 1341 SK05136 遺構図

SK05205 (遺構: 図 1342、遺物: 図 1343)

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、NR018埋土に被覆されていた。北側をSK05152に切られ、平面形は不明瞭であった。

**形状** 南部は排水溝によって切られ、東部は調査区域外となるため全形は不明である。現状で確認した平面形は不整形であり、北西壁面は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

**遺物出土状況** 埋土中から土器148点、木製品2点が出土した。

**出土遺物** 3480はVI期鉢A2類である。口縁端部がわずかに直立する。端部、胴部に刺突文が認められる。3481はVI期～VII期高環脚部。外面に縦方向のミガキが施される。3482はVII期高環C4類。内面に精緻な文様が認められる。多条沈線間にヘラによる山形文を上下に配し、さらに中央にはクシによる対向山形文を2帯配置する。多条沈線は上段のみ幅広で下段は少条である。3483は棒材。断面長方形を呈し、下端部は欠損している。

**時期** 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

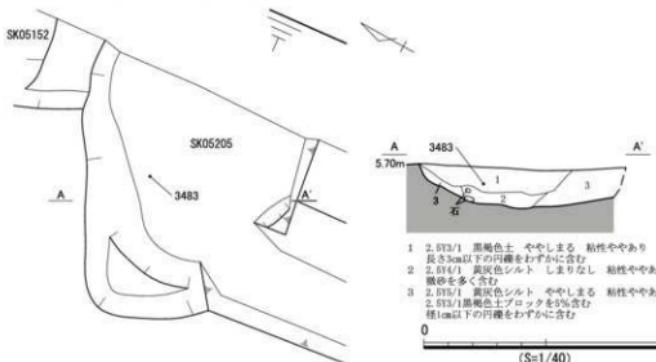


図 1342 SK05205 遺構図

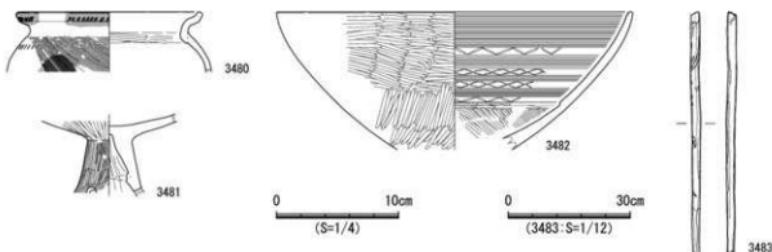


図 1343 SK05205 遺物実測図

SK05218 (遺構: 図 1345、遺物: 図 1344)

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、NR018の埋土掘削後にNR013埋土上面で検出した。平面形は不明瞭であった。

**形状** 不整円形を呈し、長軸長約1.3m、短軸長約1.0m、深さ約0.1mである。壁面の傾斜は緩やかで、底面は東側に一段深い掘り込みがある。

**埋土** 単層で、微砂や礫が混入することから、自然堆積の可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土器6点が出土した。本遺構はIV期以前に埋没したNR013埋土上面で検出していることから、出土土器のうちI期のものは混入と考えられる。

**出土遺物** 3484はI期壺胴部。頸胴部の破片で、削り出しの段直下に太い沈線を施す。外面に丁寧なミガキが認められる。

**時期** 出土遺物から時期の推定は困難であるが、NR013埋土上面で検出した遺構の多くはVI期以降であるため、本遺構もVI期以降と考えられる。

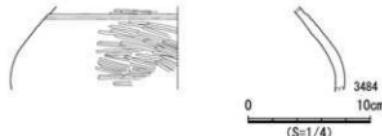


図 1344 SK05218 遺物実測図

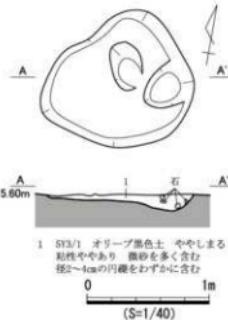


図 1345 SK05218 遺構図

#### SK05297 (遺構: 図 1346、遺物: 図 1347)

**検出状況** 西部東側南端に位置する。NR012掘削後に平面形を確認し、SD1053埋土を切っている。本遺構の検出面では土器がまとまって出土しており、平面形は比較的明瞭であった。

**形状** 東側は調査区外に位置するが、およそ梢円形を呈する。深さは約0.3mで、底面はほぼ平坦であり、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 5層に分層した。埋土中に微砂層を数条確認できたことから機能時に開口していたといえ、流水等により自然に埋没したと考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から268点の土器片が出土した。土器片の多くは1層からの出土である。

**出土遺物** 3485はV期高坏B2類脚部。脚裾部が強く外反する。3486は安山岩製の石核。自然面を残す剥片で、作業面は3面確認できる。

**時期** 本遺構はVII期～VIII期以降に埋没するNR1053埋土上面から掘り込まれている。本遺構の埋土が流水堆積であることから出土遺物は混入の可能性があり、本遺構の時期はVII期～VIII期以降と考えられる。

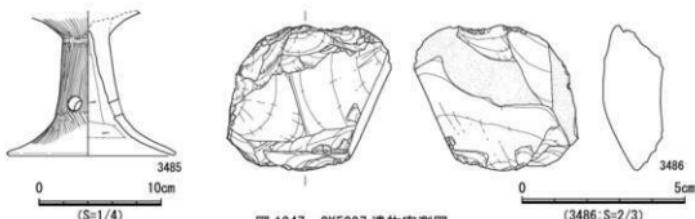


図 1347 SK05297 遺物実測図

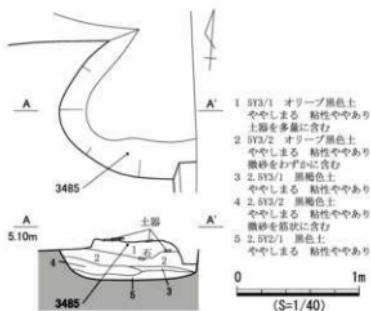


図 1346 SK05297 遺構図

## SK05317（遺構：図1348、遺物：図1349）

**検出状況** 西部東側北寄りに位置する。IV層除去後、基盤層であるV層とも遺構埋土とも異なる堆積を確認した。平面的な土性・土質とともに、東西両壁面においても10cm前後の堆積を確認したため、大きな窪地状の地形に堆積した土層と判断して掘り下げた。東・西・北側は搅乱溝によって滅失し、南側はSB451に切られる。

**形状** 平面と壁面の観察により範囲を確定した。全形は不明であり、底面はほぼ平坦である。

**埋土** 最大で3層に分層した。主にオリーブ黒色シルトが堆積し、ブロック土が混入していることから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器709点、石器3点、粘土塊3点が出土した。土器片は埋土全体に散在していたが、南東部から比較的残りのよいⅦ期の高坏や甕がまとまって出土した。

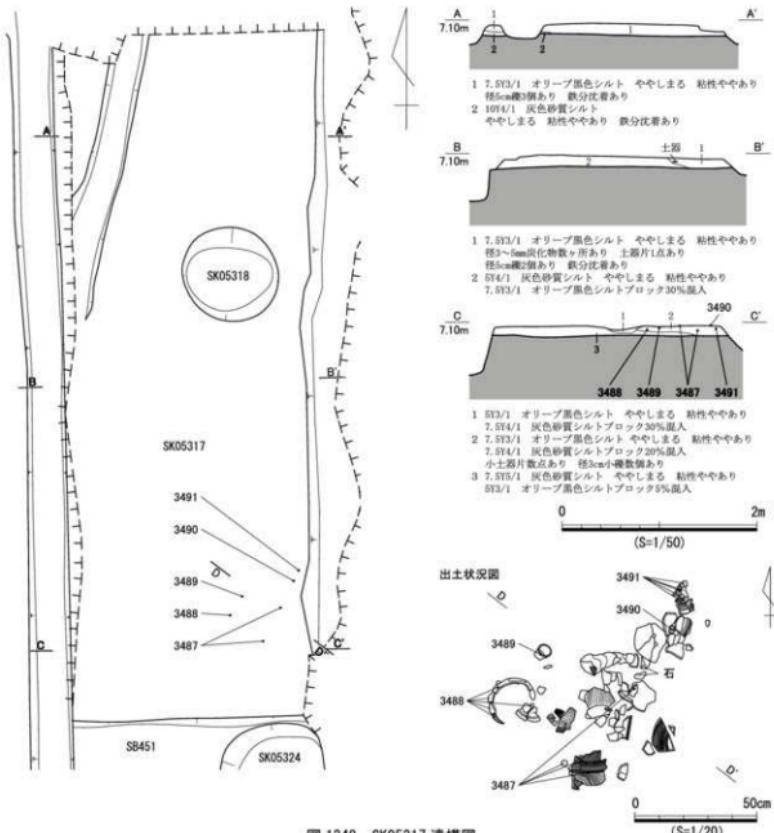


図1348 SK05317 遺構図

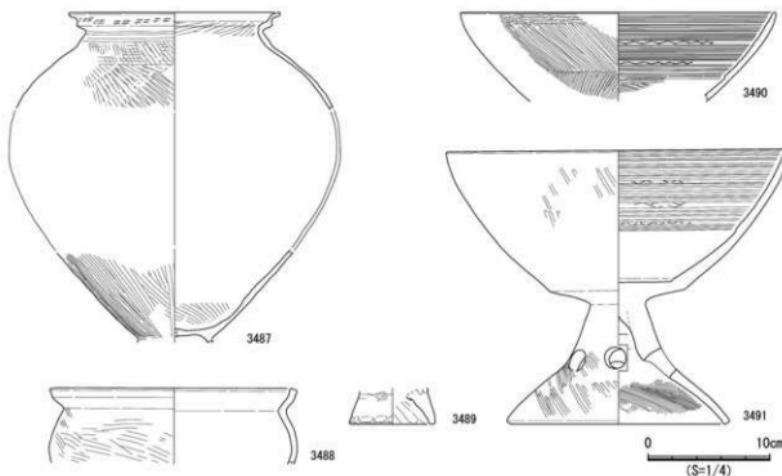


図 1349 SK05317 遺物実測図

**出土遺物** 3487はVI期甕D1b類。口縁部が強く屈曲し、直立する部位に刺突文が認められ、端部が強く外方に引き出される。3488はVII期甕E5類。口縁部が短く内湾気味で、端部が平坦である。3489はVII期甕脚部。短くハの字に開き、内面にはユビナデの痕跡が強く残る。3490、3491はVII期高坏C4d類。3490は3帯の多条沈線間に振幅の小さい山形文を施す。3491は口縁部がやや内湾気味で、内面上半2分の1程度に多条沈線4帯間に振幅の小さいヘラによる山形文、クシによる対向山形文を施す。文様帶より下には段が認められ、口縁部と坏底部との境にも顯著な段が認められる。脚部は透孔付近までは円錐形で脚裾部は強く内湾しながら開く。脚部中央付近に、横並び2孔1対の透孔を2方向に配置する。端部は平坦で内面がやや肥厚気味である。

**時期** 出土遺物の時期とVI～VII期のSB451に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

#### SK05324（遺構：図 1350、遺物：図 1351）

**検出状況** 西部東側北寄りに位置し、竪穴住居跡が密集する範囲内にある。SB451床面で検出したが、他遺構との重複が著しく平面形は不明瞭であった。

**形状** 長軸長約2.4mで、南北に長い梢円形を呈する。深さは

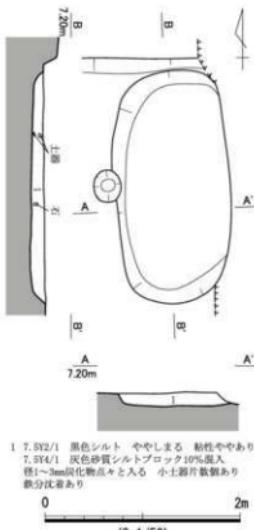


図 1350 SK05324 遺構図

約0.1mであり、底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は比較的強い。

**埋土** 単層であり、ブロック土と炭化粒が混入することから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から184点の土器片が出土し、遺構の中央南寄りでやや大きな土器片が内面を上にして横位で出土した。埋土中からの出土土器はVI～VII期のものが主体となる。SZ119と切り合っている影響からか、IV期の壺が出土した。

**出土遺物** 3492はIV期壺A1類胴

部。3493はVI期後半の高環C類  
脚部。坏底部内面の段が顕著である。

**時期** 出土遺物の時期とVI～VII

期のSB451に先行することから、  
VI～VII期と考えられる。

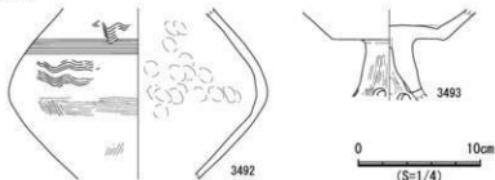


図 1351 SK05324 遺物実測図

SK05348（遺構：図1353、遺物：図1352）

**検出状況** 西部東側北寄りに位置し、竪穴住居跡が密集する範囲の空閑地にある。北側をSK05347に切られており、平面形はやや不明瞭であった。

**形状** 長軸長約0.3mで、東西に長い楕円形を呈する。深さは約0.1mであり、底面はほぼ平坦で、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 単層であり、炭化物をわずかに含む。

**遺物出土状況** 埋土中から21点の土器片が出土した。埋土上面にて手捏ね形土器が口縁部を下にして出土した。

**出土遺物** 3494はVI期～VII期手捏

ね形土器A類。口縁部が内湾する。

**時期** 出土遺物の時期から、VI～VII

期と考えられる。



図 1352 SK05348 遺物実測図

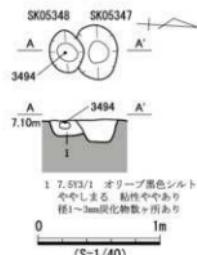


図 1353 SK05348 遺構図

SK05354（遺構：図1354、遺物：図1355）

**検出状況** 西部東側北寄りに位置し、竪穴住居跡が密集する範囲の空閑地にある。平面形は明瞭であった。

**形状** 長軸長約0.8mで、南北にやや長い楕円形を呈する。深さは約0.3mで、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的急である。また、北壁面には一段の平坦面がある。

**埋土** 3層に分層した。底面形状に沿うように中央が窪む堆積で、1層と2層の層界付近から多数の土器が横位で出土した。

**遺物出土状況** 埋土中から1,329点の土器片が出土した。土器片は南側に集中しており、土器とともに亜円碟も数点出土した。1層と2層の層界付近から集中して出土している。

**出土遺物** 3495はVI期～VII期の土製品で、傘形を呈する蓋と考えられる。天井部がやや突出して頂部が平坦だか、やや窪む形状である。口縁部はわずかに内湾し、端部は平坦気味である。3496はVI

期～VII期壺脚部。3497はVII期壺D類脚部。端部を短く折り返す。3498はVI期壺D類脚部。端部の折り返しが認められない。3499はVII期高杯G3b類。口縁部が内湾し、上半に多条沈線が認められる。3500はV期器台A1類。脚部に直線文が認められる。

**時期** 出土遺物の時期から、VI～VII期と考えられる。

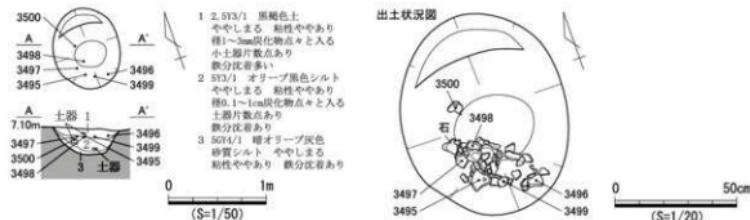


図 1354 SK05354 遺構図

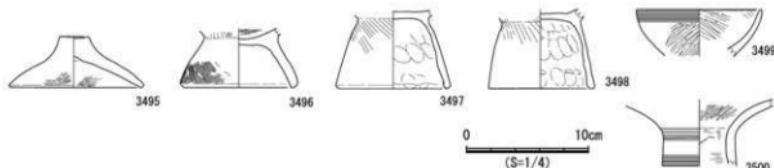


図 1355 SK05354 遺物実測図

#### SK05369 (遺構: 図 1357、遺物: 図 1356)

**検出状況** 西部東側北寄りに位置する。SD1069完掘後の底面において検出し、平面形は明瞭であった。

**形状** 長軸長約0.3mで、南北にやや長い長楕円形を呈する。深さは約0.2mであり、底部は平坦で、壁面の傾斜はほぼ垂直する。

**埋土** 黒色シルトの単層である。ほぼ完形の小型器台が出土し、埋土が单一であることから人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から小型の器台(3501)が口縁部を下にして出土した。

他の遺物は出土しなかった。

**出土遺物** 3501はV期～VI期器台A1b類。A類のなかでは小型品で、脚部に柱状となる部位が認められず、口縁部、脚部ともに短く強く外反する。

現存部位では透孔を確認できなかつ

た。

**時期** 出土遺物の時期から、V～VI

期と考えられる。

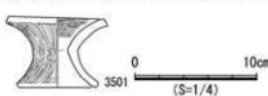


図 1356 SK05369 遺物実測図

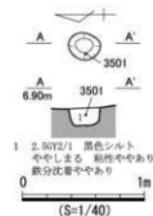


図 1357 SK05369 遺構図

## 6 自然流路

西部域の弥生時代後期から古墳時代前期の自然流路は、微高地の西側から南側にかけて分布する。このうち、水流部の窪みが確認できる自然流路はNR002のみであり、他は微高地周縁に展開する湿地状の窪みである。



図 1358 西部域の弥生時代後期から古墳時代前期の自然流路分布図

NR002 (遺構: 図1359~1365・1368・1371・1374・1376・1377・1379・1383・1416・1420、遺物: 図1366・1367・1369・1370・1372・1373・1375・1378・1380~1382・1384~1415・1417~1419・1421~1435)

検出状況 西部西側中央における自然流路であり、中央を2008年度に、北端を2008年度と2010年度に、南端を2010年度に調査した。遺物包含層であるIV層掘削後にV層もしくは灰色シルト上面で検出し、流路西側の平面形が不明瞭であった。なお、現地調査では、遺物包含層掘削後に検出した褐

上層完掘状況

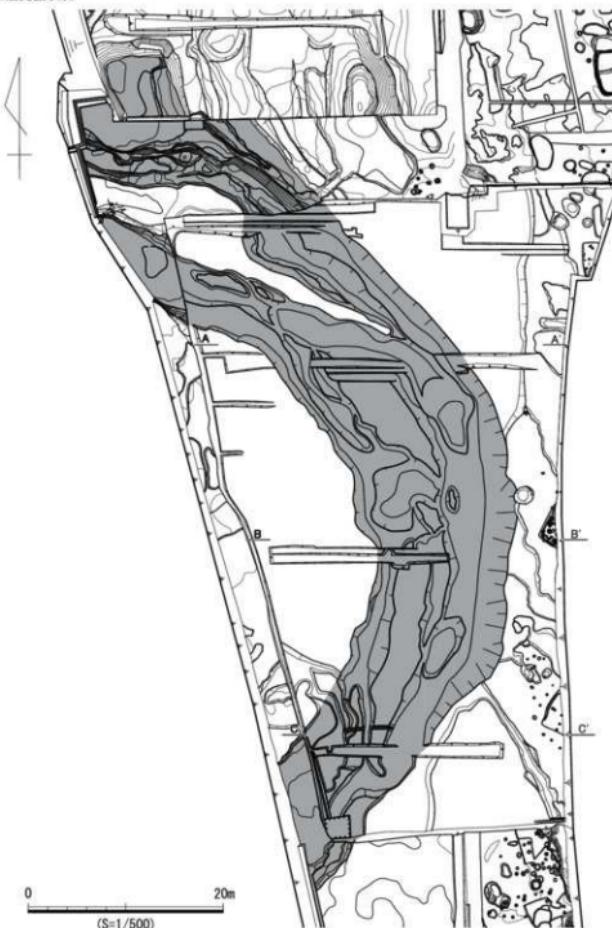


図 1359 NR002 遺構図（1）

灰色土や黒褐色土を本遺構埋土と認識したため、水流部周辺に形成された浅い窪地（いわゆる河原）の範囲から出土した遺物も本遺構出土遺物として取り扱った。

**形状** 検出した範囲では、調査区西壁から南東方向に流れ、途中で大きく湾曲して南西方向へ向きを変えている。その幅は約15mを超え、深さは最大で約1.5mが認められる。壁面の傾斜は緩やかで、底面は湾曲部が最も深い。土層図の1～7層、8～10層、11層で堆積状況が異なり（堆積状況については後述）、7層完掘後の平面形（図1359：NR002上層完掘状況）と、11層完掘後（図1360：NR002

下層完掘状況



図1360 NR002遺構図(2)

下層完掘状況)の平面形が異なる。7層完掘後の平面形は水流部の幅が広く、北側における2つの流れが湾曲部付近で合流している。一方、11層完掘後の平面形は北側の水流部の幅がやや狭く、湾曲部付近で北側へのびる凹み(SK4959)が形成される。また、水流部の壁面傾斜がやや急となる。なお、湾曲部南側ではNR002からSD1019が分岐し、その下流側にてSW003が構築されている。

**埋土** 埋土は大きく11層に分層した。先述したように、埋没は大きく3段階に分けられる。最初に堆積するのが11層である。礫を多く含む砂礫の厚い堆積で、短期間で堆積したと考えられる。次の堆積は10層である。10層はシルトが主体であり、縄文時代晩期後半～I期に堆積している。部分的に微砂が筋状に堆積していることから、一定の流水があったと考えられる。なお、9層はSK4945埋土、

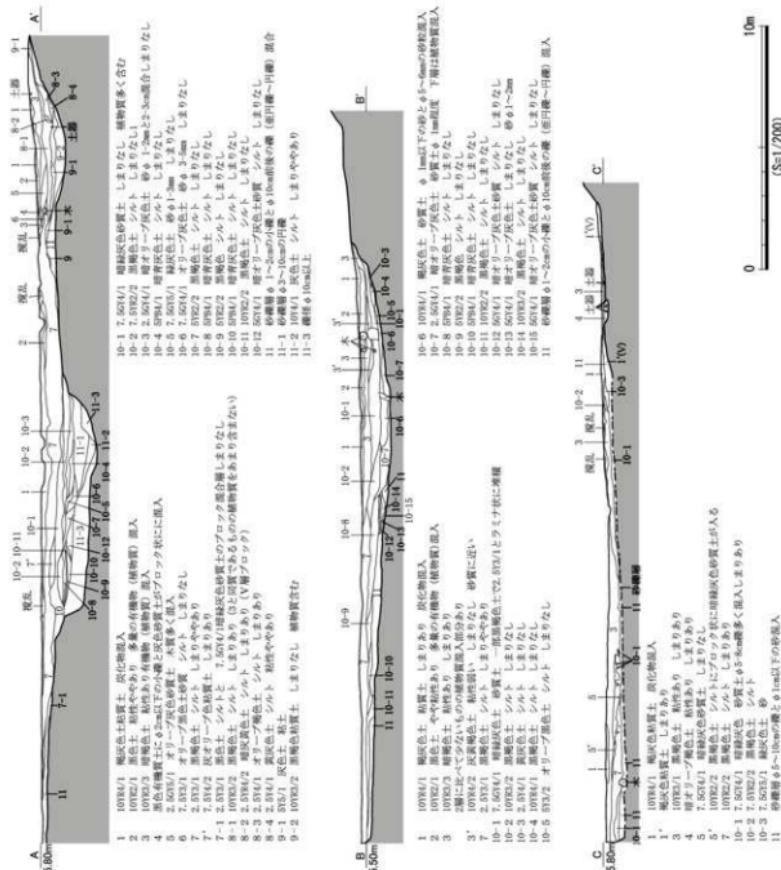


図 1361 NR002 遺構図 (3)

8層はその被覆土である。最終埋没の堆積は1～7層である。そのうち、特に2層と7層の黒色土からV期～X期の遺物が多量に出土した。また、全体的に植物遺体を多量に含んでいることから、流水がほとんどない状態でゆっくりと堆積が進行したと考えられる。3層が多くの遺物を包含し、流路の東側付近のみで確認した。

**遺物出土状況** 埋土から土器90,109点、金属製品2点、灰釉陶器19点、須恵器39点、中近世陶磁器90点、石器類55点、木製品338点が出土した。土器の大半はV期～VII期のものであり、7層までの出土量

遺物出土状況図

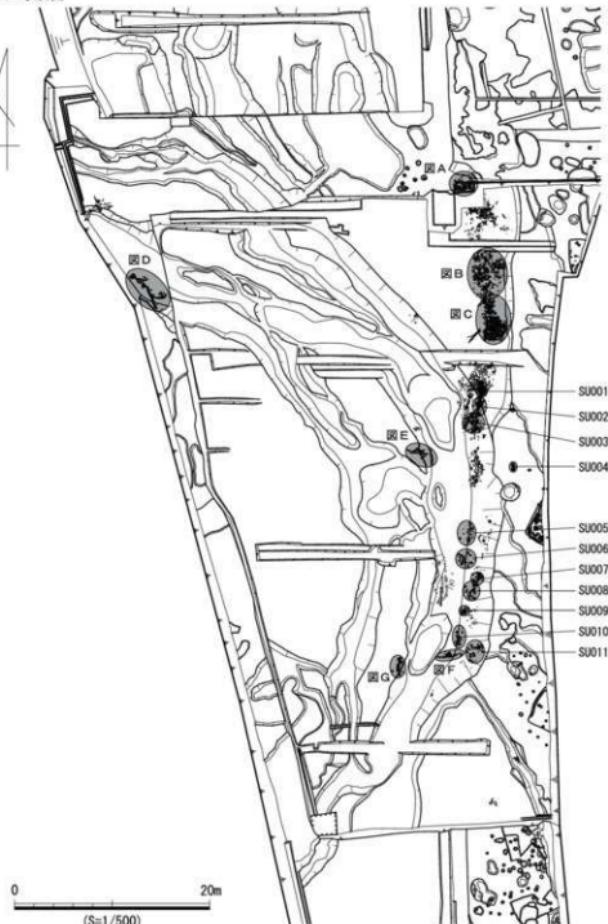
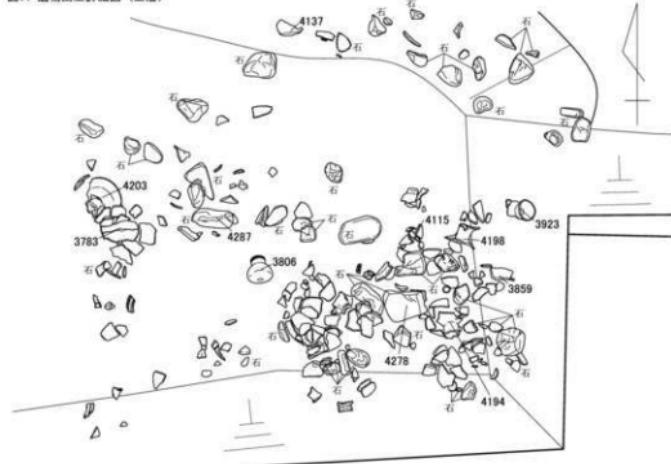


図 1362 NR002 遺構図(4)

が極めて多く、8層以下では少なくなる傾向が認められた。7層までは主に弥生時代～古墳時代前期の土器が多く出土し、その平面的な分布は湾曲部の東側に密集している。8～10層中では縄文時代晚期後半～I期の土器片が出土し、その分布は縄文晚期～I期の土坑であるSK04945付近の流路北西側に分布している。石器類は7層までの土器と同様に湾曲部の東側からの出土が目立つものの、木製品は水流部から散在して出土している。なお、7層までの遺物がまとまって出土した範囲を、現地調査にて遺物集積として取り上げた(SU001～SU011)。以下の出土遺物の項目では、SU001～SU011について出土状況と個々の遺物に関して記述し、土器集積以外の遺物は種別(土器類、石器類、木製品)ごとに分けて記述する。

図A 遺物出土詳細図(上層)



図A 遺物出土詳細図(下層)

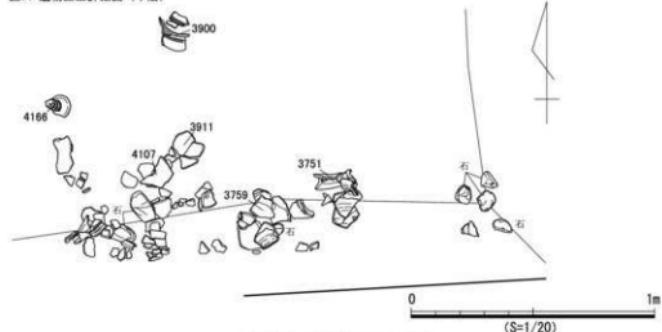
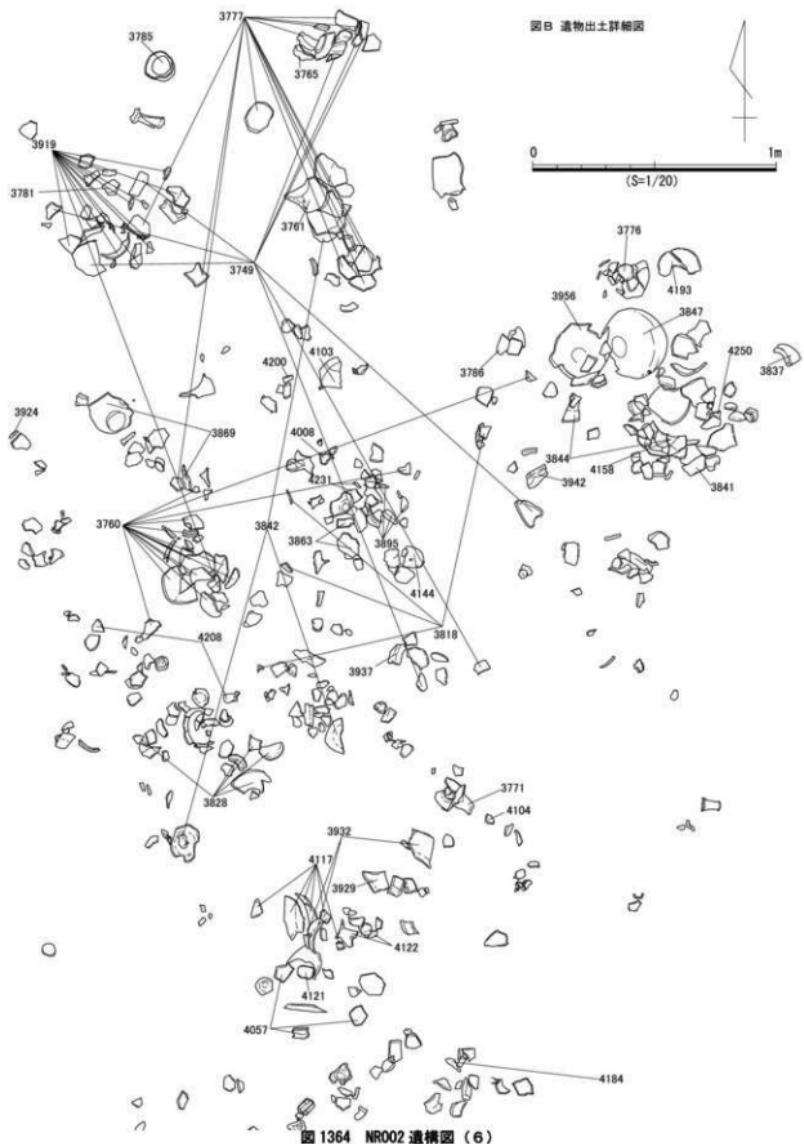


図1363 NR002 遺構図(5)



図B 遺物出土詳細図



## 出土遺物

SU001 2層掘削中に検出した遺物集積で、土器199点を取り上げた。直径約0.5mの範囲に土器が分布する。VI期前半の遺物が多い。

3502はVI期壺H類底部。小さな平底である。3504はV期末～VI期甕A2a類。口縁部外面が鋭く直立して、頸部も直立気味である。口縁部内面は直立する部位がやや短く、強い凹面を形成する。頸部直下に2帯の直線文を施す。3505は口縁端部に強いヨコナデによる著しい凹面を形成するVI期の甕B3類。口縁部も頸部から屈折するが、端部付近は強いヨコナデによって内湾気味となる。3503はVI期前半鉢A3a類。口縁端部上端をわずかに拡張する。頸部直下に直線文、刺突文が認められる。3506はV期前半の高环B2a類。口縁部が短く立ち上がり、端部が外方へ拡張されて、内面は凹面を形成する。3507はVI期器台B1c類。口縁端部下端を拡張して、多条沈線を施す。

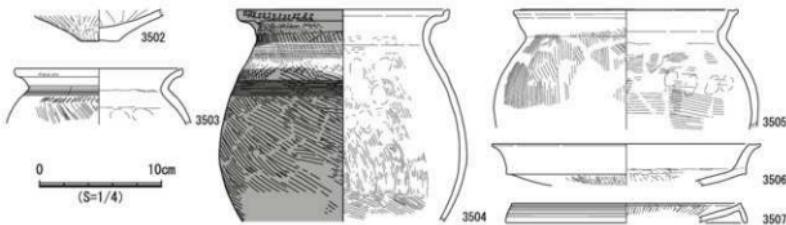


図 1366 NR002-SU001 遺物実測図

SU002 2層掘削中に検出した遺物集積で、土器246点を取り上げた。甕(3509)の周囲に南北長約2.0mの範囲で土器片が分布する。VI期後半の遺物が多い。

3508はVI期後半壺H類胴部。偏平な胴部で小さな平底の中央に穿孔が認められる。3509はVI後半甕B3類。ほぼ完存する良好な資料。口縁部は短く屈折して、端部には断続的なナデによる凸凹が目立つ。胴部は倒卵形で最大径は胴部上半にある。器面全体に粗いハケ目が認められる。胴部下半に方向の異なるハケ目があり、羽状となる。3510はVI後半甕A4類。口縁部がわずかに直立する。刺突文が認められる。3511はVI後半器台B1類。脚部は直立気味だ

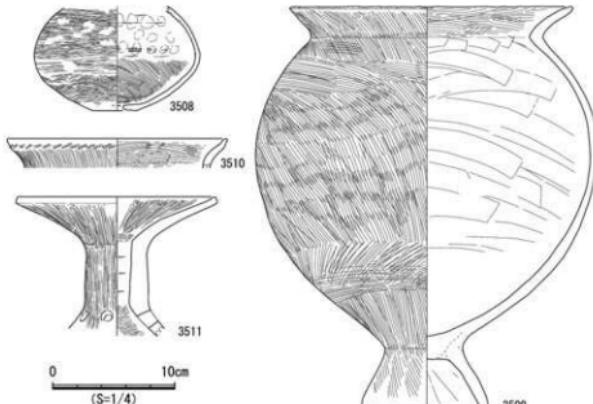


図 1367 NR002-SU002 遺物実測図

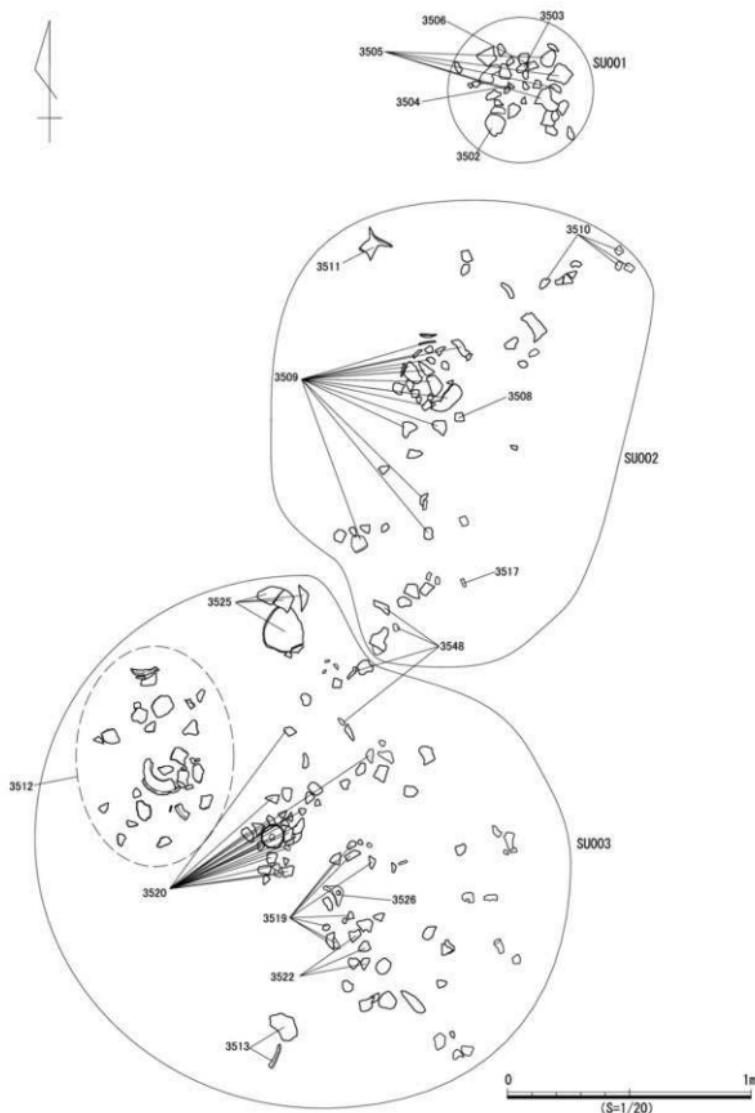


図 1368 NR002 遺構図 (8)

が、口縁部はやや内湾する。

SU003 2層掘削中に検出した遺物集積で、土器512点を取り上げた。高坏（3525）が正位で出土し、その南側約2.0mの範囲で土器片が散在する。ほぼ完形の甕（3520）も出土した。VI期後半～VII期前半の遺物が多い。

3512はVI期壺A1a類。口縁部が外反して立ち上がり、端部下端を大きく拡張する。端部には擬凹線が認められ2個1組の円形浮文が4方向に配置される。内面には羽状文と円形刺突文が施文され、赤彩を文様帯以下から頸部まで施す。胴部は下膨れで頸部にやや断面の低い突帶を2条貼付する。突帶間のみに刺突文、胴部上半に直線文3帯、振幅の短い波状文2帯、最下段に円形刺突文を施文する。頸部と文様帯以下の胴部に赤彩が認められる。3513はVII期前半の壺A3類。口縁部が外反して、内面には段をもつ。端部と段までの間に羽状文を施文する。胴部は下膨れ気味で、最大径付近までに直線文3帯と山形文2帯を施文する。器面にはミガキ調整が認められず、ハケ目調整のままである。煤が一部に強く付着する。赤彩は口縁部外面、山形文に施される。3514、3515はVI期～VII期の壺A1a類。口縁部が大きく外反して、端部下端を拡張する。加飾が顕著で頸部突帶の両側に円形刺突文、胴部上半には直線文4帯の間に波状文と刺突文を施文する。内面には羽状文を施文する。赤彩が外面では文様帯以外、内面では頸部に認められる。3516はVI期～VII期の壺B1類。口縁部が頸部で屈折して直線的に伸び、端部には強い平坦面が認められる。3517はV期～VI期壺K類。口頸部は長く直立して口縁部が強く外反する大型の壺。口縁部のみが遺存する。端部下端を拡張して、直線文の上に円形刺突文を施文する。胴部には羽状文が認められる。3517はこれまでの資料には認められなかった例外的な資料である。形状や口縁端部の文様は畿内のものに類似し、胴部文様は壺A類に類似する。3518はVI期～VII期甕A4類。口縁部がわずかに屈曲する。端部には刺突文が認められる。胴部はやや下膨れ気味である。3519はVII期前半の甕D2b類。口縁部が鋭く屈曲して上段は外方へ強く屈曲して、端部は凹面を形成する。胴部は粗いハケ目が認められ、肩部が強く張る。頸部直下からやや離れた位置にヨコハケが認められる。ハケ目の痕跡、ヨコハケの位置などが3520と類似する。3520はVI期甕D1b類。口縁部が屈曲し、上段は直立してから端部を外方へ押し、凹面を形成する。胴部は肩部が強く張り、倒卵形を呈する。頸部直下、頸部直下からやや離れた位置にヨコハケが認められる。3521はVII期甕D2b類。脚部を打ち欠きによって失われているが、それ以外はほぼ完形品である。口縁部が鋭く屈曲し、上段がさらに外方へ強く屈曲する。端部には凹面が形成される。胴部は倒卵形で、単位の細かなハケ目が認められる。ヨコハケが頸部直下と頸部直下からやや離れた位置に認められる。3522は3519と同一個体の可能性が高いVII期前半甕D2b類の胴部。脚部には打ち欠きが認められる。3523はV期前半高坏B2a類。口縁部が短く端部上端を外方へ拡張して、擬凹線を施文する。口縁部には波状文が認められる。3524はVI期前半高坏B3b類。口縁部が短く強く外反する。端部は丸くおさめる。3525はVII期高坏D2類。ほぼ完存する良好な資料。縮小した坏底部から口縁部が大きく開く。端部には内傾面が形成され、多条沈線を施文する。脚部は付根がやや細身だが、付根から大きく開く。裾部は内湾する。3526はVI期後半～VII期前半の高坏C3類もしくはC4類の大型の高坏脚部。付根から円錐状に脚部が広がり、裾部でやや外反傾向を強める。透孔は1組2穿孔が2方向に配置される。内面には坏底部と口縁部との境にある段差が明瞭に認められ、円周状にミガキを加えている。3527はVII

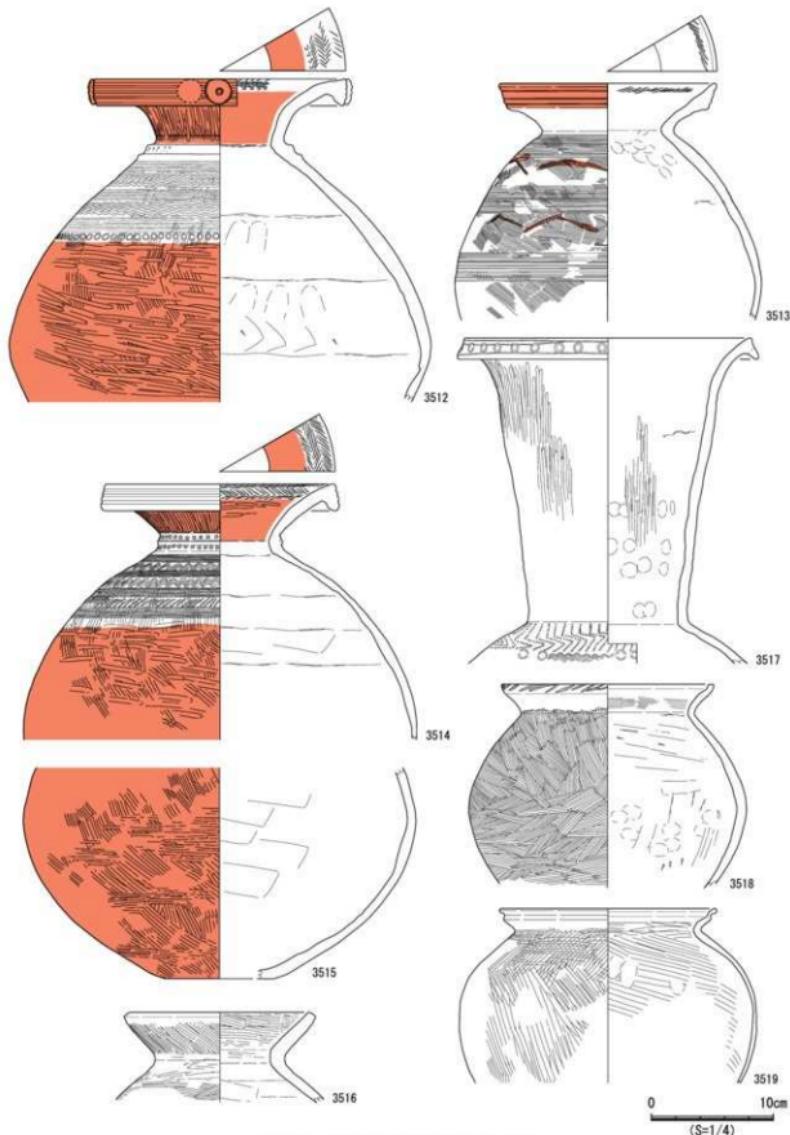


図 1369 NR002-SU003 遺物実測図 (1)

期器台D類。口縁部は外面では底部で稜をもって立ち上がるが、内面で内湾して立ち上がる。端部は内傾面を形成し、多条弦線を施す。脚部は付根から円錐状に広がり、透孔が上下に配置される。

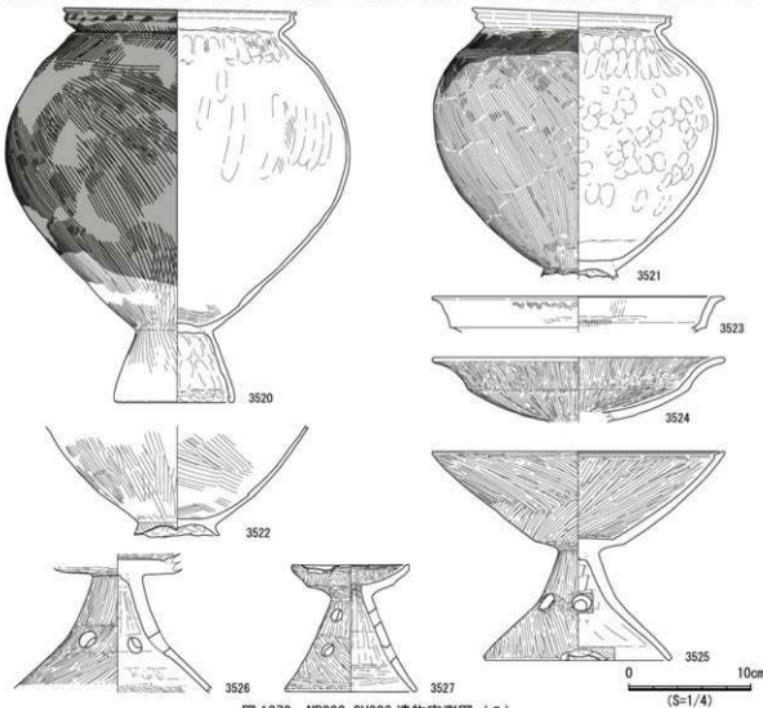


図 1370 NR002-SU003 遺物実測図 (2)

SU004 3層掘削中に検出した遺物集積で、土器177点を取り上げた。南北長約1.0mの範囲に密集し、  
二次的な被熱を受けた破片が認められた。V-2期の遺物が多い。

3528～3535はV-2期壺A1類。口縁部が頸部で強く屈曲して直立する。端部には強い凹面が形成され、刺突文が施文される。3531、3534、3535には、二次的な被破も認められた。3534には波状文が認められる。3532は頸部直下に直線文が認められ、口縁部に打ち欠きが認められる。3536はV-2期壺B1b類。口縁部がくの字に屈曲し、端部には刺突文を施文する。内面にはケズリが認められる。3537はV-2期壺B類胴部。内面にケズリが認められる。3538は大型のV-2期器台Ala類。口縁部、瓶部とも強く外反して、端部に強い凹面を

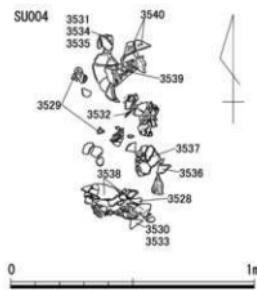


圖 1271 NB002 漸擴圖 (a)

形成する。それぞれ上端、下端が拡張される。脚部は柱状で中程からやや外方に開く。透孔は脚部中位よりやや下がった位置の4方向に施される。二次的に被熱した可能性があり、器面全体がやや磨耗し、赤色化している。3539はV-2期高環B2類の脚部で大型品。脚部が付根から円錐状に広がり、裾部が強く外反する。端部は強い平坦面を形成する。5帯の直線文を施し、最下段の直線文上に4方向の透孔が配置される。赤彩が文様帶を除いた部位に施される。二次的な被熱による煤の付着が認められる。3540はV-2期高環B類の脚部。裾部が強く外反し、外面にはハケ目が残る。また、煤が付着する。

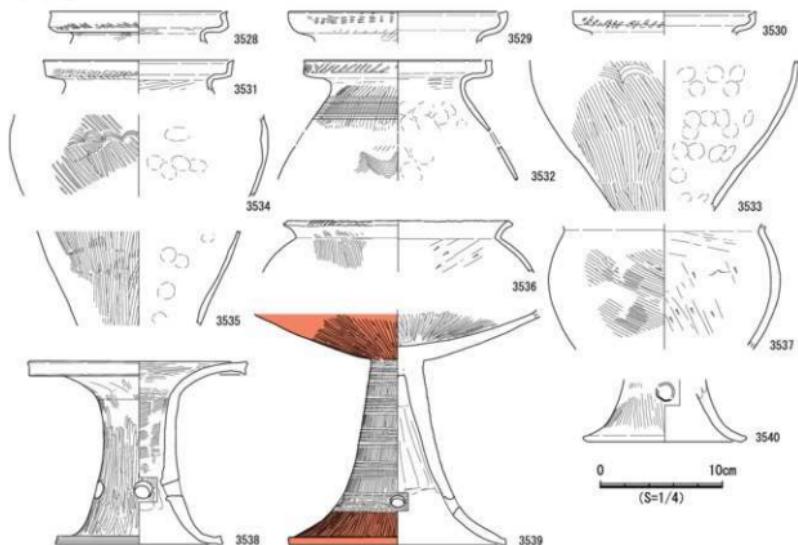


図1372 NR002-SU004 遺物実測図

SU005 3層掘削中に検出した遺物集積で、土器39点、石器類1点、木製品5点を取り上げた。南北長約2.4mの範囲に遺物が分布する。VII期後半の遺物が多い。

3541はV期～VI期の複合鋸歯文のある壺胴部。3542は小型品でVII期壺A類胴部。胴部は下膨れ気味で、上半に直線文2帯とその間に山形文を施し、最下段に刺突文を加える。文様帶以下と山形文中に赤彩が認められる。3543はVII期壺A類胴部。胴部上半に直線文があり、太い沈線によって3帯に区画されているようにみえるが、直線文との重複関係がないので同一の工具による施文であろう。文様帶最下段には刺突文が認められる。3544はVII期壺E類。口縁部が頸部で屈折して、短く外反する。端部には顯著な平坦面を形成する。3545はVII期壺A4類。ほぼ完形となる土器である、口縁端部下端が拡張されて屈曲が顯著だが、下端に粘土を足して屈曲を強調する。補充した粘土を除いた形状をみると屈曲は弱い。胴部は最大径が胴部中央やや下位にある。脚部は短くやや内湾する。口縁端部、脚端部に打ち欠きが認められる。3546はVII期後半の高環D2類。口縁部がやや内湾して大きく開く。端部

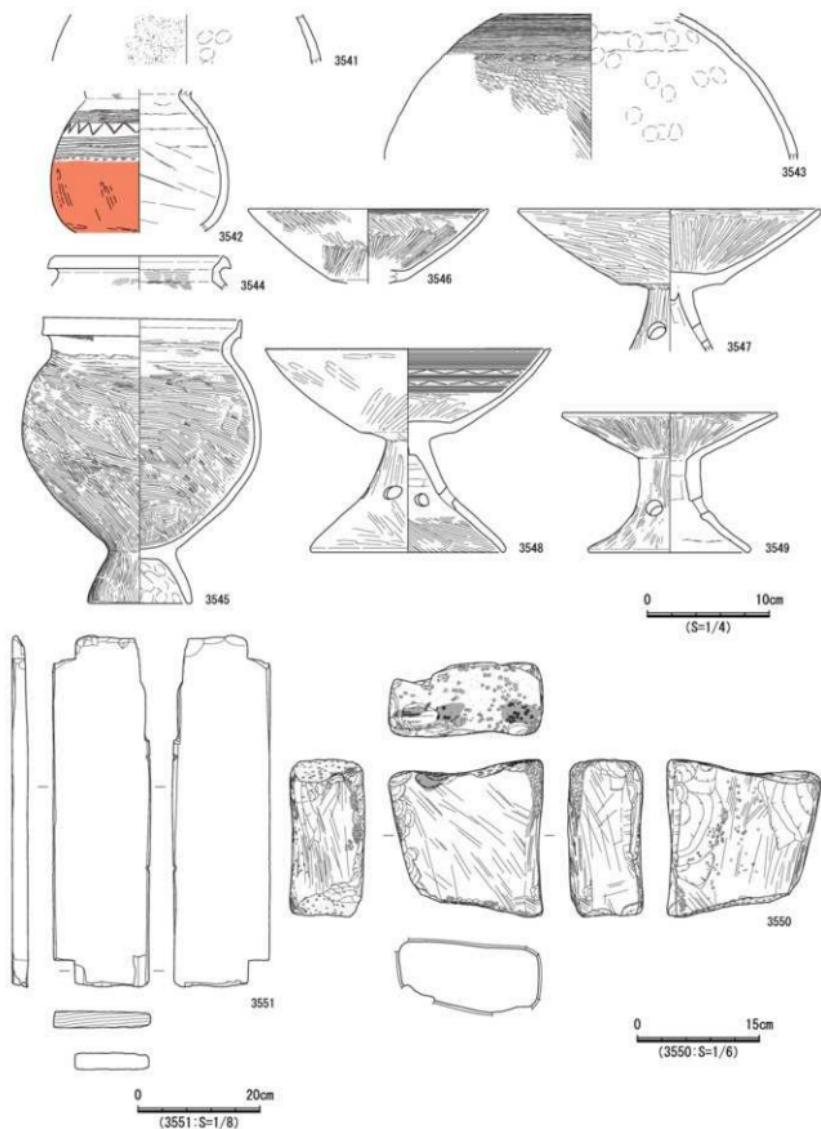


図 1373 NR002-SU005 遺物実測図

の内傾面に多条沈線を施文する。3547はVII期後半高坏D1類。小さな坏底部から口縁部が屈折して、直線的に開く。坏部は浅く、端部には顯著な平坦面が認められる。内面の坏底部と口縁部の境にある段差は痕跡的で、ミガキを円周状に施すことによって形成する。脚部はわずかに内湾する。3548はVII期後半の高坏D4類。小さな坏底部から口縁部が大きく開き、坏部高が低い。端部は内傾面を形成して、多条沈線を施文する。内面には2分の1程度の範囲に多条沈線3帯と山形文2帯を施文し、文様帶直下にわずかに段を形成する。坏底部と口縁部との境にも段が認められる。脚部は付根から円錐状に広がり、透孔付近から内湾する。3549はVI期～VII期の器台B2a類。口縁部がわずかに内湾しながら開き、脚部やや短く裾部で内湾する。3550は凝灰質砂岩製の砥石。上下の自然面は部分的に砥面が見られる。敲打痕も認められる。3551は壁板の可能性がある建築部材。側面に半円形の溝2カ所認められる。

SU005

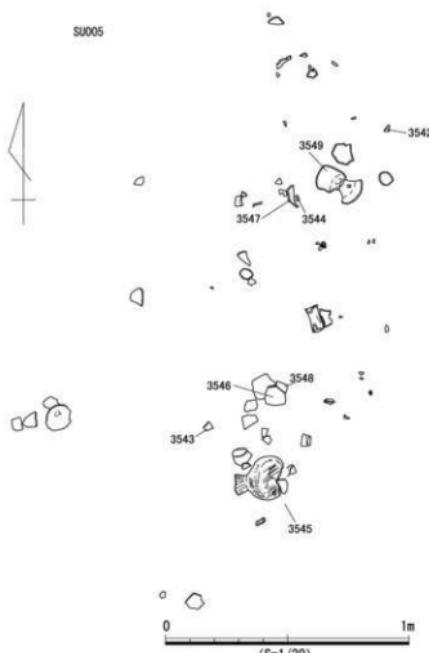


図 1374 NR002 遺構図 (10)

SU006 3層掘削中に検出した遺物集積で、土器94点を取り上げた。南北長約2.0mの範囲に土器片が分布する。VII期前半の遺物が多い。

3552、3554は口縁部が強く外反して、内面に段のあるVII期前半壺A3類。3552の段はやや弱く、羽状文が施文される。羽状文以下には赤彩が認められる。端部は下端がわずかに拡張されて、赤彩が施される。3554は端部は下方へ大きく拡張され、擬凹線と3個1組の棒状浮文が4方向に施文される。内面には2帯の羽状文が認められる。頸部には2条の突帯がめぐり、上端がナデによって押し潰される。そのため、低位の突帯で、とくに下段の突帯は痕跡的である。胴部はなだらかに膨らみ、直線文3帯、山形文2帯を交互に施文する。赤彩が口縁部内外面、山形文に施される。3553はV期壺A類の底部。大型品で赤彩が認められる。磨耗が著しい。胎土が茶褐色を呈し、緻密である。残る資料はVII期前半と考えられる。3555はVII期前半甕D類脚部。脚部は直線的で端部の折り返しが弱い。3556はVII期前半甕E類にも類似するが外面全体に丁寧なミガキがあるので、鉢D類。脚部は短く内湾して開き。端部に打ち欠きが認められる。胴部は付根から直線的に外方へ伸びる。3557はVII期前半器台C2類。口縁部が短くわずかに内湾する。端部は尖り気味である。3558はVII期前半器台B3類。付根から脚部が強く開く。3559はVII期前半手捏ね土器C類。口縁端部を欠損するが、打ち欠きによる欠損の可能性がある。

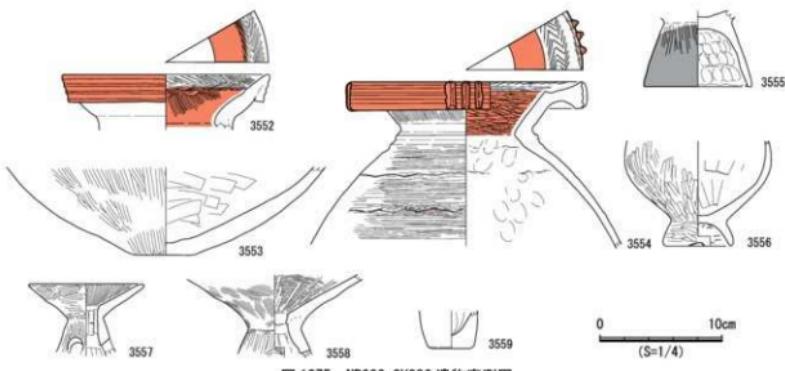


図 1375 NR002-SU006 遺物実測図

SU007 3層掘削中に検出した遺物集積で、土器48点を取り上げた。直径約1.6mの範囲に土器が分布する。VI-1期の甕(3560)、鉢(3561)、高坏(3562)、器台(3567)の4個体がまとまって出土した。器台(3566)はやや集中域から離れて出土し、南側のSU008出土遺物と接合した。VI-1期の遺物が多いものの、VII期(3563)やX期(3565)の土器も含まれる。

3560はVI-1期甕B2類。口縁部が短く頸部で屈折して、端部は凹面を形成する。胴部は肩部が強く張る倒卵形である。3561はVI-1期鉢B2類。円盤状の底部から胴部がわずかに内湾しながら立ち上がる。口縁端部は比較的平坦だが、ヨコナデが断続的であったためか凹凸が目立つ。内外面とも粗いハケ目が残る。3562はVI-1期高坏B3a類。口縁部が坏底部から強く外反する。端部は平坦だが、わずかに丸みをおびる。外面の坏底部と口縁部の境界は新たに粘土を足して強い稜を形成する。脚部は付根付近が柱状で、裾部で外反する。ミガキが外面全体や坏部内面に丁寧に施されるが、口縁部外面のみその間隔が離れ、上下方向の振幅を強調した暗文の波状文のように見える。3563はVII期後半高坏D4類。口縁端部が内傾し、多条沈線を施す。内面にも細線による多条沈線4带、山形文3带を交互に施す。文様帶最下段の段差は認められない。3564はVI-1期高坏B3b類。口縁

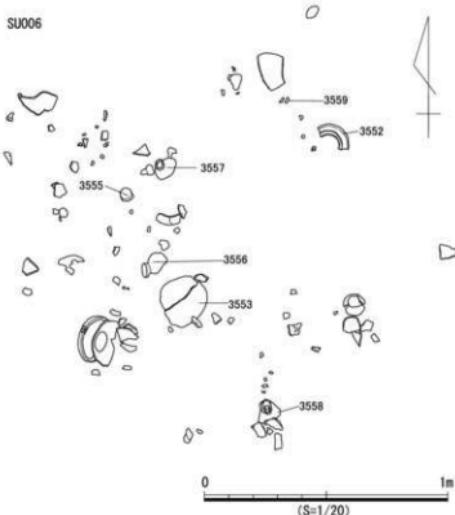


図 1376 NR002 遺構図 (11)

部が強く外反して開き、端部を丸くおさめる。3565はX期の高杯。口縁部が付根から大きく開き、脚部は内湾して裾部で強く外反する。3566、3567はVI～I期器台B1a類。3566は口縁部が直線的に外方へ開き、脚部は基部付近が筒状となるが、裾部は外反する。他の同類と比べると、やや脚高が低くA1類にも類似する。器面全体にハケ目や指頭圧痕が残り、粗雑なつくりである。3567は脚部が付根からわずかに広がり、裾部で外反する。3568はVII期手捏ねC類。打ち欠きが認められる。

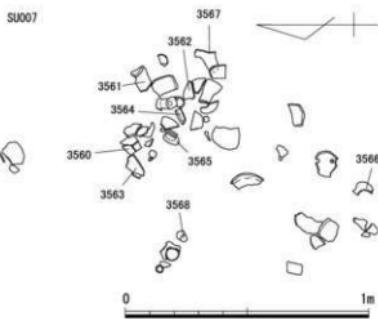


図 1377 NR002 遺構図 (12)

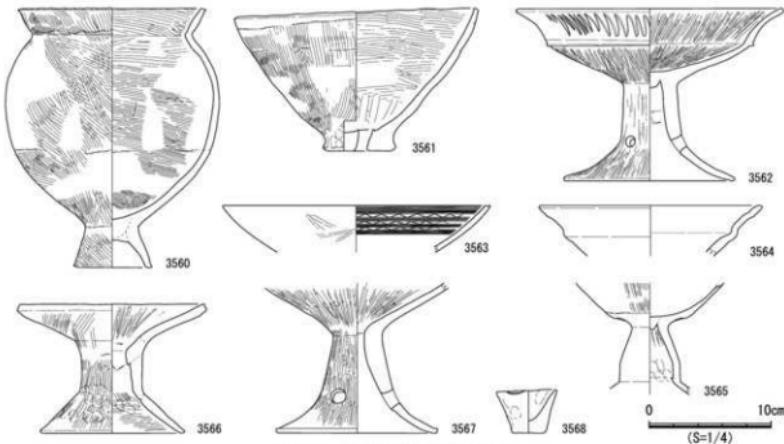


図 1378 NR002-SU007 遺物実測図

SU008 2層掘削中に検出した遺物集積で、土器668点、木製品1点を取り上げた。直径約2.0mの範囲に遺物が分布する。VII期の遺物が多いものの、他の時期の遺物も出土している。

3569はVI期～VII期の壺B1類。口縁部が外反して、端部は平坦である。3570はVII期壺A類の胴部。下膨れの胴部で上半に直線文と山形文を交互に施文する。赤彩が山形文と文様帶以下に施される。3571はVII期壺A5類。口縁部が外反して、端部を拡張する。端部には羽状文を施文する。内面には煤が付着する。3572はVII期後半～VIII期の壺E類で柳ヶ坪型壺の胴部。大振りな波状文と直線文が認められる。3573はV期末～VI期前半の壺A2b類で平底壺である。口縁部は強く屈曲して、端部はわずかな内傾面を形成する。胴部は肩部が強く膨らみ、他の同類と比べてやや偏平である。底部は小さくやや上げ底でA1類と同様である。3574はVII期壺D3類。頸部に沈線が認められ、口縁部が屈曲する。上段は短く外反して、端部はわずかに肥厚気味となる。端部に打ち欠きが認められる。3575、3576

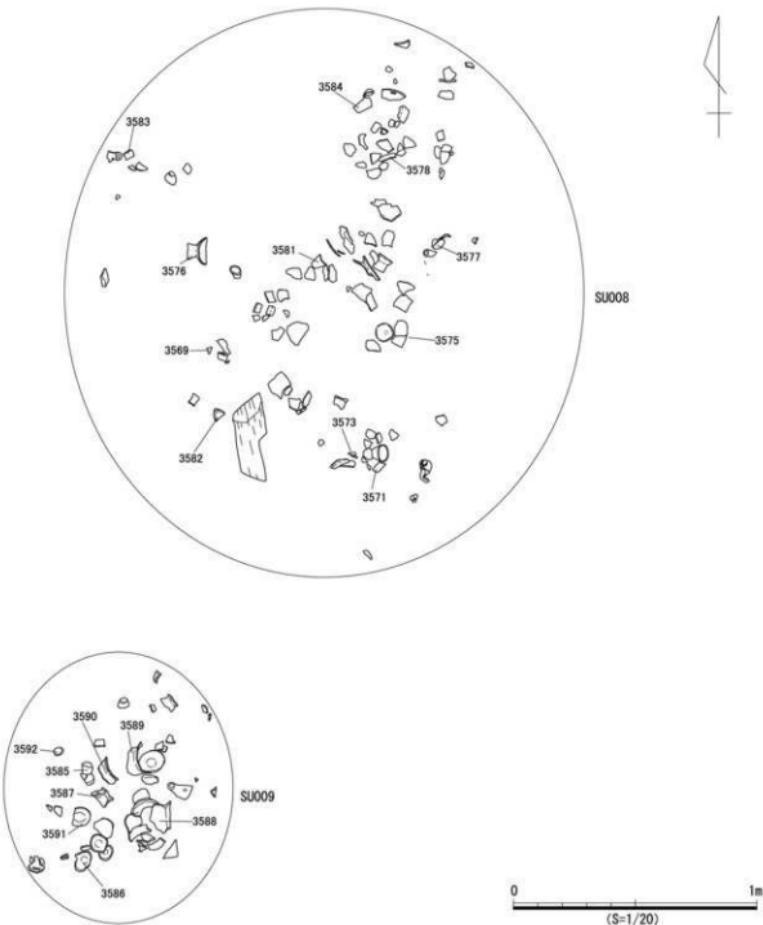


図 1379 NR002 遺構図 (13)

はVII期甕E類。3575は脚部が短く開き、胴部は付根から大きく開く。端部には打ち欠きが認められる。3576も3575と同様の脚部形状で口頸部までが遺存する。口縁部から胴部にかけては3577と類似する。3577はVII期鉢G類のほぼ完形品。胴部は底部から内湾しながら緩やかに立ち上がり、最大径は中央よりやや上位に位置する。口縁部は頸部からわずかに直立して、端部を尖り気味におさめる。外面は粗いハケ目が顕著である。3578、3580はVII期末～VIII期の高杯D2類。3578は肥厚した内傾面は認められるが、多条沈線は認められない。3580は杯底部が小さく、口縁部が内湾しながら大きく開く。端部には内傾面を形成する。内面の杯底部と口縁部との段は痕跡的で、ミガキを円周状に施すことによ

って形成する。脚部は短く外反し、透孔が上下2段を千鳥状に配置する。3579はVII期後半の高杯D5類。形状は3580に類似するが、口縁部が直線的で内面の段が顯著である。内面には少条の多条沈線5帯、貝による連弧文4帯を施文する。3581、3582はX期の高杯脚部。付根から短く内湾して開き、裾部で強く屈曲して外反する。3583はV期末の器台A1類。口縁部が強く外反する。3584はVII期の器台。受部は小さな皿状で、脚部は長脚である。脚部は付根から円錐状に広がり、裾部でわずかに内湾する。透孔が中位より上位に位置する。口縁部に打ち欠き、脚部に煤の付着が認められる。

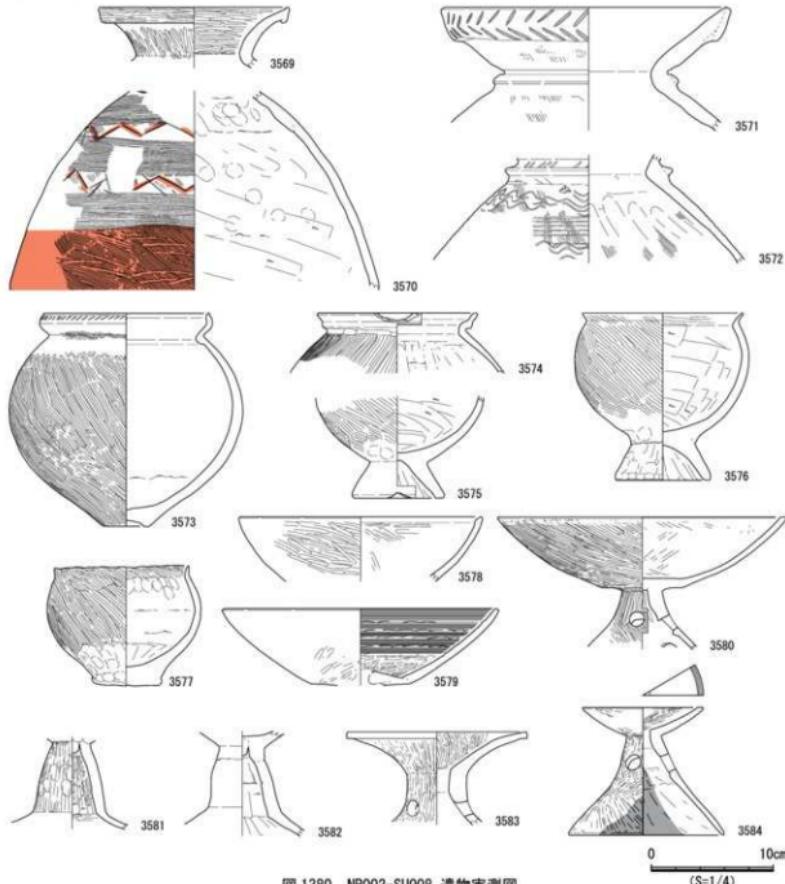


図1380 NR002-SU008 遺物実測図

SU009 3層掘削中に検出した遺物集積で、土器73点を取り上げた。VII期甕(3588)の周辺約1.0mの範囲に土器片が分布する。VII期の遺物が多いものの、他の時期の遺物も出土している。

3585はⅦ期壺の胴部。偏平な胴部で薄く仕上げられる。3586はⅠ期壺の底部。貝殻条痕が認められ、底部外面中央がわずかに窪む。3587はⅥ期～Ⅶ期甕の脚部。直線的に脚部が伸び、端部には平坦である。3588はⅦ期甕B3類。口縁部が短くくの字に屈折して、端部に凹面を形成する。凹面は断続的な強いナデによる凹凸が認められる。胴部は球形にちかく、脚部は短く内湾する。外面全体に粗いハケ目が残る。3589はⅦ期甕B4類。口縁部が頸部で屈折して外反し、端部を丸くおさめる。胴部は肩部が強く張る。3590はⅧ期甕D2b類。口縁部が屈曲して、上段が外反する。3591は低脚のⅣ期高杯。脚部が短く強く外反して、端部に強い平坦面を形成する。3592はⅦ期手捏ね土器C類。口縁部がわずかに外反する。

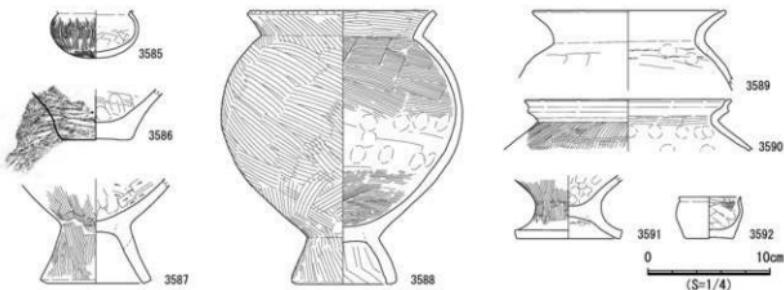


図 1381 NR002-SU009 遺物実測図

SU010 3層掘削中に検出した遺物集積で、土器471点を取り上げた。Ⅶ期鉢(3597)が完存した状態で出土し、その周囲約1.0mの範囲に帶状に土器が分布する。Ⅷ期～Ⅶ期の遺物が多い。

3593はⅤ～Ⅵ期壺K類。口頸部が直線的となるが、頸部で段を形成する。胴部は肩部が強く張る。3594はⅧ期甕D2a類。口縁部が強く屈曲して、上段は直立してから短く外反する。頸部直下にヨコハケが認められる。3595はⅤ期鉢A2類。口縁部がわずかに屈曲する。胴部は最大径が口径より下回り、その膨らみは弱い。下半でわずかに屈曲する。下半はケズリの後、ミガキが施される。3596はⅤ～Ⅵ期鉢F類。口縁部が内湾して、端部は丸くおさめる。3597は口縁部がわずかに外反するⅦ期鉢G類。底部は突出して、胴部が緩やかに内湾しながら立ち上がる。胴部外面には輪積みの痕跡が目立ち、つくりが粗い土器である。3598はⅦ期器台B4類。口縁部が強く内湾する。端部下端を外傾させて大きく拡張して、精緻な多条沈線を施す。内外面ともに丁寧なミガキが認められる。3599は口縁部を欠損するが、胴部が内湾するⅥ～Ⅶ期手捏ね土器D類。

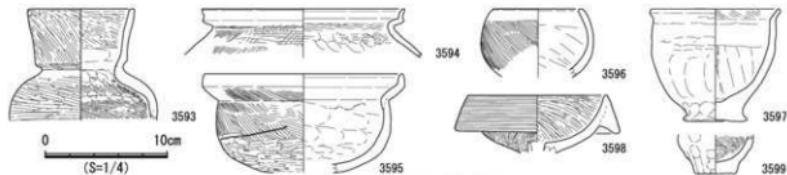


図 1382 NR002-SU010 遺物実測図

SU011 3層掘削中に検出した遺物集積で、土器384点、木製品2点を取り上げた。直径約2.0mの範囲に遺物が分布し、人為的な打ち欠きのある土器(3604、3609)も出土した。VII期後半の遺物が多い。

3600はVI期壺A3類。口縁部が外反する。内面に平坦な面を形成し、強い段を設ける。平坦な面には擬凹線を施す。段から頸部までは赤彩が認められる。3601はVII期～VIII期大型壺の胴部。下膨れの胴部をもち、胴部下半で屈曲気味となって底部にいたる。胴部上半に文様帶があり、一次調整である斜位のハケ目の上に波状文と直線文を重ねる。文様帶以下の胴部は斜位のミガキの上に丁寧なミガキが加えられる。3602は口頸部を一部欠損するが、ほぼ完存する小型のVII期壺J1類。口縁部が外反して

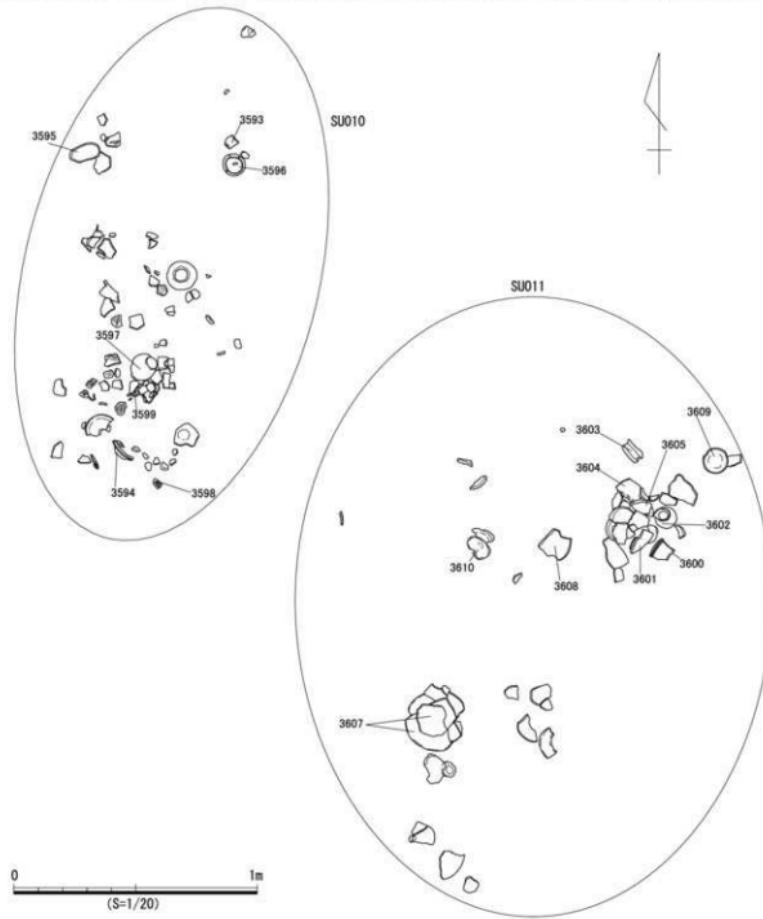


図 1383 NR002 遺構図 (14)

端部が平坦である。内外面に粗いハケ目が認められる。胴部は中央が強く膨らみ、下半はやや直線的である。全体の形状はB2類に類似する。3603はVI期斐A2b類。口縁部外面が屈曲するが内面の屈曲が弱く、端部は内傾するものの平坦面はやや形骸化する。胴部上半に直線文2帯、刺突文1帯を施文する。3604は脚部を欠損するが、その他はほぼ完存するVII期斐D2b類。口縁部が強く屈曲して、上段は外反する。端部を外方へ引き出し、凹面を形成する。胴部は倒卵形で上半にヨコハケが認められる。

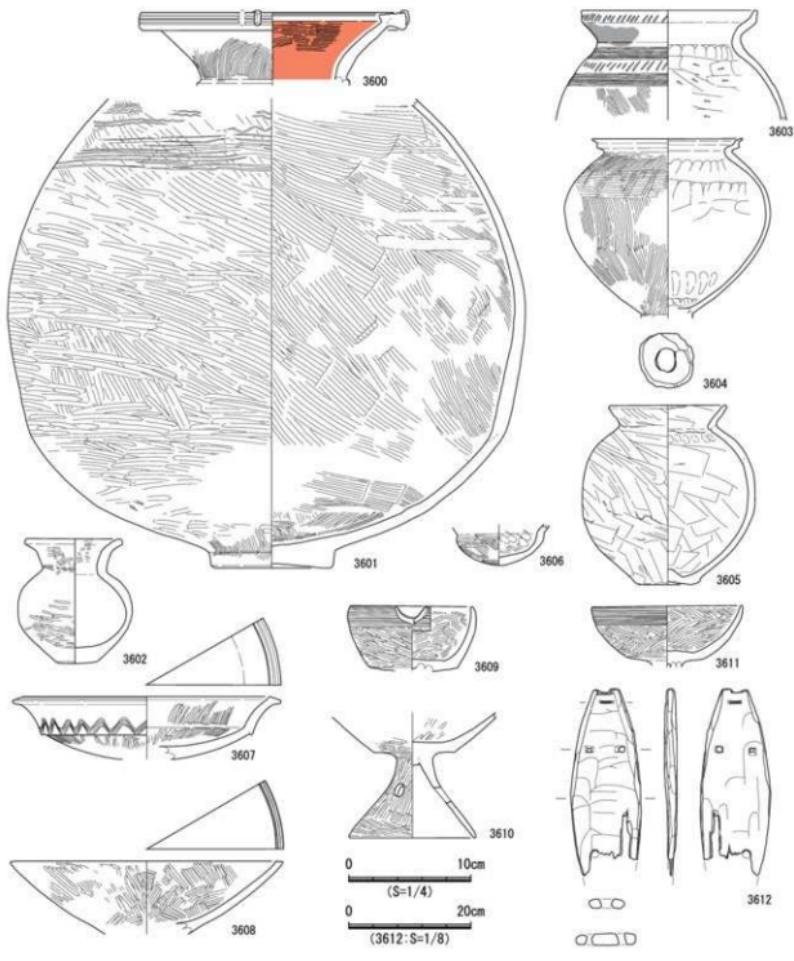


図 1384 NR002-SU011 遺物実測図

底部中央に打ち欠きによる穿孔が認められる。3605は胴部がやや偏平気味のⅦ期の小型平底甕でE4類。口縁部が短く屈折して端部やや平坦で、形状はE3類に類似する。胴部は内外面ともに板ナデによる凹凸が顕著である。3606は胎土が精緻な小型のⅦ期後半の甕。扁平な胴部が特徴的で口縁部は欠損するものの、頸部の屈折が強いて外方へ大きく開くと考えられる。3607はⅧ期前半高坏B2a類。口縁部が短く外反する。口縁部は坏底部で強く屈曲し、坏底部より下方へはみ出る部位が認められる。端部外傾して、外方を拡張して擬凹線を施文する。口縁部下半にも波状文を施文する。3608はⅦ期高坏D2類。口縁部が内湾しながら大きく開く。端部は内傾面があり、多条沈線を施文する。内外面ともに丁寧な羽状のミガキが認められる。3609、3611はⅧ期高坏G3b類。脚部を欠損するが、坏部は完存する。3609は坏底部と口縁部の屈曲が顕著で口縁部が内湾しながら立ち上がる。内面の段はわずかに認められる。口縁部外面上半に多条沈線を施文する。口縁部には3箇所の打ち欠きが認められる。3611は3609と比べて坏底部径が小さく、口縁部が内湾ながら大きく開く。内面の段は痕跡的で沈線状に施したミガキによって形成される。口縁部上半には細密な線による多条沈線が認められる。内外面とも丁寧な羽状のミガキが認められる。3610はⅦ期高坏G2類。口縁部が大きく開き、脚部は据部で内湾する。端部には打ち欠きが認められる。3612は田下駄。中央に2箇所の方形孔（縦約1.1cm・横約1.4cm）、上端に2箇所の長方形孔（縦約0.6cm・横約2.2cm）がある。

#### 土器集積以外の遺物

##### 土器類

**縄文土器** 3613は縄文時代早期の東海条痕系土器の深鉢。磨耗が著しい。突帯にキザミがあり、外面には織維痕、内面には条痕が認められる。3614は縄文時代晚期中葉の深鉢口縁部。口縁部がわずかに肥厚気味で内湾し、端部が平坦である。外面はケズリが認められ、胎土中には金雲母が目立つ。3615は縄文時代晚期中葉～後半にかけての深鉢口縁部。胴部から口縁部が弱く外反する。器面全体に磨耗が進行しているが、端部はやや平坦でキザミが認められる。口縁部から胴部にかけて右下がりの条痕が認められる。3616、3623は口縁部が外傾し、端部に押圧が認められる縄文時代晚期後半の深鉢口縁部。3616は肩部が屈折し、肩部以下にはケズリがみられる。3617、3618、3620は縄文時代晚期後半の深鉢口縁部。肥厚した口縁端部からやや離れた位置に素文突帯を貼付する。3617、3620は内面に沈線が1条認められる。3620の端部上端にはわずかに押圧らしい痕跡が認められる。3619、3622は縄文時代晚期後半の深鉢口縁部。口縁端部にキザミが認められ、端部からやや離れた位置にD字状の押圧のある突帯を貼付する。3619の端部にはキザミが認められる。3621は口縁部がわずかに外反し、端部のキザミのある縄文時代晚期後半の深鉢口縁部。肩部が弱く屈曲し、肩部より上には縱方向の条痕、下には横方向のケズリが認められる。3624～3627、3629、3630、3633は縄文時代晚期後半の深鉢口縁部。端部直下にD字状の押圧のある突帯を貼付する。3625、3629の突帯は断面高が高い。3628、3631、3632、3653は縄文時代晚期後半の深鉢。3628、3653は口縁部が外反し、突帯が端部から下がった位置に貼付される。3628、3631は突带上にユビによる押圧が認められる。3653は端部が平坦で、突帶より上位にも条痕が認められる。3634は縄文時代晚期後半の深鉢口縁部。口縁端部を肥厚し、沈線が認められる。3635は縄文時代晚期後半の深鉢胴部。右下がりの条痕に対して、縱方向のケズリが間隔をおいて加えられる。3636、3638は縄文時代晚期後半の深鉢口縁部。口縁端部はやや平坦で、貼付突帶にはO字状の押圧が認められる。3637、3639～3642は縄文時代晚

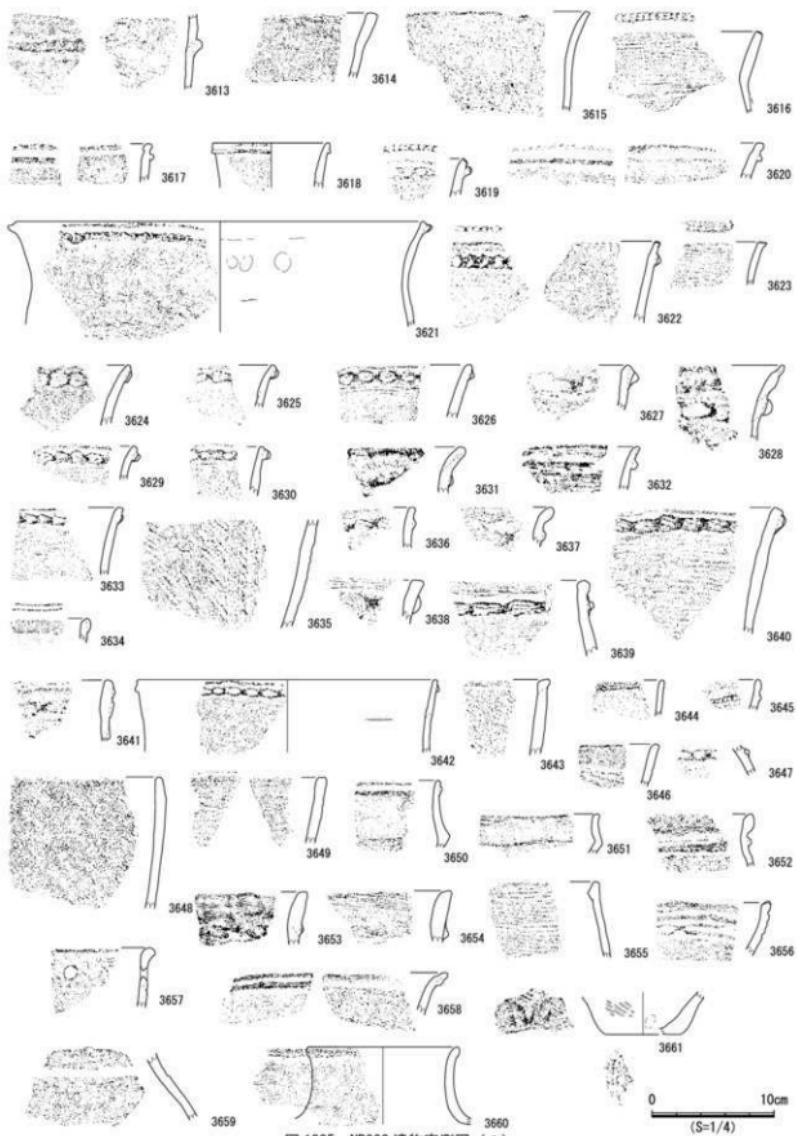


図 1385 NR002 遺物実測図 (1)

期後半末の深鉢口縁部。口縁端部が肥厚し、その下にO字状の押圧のある突帯が貼付される。3642の突帯は細身である。3643、3644、3646、3648は縄文時代晚期後半の内湾する深鉢口縁部。端部がわずかに肥厚し、外面にはケズリが認められる。3649は縄文時代晚期後半の深鉢口縁部。端部が平坦で、外面には横方向のケズリが認められる。3645は縄文時代晚期後半の小型の鉢。貼付突帯上にキザミが認められる。3647は縄文時代晚期後半末の変容壺胴部。横走する突帯上に刺突が認められる。突帯より上部にはわずかに条痕が認められる。3650、3651は縄文時代晚期後半の屈曲浅鉢口縁部。3650は口縁端部のやや下に断面の低い素文突帯を貼付する。3651は精製品で、口縁部が短く立ち上がる。波状口縁の可能性がある。3652、3662～3664は縄文時代晚期後半末の変容壺口縁部。3652は口縁部が短く外反して、端部を肥厚する。素文突帯が1条認められる。3662は口縁部が短く外反し、素文突帯1条が認められる。突帯の断面形状に特徴があり、低位の突帯で、その頂上となる断面高の最も高い位置が突帯幅の中央ではなく、かなり下方向へ移動した位置にある。3663の突帯も3662と同様の形状で、2条を貼付する。3664は大型品で断面三角形の突帯を貼付する。3654は縄文時代晚期後半末の深鉢口縁部。口縁部が弱く外反して、端部は平坦である。外面には口縁部まで条痕が認められる。突帯が口縁端部からやや下がった位置に貼付され、その上を横長にユビの押圧を加える。押圧が強く、その部位が広いため、突帯が痕跡的である。3655は縄文時代晚期後半末の深鉢口縁部。口縁部が外傾し、端部が内傾する。内傾面は下端に粘土を貼付し肥厚して、形成する。3656は縄文時代晚期後半末の有文浅鉢。口縁部上半に眼鏡状、鍵の手状にもみえる浮線文が認められる。口縁端部に一部、瘤状になる部位が認められるが、意図的なものか不明である。3657は口縁端部がわずかに外反する縄文時代晚期後半の深鉢口縁部。両面からの穿孔が認められる。3658は口縁端部を肥厚させて、沈線を1本加える。縄文時代晚期後半であろう。下端の破損部がわずかに屈曲しているので、屈曲浅鉢の可能性がある。また、口縁部は形状から波状口縁の可能性がある。3659は縄文時代晚期後半の深鉢胴部。肩部に段があり、肩部より下にケズリが認められる。3660は縄文時代晚期後半の壺。口縁端部をわずかに肥厚する。口頸部は内傾して、肩部は屈曲する。3661は縄文時代晚期後半の深鉢底部。

**I期の土器** 3665～3683は遠賀川系土器。3665～3671は壺口縁部。口縁部短く外反する。3665、3668は口頸部に削り出しによるわずかな段差を設ける。3666は頸部に削り出し段の上に沈線が認められる。3667は口縁部が短く立ち上がり、頸部直下に連弧状の文様が認められる。3669は頸部に削り出しの突帯、頸胴部の境に削り出しの段を設け、その下に沈線3条を加える。3670には穿孔が認められる。3671には多条化した沈線が認められる。3672、3673、3678は壺頸部。3678には削り出しの段がある。3674～3683は壺胴部。3675は削り出し段の上に沈線が3条認められる。3680は沈線が認められる。3681は無軸木葉文が認められる。横方向の1条の沈線をはさんで、4条の沈線によって文様が形成される。黒色顔料が塗布されている可能性がある。3682は削り出しの段より下に沈線が1本認められる。黒色顔料が塗布されているかもしれない。3676は赤彩による連弧文状の文様が認められる。黒色顔料が塗布されている可能性がある。3677、3683には削り出しの段が認められる。3679には沈線が認められる。3683は黒色顔料が塗布されている可能性がある。3684は沈線のある壺。底部にはケズリが認められる。沈線文系の壺底部であろう。3685は条痕のある壺。3686、3687は深鉢口縁部。端部外方へ拡張され、その直下は強いナデによって凹面を形成する部位が認められる。

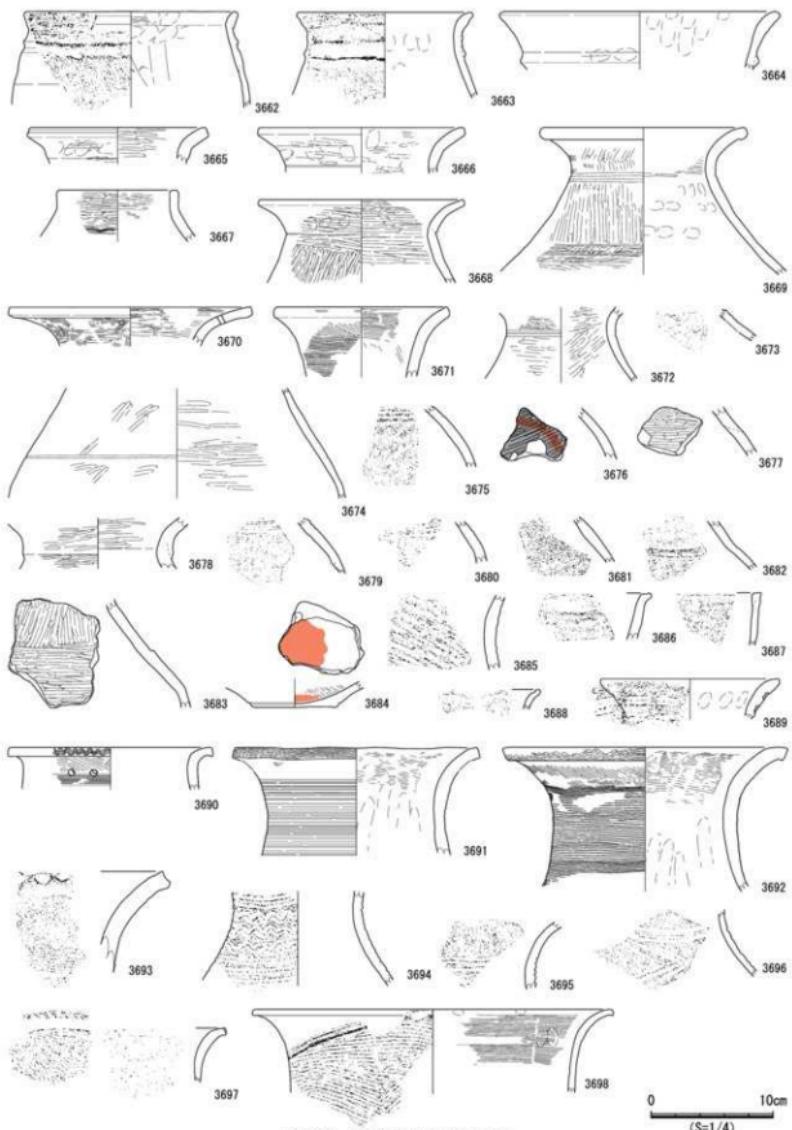


図 1386 NR002 遺物実測図 (2)

0 10cm  
(S=1/4)

3687の外面にはケズリの痕跡が認められる。3688は波状口縁を呈し、その形状にそって沈線が認められる。沈線文系土器と考えられ、Ⅱ期に降る可能性もある。3689は口縁部が弱く外反して、半截竹管による短い沈線が認められる。

**Ⅱ期の土器** 3690～3693は壺A類。口縁部が強く外反して、端部が平坦である。3690～3692の端部には波状文が認められる。3690の頸部には穿孔が認められる。3690～3692の頸部には直線文を施文する。3693は外反する口縁端部に押圧が加えられ、頸部に直線文が認められる。3694～3696は壺の頸胴部片。3694は半截竹管による直線文の間に波状文を施文する。3695は直線文の下に波状文が認められる。3696は2条の沈線の下に羽状文を加える。3697は甕A類。口縁部が弱く外反して、端部にキザミがある。胴部にはハケ目が認められる。3698、3700は甕C類。口縁部が外反し、端部が外頸する。端部は横方向の条痕によって形成され、ユビによる押圧が認められる。外面の条痕は口縁部では右下がり、胴部では継羽状となる。内面にはハケ目が認められる。3699はⅡ期の甕B類。口縁部が短く屈折して、端部にはキザミ、ユビによる押圧が認められる。

**Ⅳ期の土器** 3701は壺A類胴部。頸部が細身で胴部が強く膨らむ。文様は3本1組×3による複合クシによって3帯の直線文が認められる。同様の工具によって縦方向の直線文も認められる。3702、3703、3705は口縁部が屈曲して短く立ち上がり、凹線文が認められる壺A1類。3703の頸部には凹線が認められる。3704は口縁部が内湾する壺A2類。凹線文の下に羽状文を施文する。3706は壺A類胴部。円窓が認められる。3707、3708は壺A類の底部。いずれも底部外面に木葉痕が認められる。3709はⅣ期末～V期初頭の壺。頸部がやや細身で直立し、口縁部が強く外反する。端部下端を拡張して刺突文を施文する。内面には羽状文と3個1組の瘤状突起を3方向に配する。羽状文はその末端に工具の動きが認められ、扇形文的となる。頸部には断面三角形の突帯が2条貼付され、その間に廉状文を施文する。胴部はやや偏平で下半を欠損する。頸部から胴部最大径付近まで施文があり、直線文と波状文を3帯、最下段に扇形文を施文する。3710は壺H類口縁部。口縁部が外反し、端部で水平に伸び、強い平坦面を形成する。内面には3個1対の円形浮文が認められる。胎土や調整からⅣ期の可能性が高い。3711、3712は壺H類胴部。斜格子文が認められる。胎土が緻密で黒褐色を呈し、古井式と考えられ搬入品であろう。3713は壺A2類の胴部。口頸部を欠損するが底部まで遺存する。胴部はなだらかに膨らみ、肩部で屈曲する。胴部下半には打ち欠きによる孔が認められる。胴部上半には2本1組×3の複合クシによる施文が認められる。頸部以下には直線文が5帯以上、波状文、直線文、波状文の順で文様が構成される。底部外面にはハケ目が認められる。3714、3715は甕A1類。口縁部が短く屈折して端部は上下端をわずかに拡張した強い平坦面を形成する。磨耗が著しいため不明瞭だが、胴部にはタタキとハケ目が認められる。胴部中央には刺突文が認められる。3714は大型品、3715は小型品である。3716は甕A類底部。外面にハケ目が残り、穿孔が認められる。3717～3721、3724、3725は甕A2類。3717は底部には穿孔があり、ハケ目が認められる。胴部の調整はタタキ後ハケ目である。タタキは胴部上半で水平方向、下半では右下がりの方向である。3718は壺A2類。口縁部が短く屈折し、胴部は頸部から強く膨らむ。最大径は胴部上半にあり、下半は直線的に徐々に径を縮小させて底部へ向かう。胴部外面には右下がりタタキの後、縦方向のハケ目が認められる。内面は下半が継方向のケズリ、上半はハケ目が認められる。口縁端部にはタタキが認められる。3721は端部に強いヨコナデが認められ、タタキが滅失して凹面を形成し、上端が拡張気味となる。内面にはハケ目が

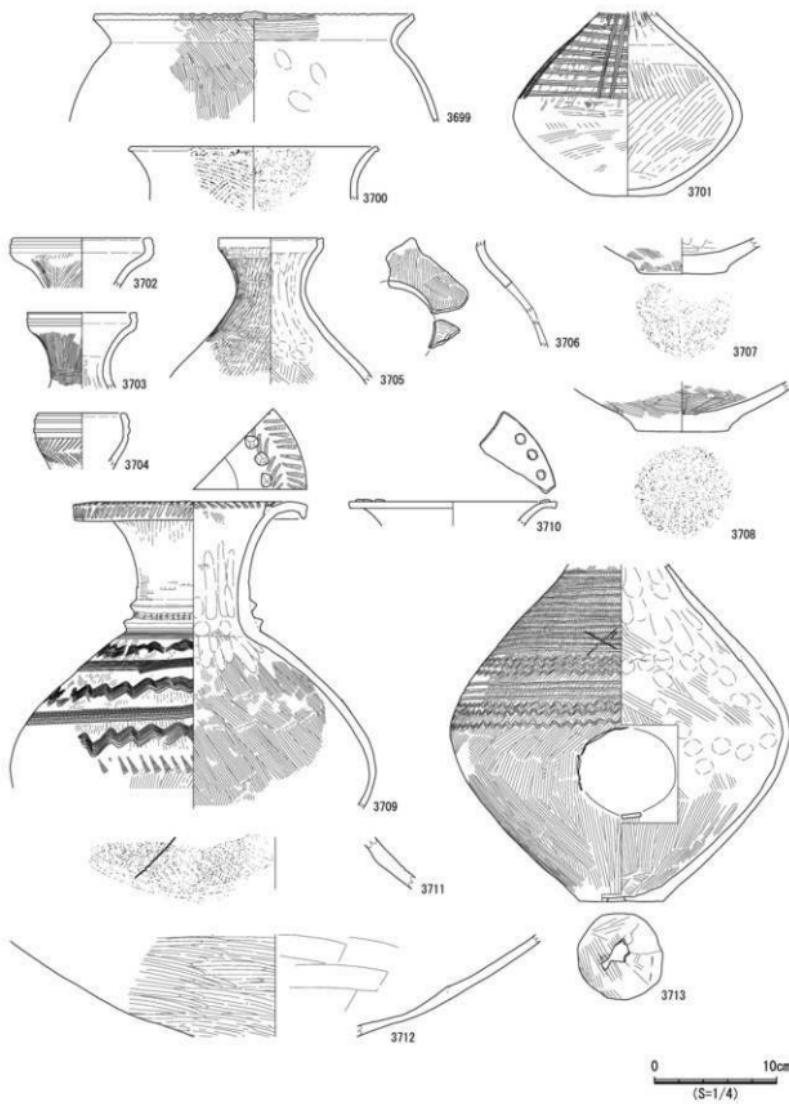


図 1387 NR002 遺物実測図 (3)

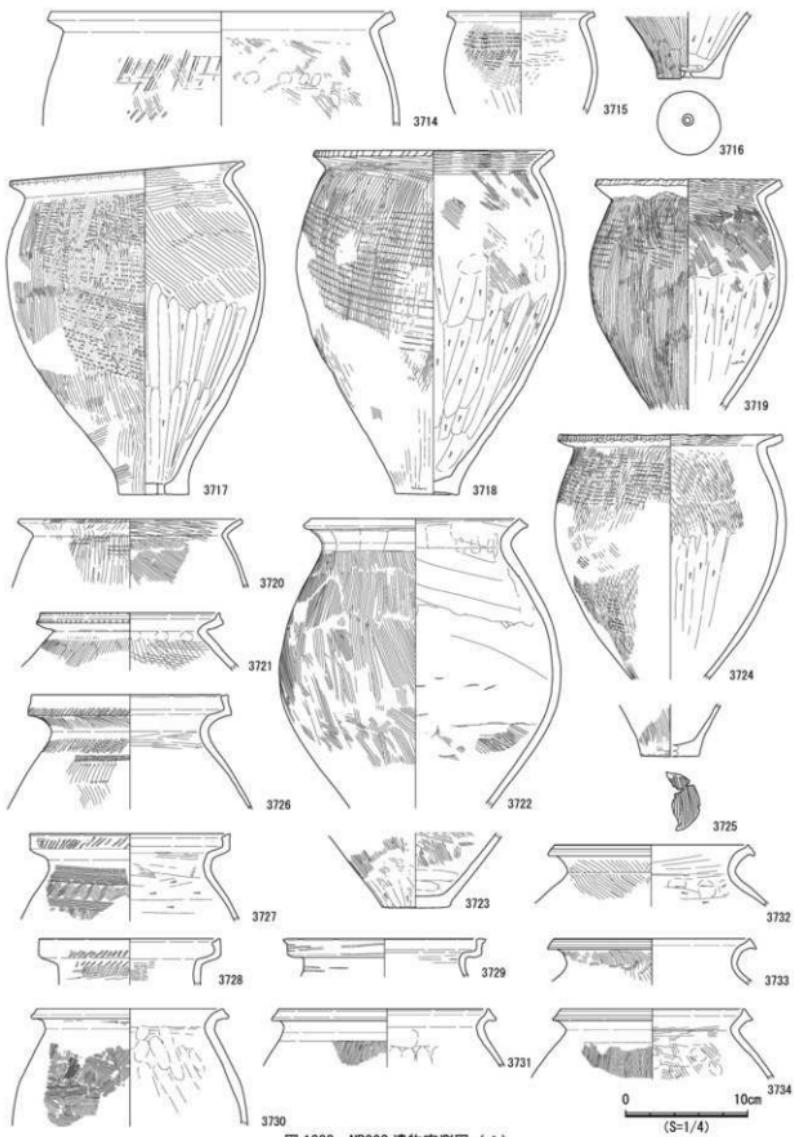


図 1388 NR002 遺物実測図 (4)

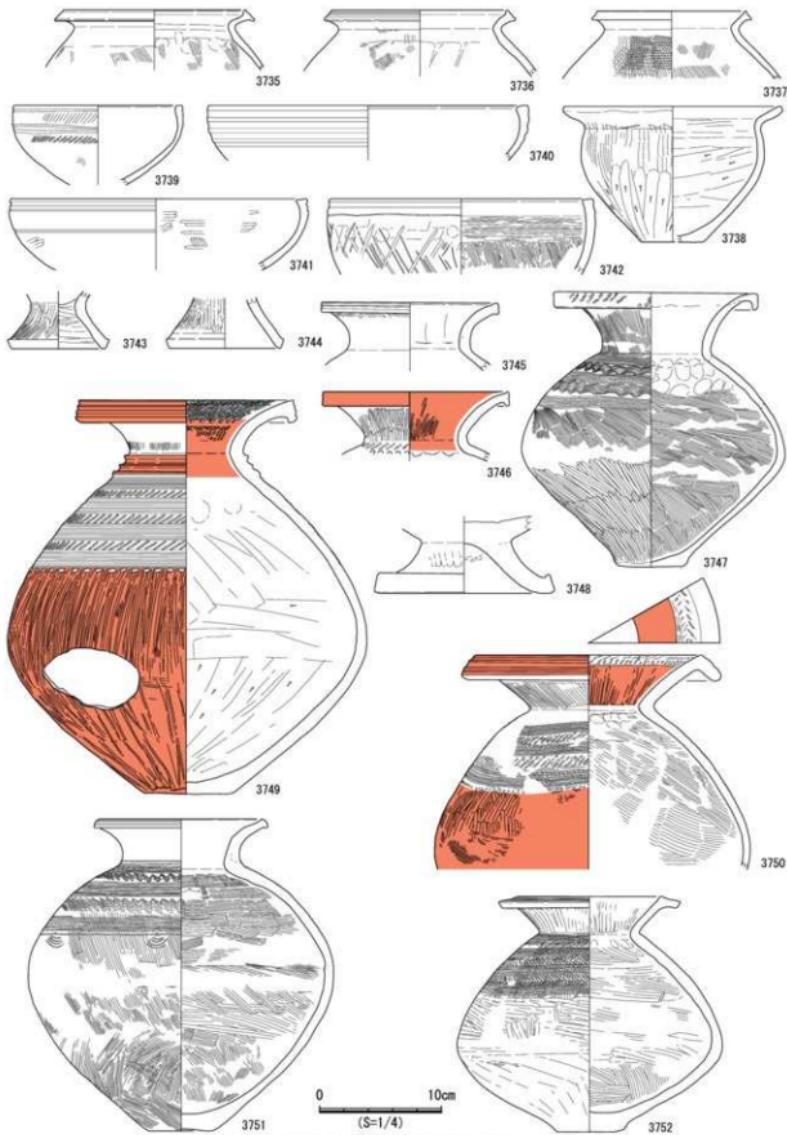


図 1389 NR002 遺物実測図 (5)

認められる。3722、3723、3730～3736は甕D類。口縁部が短く屈折して立ち上がり、端部は上下端を拡張し、強いナデによって外傾した面を形成する。3722、3723は胴部が弱く膨らみ、縦方向のハケ目が残る。底部は平底である。V期の可能性がある。3726、3727は甕B2類。口縁部が強く屈曲して直立し、端部には顕著な凹面を強いヨコナデによって形成する。強いヨコナデのため、端部上端が外方へわずかに拡張され、刺突文の上半が滅失する。口縁部内面の屈曲する部位でも強い凹面が認められる。3726の胴部は頸部からなだらかに膨らみ、刺突文を施文する。3727の胴部は直線文と波状文を交互に2帯施文する。3728は甕B類。頸部は直立し、口縁部が屈折して直立する。端部は内傾面を形成する。3729は甕B1類。口縁部が強く屈曲する。端部がわずかに外反する。3737は甕D類。口縁部が短く屈折して、端部は外傾する凹面を形成する。3738は鉢。口縁部が短く、くの字に屈折する。胴部は頸部からそのまま径を縮小する。3739～3742は高坏A類。口縁端部の平坦面が顕著で、口縁部は強く内湾する。外面には凹線文が認められる。3739には刺突文がみられる。3742は斜格子文が認められる。3743、3744は短く聞く高坏脚部。端部には強い平坦面が形成される。

#### V期～IX期の土器

**壺** 3745はV期～VI期壺A2類。口頸部が外反する。端部がわずかに直立して、直線文を施文する。3747はV期壺A1類。口頸部が外反し、端部を下方へ拡張して、刺突文を施文する。胴部上半は強く膨らみ、下半は直線的な形状で小さな底部にいたる。頸部直下には、断面の鋭い直線文が3帯施文され、同様の断面形状をもち、振幅の小さな波状文が直線文間に施文される。また、胴部にはわずかに斜格子状の籠目痕が認められる。3748はV期の壺A類頸部。端部に内傾する強い凹面を形成して、上端が拡張される。3749、3750、3752、3753はV期～VI期の壺A1b類。3749はVI期前半の壺A1b類。口縁部が短く外反して、下端を拡張する。胴部はやや下膨れ気味で、中央やや下がった位置に打ち欠きが認められる。口縁部内面には羽状文2帯、最下段に刺突文を施文し、文様帶から頸部にかけて赤彩する。頸部には断面三角形の突帯が3条貼付し、胴部上半2分の1程度まで文様が認められる。胴部文様は直線文と刺突文を交互に施文し、直線文は4帯、波状文は3帯の施文があり、最下段に刺突文を施文する。文様帶以下は赤彩される。また、内外面の一部に煤が付着する。3750は口縁端部が外傾し、赤彩が認められる。胴部は強く膨らみ、直線文3帯の間に斜位の刺突文が充填され、最下段に刺突文が施文される。文様帶以下には赤彩がみられる。内面は羽状文を施文し、文様帶以下に赤彩が認められる。3752は口縁端部が外傾し、わずかに下方へ拡張する。胴部は肩部まで直線的に開き、肩部で屈曲する。頸部直下から胴部上半2分の1程度に直線文4帯とその間に精緻な羽状文を施文する。羽状文の方向が3帯目のみが逆となる。3753は口縁部が外反して端部を下方へ拡張する。2個1組の円形浮文が認められる。3754はVII期壺Ala類。口縁端部を大きく下方に拡張して、円形刺突文が認められる。3746、3756～3758、3760、3761はVI期壺A1b類。口縁部が外反して、端部下端を拡張する。3746は口縁部が外反して、端部下端を拡張する。端部と口縁部内面に赤彩が認められ、頸部直下には刺突文と円形刺突文を施文する。3756は内面に羽状文が認められ、内外面に赤彩を施す。3757は外面に円形浮文、内面に2帯の刺突文を施文する。頸部直下には直線文が認められ、赤彩が口縁端部と頸部内面に認められる。3758は内面に扇形文が認められ、扇形文より下に赤彩を施す。3760はほぼ完存品だが、摩耗が著しい。胴部はなだらかに膨らみ、最大径は胴部中央に位置する。摩耗のため文様が不明瞭だが、胴部上半には直線文と波状文が認められる。内面には扇形文が認めら

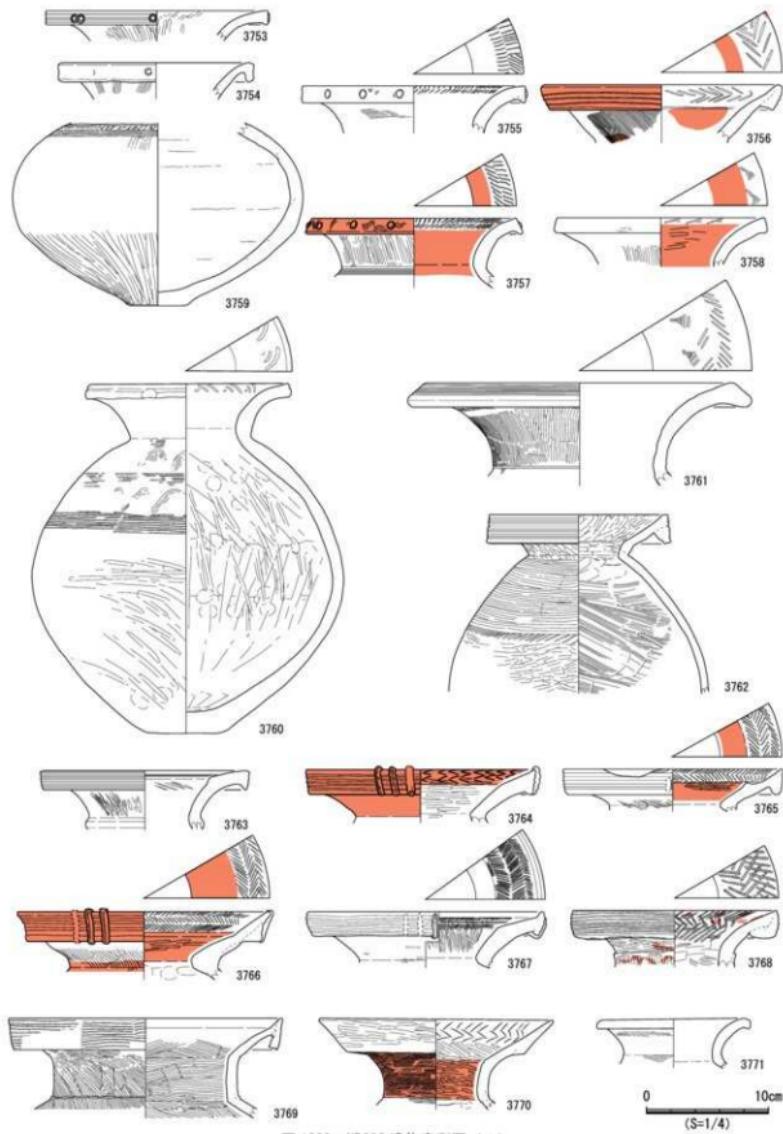


図 1390 NR002 遺物実測図（6）

れる。3761の内面には羽状文と扇形文が認められる。3751、3755はV期壺A類。3751は胸部が球形で、上半に直線文、波状文を交互に施し、最下段に扇形文を施す。3755は口縁部が外反し、外面には円形浮文間に摩耗が著しいが、繊細な波状文が認められる。3759、3783はV期～VI期壺A類胸部。3759は胸部中程が強く膨らみ、上半には直線文と刺突文が認められる。3783は胸部下半に穿孔があり、内面には赤色顔料が付着する。3762～3767はVI期～VII期の壺A3類。口縁部が外反して、端部下端を大きく拡張する。内面は頸部が直立してから外反する。3762は本類では少數例で内面加飾が認められない。外面には直線文が認められる。胸部には頸部直下に直線文を5帯施してから、最下段に刺突文を加えている。3763の口縁部内面には直線文が認められる。3764は内面に羽状文、外面には直線文の他に3個1組の棒状浮文が認められる。棒状浮文の上にはキザミが加えられる。内外面ともに赤彩が認められる。3765は口縁部に打ち欠きがあり、内面に羽状文、赤彩が認められる。3766は内面の頸部が直立せず、文様帶下端を沈線状の段差でもって、わずかに屈曲部位を形成する。文様帶は羽状文で構成し、文様帶以下には赤彩が認められる。外面には3個1組の棒状浮文があり、端部と頸部に赤彩が認められる。3767は内面に羽状文が認められる。3769はVII期の壺A4類。胎土や焼成は緻密で、VII期～IX期の土器に類似する。頸部が直立して立ち上がり、口縁部が屈折して外反する。端部を拡張して、直線文を施す。3768、3770、3772～3774はVII期後半の壺A5類の口頸部。3768は拡張された口縁部下端を補強するようにその内側も粘土補填され、その上には指頭圧痕がそのまま残る。端部に直線文、頸部に貼付された偏平な突带上にキザミが認められるが、いずれもやや粗い施文である。頸部突带上にはわずかに赤彩が認められる。内面には大振りな羽状文を施し、その範囲が頸部付近まで及ぶ。赤彩が認められ、円文と考えられる。3770は頸部が直立して、口縁部が外反する。端部を拡張して、一部に残るヨコハケが直線文のようにみえるが、全体にミガキが施されており、ヨコハケはミガキが及ばなかったハケ目である。内面には羽状文が施文されるが、頸部との境までには一部、無文帶を残す。頸部内面には赤彩が認められる。3772、3773は口縁部が大きく外反して、端部を上下に拡張する。3772は外面には3個1組の棒状浮文を加え、端部だけではなく口縁部全面に赤彩を施す。内面には細い突帯を貼付し、その内側に羽状文を施し、その外側には赤彩を施す。3773は4本1組の棒状浮文を4方向に配し、その間に羽状文を施す。羽状文の中央には1条の沈線が加えられる。3774は口縁端部を上下に拡張して、羽状文を施す。

3771はV期～VI期、3775～3777、3781はV期の壺B1類。口縁部が外反して、端部は平坦である。胸部は頸部から強く膨らむ。3771は口縁部が短く外反して、端部が平坦である。3776は口縁部が短く外反する。胸部は肩部が強く張り、最大径が上半に位置する。3777はほぼ全形が残るが摩耗が著しい。口縁部は弱く外反して、胸部中央が強く膨らむ。底部が小さく、胸部下半は直線的である。3778、3782はVII期壺B2a類。口頸部が外反して、端部が平坦である。3778の内面には数条の縦方向の赤彩が認められる。3782の胸部は膨らみが強く、粗いハケ目が認められる。3779、3784はVII期壺B2b類。口縁部が外反して、端部が平坦である。内面は頸部が直立してから外反する。3779は穿孔があり、例外的に刺突文が端部に認められる。口縁部がやや短いことから、刺突文は擬口縁の可能性がある。3780、3785～3788、3792、3794は口縁部が直立気味となる壺C類。3785、3794はV期～VI期、3786～3788、3792はVII期。3785、3794は胸部が球形にちかく、やや突出した小さな底部をもつ。3786は口縁部が直立し、胸部形状は3776と類似するがハケ目を残す。3787は口縁部が直立して、端部は平坦面を形成す

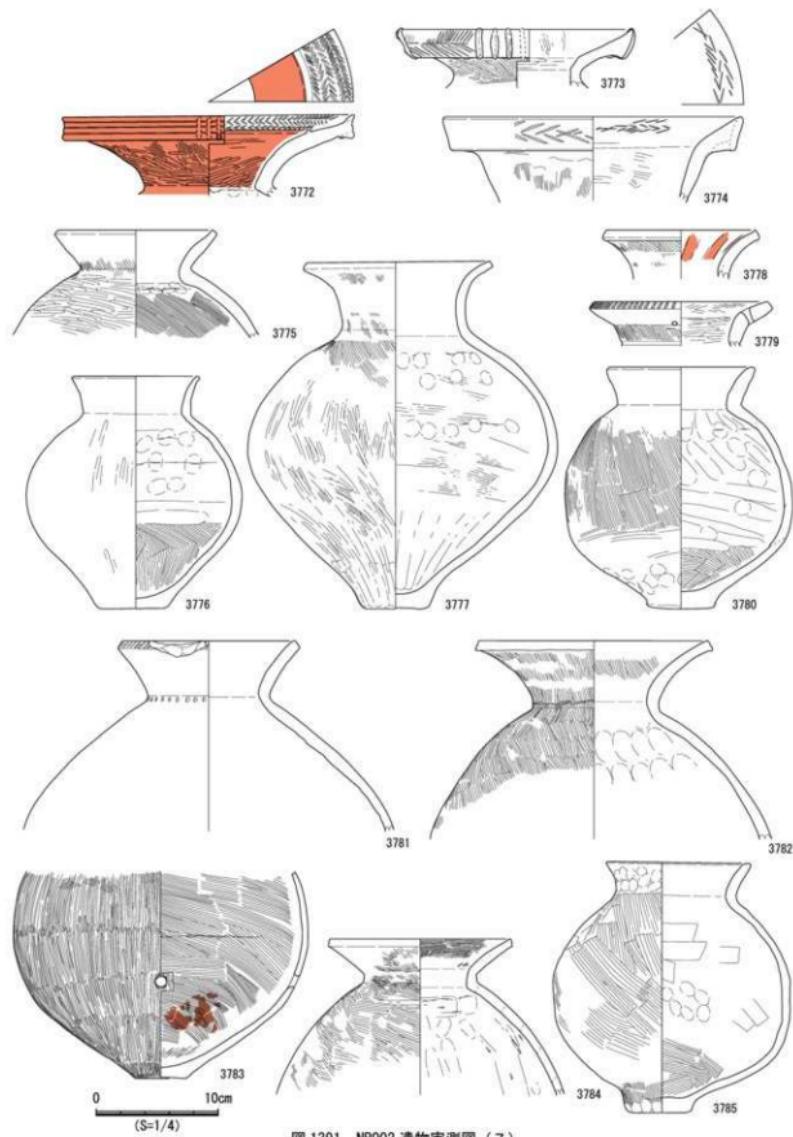


図 1391 NR002 遺物実測図 (7)

る。胸部は強く膨らみ、器面全体に粗いハケ目が認められる。3788は口縁部に打ち欠き、二次的に被熟が認められる。3792、3794は口縁部が例外的に内湾気味で、3792には打ち欠きが認められる。3780はⅦ期。口縁部がやや外傾しながら頸部が直線的に立ち上がる。胸部は肩部が強く膨らみ、下半で直線的になり突出した底部に向かう。最大径は胸部中央や下位にあり、下膨れ気味である。

3789はⅧ期壺D1類。口縁端部が短く直立し、下端に刺突文が認められる。胸部は強く膨らみ、頸部直下に直線文、刺突文が認められる。3790はⅨ期の壺D1類。口縁部が直立して、刺突文をもつ。頸部は直立して、胸部が強く膨らむ。3791、3793はⅧ期～Ⅹ期の壺D3a類。3791は口縁部が外傾して端部が直立して、平坦面を形成する。胸部はなだらかに膨らみ、最大径は中央や下に位置する。底部は突出する。胸部下半には煤が顯著に付着する。3793は口縁部が痕跡的に屈曲する。外面に赤彩が認められる。3795はⅧ期の大型の壺。口縁部と胸部の多くを欠損するが、胎土が緻密で、焼成が堅緻である。頸部が外方に直線的に伸び、欠損部位ちかく形状がさらに外方へ屈曲するので、二重口縁壺の可能性がある。胸部は頸部で屈折して膨らみ、ハケ目の下位に羽状文を施文する。3796、3799はⅨ期の壺F1類。3799は口縁部がわずかに直立気味となる。赤彩が認められる。3796には片口となり、Ⅹ期の可能性もある。3797、3798、3801、3802はⅧ期後半～Ⅹ期の壺F2類。3798は口縁部が短く直立気味となり、胸部が強く膨らむ。3801はやや口縁部が外反して、肩部が強く張る。底部は突出気味である。3802は口縁部が直立して、胸部が強く膨らみ、偏平である。3800、3803はⅨ期～Ⅹ期の壺H1a類。3800は口縁部がやや短く直線的に伸び、胸部は偏平で算盤玉状である。3803はⅩ期前半。口縁部が長く立ち上がり、胸部は偏平である。3804、3805はⅩ期～Ⅺ期の壺H1b類。口縁部が直線的に伸びる。3804は端部直下に沈線が認められる。3805は端部直下に連弧状の文様がある。3806はⅪ期壺H類。口縁部が内湾し、胸部最大径は中程よりかなり底部にちかい位置にある。胸部下半の形状は鉢A類に類似する。口縁部上半には多条沈線、打ち欠きが認められる。3807～3811はⅪ期壺H2b類。3807は口縁部3分の2程度を加飾する。その文様は多様で、上から順に多条沈線、刺突文、多条沈線、多条沈線、連弧文、多条沈線、連弧文、多条沈線、刺突文、多条沈線、連弧文、多条沈線、連弧文、多条沈線がみられる。刺突文は振幅が狭く精緻である。刺突文、連弧文間の多条沈線は少条で2本の場合も認められる。最下段の多条沈線が最も多条である。3808は口縁部が内湾して、3分の2程度に加飾する。上半には多条沈線、下半はさらに上半分に羽状となるよう刺突文を交互に施文して、その間に少条の多条沈線を充填する。その下半分には多条沈線を施文する。打ち欠きが相対する2箇所に認められる。3809、3810は多条沈線4帯の間に山形文を施文する。3809の刺突文は連弧文的である。3811は口縁部が大きく内湾して胸部高を大きく上回る。口縁部には少条の多条沈線と山形文を6帯交互に3分の2の範囲に施文する。胸部は上半がなだらかで、中央や下にある肩部が強く屈曲して底部にいたる。3812～3815はⅪ期～Ⅻ期の壺H類の胸部。胸部は偏平で算盤玉状である。3814、3815は肩部の屈曲が弱い。3816、3817はⅪ期～Ⅻ期の壺H3類。3816は口縁部が短く外反して、打ち欠きが認められる。胸部は肩部が強く張り、下半は直線的に突出する小さな底部にいたる。器面全体にハケ目が認められ、胸部中央に穿孔が認められる。3817の胸部は球形にちかく突出した底部をもつ。胸部下半に煤が付着する。3819、3820はⅪ期壺F1類。口縁部が短く直立して、2個1組の穿孔が1対認められる。外面にはハケ目が残り、赤彩が認められる。3818、3823、3828、3829はⅪ期～Ⅻ期の壺F1類。口縁部が短く直立する。3818は無頸壺。口縁部が内湾して、胸

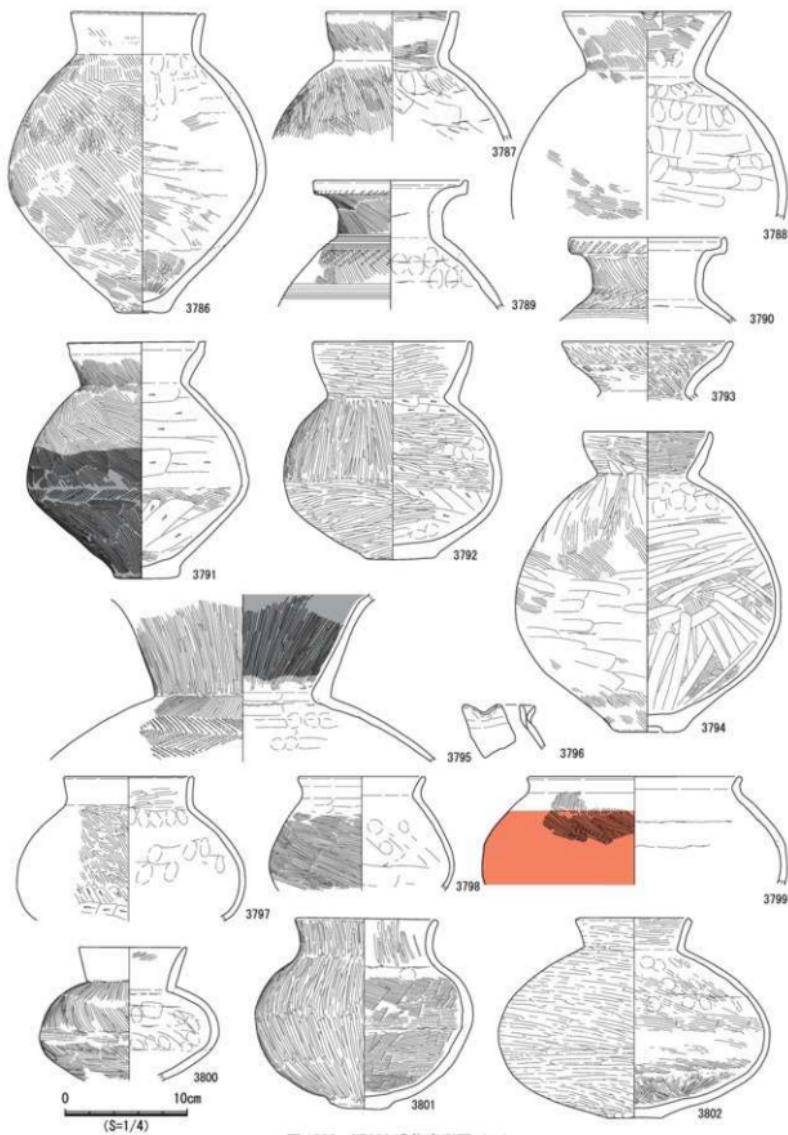


図 1392 NR002 遺物実測図 (B)

部形状は球形にちかい。口縁部には穿孔が認められる。3823は胴部が強く膨らみ、偏平である。3828は脚付の壺。胴部はやや偏平で、脚部は高杯I類と類似して、裾部が外反する。また、外面には部分的に赤彩が認められる。3829は脚付の壺。胴部は上半が強く膨らみ肩部が張る。下半はやや直線的で最大径は中央よりわずかに上に位置する。脚部は短く外反して、打ち欠きが認められる。3821、3822、3824～3827、3846はVI期の壺F2類。口縁部が短くわずかに外反して、端部を丸くおさめる。3826は小型品で胴部は偏平で、胴部下半にある肩部が強く屈曲する。胴部上半はなだらかである。3827は胴部から肩部までなだらかに膨らみ、下半は直線的となる。器面全体に丁寧なミガキが認められるが、部分的に強い煤の付着が認められる。3846は例外的に口縁端部が平坦で、胴部が算盤玉状である。3830、3850、3863、3872はV期～VI期の壺胴部。3830は偏平な胴部で、外面は丁寧なミガキが認められる。頸部は直立すると考えられる。3863は胴部が底部から直線的に外傾する。底部に穿孔が認められる。3872は口頸部を欠損する以外はほぼ完存する。胴部は頸部からなだらかに膨らみ、最大径が下半に位置する。上半には直線文3帯とその間にやや振幅の大きい波状文を施文する。3864、3873はVI期～VII期の壺底部。3873は大型の壺で胴部下半から底部が残存する。強く膨らむ胴部に突出した底部がつく。外面には煤が顯著に付着する。3831は小型の壺でVI期～VII期の壺I1類。口縁部が短くくの字となる。3832はV期壺J1類。口縁部は頸部から緩やかに外反し、対向する箇所に打ち欠きが認められる。胴部は頸部から肩部までがわずかで、胴部径は口径を大きく下回る。胴部下半は直線的に小さな底部に至り、胴部形状は腰高である。底部は側面を貫通する穿孔が認められ、その片方には未貫通の穿孔が認められる。3833はVII期後半壺J4類。偏平な胴部から頸部でやや屈曲して、口縁部が内湾して立ち上がる。端部でやや外反する。口縁部には端部から頸部にかけて繊細な文様が認められる。磨耗が進行しているが、少条の多条沈線4帯、連弧文3帯による施文によって構成される。

3834はVII期壺G3a類。口縁部が強く内湾して、端部に内頸面が認められる。3835、3841、3844はV期～VI期の壺F類胴部。肩部が強く膨らみ、やや偏平である。3837～3840はV期壺A類頸部。断面三角形の突帯が貼付され、その間に円形刺突文を充填する。円形刺突文は半截竹管を組み合わせて施文する。3840は頸部直下に直線文が認められる。3842はV期壺F類胴部。肩部がやや張り、赤彩が認められる。3845、3847、3848はV期～VII期の壺A類胴部。3845は磨耗が著しいが胴部上半に刺突文と直線文を交互に施文する。器形は下膨れで、下半には赤彩が認められる。3847は口縁部を欠損するが、頸部から胴部にかけては完存するものの全体に摩耗が著しい。胴部上半には直線文と波状文が交互に施文されるが、摩耗が著しい。下膨れで胴部下半には穿孔が認められる。3848は円形刺突文の下に山形文が認められる。3836、3843、3858はVII期壺A類の胴部。3836、3843は胴部上半に山形文と直線文を交互に施文する。3836は小型品で磨耗のため判然としないが、部分的に赤彩が認められるので、赤彩による円文が施文された可能性がある。3843の山形文の施文具はクシ状工具で工具の動きからすると波状文の可能性もある。3858は山形文の上に赤彩を重ね、文様の最下段に刺突文がみられる。文様帯以下に赤彩を施す。3869はV期の壺A類底部。3871はVI期～VII期の壺A類底部。赤彩が認められる。3849はV期～VI期壺A類の脚部。外反の強い脚部で、端部に直線文と打ち欠きが認められる。3851、3853、3855～3857、3860、3862はV期の壺K類。3851は口縁端部がやや外反する。3853は中型の壺。口頸部が短く直立気味に外反し、端部は平坦である。胴部は膨らみが弱い。3855は突帯が2条認められ、脚台付の長頸壺の胴部と考えられる。3856はV期の壺で口頸部が

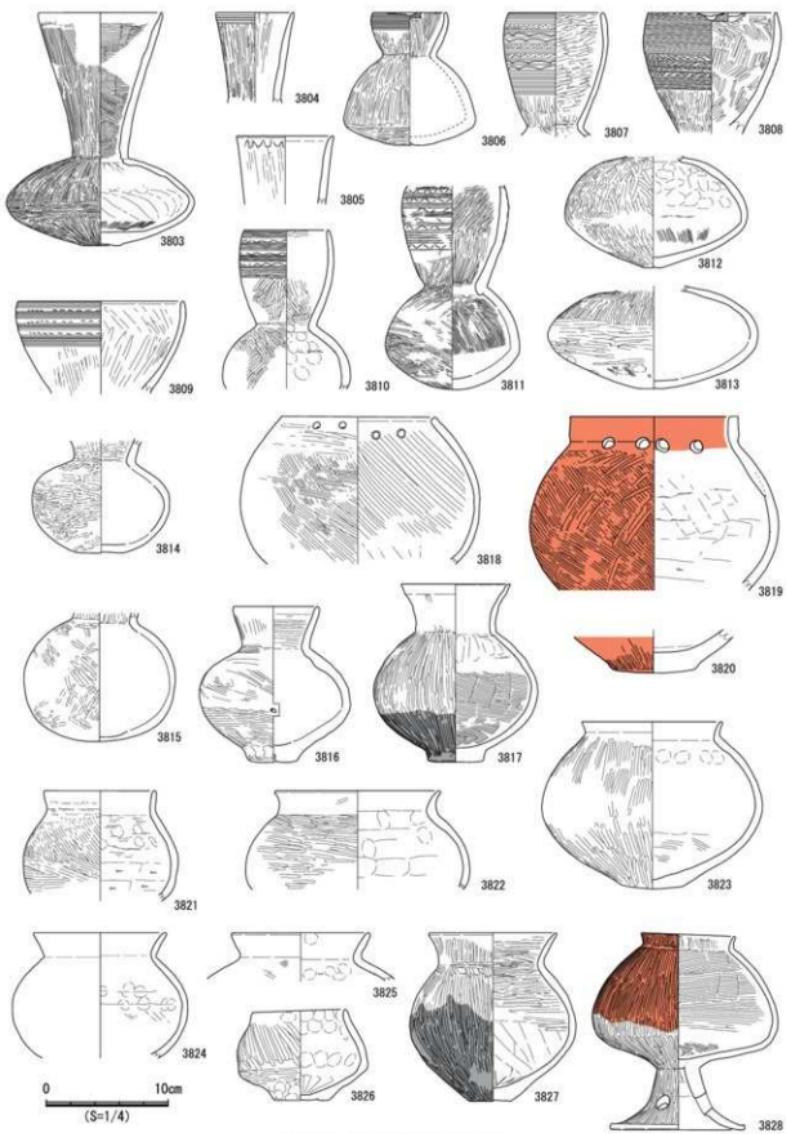


図 1393 NR002 遺物実測図 (9)

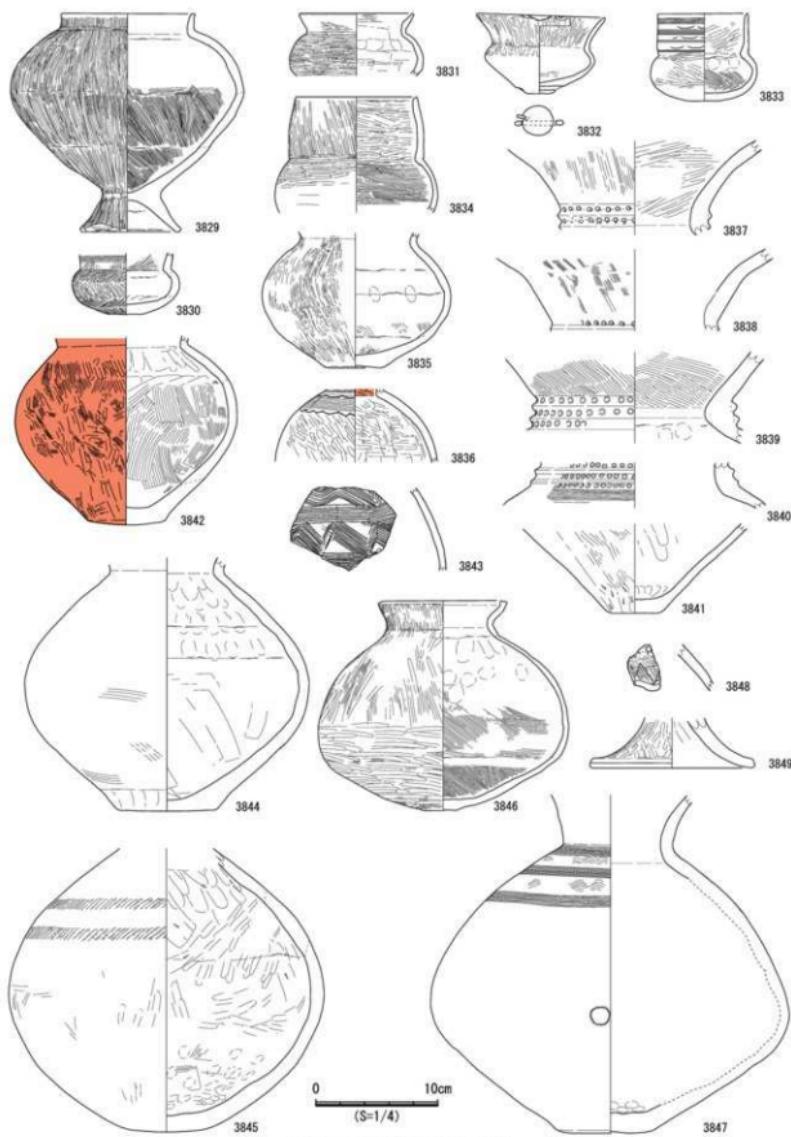


図1394 NR002 遺物実測図 (10)

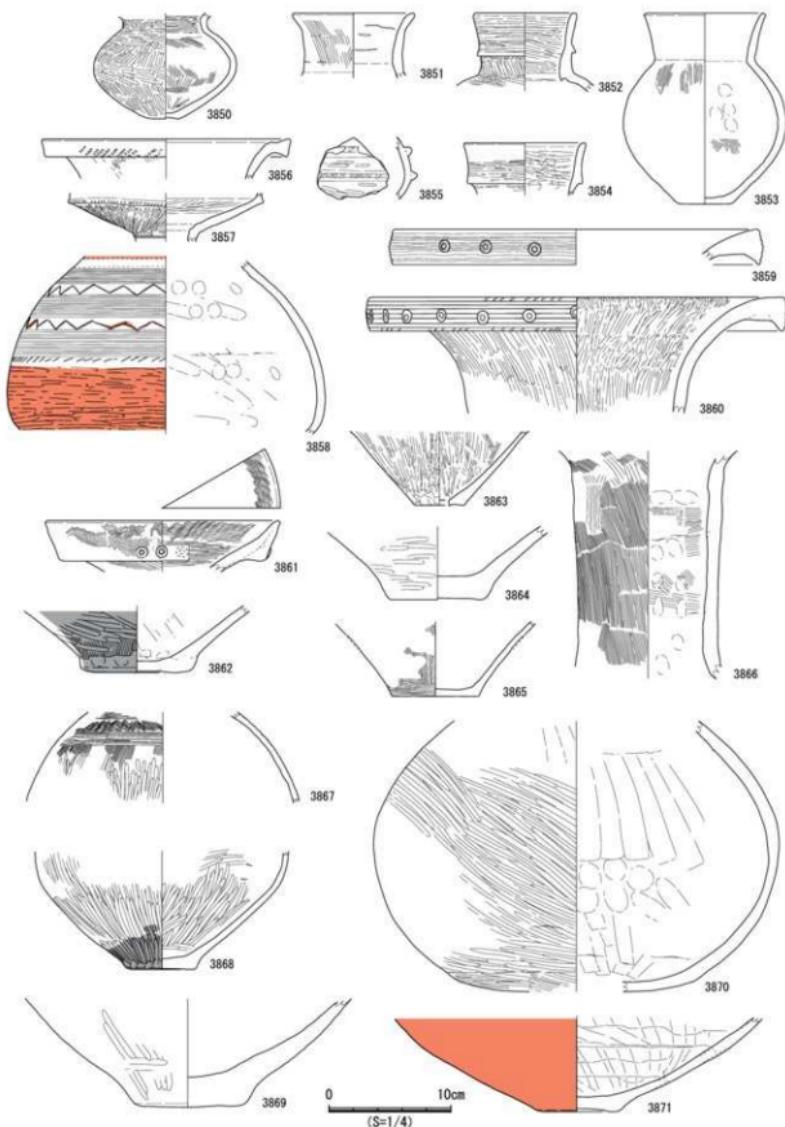


図 1395 NR002 遺物実測図 (11)

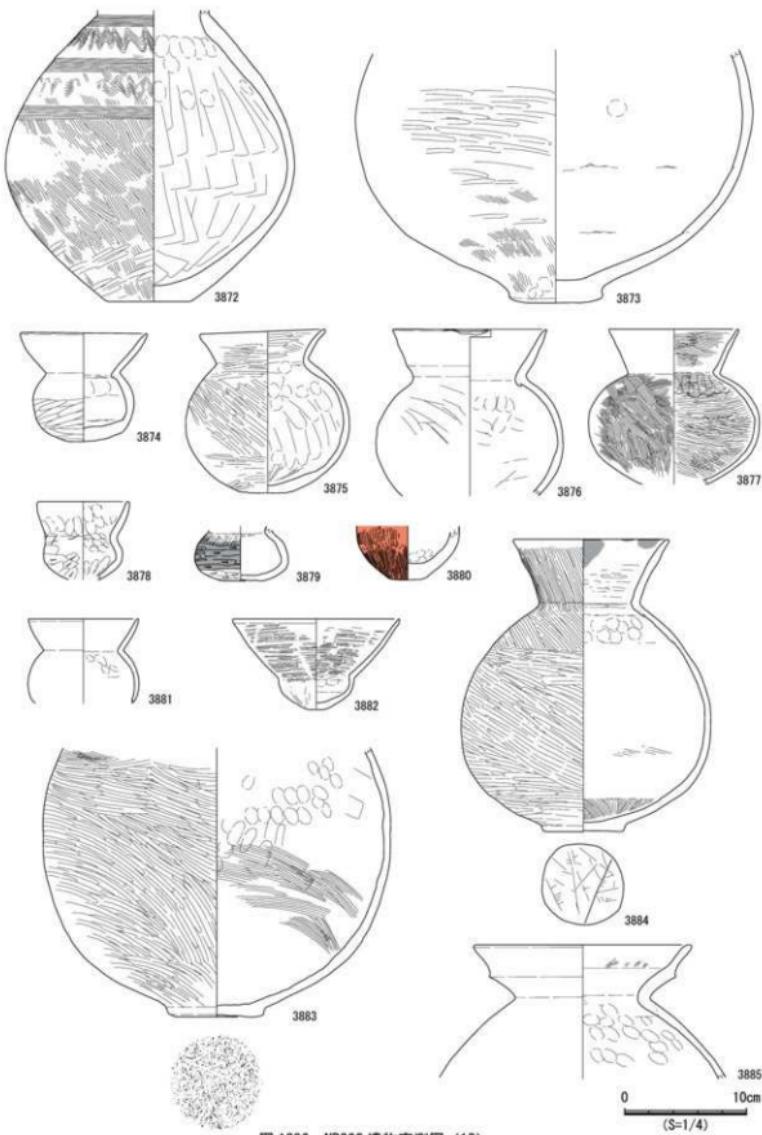


図 1396 NR002 遺物実測図 (12)

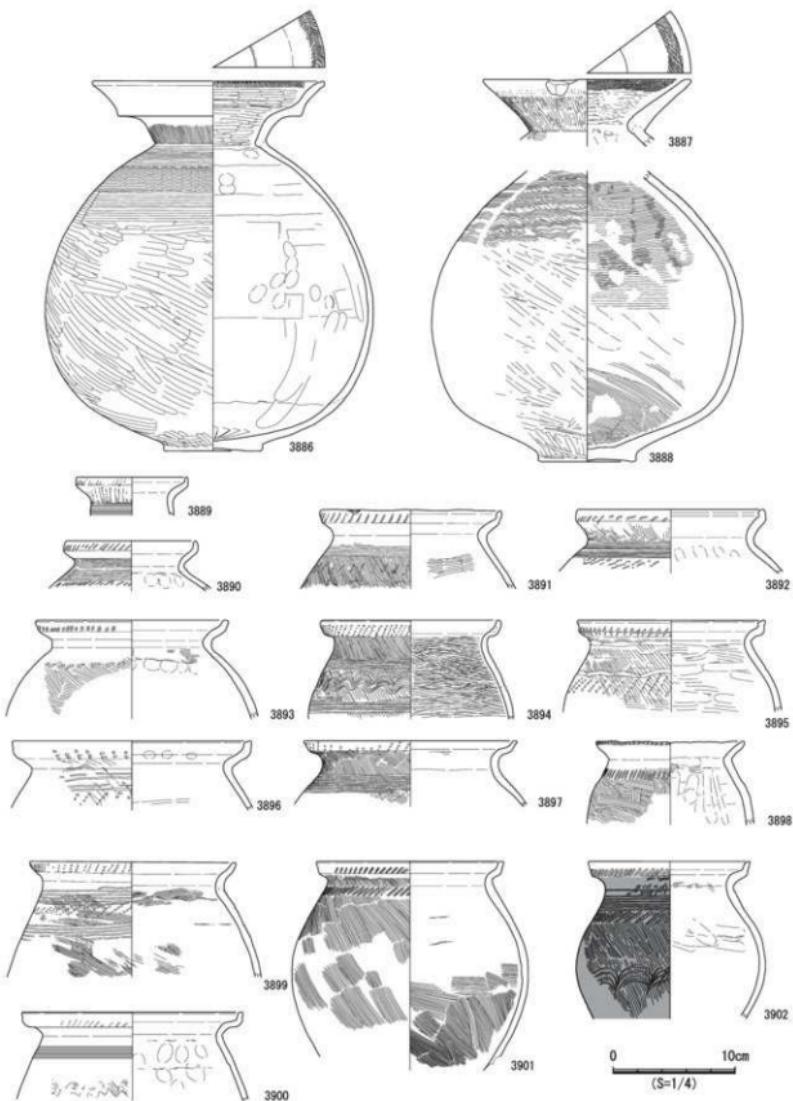


図 1397 NR002 遺物実測図 (13)

外傾する。端部が強く外反して水平に短く伸び、強い平坦面をもって刺突文を施文する。内面には強い凹面を形成する。胎土に金雲母と角閃石を含み、在地のものとは異なる。3857も3855に類似する資料で突帯にキザミが認められる。3860は生駒西麓産の大型広口壺の口縁部。口縁部は強く外反して、端部下端を大きく拡張する。端部には直線文と円形貼付文が認められる。3862は生駒西麓産の壺底部。3852、3854はVII期～VIII期の壺K類。口頸部が直立して、胴部は頸部から強く広がる。頸部には稜が下方にある断面三角形の突帯を貼付し、有段状の口縁を形成する。内外面ともに丁寧なミガキが認められる。3859、3866はV期壺K類。3859は口縁部が強く外反し、円形浮文が認められる。胎土中に角閃石が含まれるので、生駒西麓産と考えられる。3866は長頸壺の頸部。畿内V様式に類似する。3861はVII期壺K類。口縁部が外反して、端部下端を拡張する。円形浮文と振幅の小さい波状文がみられる。内面にも同様の波状文がみられる。3865はV期～VI期の壺A類底部。丁寧なミガキが認められ、器壁が薄く精緻なつくりである。内外面ともに顯著に煤が付着し、内面は使用により表面の剥落が著しい。3867、3868は壺A類胴部と底部。胴部は強く膨らみ、上半には直線文と波状文が認められる。下半は丁寧なミガキが認められ、底部周縁のみ円環状に煤が付着する。3870はVII期～VIII期壺K類胴部。大型品で球形を呈する。3874～3878、3881、3882はIX期の小型～中型の壺。口縁部が短く直線的に伸び、胴部は球形にちかい。3875は口縁部と胴部に打ち欠きが認められる。3876は口縁部に打ち欠きが認められ、煤が付着する。3878は胴部の歪みが著しい。3882の胴部は偏平で、胴部径より口径が大きく上回る。3879はIX期の小型壺の壺胴部。偏平な胴部で胴部上半のみに煤が強く付着する。3880はVI～VII期の小型の壺底部。赤彩が認められる。3883はIX期の大型の壺胴部。胴部には丁寧なミガキが認められ、破損する上端にわずかに文様らしき痕跡が認められるので柳ヶ坪型壺の可能性がある。底部に木葉文が認められる。3884はほぼ完存するIX期の壺。木葉痕のあるわずかに突出した底部から胴部が立ち上がる。胴部は球形にちかいが、最大径が胴部中央やや下位にあり、下膨れ気味である。口縁部が頸部から直線的に外傾して立ち上がる。端部はやや尖り気味である。胴部上半2分の1程度にはミガキ調整が及ばず、ハケ目が残り、文様風にみえる。口縁部には数箇所の打ち欠きが認められるとともに、内外面に指頭程度の煤が付着する。胴部にも2箇所に二次的な被熱により円形の煤が付着する。3885はIX期の壺。形状は柳ヶ坪型壺と同一であるが、口縁部外面の文様は認められない。内面には磨耗のため一部に刺突文が認められる。3886はIX期の柳ヶ坪型壺。口縁部は二重口縁を呈し、内面には羽状文が認められる。胴部はやや下膨れ気味だが、球形にちかく、底部はわずかに突出する。底部にはケズリが認められる。頸部直下から胴部上半2分の1程度まで施文があり、直線文2帯と振幅の小さい波状文で構成する。3887、3888もIX期の壺。胎土や文様が柳ヶ坪型壺と類似するが、口縁部は二重口縁ではなく単純口縁で、頸部が直線的に外方に伸びる。端部は強いナデによって内傾面が形成される。ナデは外面にまで及び、鋭いハケ目の痕跡がナデ消される。内面には羽状文を施文するが、上端は工具の動きがあり、波状文的にみえる。胴部は下膨れで、底部は突出する。胴部上半2分の1には頸部に残るハケ目と同様の鋭い工具による斜位のハケ目の上から、波状文と直線文を交互に施文する。下半はケズリの痕跡が認められ、ケズリの後、丁寧なミガキが認められる。底部外面にも同様の調整が認められる。

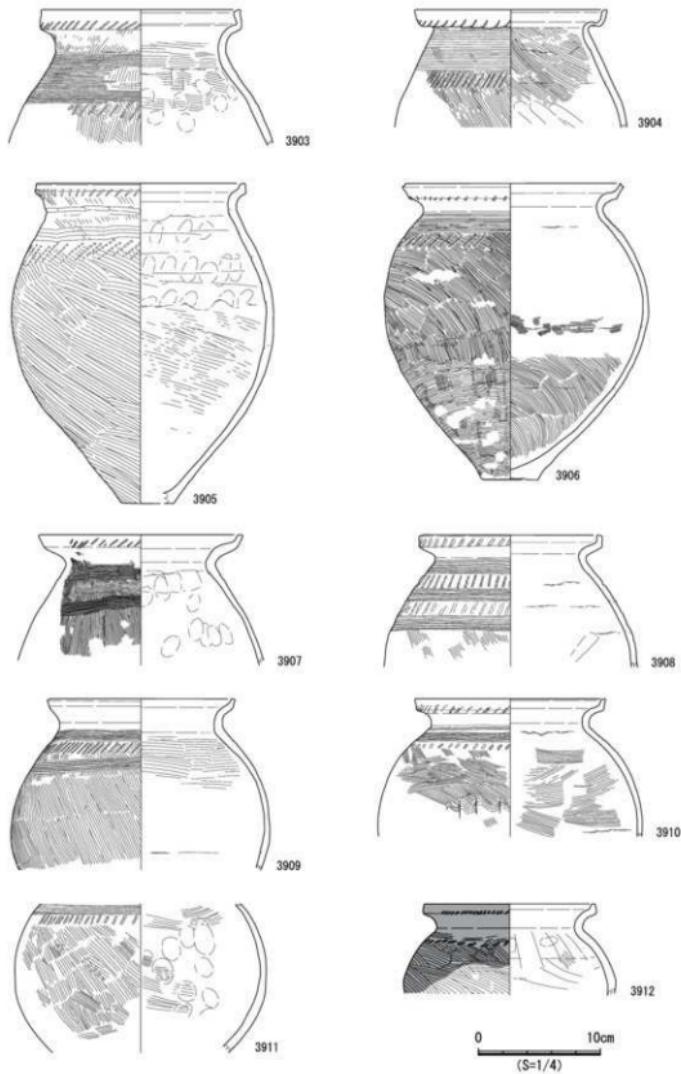


図 1398 NR002 遺物実測図 (14)

**壺** 3900、3904はV期壺A類。口縁部が短く直立する。頸部直下に3904は幅広の直線文、刺突文、3900は直線文、波状文が認められる。3903はV期壺A1類。口縁部が強く屈曲して内傾して、端部に強い平坦面が認められる。内面は強く屈曲による凹面を形成する。頸部は直立気味で、胴部はなだらかに膨らむ。3903の文様は口縁部に刺突文、頸部直下に直線文と刺突文が施文され、直線文は3帯で形成される。3901はV期壺A2b類。口縁部が短く屈折して立ち上がる。端部、頸部直下にやや大きな刺突文を施文する。3911はV期壺A類胴部。上半に直線文、刺突文が認められる。3894、3895、3897、3902、3905はV期壺A2a類。頸部がやや直立して、口縁部が屈曲する。3895、3897、3902、3905は端部に刺突文、頸部直下に直線文と刺突文を施文する。直線文は幅広である。3894は直線文間に波状文を施文する。3895の直線文は幅広で、断続的な動きの施文が認められ、波状文的である。また、1本1本の動きが別々のため、それぞれ単独の沈線を引いているのかもしれない。3889、3890、3892、3896、3898、3899、3906～3910、3912、3918、3919、3921、3922はV期壺A2b類。口縁部が直立して、端部はわずかに丸みを帯びた内傾面を形成する。3906、3919はV期前半。口縁部が鋭く直立して、端部はやや内傾する凹面を形成する。内面にも強いヨコナデによる凹面が認められる。胴部は頸部からなだらかに膨らみ、最大径は上半にある。下半は直線的に小さな平底の底部に向かう。底部は中央がやや畳み、ドーナツ状である。文様は口縁部と胴部上半に認められる。口縁部の刺突文は下端に偏るが、ヨコナデによって消失したものである。3906は頸部直下に直線文、刺突文を施文する。3919の胴部には直線文、刺突文、直線文の施文が認められるが、刺突文と下段の直線文の間がやや離れる。また、胴部中央には波状文、線刻状の文様らしきものが残る箇所がある。3889は小型品で端部の刺突文のほかに口頸部にも刺突文を加える。3890、3896、3910は口縁端部、頸部直下に直線文、刺突文が認められる。3890の直線文は幅広で3帯で構成される。3909は胴部に直線文2帯と刺突文を施文する。3898、3912は端部下端と頸部直下からやや離れた位置に刺突文を施文する。3907は直線文間に振幅の小さい波状文を施文する。3918は口縁部に打ち欠きが認められる。端部に刺突文、頸部直下に直線文と刺突文を施文する。直線文は上下端を沈線によって区画する。3921、3922は頸部直下に廉状文、その下に波状文、廉状文を施文する。3891、3893、3913～3917、3920、3924～3928、3933はVI期壺A3類。端部は平坦面を形成するが、口縁部の屈曲が弱くなる。3893は端部に刺突文、頸部直下に直線文を施文する。口縁部に打ち欠きが認められる。3915、3916、3925、3926は端部に刺突文、頸部直下に直線文と刺突文を施文する。3920は端部下端に刺突文をもつが、胴部には文様は認められない。肩部が強く張り、胴部は倒卵形を呈す。脚部は打ち欠きが認められる。3924は口縁部、胴部とともに文様が認められない。3926の胴部は下膨れ気味である。3928はやや口縁部が直立気味で、打ち欠きが認められる。3933は口縁部下端に刺突文があり、肩部が張り最大径は胴部上半にある。3929～3932はVI期～VII期の壺A4類。口縁端部がわずかに屈曲する。3929は頸部直下に直線文と刺突文が認められる。3930は端部下端に刺突文、その直上に1本の沈線が認められる。頸部直下には直線文と刺突文があり、直線文は上下端が幅広である。3927、3932は施文が認められない。3932の胴部は下膨れ気味である。3923はVI期～VII期壺脚部。内面中央に未貫通の穿孔が認められる。3934はV期末～VI期の壺A類胴部。口頸部を欠損するものの、胴部はほぼ完存する。底部は小さな平底で胴部は底部から直線的に立ち上がる。肩部は強く膨らみ、最大径は胴部上半にある。胴部中央に穿孔が認められる。3935、3936はV期壺A類底部。3936は上げ底で内面にケズリが認められる。

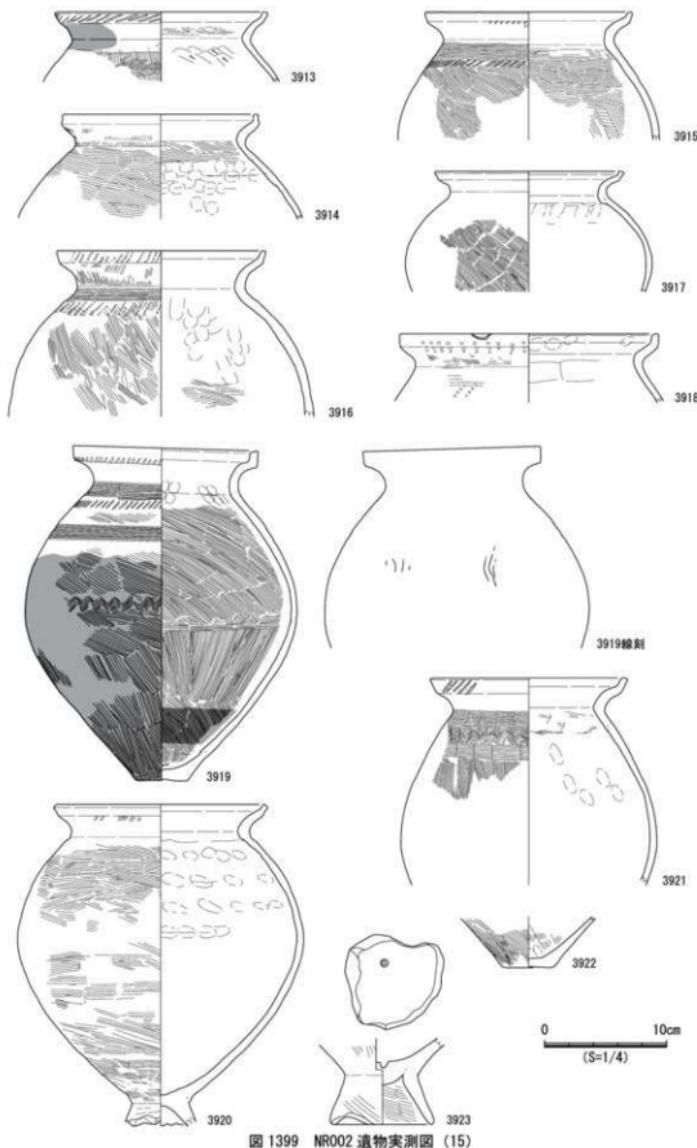


図 1399 NR002 遺物実測図 (15)

3939はV期壺B1a類。口縁部が弱く外反し、端部が平坦である。3937、3938、3940～3944、3956はV期壺B1b類。口縁部が頸部で屈折して、くの字となり端部に刺突文が認められる。3941は口縁部が短く屈折して、端部に強い平坦面を形成する。3956は脚部を除く胴部が残る。胴部は膨らみが強く、最大径は胴部上半にある。3945～3955、3957はVI期の壺B2類。3947、3951は口縁部が頸部で屈折して、弱く外反する。端部が平坦で刺突文を施文する。頸部直下には直線文と刺突文を施文する。3947の直線文は工具の間隔が幅広で動きが断続的である。3948は磨耗のため判然としないが、籠目らしき痕跡が認められる。3949の口縁端部は強いナデによって沈線状となる。3952は口縁部がくの字となり、端部に強い凹面が認められる。下端は強いナデによって拡張される。胴部は肩部が強く張る。3955は口縁部がやや外反気味となる。3957は口縁部が外反して、端部に刺突文をもつ。胴部にも刺突文を施文する。3958～3962、3964、3966はVII期壺B3類。口縁部が頸部に屈折して、くの字に立ち上がる。端部は断続的な強いナデによって平坦ながらも凹凸が認められる。3959は口縁部外面に輪積み痕や新たな粘土の貼付が著しい。3961、3964は胴部の膨らみは弱く、脚部は裾部がわずかに内湾する。3963、3965、3968～3970はVII期壺B4類。口縁部が弱く外反して、端部を丸くおさめる。3963は肩部が張り、最大径が胴部上半にある。3965は端部がわずかに肥厚気味である。3969は頸部直下に刺突文を2帯施文する。3970は胴部が球形にちかい。3971はVI期～VII期の壺胴部。脚部が短く直線的に開き、胴部が付根から大きく開く。3972はV期壺B類。胴部から脚部かけて遺存する。大型品で脚部が付根から直線的にハの字に開き、端部に平坦面を形成する。胴部内面にはケズリが認められる。3967はVI期～VII期壺B4類。口縁部が外反して、端部を丸くおさめる。3973はVI期～VII期の壺C2類。口縁部がわずかに内湾し、端部は平坦面を形成する。胴部だけではなく、口縁部にもハケ目が残る。3980はVII期の壺A類～C類の胴部片で線刻が認められる。数本の沈線によって描画されるが、破片のため全形は不明である。3974～3979、3981はVI期壺D1b類。口縁端部が鋭く屈曲して直立し、上端をわずかに外反させる。3977の端部はわずかに凹面を形成する。刺突文が施文される。頸部直下にはヨコハケが認められる。3982～3987はVII期壺D2b類。口縁部が屈折して外反する。3988、3989はVII期壺D3類。口縁部が弱く屈折して、胴部が強く膨らむ。胴部最大径よりわずか上位にヨコハケが認められる。3989は小型品で、頸部に沈線が認められる。口縁部、脚部に打ち欠きが認められる。3993～3995はVII期～VIII期の壺D類脚部。胴部は緩やかに膨らみ、脚部は細身の付根からハの字に開く。3987は端部にわずかな凹面を形成する。3990～3992、3996～3999、4000～4005、4016～4019はIX期の壺D類。3990、3991は口縁部の屈曲が3991よりさらに弱くなり、端部が平坦である。3998、3999の脚部は打ち欠きが認められる。4002は口縁端部が凹面を形成し、下端がわずかに拡張される。頸部には沈線が認められる。4004は全形が復元できた好例。口縁端部下端をわずかに肥厚して、胴部が強く膨らむ。脚部付根は細身で脚部が直線的に伸びる。4000、4018、4019の口縁部屈曲はその形骸化が著しい。4018は頸部に沈線が認められる。4010、4013はV～IX期の壺D類脚部。付根から脚部が強くハの字に開く。4010は破断面に煤が付着する。4009はV期壺B類の脚部。脚部がハの字に開く。4006～4008、4015はVI期～VII期の壺脚部。4006、4007は打ち欠きが認められる。4015は胴部が脚部付根から胴部に緩やかに立ち上がる。4011、4012、4014はVII期～VIII期の壺脚部。付根がやや細身である。4014は大型である。4020はVII期壺E2類。口縁部が頸部から短くくの字なり、頸部が強いナデによって凹線状となる。4023はVI期～VII期の壺E1類。口縁

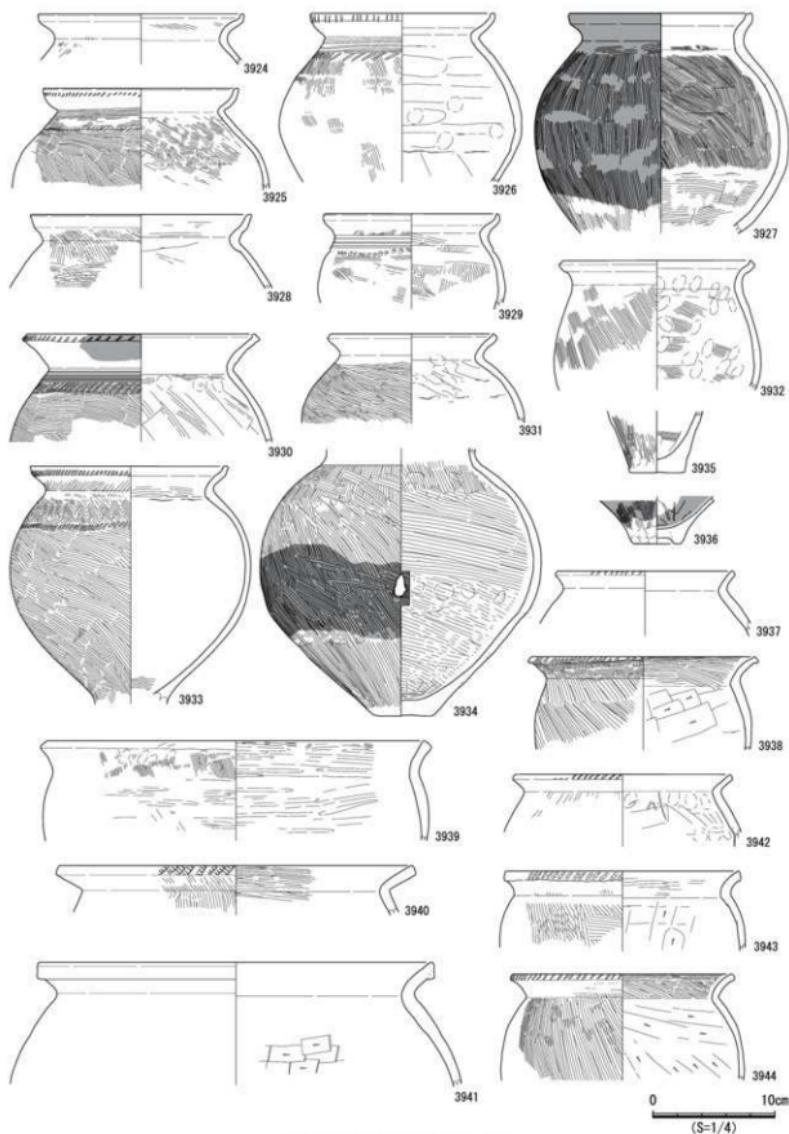


図 1400 NR002 遺物実測図 (16)

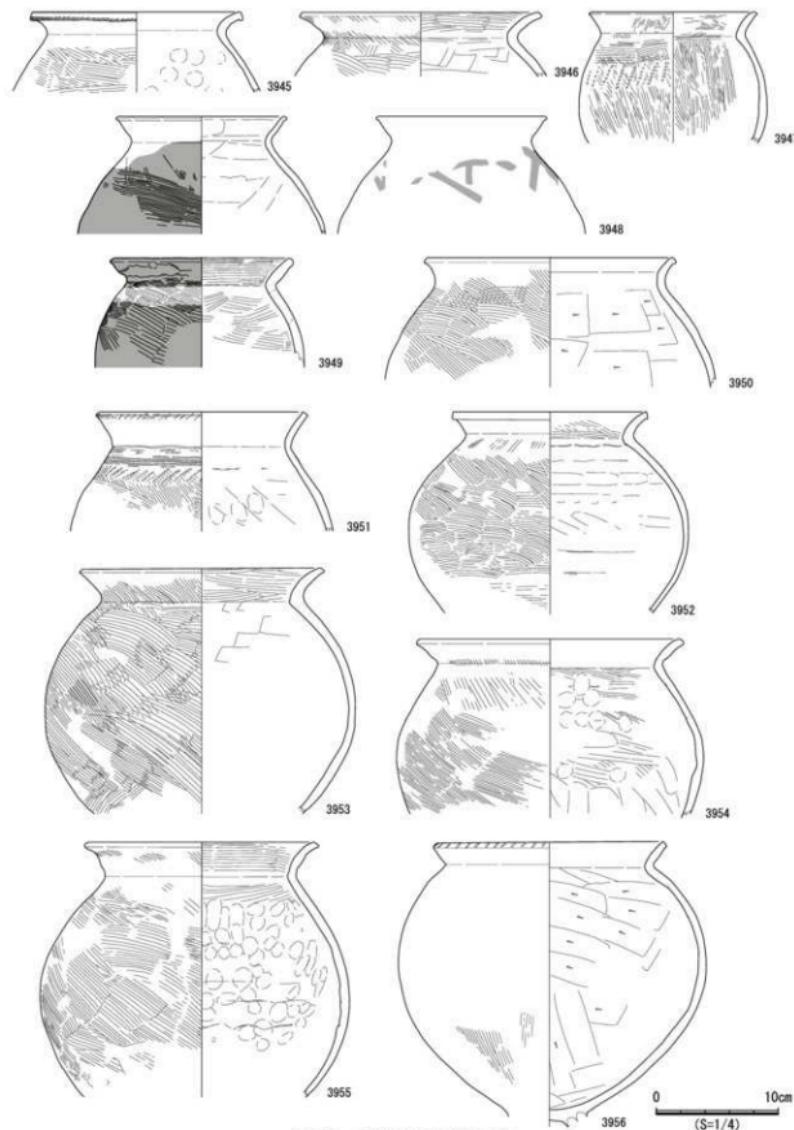


図 1401 NR002 遺物実測図 (17)

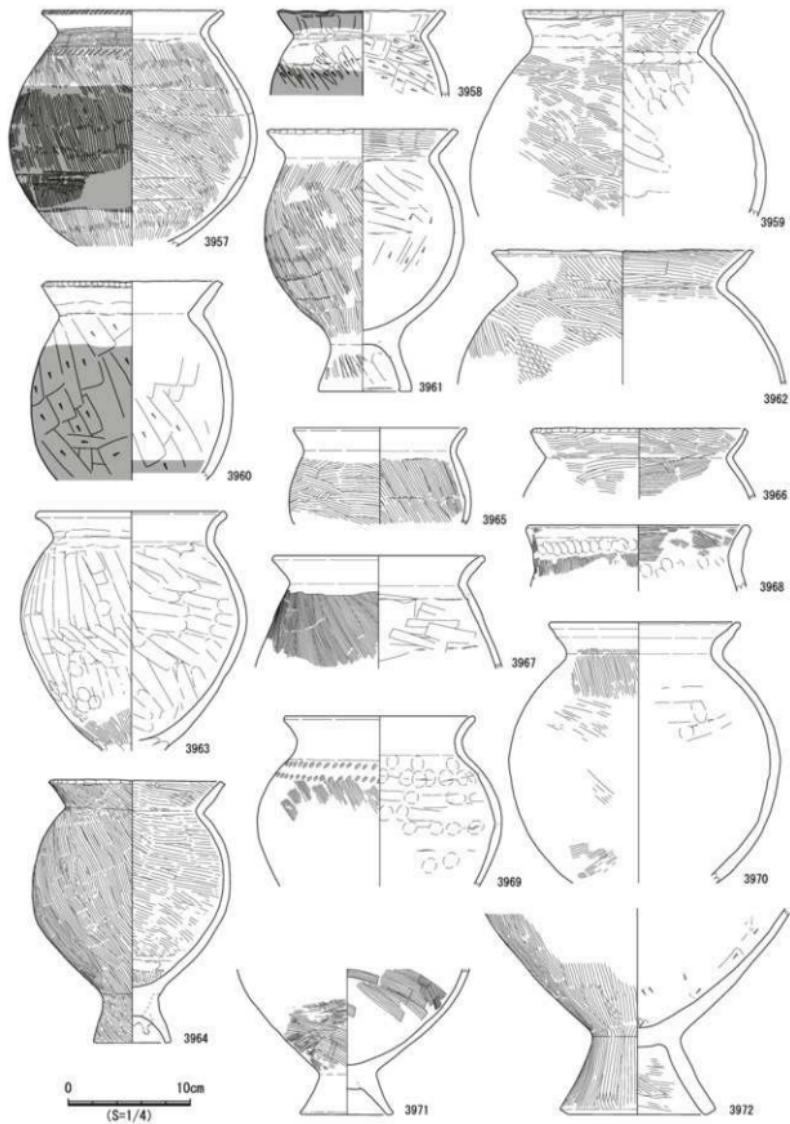


図 1402 NR002 遺物実測図 (18)

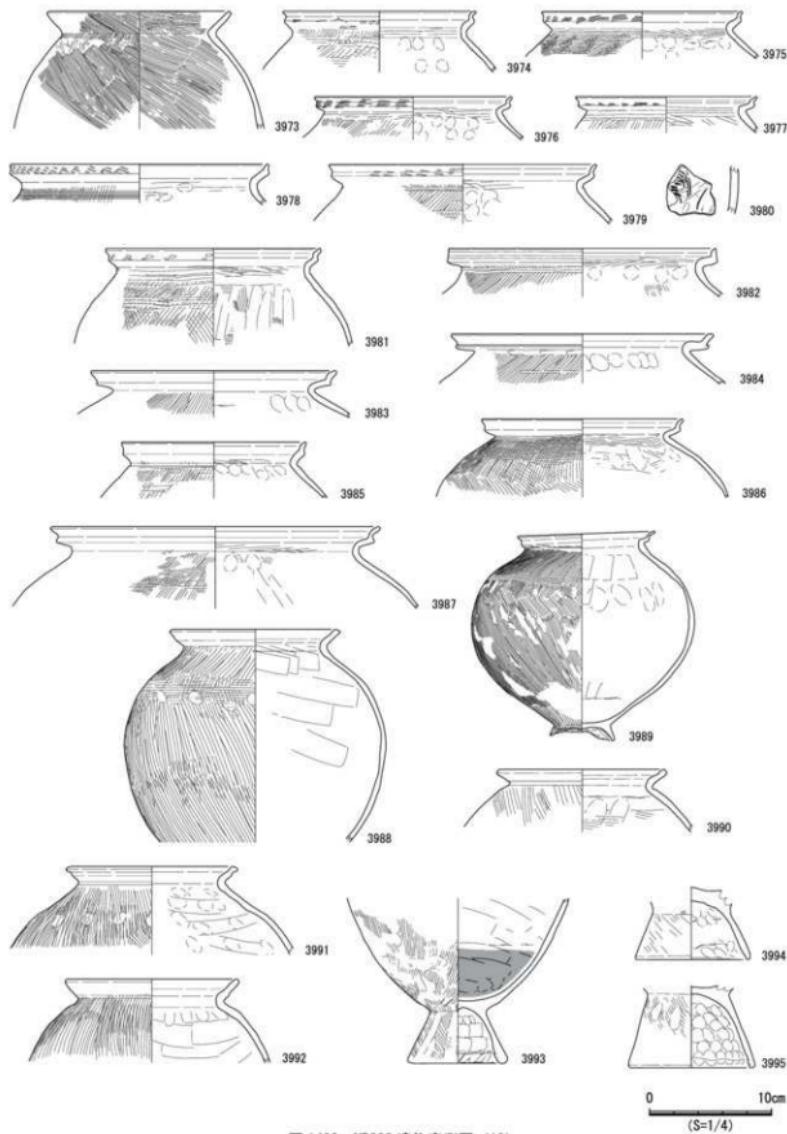


図 1403 NR002 遺物実測図 (19)

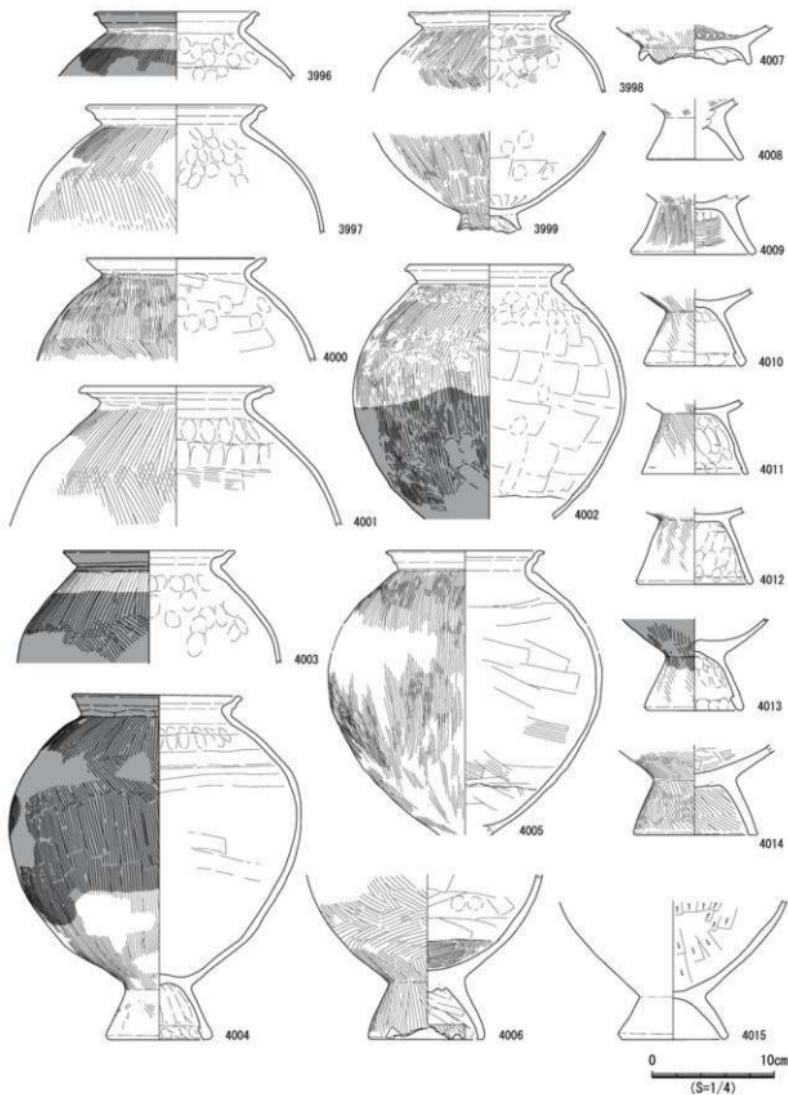


図 1404 NR002 遺物実測図 (20)

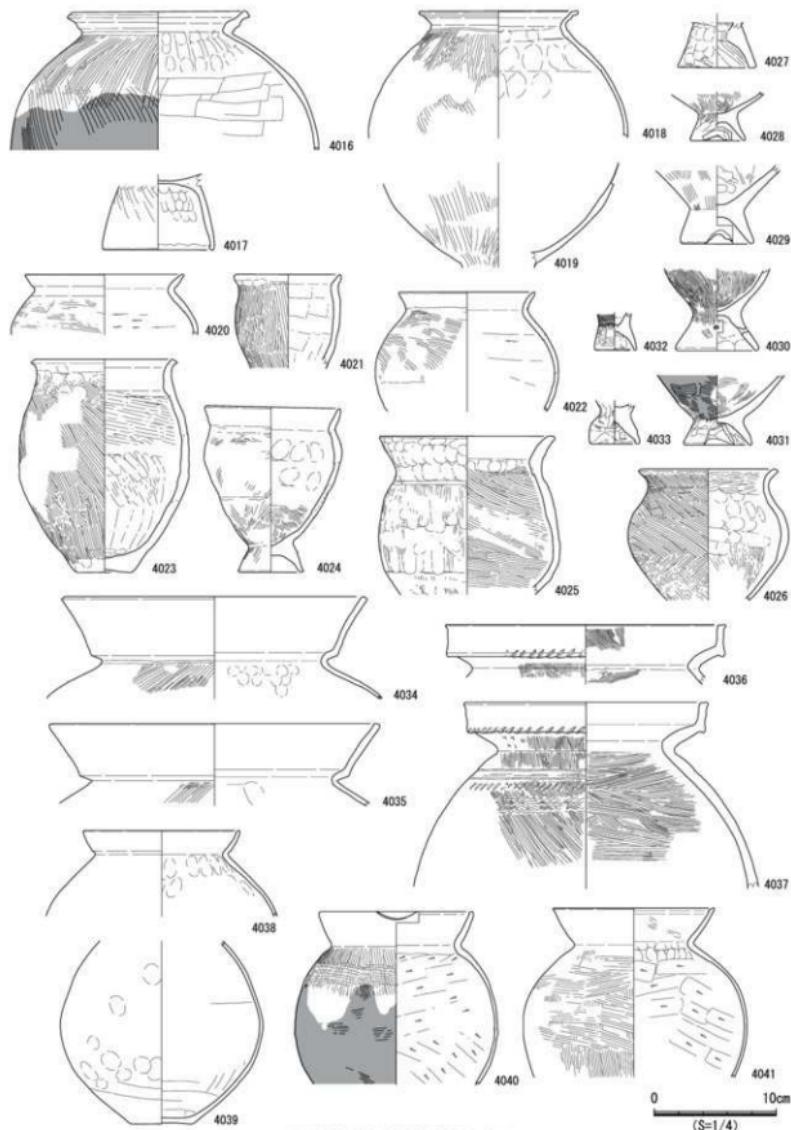


図 1405 NR002 遺物実測図 (21)

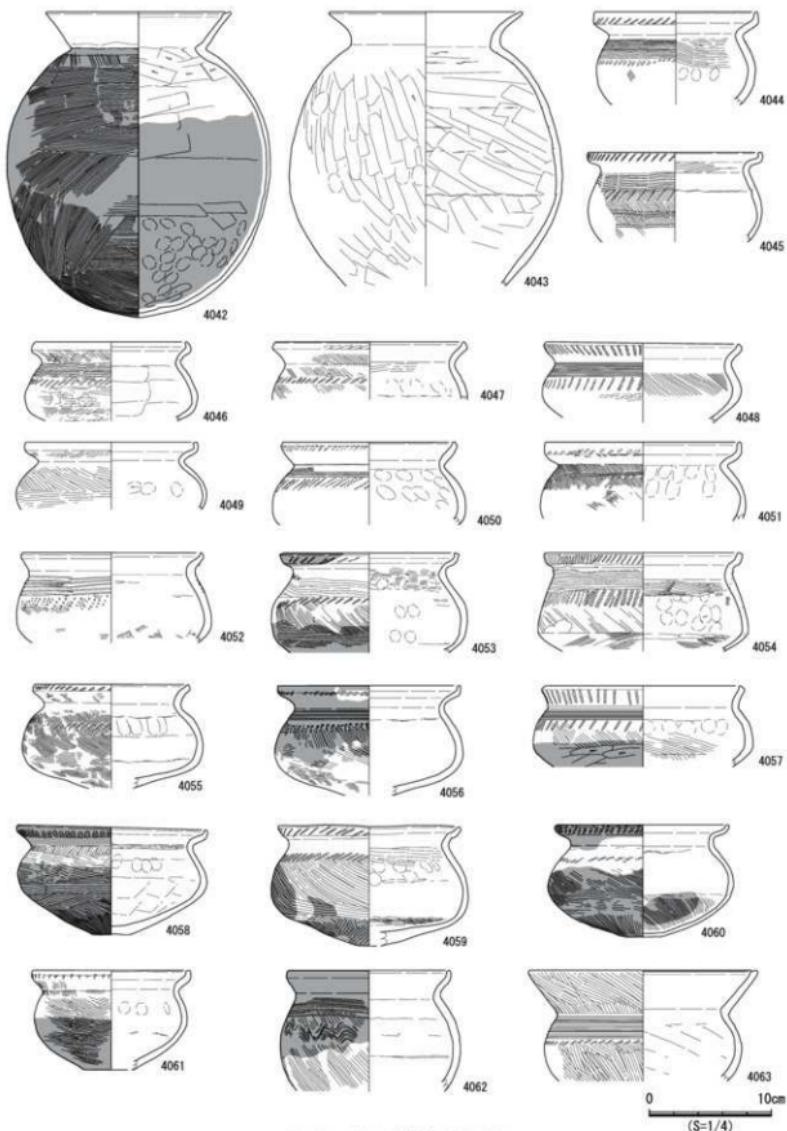


図 1406 NR002 遺物実測図 (22)

部が短く外反して端部は平坦である。頸部の屈曲が弱く、肩部も緩やかである。胴部最大径が中央より上位にあり、胴部下半は直線的である。底部には線刻らしきものが認められる。4021、4022はVI期～VII期の甕E6類。口縁部が短く立ち上がる。4024はVI期～VII期の甕E5類。口縁部が直線的に伸びる。胴部は最大径が頸部やや下にあり、膨らみが弱い。脚部は短くハの字に開く。4025、4034、4035、4038～4043はIX期の甕。4025は口縁部が弱く外反して、端部を丸くおさめる。胴部の膨らみが弱く、胴部径より口径が上回る。外面には輪積み痕が残り、器面の調整が粗雑である。4026はVI期～VII期の甕E2類。口縁部が外反する。4027、4028、4030～4033はVI期～VII期の甕E類脚部。脚部は短くハの字に開く。4028、4031には打ち欠きが認められる。4029は甕E類のVI期～VII期の胴部と脚部。脚部が短く直線的に開き、端部に数箇所の打ち欠きが認められる。4034、4035は口縁部が直線的に外傾する山陰系の甕。4043は口縁部が強く外反して尖り気味におさめる。胴部は緩やかにふくらむ。胴部外面には単位の小さなケズりが認められる。4036はV期甕F類。口縁部が頸部から短く外傾して、端部が大きく直立する。端部には強いナデが認められ、端部がやや外方に引き出される。屈曲部には大ぶりな刺突文が認められる。4037は口縁部が直立して、屈曲部に刺突文をもつVI～VII期甕F類。胴部には刺突文と波状文が認められる。4038、4039は口縁部がやや内湾しながら短く立ち上がり、端部をわずかに肥厚する。胴部は球形にちかいが、底部は小さな平底である。内面はケズリ調整が認められ、器壁が薄く仕上げられる。4040はVII期後半～IX期の甕で布留型甕。搬入品の可能性が高い。口縁部は短く内湾して端部に内傾する肥厚面が認められる。胴部は球形にちかく、縦方向のハケ目を加えて肩部に横方向のハケ目が認められる。内面には丁寧にケズりが認められる。口縁部には打ち欠きがある。4041、4042は4038と類似する。口縁端部は下端を肥厚した内傾面が形成される。胴部はなだらかに膨らみ、側面形は梢円形にちかく底部は丸底である。外面にはハケ目が残り、胴部上半では横方向、下半では不定方向となる。内面にはケズりが認められ、器壁を薄く仕上げる。4041の胴部は球形にちかく、搬入品と考えられる。

**鉢** 4044、4045、4051はV期鉢A1類。口縁部が強く屈曲して直立し、刺突文が認められる。胴部は肩部が強く張り、それより上に直線文と刺突文を施文する。4046、4048、4049、4052～4054、4056、4058～4062、4064はV期後半～VI期前半の鉢A2類。口縁部が短く屈曲する。胴部が強く膨らみ、口径を上回る。4048、4056、4058、4061は口径と胴部径がほぼ同じである4046、4052～4054、4056は頸部直下に直線文と刺突文が認められる。4054は肩部がやや屈曲する。4058～4060はほぼ完形品。4058は口縁端部下端に大振りな刺突文が認められる。4059は刺突文が端部下端、頸部直下に施文される。胴部最大径は中央より下にあり、下半は直線的に底部にいたる。4060の文様は4059と同様だが、頸部がやや直立する。4061は端部下端に刺突文を施文する。4062は頸部直下には直線文と波状文が認められる。4047、4050、4055、4057はVI期の鉢A3a類。口縁部が短く外反して端部が尖り気味である。4055の胴部は肩部が強く張り、胴部径が口径より大きい。最大径は胴部中央よりやや下にある。4057の刺突文は口縁端部ではなく、口頸部に施文する。4066、4067はVI期～VII期の鉢A4a類。口縁部が短くハの字となり、端部は尖り気味である。4066は肩部が強く張り、胴部下半は直線的である。4067は肩部が強く張り、胴部径が口径を上回る。4063はVI期～VII期の鉢A4b類。口縁部が大きく外反して、頸部直下に太い沈線があり、その下に直線文と刺突文が認められる。4065はV期～VI期の鉢A類底部。偏平な胴部で、小さな平底が認められる。ドーナツ状の高まりがあり、甕A類と類似す

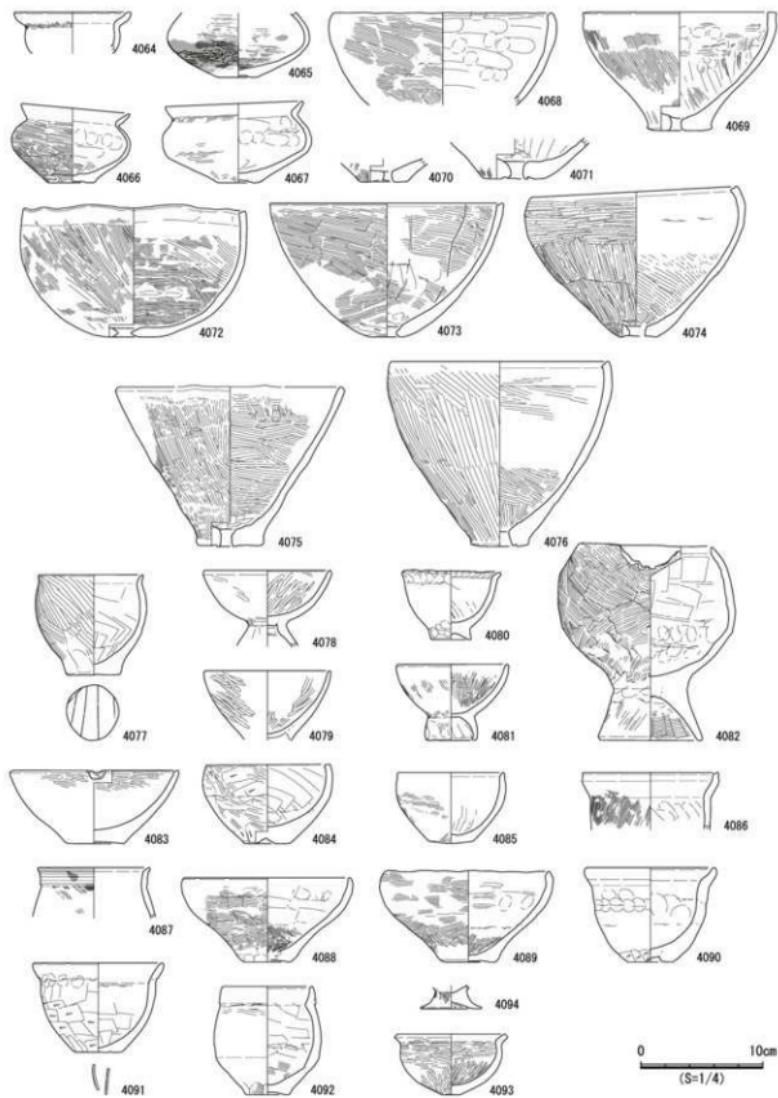


図 1407 NR002 遺物実測図 (23)

る。鉢A類のなかではめずらしい例である。4068、4075、4076はVI期～VII期鉢B1類。4068は口縁部が内湾して立ち上がり、端部は尖り気味である。4075は小さな底部から口縁部がわずかに内湾しながら直線的に立ち上がる。4076は底部から口縁部まで緩やかに内湾する。4069、4072～4074はVI期～VII期の鉢B3類。胴部が強く内湾して、口縁部は直立気味である。4072の端部は平坦面を形成するが、凹凸が認められる。端部は高环によく認められる内傾面を形成する。4073、4074の端部は平坦である。4070、4071は穿孔のあるVI期鉢B類底部。4077はVII期鉢C類。小さな底部から口縁部が内湾する。外面には粗いハケ目が認められる。4078～4082、4094はVII期鉢D類。4082は完存する資料で脚台付根から胴部が緩やかに膨らみ、口縁部が内湾する。その形状は鉢C類に類似する。口縁部には打ち欠きが認められる。脚部は短くハの字に開く。VII期であろう。4078、4079は脚裾部を欠損する。口縁部が内湾する。丁寧なミガキが認められる。4079は内面に羽状のミガキが認められ、煤が内外面にわずかに付着する。4078はVI期～VII期、4079はVII期と考えられる。4080は小型品。口縁部が内湾して立ち上がり、端部がわずかに外反する。底部は突出させて、内面を窪ませることによって脚台状に形成する。4088、4089はVII期鉢F類。突出した底部から胴部が直線的に立ち上がり、口縁部で内湾する。4089の口縁端部は尖り気味で打ち欠きが認められる。4083はVII期鉢E類。平底の底部から口縁部がわずかに内湾しながら、外傾するのでE類とした。口縁部に内傾面が認められ、高环D類と坏部形状が酷似する。片口部は残存部位からは認められなかった。4084、4085はVII期鉢F類。口縁部が内湾する。4085は小型で端部に内傾面が認められる。外面には細かなハケ目が認められ、肩部は横方向である。4084の端部は何かの工具でケズリ取ったかのように平坦である。4086、4090～4092はVI期～VII期の鉢G類。4086は肩部の張りが弱く、口縁部が内湾する。4090は胴部が底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は短く外反する。内面はナデによって凹面を形成し、外面には輪積み痕が目立つ。底部外縁にはケズリが認められる。4091は口縁部が弱く外反する。4092の口縁部には直線文がみられる。4087、4093は鉢H類。4087は口縁部が直立して極細の沈線による直線文が認められる。口縁部と胴部の境にはわずかな段差が認められる。VII期の可能性が高い。4093は口縁部が短くハの字に屈折して、端部が平坦である。内外面ともに丁寧なミガキが認められる。VI期～VII期であると考えられる。4094は鉢D類の底部で、脚台状を呈する。

**高环** 4095はV期高环A1類。环底部が大きく、口縁部が強く屈曲して短く直立する。端部は外反して外傾し、やや平坦である。波状文、直線文を施文する。4096はV期高环A2類。口縁部が短く直立し、太い沈線が認められる。脚部は付根からやや外反しながら開き、裾部でさらに短く強く外反する。端部は平坦で上端が拡張気味となる。透孔が裾部に4方向に位置する。4097はV期高环A類脚部。脚部は外反して、端部上端を外方に拡張する。4098、4099はV期高环B類。4098は口縁部が短く立ち上がり、波状文が認められる。4099は脚裾部。強く外反し、端部が上方へ大きく拡張される。等間隔に穿孔が認められる。4100～4102は口縁部が短く外反して、端部が外傾して、さらに外方へ拡張されるV期高环B2a類。脚部は裾部で強く外反して、端部には強い平坦面を形成する。赤彩が認められる。4100、4101の环部には直線文と波状文、脚部には直線文と刺突文が交互に施文され、刺突文は向きを変えて直線文をはさんで羽状文2帯を形成する。4103、4105、4106、4108、4109はV期高环B2b類。口縁部が短く外反して、端部に顕著な平坦面を形成し、やや外方へ拡張される。4105、4106は口縁部が环底部で強く屈曲して、短く立ち上がり、端部には強い平坦面を形成する。脚部は

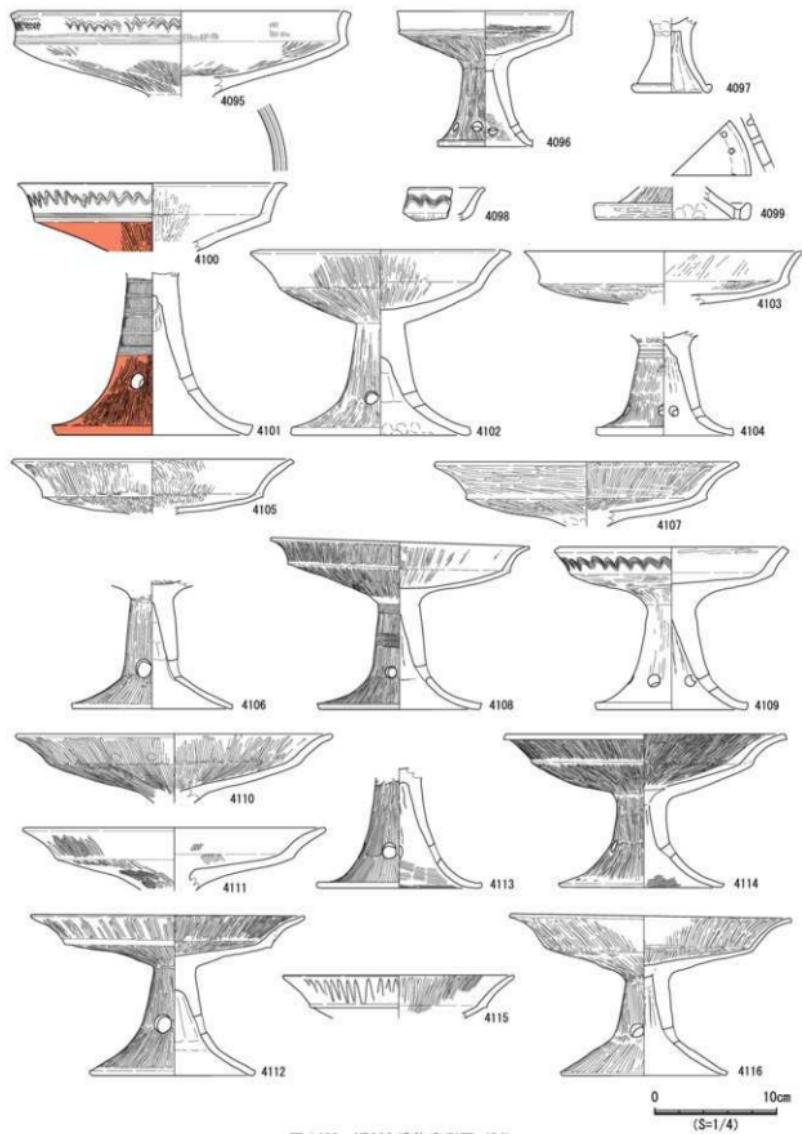


図 1408 NR002 遺物実測図 (24)

柱状で裾部は強く外反する。端部は平坦で、透孔が裾部ちかくに位置する。4108は口縁部が坏底部から強く外反し、端部が平坦部である。脚部は付根から円錐状に広がり、直線文を2帯施文する。裾部は強く外反して、端部には凹面を形成する。4109は脚裾部が強く外反し、端部に上端がわずかに拡張された平坦面を形成する。4104、4118はV期高坏B類の脚部。4104は裾部に透孔が位置し、付根には直線文を施文する。外面には赤彩が認められる。4118は付根から透孔までは柱状で、中実である。裾部がわずかに内湾する。4107、4115はV期高坏B類。口縁部が強く外反する。4107は外面のミガキは横方向で、内面のミガキは縱方向である。4115は暗文状の波状文が認められる。4113はV期高坏B2類脚部。裾部が強く外反して、端部には強い平坦面を形成する。4114、4117はV期高坏B3a類。口縁部が外反して端部が平坦である。4114の脚部はやや短く、裾部で外反する。4117の脚部は付根から円錐形に広がり、裾部が強く外反する。4110～4112、4116、4119はV-3期高坏B3b類。口縁部が坏底部から強く外反する。脚部はやや短く、裾部で強く外反する。4110は口縁部が短く強く外反するため、坏底部の屈曲が弱くなる。4111は端部を丸くおさめる。脚部は欠損するが、坏部はほぼ完存する。4112は4116より口縁部の外反が強く、端部が丸みをおびる。坏底部下端が粘土の貼付によって強調され、直線文を施文する。4116は端部を丸くおさめるが下端が強調される。4120～4122はVI-1期高坏B4類。坏底部が付根からわずかに内湾し、口縁部が直立してからわずかに外反する。4120の端部は尖り気味で、打ち欠きが認められる。外面全体に煤が付着する。4123、4124、4126、4127はVII期の高坏C4d類。4123、4124は多条沈線3帯の間に振幅の小さい山形文を施文する。4124の山形文は間隔の狭い範囲に施文したためか、連弧文的である。4126は多条沈線を4帯施文し、その間に山形文と羽状文を加える。4127は内面上半3分の1程度に多条沈線を施文し、その下位は山形文、対向山形文、山形文と少条の多条沈線を施文する。少条の多条沈線は山形文、対向山形文の直下に位置し、その単位は4～5本である。上半にある多条沈線は4～5本の単位を3帯で構成している。山形文はヘラ、対向山形文はクシと別の工具によって施文する。4125はVI期高坏C2c類。口縁部が坏底部で鋭く屈曲して、やや内湾しながら立ち上がる。内面には多条沈線を施文する。4128、4130、4131はVI期～VII期の高坏C類脚部。4130は裾部が強く内湾する。4132、4135はVII期高坏D1類。4132は打ち欠きが認められる。4135は口縁部の一部を欠損する。口縁部は直線的に大きく開き、脚部は外反する。4134、4136、4139はVII期後半高坏D2類。4134は口縁部が外側へ開き、口縁端部を肥厚して、多条沈線を加える。坏底部内面には顕著な段が認められる。4136、4139は口縁部が脚部付根から直線的に開き、端部に内傾面を形成する。4136の脚部は付根から円錐形に開く。4139は裾部が内湾する。また、内面には一部羽状ミガキが認められる。4133はVII期高坏D3類。口縁部が直線的に伸び、端部に内傾面を形成する。4133は内傾面、口縁部内面上半に多条沈線を施文する。多条沈線の単位は2本1組と少条で、内傾面には1帯が認められる。その下にはやや間隔をおきながら、6帯を施文する。坏底部内面の段は認められる。内外面ともに煤が付着する。4129はVII期前半の高坏C4b類。小さな坏底部から口縁部が大きく開き、端部は内傾面を形成して、多条沈線を施文する。脚部は付根から円錐状に開き、裾部で強く内湾して開く。透孔は2穿孔1組で2方向である。外面には口縁部下半から付根にかけて強い煤痕が残る。ミガキが入念に施され、口縁部内面は羽状である。4131はVI期～VII期の高坏C4類。裾部がわずかに内湾する。4137はVII期高坏D類。4138はVII期高坏D類脚部。脚部が短く、裾部が内湾する。4140はVII期高坏D4類。ほぼ完存する。坏底部径が小さく、

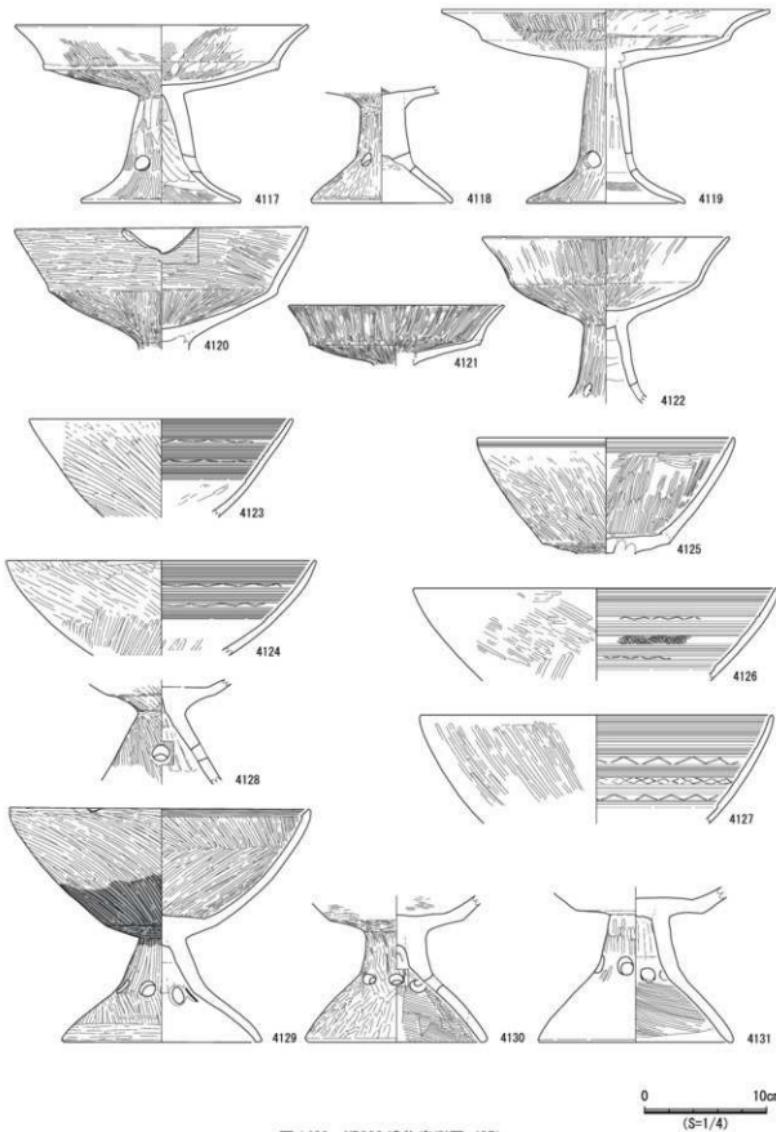


図 1409 NR002 遺物実測図 (25)

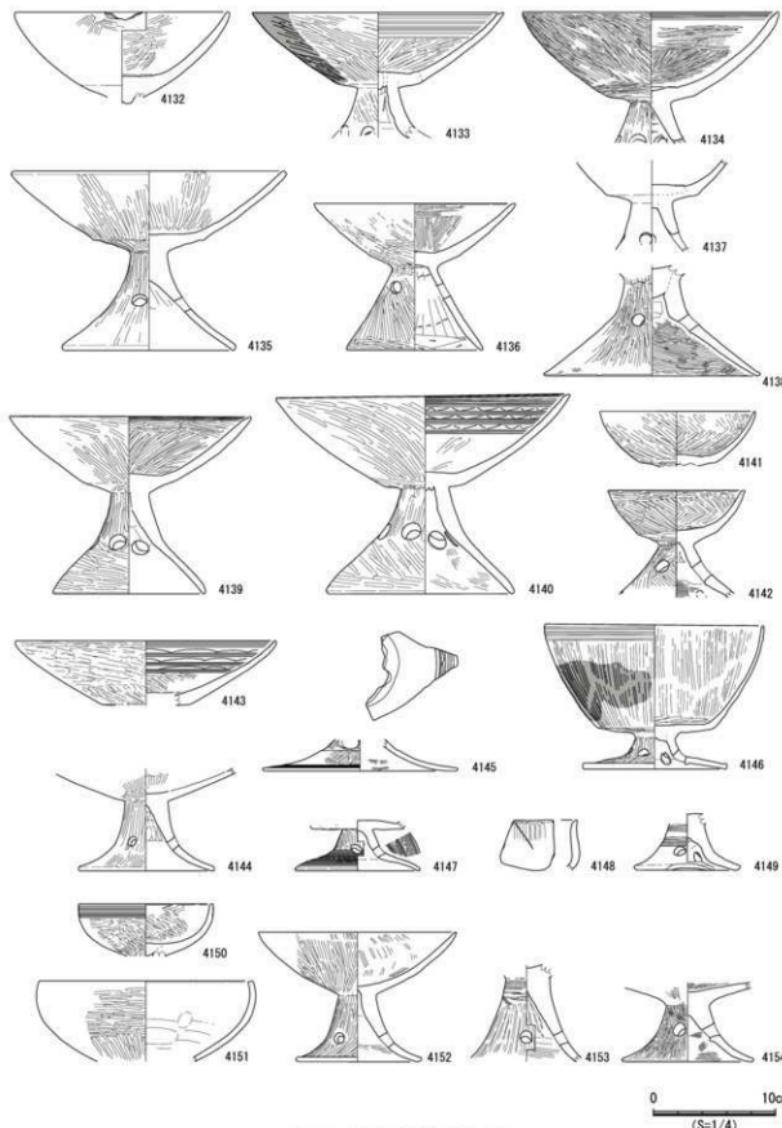


図 1410 NR002 遺物実測図 (26)



図 1411 NR002 遺物実測図 (27)

脚部付根が細身で裾部が内湾する。内面には上半2分の1程度に、3～5本程度の少条の多条沈線を内傾面とその下に4帯施文して、その間にさらに山形文を施文する。底部の段差がわずかに残る。4141はVII期高坏G3a類。口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がる。内面には羽状ミガキが認められる。4142はVI期高坏G1類。口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がる。脚部はやや外反しながら開き、裾部でわずかに内湾する。4143はVIII期高坏E類。口縁部が大きく開き、内面に多条沈線と連弧文による加飾が認められる。加飾は少条の多条沈線4帯と連弧文3帯で構成される。4144はVIII期の高坏E類脚部。4144は脚裾部が強く外反し、端部には強い平坦面を形成する。4145はVII期後半の高坏G3c類もしくはH2類の脚部。強く外反する脚部をもち、透孔や下側に段差を形成する。裾部には繊細な線による多条沈線と連弧文が施文される。4146はVII期前半の高坏G3b類。ほぼ完存する。坏部は側面が台形で、口縁部が坏底部で強く屈折して内湾気味に立ち上がる。上半には多条沈線、部分的に煤の付着が認められる。脚部は短脚で裾部が強く屈折して開く。透孔は2穿孔1組2方向である。4147はVII期高坏G3c類脚部。裾部が屈曲して内湾し、外面には細かな施文が認められる。少条の多条沈線の間に刺突文、山形文、連弧文を充填する。4148、4155はV期～VI期の高坏I2類。口縁部がわずかに直立する。4148は線刻が認められる。4149、4153、4154、4158、4160、4162、4165はV期～VI期の高坏I類脚部。脚部が短く外反する。4149、4153、4158には直線文が認められる。4149、4153はV期であろう。4165の裾端部は平坦で上端がわずかに拡張される。4150はVII期高坏H2類。小型品で口縁部が強く内湾し、外面には多条沈線がみられる。内面には煤が付着する。4151は坏部が椀状を呈するV～VI期高坏H1類。4152はV期高坏H類。口縁部が緩やかに内湾して立ち上がり、脚部は付根から透孔まで円錐状に開き、裾部で強く外反する。端部は平坦である。4156、4167はV期高坏I2類。口縁部が内湾して端部がわずかに直立する。4156は大型品。4167も大型品ではほぼ完存する。脚部は裾部で外反して、端部に強い平坦面を形成する。直線文が3帯施文される。4157、4159、4161はVI期高坏I3類。坏底部から口縁部がわずかに内湾しながら、内傾する。4159の口縁部には打ち欠きが認められる。4163はVI期器台B1類。4164はV期高坏I1b類。口縁部が脚部付根から大きく開き、やや屈曲して内傾する。坏部が深く、端部は直立気味で沈線2条、打ち欠きが認められる。脚部は円錐形に広がり、直線文3帯を施文し、裾部を欠損する。直線文以下の外面と内面に赤彩が認められる。4166はV期高坏I類脚部。3帯の直線文が認められる。4168～4173は口縁部が直線的に伸びるIX期の高坏。4172の脚部は柱状である。4174～4176はV期～VI期の高坏J類。4175は小型品で付根から透孔ちかくまで断面が中実である。裾部で強く外反する。V期の高坏B類、I類に類似する。4176は傘形の形状を示す脚部。丁寧なミガキが認められる。4174は脚部が細身の長脚で柱状を呈し、裾部が強く外反する。4177～4179、4182はIX期高坏の脚部。裾部ちかくまでは柱状を呈し、裾部が強く外反する。4173、4182はほぼ完存するIX期高坏。4179、4182は煤が付着する。

**器台** 4184～4193、4195～4197、4199～4202、4204、4205、4214、4216、4217はV期器台A1a類。4184、4193は口縁端部を拡張して、擬凹線と3個1組の円形浮文を施文する。4187～4190、4197、4204、4216は口縁部が大きく外反して、端部には強い平坦面が認められる。B類と比べると基部の径が大きく脚部が短い。裾部が外反して、端部は丸くおさめる。脚部が付根から透孔まで柱状形とならずに、わずかに円錐形となり、B1類に類似する。4185、4192の器形は4189、4190、4204と同様だが、4185は端部が強く内傾して擬凹線を施文する。4192も口縁部が内傾するがやや丸みをもち、

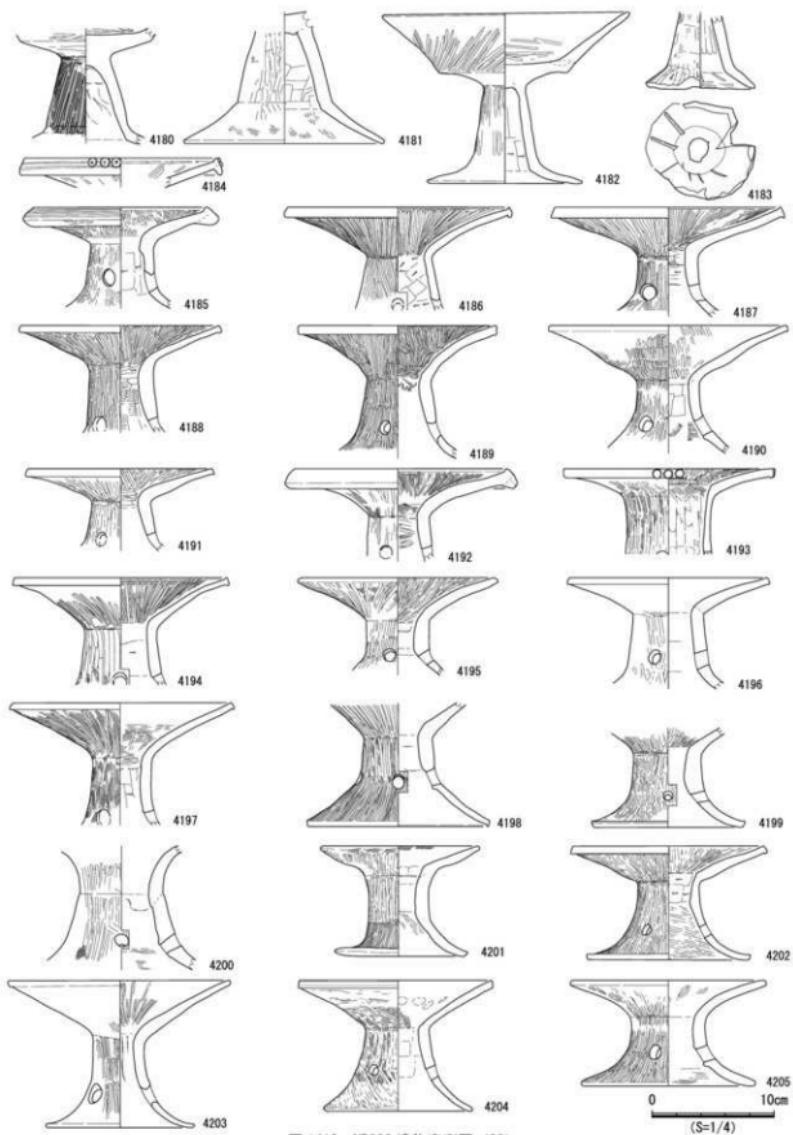


図 1412 NR002 遺物実測図 (28)

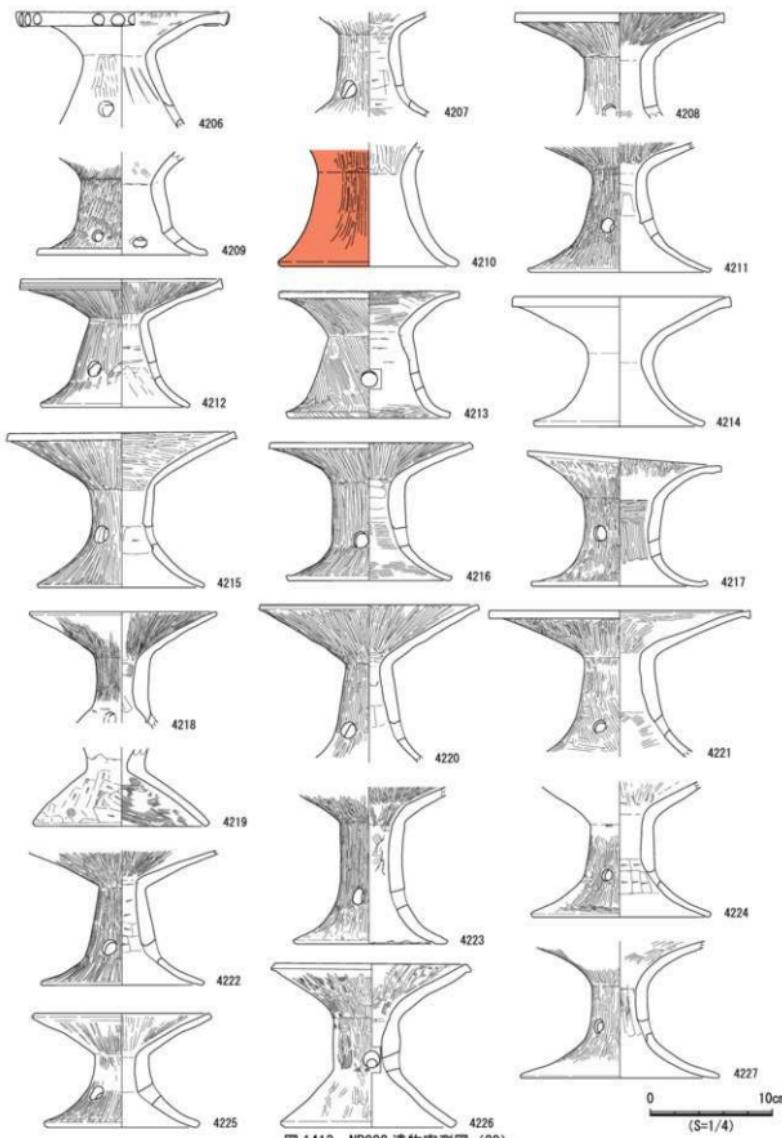


図 1413 NR002 遺物実測図 (29)

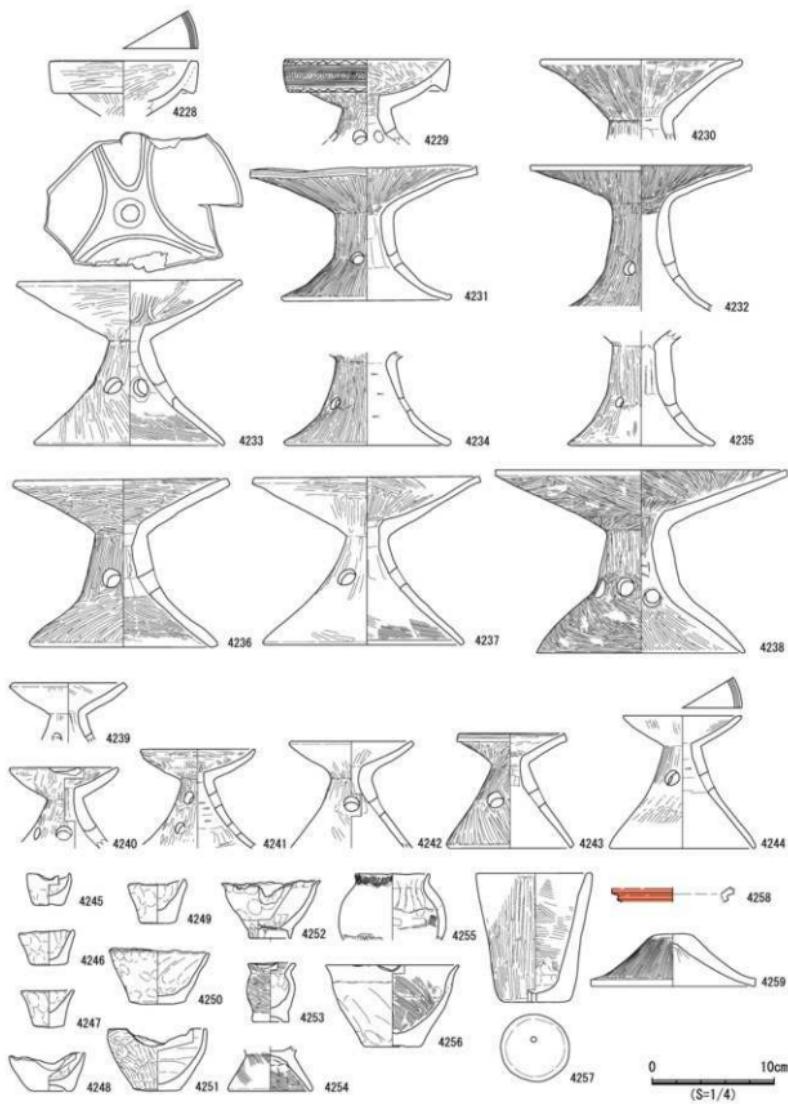


図 1414 NR002 遺物実測図 (30)

下端が拡張される。沈線が1本認められるが、全周せず、難な施文のため、意図した沈線ではないかもしれない。V期後半に相当する。4215はV-3期器台A1類。口縁部が大きく外反して、端部に強い平坦面を形成する。脚部は透孔ちかくまでは柱状で、裾部は外反する。裾部の外反が他の同類に比べて弱く、B1類に類似する。4207は器台A1類。筒状の基部が認められる。4206、4209、4210、4212、4213はV期の器台A2類。4206は口縁部が強く外反して、3個1組の円形浮文を4方向に配置する。4209の透孔は8方向と考えられる。端部は平坦で部分的にハケ目が認められる。4210は脚部。脚部は外反して、赤彩が認められる。4212は口縁部が強く外反し、端部に平坦面を形成して、直線文を施文する。脚部は付根から円錐状となり、裾部が外反する。4213は口縁部が短く外反して、端部は平坦である。脚部は付根から外反しながら開き、裾部でさらに短く外反する。4194、4198はV期器台A1a類。基部が直立気味で、口縁部、脚部が強く外反し、端部は平坦である。4211はVI期器台B1類脚部。透孔ちかくまではわずかに広がるもののはぼ柱状を呈して、裾部で外反する。4203はVI期器台B類。口縁部が直線的に立ち上がる。脚部は外反する。4208、4218~4227はVI期前半器台B1a類。4208は口縁部が直線的に開き、端部が平坦である。端部下端がわずかに拡張される。4221、4223、4224、4227は脚部が付根から透孔近くまでは柱状を呈し、裾部で外反する。4218、4226は口縁部が大きく外反する。4218は内面に強く煤が付着し、蓋として転用された可能性がある。4222は口縁部が直線的に開き、脚部は裾部で強く外反する。端部はやや丸みを帯びるが、平坦である。4226は端部に強い平坦面を形成する。4231、4232はVI期後半器台B2a類。口縁部が大きく外反して、端部には強い平坦面を形成する。脚部は付根からわずかに円錐形に広がり、裾部で強く外反する。4233、4236~4238はVII期器台B3類。口縁部が内湾気味に立ち上がり、脚部は付根から大きく広がり、裾部でわずかに内湾する。4233の脚部には煤が付着する。口縁部内面には線刻が認められる。極細の2本1組の沈線によって連弧状の描画が認められるが、欠損部位のため、全形は不明である。4228、4229はVII期器台B4類。4229は口縁部が強く外反する。4229は端部を拡張して精緻な文様を施文する。中央にある1.5単位の稻妻状にもみえる山形文の上下に多条沈線と山形文を配置する。羽状文、山形文とも1単位が細かく、精密な施文である。脚部は付根からやや開く。裾部は破損するが、強く屈曲しているので、裾部は強く外反すると考えられる。透孔は2穿孔1組が2方向に配置される。脚部、透孔の形状は高環G類と類似する。4230はVI期器台B1類。口縁部は強く外反する。4235はVI期~VII期器台B2類の脚部。付根から脚部はやや外反しながら開き、裾部でさらに外反する。4234はVII期の器台B3類脚部。裾部が外反する。4239、4242、4243はVII期器台C1類。口縁部が短く開き、端部は平坦である。4239は脚部が付根から円錐状に広がり、裾部でわずかに内湾する。4240、4244はVII期器台C2類。口縁部が皿状で、脚部がハの字に開く。4240は打ち欠きが認められる。4244は裾部が内湾する。4241はVII期~VIII期の器台C3類。口縁部は皿状で、端部を上方にややつまみ上げる。その際に生じた段差が外面に沈線状にみえる。脚部は付根から外反して開き、透孔は上下に2穿孔したものと3方向に配置する。

**その他** 4245~4251、4254、4256はVI期~VII期手捏ね土器C類。4248、4251の口縁部に打ち欠きが認められる。4251はやや大型品で口縁部が内湾し、丁寧なつくりである。4256も大型品である。4252、4253、4255はVI期~VII期の手捏ね土器E類。4252の胴部は碗状を呈し、口縁部は短く外反する。外反が断続的なナデによって形成されているため、端部の凹凸が目立つ。底部の外縁には粘土紐

を貼付して、粗雑な脚台を形成するので、鉢D類を模したと考えられる。底部には穿孔が認められる。4253は甕を模倣したと考えられる。ハケ目も認められる。4255は、胴部が強く膨らみ、口縁部がつまみ上げられ短く立ち上がる。4257はV期～VI期の筒形を呈する土器。口縁部が一部残存するが、この残存部位のみで全形を推し量ってよいか検討の余地がある。底部は平底で穿孔が認められる。4258はV期の土製品。口縁部が短く屈折して、端部に顯著な平坦面が認められる。薄く精緻なつくりで赤彩が認められる精製品である。合子と考えられる。4259は断面形が傘形となるV期の蓋。外面には赤彩が認められる。天井部は平坦である。4260は小型品で底部に透孔のある脚台である。何らかの形状を模倣した土製品の可能性がある。IV期～V期であろう。口縁部を欠損するため全形は不明だが、胴部はそれほど大きく膨らむ形状ではなく、弥生時代中期後葉の脚台付の無頸壺や木製品の臼に類似する。胎土はVII期～VIII期ものにちかい。4261はVI期～VII期の合子。口縁部が直立して立ち上がり、脚部が短く外へ開く。口径7.6cm、器高7.2cmである。内外面ともに身部と脚部との境界に細い沈線が認められる。口縁部には2個1組の穿孔が1対認められる。外面には丁寧なミガキが認められるが、内面にはハケ目が残る。脚裾部には小さな透孔があり、6方向に配置されるが、うち1つは打ち欠きのために欠損している。4262は器種不明である。口縁部が直線的に内傾して、筒状を呈する。下半部を欠損するため、全形は不明である。間隔をおいて直線文を3帯施文し、口縁部に煤が付着する。文様、胎土、調整からV期～VII期と考えられる。4266は円弧状の把手。裏面に剥離痕が認められる。甕や鉢に付く半円状の把手の可能性がある。胎土、調整からVI期～VII期の可能性が高い。4268はVI期～VII期の土製の玉。断面形が算盤玉状で中央に穿孔が認められる。高坏で坏部と脚部の接合部位にみられるものと形状が類似する。

**X期の土器** 4180、4181、4183は据部が強く外反する高坏。柱状部がIX期の高坏と比べると径が大きく、円錐形である。4183の内面には縫刻があり、4180には煤が強く付着する。

**古代の土器** 4265は口縁部が緩やかに内湾しながら立ち上がる深碗。体部内外面に灰釉が漬け掛けされている。

**中世の土器** 4263、4264は体部内外面に一段ナデを施す土師器皿。4263は口縁部内面がわずかに窪む。4267は土錘で、長軸3.9cm、孔径0.3cmである。

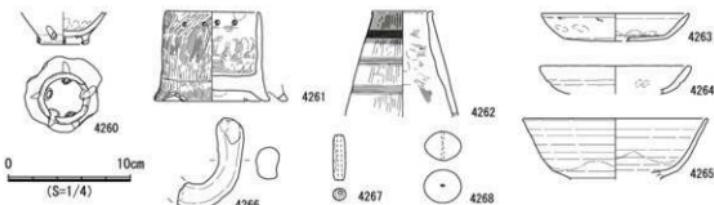


図 1415 NR002 遺物実測図 (31)

## 石器類

4269～4282は砥石。4269は楕円礫を素材とする表裏面に砥面のある砥石である。4270は表面に砥面があり、砥面に敲打痕が観察できる。4271は小型の砥石で、手持ち砥石と考えられる。表裏面及び側面に砥面をもち、下半部は折損する。先端付近には衝撃による剥離痕が認められる。4272は表裏面に砥面があり、表面の研磨が著しい。4273は表面と側面に砥面があり、砥面には線状痕が認められ、右側面に敲打痕が観察できる。4274は楕円形のやや丸みをもった砂岩を素材とした砥石で、表裏面に砥面が認められる。4275は長さ43.3cmの大型砥石であり、円礫の平坦面を砥面として使用しているが、中央で大きく割れている。4276は敲打痕が側面に認められ、裏面が炭化している。4277は長さが39cmで、側面に縦長の砥面が9面認められる。4278は長楕円礫の平坦面を砥面として

遺物出土状況図（石器類・木製品）

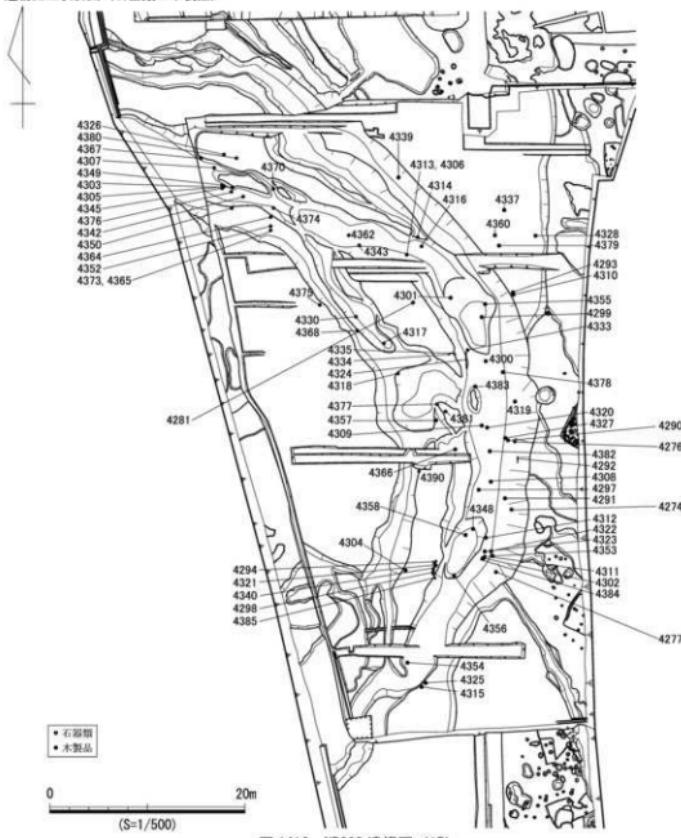


図 1416 NR002 遺構図 (15)

使用している砥石で、砥面がわずかに炭化している。4279、4280はいずれも砥面がわずかに確認できるのみで、表面の大半は割れている。4281は表面に3条の擦り切り状の溝が認められる。4282は表面の研磨が顕著である。4283～4285はハイアロクラスタイト製である。4283は叩石であり、敲打痕に加えて砥面が、表面及び側面に認められる。4284、4285は磨製石斧。4284は下半を欠損するが、割れ面が摩耗しており、再利用した可能性がある。4285は長辺3.6cmで基部は再加工した可能性がある。4286は中世の滑石製石鍋である。口縁端部はやや丸みを帯び、内面右端が斜めに研磨されていることから、破片を再利用したと考えられる。外面は口縁直下に帯状の粗い削痕が確認でき、

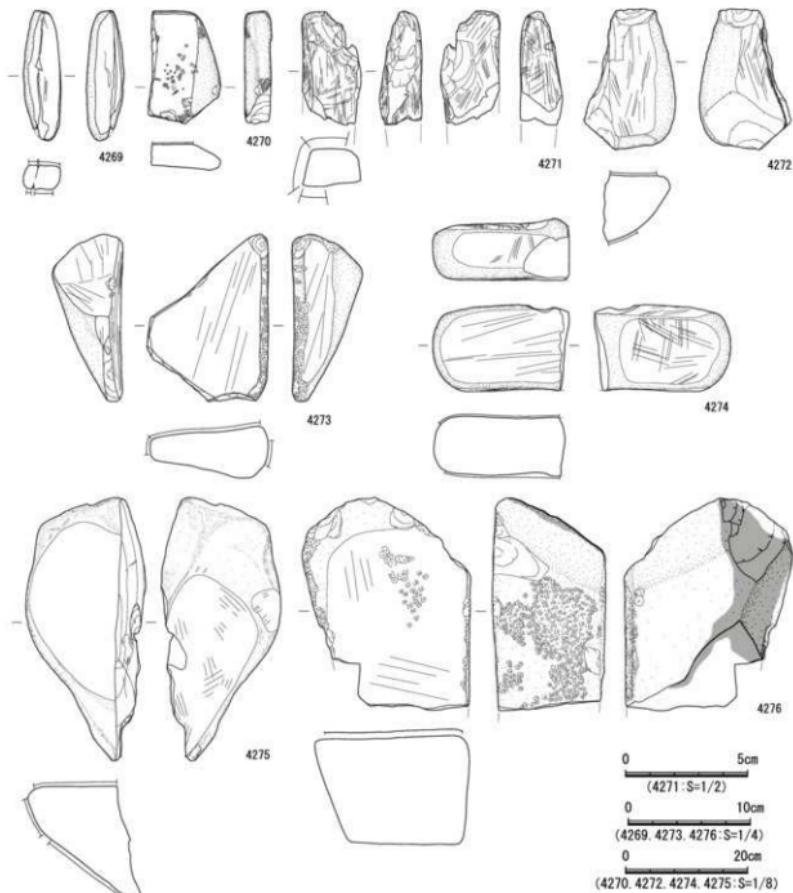


図 1417 NR002 遺物実測図 (32)

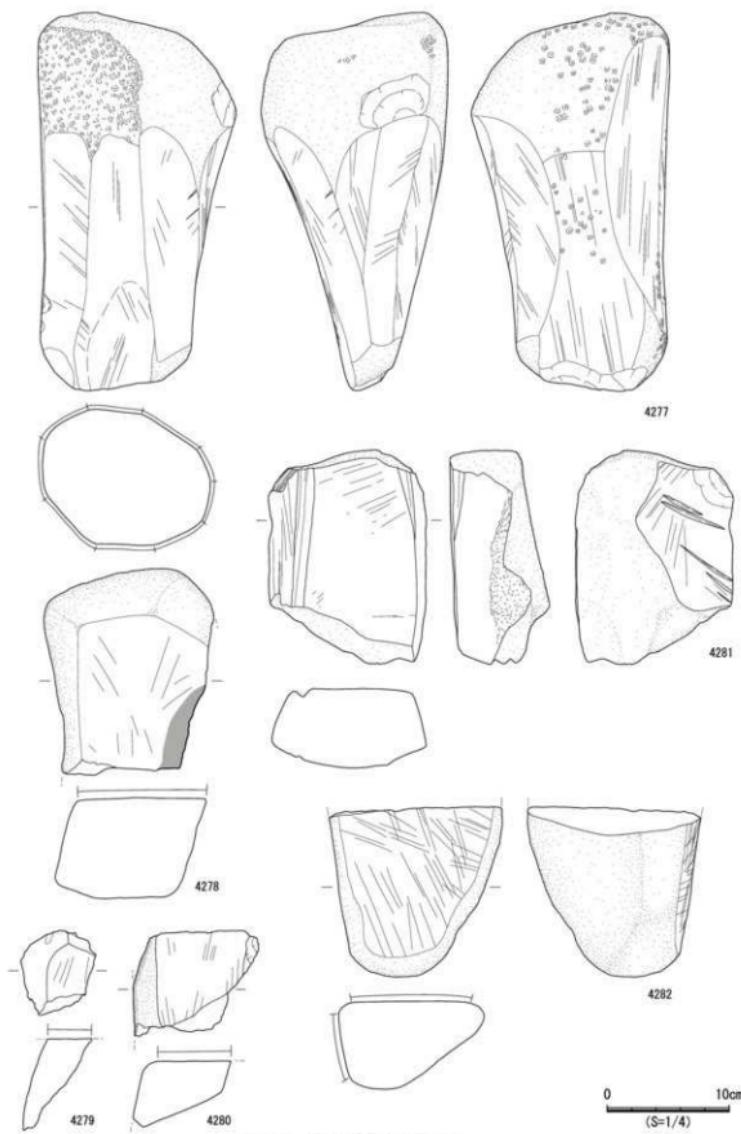


図 1418 NR002 遺物実測図 (33)

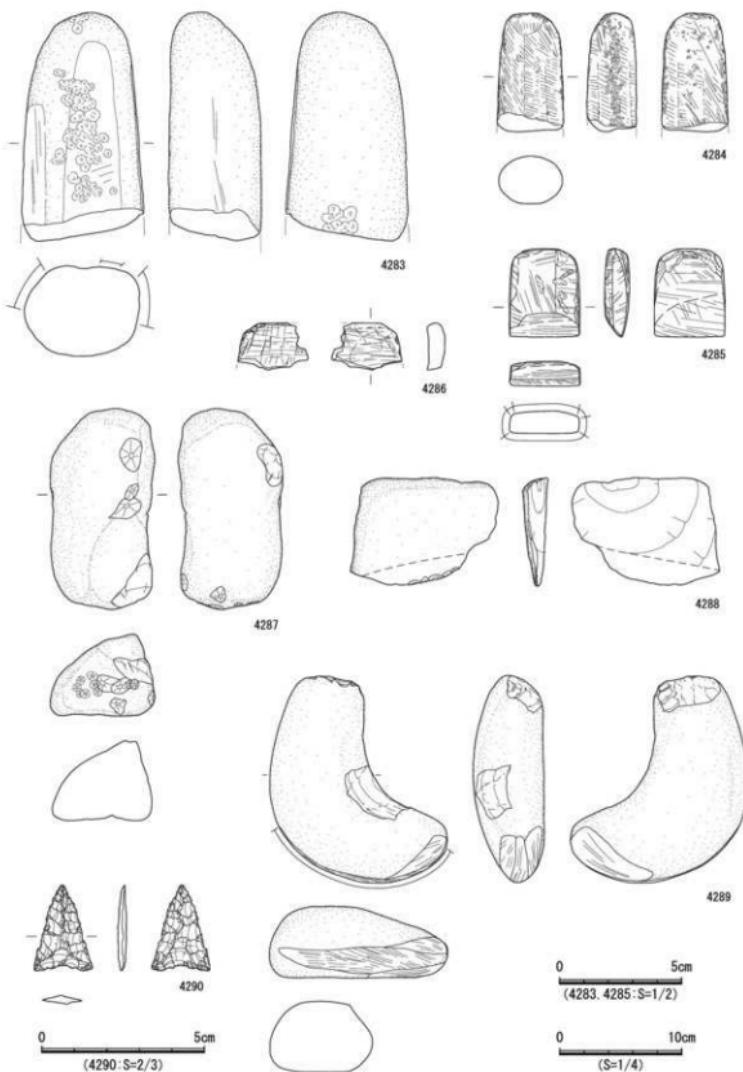


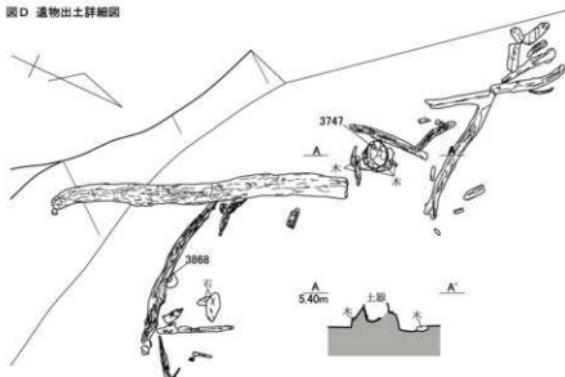
図 1419 NR002 遺物実測図 (34)

再利用時に鉄を削り取った可能性がある。4287は梢円礫を素材とする叩石で、下端に敲打痕が残る。4288は砂岩製の粗製刃器で、縁辺部に光沢が認められる。4289は砂岩製のL字状石杵。作業面の長軸が16.8cm、短軸が5.8cmをはかる大型品である。握部の断面は不定形な梢円形で、先端に剥離痕がある。作業面は光沢が認められるほど研磨されているが、赤色顔料は付着していない。4290はチャート製の打製石鎌。先端部は約40°で、基部にはわずかな抉りが入る。

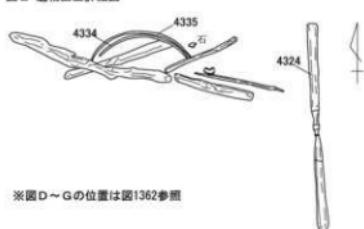
### 木製品

**起耕・整地具** 4291は泥除で、表面に粗い加工痕が残り、残存している範囲に穿孔は確認できない。4292は払い鋤で、柄の一部が欠損する。刃部は弧状に整えられるが、使用によるためか部分的に剥落している。柄は長さ約3cmの梢円形を呈する。4293は曲柄鍬。破損が著しく全形は不明であるが、軸部と刃部の付根の形状から東海系曲柄鍬と考えられる。4294は長さ39cm、幅23cmの平鋤の未製品である。着柄隆起の平面形は、上部が広く下部が尖る。柄穴は認められないが、4298よりさらに着柄隆起の整形が進んで、個体別に切り離された資料と考えられる。4296は柄の一部で、断面形は直径約5cmの円形である。端部はやや丸みをもつよう整形される。直柄の一部かもしれない。下端部を欠損する。4295、4297は竿もしくは柄の一部。4295の天地は不明である。4297は削り出し棒で、

図D 遺物出土詳細図

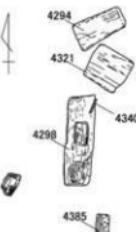


図E 遺物出土詳細図



※図D～Gの位置は図1362参照

図G 遺物出土詳細図



図F 遺物出土詳細図

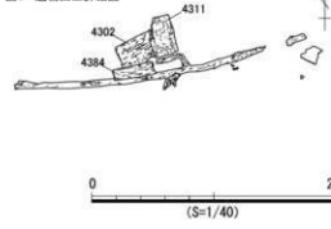


図1420 NR002遺構図(16)

片側の端部を削り出し丸く加工しており、柄の可能性がある。4298は長さ約76cmの連作の平鍬未製品。鍬の着柄隆起が2箇所に認められる。ミカン割り材から着柄隆起の整形まで、加工が進んだ資料である。4299は反り柄。表面に粗い加工痕が残る。4300は長さ約51cm、4302は長さ約36cmのミカン割り材で、端部に切断痕が顕著に認められる。鍬の未製品の可能性がある。4301は端部に切断痕があり、側面に2箇所の抉りがある。三連の素材を削出する前段階のものと考えられる。4303は柄孔隆起を削出した段階の横鍬の未製品である。4304は薄く整形された加工材で、農具の素材と考えられる。表面に刃物痕が認められる。4305は二又鍬か三又鍬の未製品。厚みは2cm程度に均一に整えられるが、側面の整形が未調整である。4306は薄く厚みが整えられた加工材であり、樹種から起耕・整地具の素材と考えられる。4307は長さ68cmで、側面に加工痕が顕著に残る。農具素材で、一本鎌か鍬の未製品の可能性がある。4308は断面が陣笠形となる泥除けの未製品であり、裏面が平坦で、抉り込みを行う前段階のものと考えられる。4309は泥除の未製品。左側面は欠損しているが、右側面は泥除の形状が削出されている。4310は泥除で、厚みが0.6cmと薄く仕上げられているが、本来の形状は不明である。4311、4312はいずれも薄く整形された加工材で、表面に加工痕が明瞭に残る。泥除の未製品である可能性が高い。4313、4314は上部が折損しているミカン割り材で、厚みがほぼ均一に整えられている。4314は先端に抉りが認められる。4315は上下端部とともに切断されており、右側面が緩やかに湾曲している。4316も上下端部を切断しているが、ミカン割り後に表裏面に粗い加工が施されている。4317は175cm、4318は124cmが残存する大型のミカン割り材。4317は表面に複数の加工痕と線状痕がみられる。また、4318の裏面はわずかに炭化している。4319は折損が著しいが、現状の形態と樹種から起耕・整地具の素材と考えた。4320は長さ84cmが残るミカン割り材。基部には切断痕が顕著に残る。4321、4322は厚みが薄く、泥除用に加工された可能性が高い。4323はミカン割り材であり、上下端部は切断されているが、幅がやや狭い。4325は輪カンジキ型田下駄の足板。平面形は八角形で、上下端に有頭状の柄をつくりだしている。4324と4326は堅杵で、いずれも芯持ち材である。4324は長さ170cmの大型品。撻き部の断面は直径約8cmの円形であり、撻き部と握り部の境界は明瞭で、握り部中央は隆起している。4326は撻き部のみが遺存し、敲打部は丸みを帯びる。4327は横槌である。身と柄の境界は明確で、肩部はややなだらかである。身には数箇所に線状痕が残る。

**編物・紡織具** 4328は木錘。芯持材で、側面中央に浅い溝が一周する。工具痕が溝及び端部にしか認められないので、樹皮が剥落した可能性がある。4329は編組製品で、幅約0.8cmの素材を網代編みしている。

**運搬具** 4330と4331は天秤棒。いずれも削り出し棒で、端部には断面方形の溝状の欠き切りがある。4330は端部に比べて中央部分が太い。

**漁撈具** 4333～4335はタモ網枠材で、4333は先端を破損し、枝払いが不十分である。4334、4335は上端の内面が平坦になるよう整形され、4335は上端に抉りがあり、緊縛痕が認められる。また、先端は細く整形される。

**容器** 4336は平面形が長方形を呈する槽の一部。身の内法の深さは約5cmで、底部に削り出しの脚が認められる。4337は厚手の容器であり、円形を呈する大型の槽の一部と考えた。4338は円形の槽。上下に突起が設けられているので、蓋の可能性もある。内外面に線状痕が残る。4339は曲物。2箇

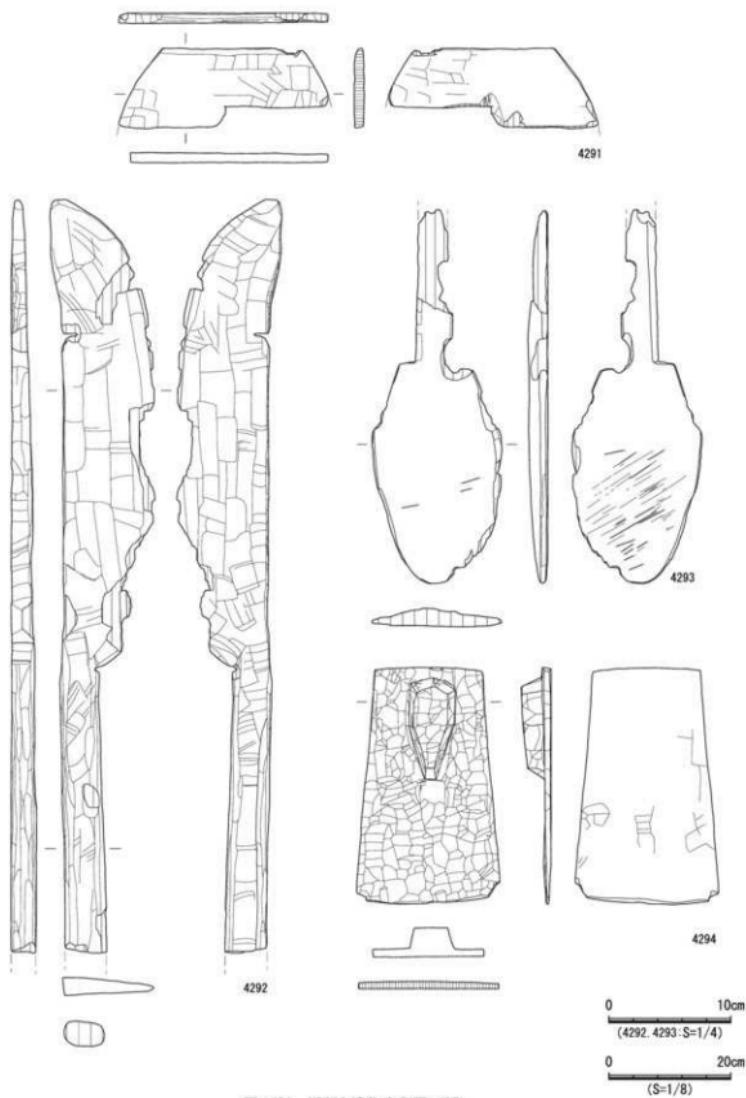


図 1421 NR002 遺物実測図 (35)

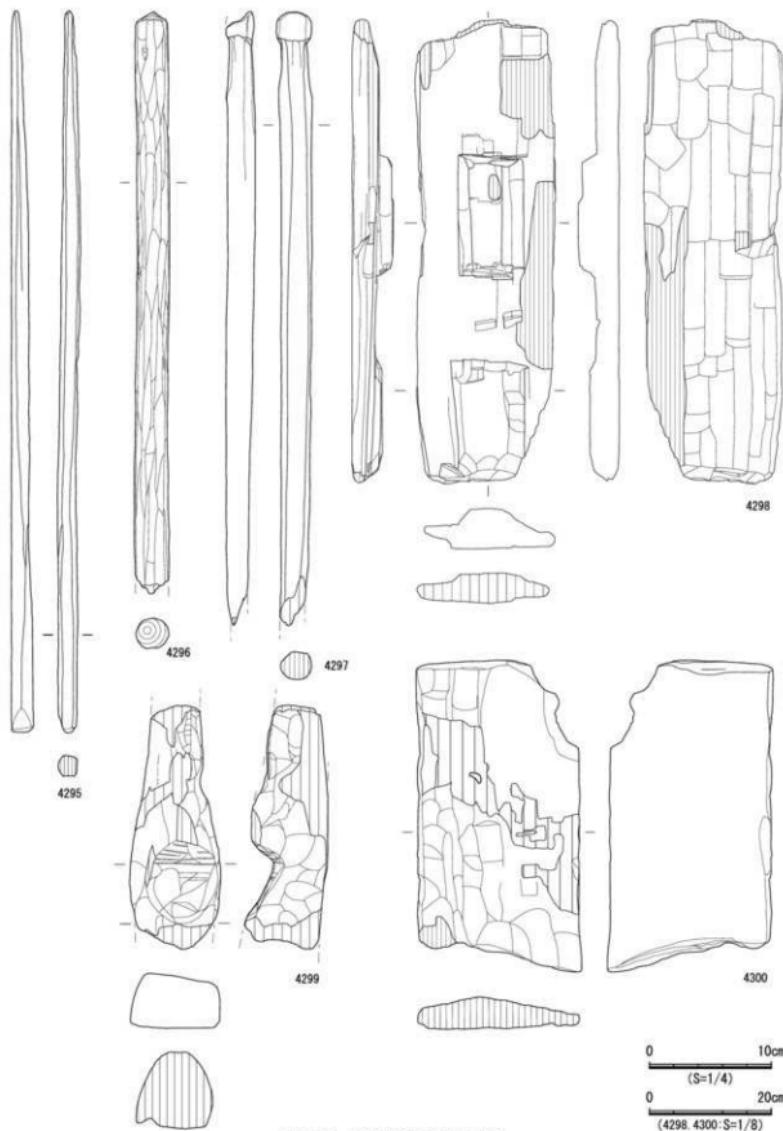


図 1422 NR002 遺物実測図 (36)

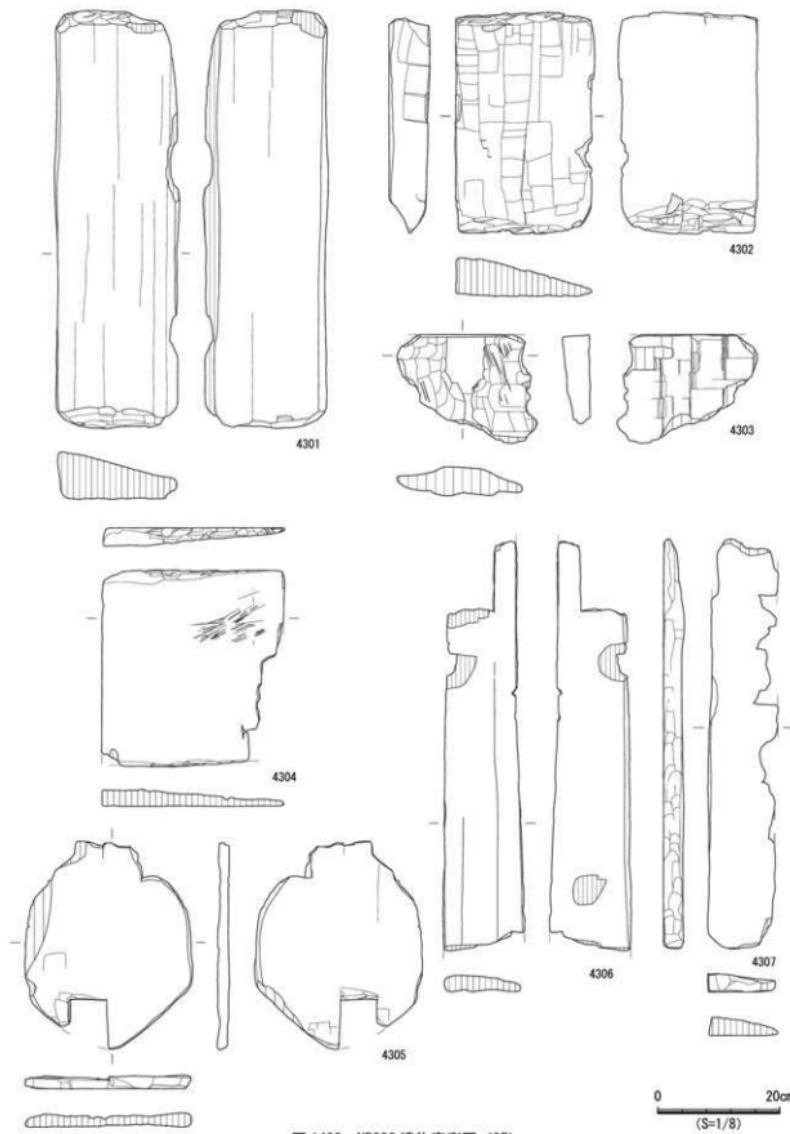


図 1423 NR002 遺物実測図 (37)

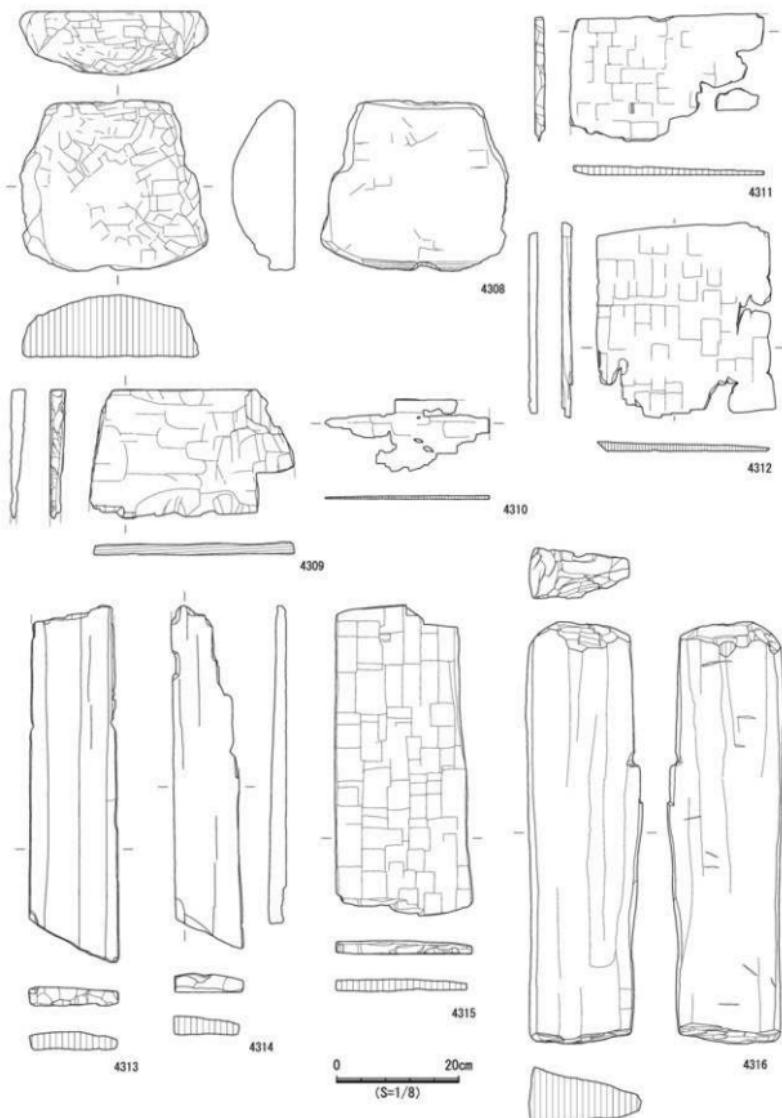


図 1424 NR002 遺物実測図 (38)

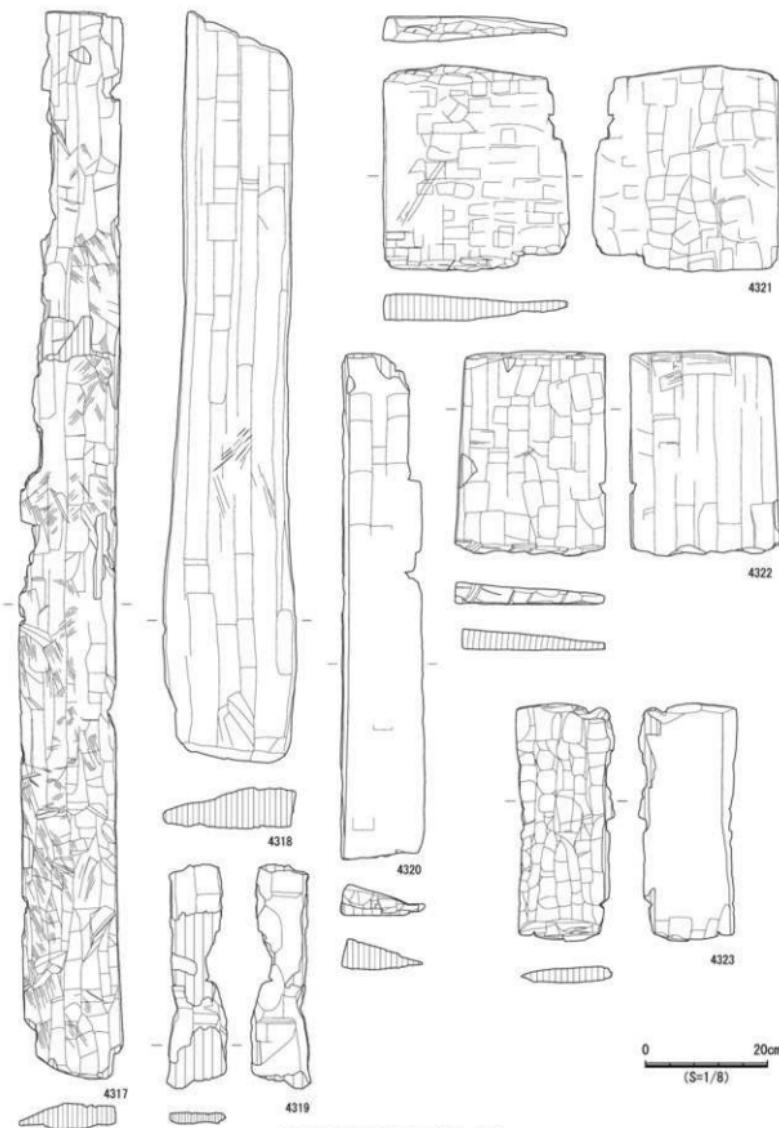


図 1425 NR002 遺物実測図 (39)

所の穿孔が認められ、側面に木釘の痕跡が認められる。表面全体に漆が塗られている可能性があるが、遺存状況が悪く不明である。4340は組物の部材。下端に抉りが入り、側面は斜めに切断されている。4341は組物で、木釘孔が1箇所残る。

**祭祀具・武具** 4332は鞘。先端を尖らせて整形し、断面形は三日月状である。表面は丁寧な整形である。4342は竿。削り出し棒で、上端が下端に比べて細く整形される。4343は表面の加工が丁寧で、上端をほぞ状に削り出す。別の器具を組み合わせと考えられ、儀器の持ち手の可能性がある。

**食事具** 4346は杓子。柄は失われているが、身の下半部が残る。底面は円形である。

**服飾具・装身具** 4347は履物。隅部が丸く仕上げられ、長辺はやや内側に反る。円形の緒孔が2箇所に確認できる。

**家具** 4344は膳。表裏面に線状痕が残る。4345は製作台。長さは64cm、厚さ約6cmで、中央に幅広の刃物痕が多数残る。4348は椅子の脚板。側面は台形状で、断面形は接地面に向かって外反する。接地面の端部は内側に厚みをもたせて整形される。上端の付根には釘穴、端部にはくさびの痕跡が認められる。

**建築部材** 4349は4分の1分割材を円柱状に加工した柱材だが、表面の加工が粗く、欠き切りも不十分であるため、未製品の可能性もある。4350は横架材を受けるために、枝分かれの部分を利用した柱材で、大きさから竪穴住居の柱材と考えられる。4351は先端を杭状に尖らせた垂木材で、表面はすべて枝が払われている。4352は垂木で、先端を尖らせるように加工し、そのやや下方に抉りを入れる。4353と4354は台輪である。4353は円形の抉り部の両側に長さ約14cmの長楕円形の孔が穿けられ、壁材と組み合わさっていた可能性がある。円形の抉り部は直径約80cmに復原でき、組み合わさる柱直径の上限を示すとみてよい。4354は円形抉り部の周囲一部のみが残存する。4355は扉の部材。長さは113cmで、両端に丁寧に整形で段が形成され、欠き込み握手と考えられる。また、方形孔が両端に穿けられ、中央やや右側には断面V字形の孔が認められる。4355は4356と同じ厚みを有し、穿孔が認められるため、櫛もしくは蹴放しと考えた。4357、4358、4361は梯子。いずれも柾目材であり、足掛部は上方が材に対して垂直に成形されている。4357は足掛部からみて、その幅20.3cmは当時の状況を残していると考えられるが、その一方で、裏面上部に何らかの圧痕・傷が認められる。1断面と3段目の足掛部を削って壁板として転用する途中の材である可能性もある。4358も上段が削られている可能性があり、下端は逆V字形を呈している。4359は壁板。長さ59cmで、3箇所に方形孔が認められる。上部にあるものが大きく垂直方向に穿けられる。4360は方形孔が2箇所にあり、綴じ穴の可能性が高く、床板もしくは壁板と考えられる。4362は床板の端材。表裏面ともに端部に斜めの加工痕が認められる。4363は構造部材。表面に段を形成していることから、他の部材と組み合わさって、固定を補助した部材と考えられる。裏面は炭化している。4364は厚みを均一なるよう丁寧に整形された床板もしくは壁板。端部を斜めに整形している。4365は壁板。両端を欠損しているが、側面には溝状の掘り込みが認められ、壁材の可能性がある。4366は幅約7cmに整えられた板材に方形孔が2箇所穿たれる。4367は上下端を欠損し、下方へ向かって直径が縮小し、上端は炭化している。4368は上下端部を欠損する。4369は建築部材で、方形孔の孔が穿けられた可能性がある。4370は柱材の可能性がある。表面は炭化しており、斜めの刃物痕が多く残る。4371は2分の1分割材で、上面には粗い加工痕が残る。4372は分割材で、削り出しの柱材を再利用した可能性が

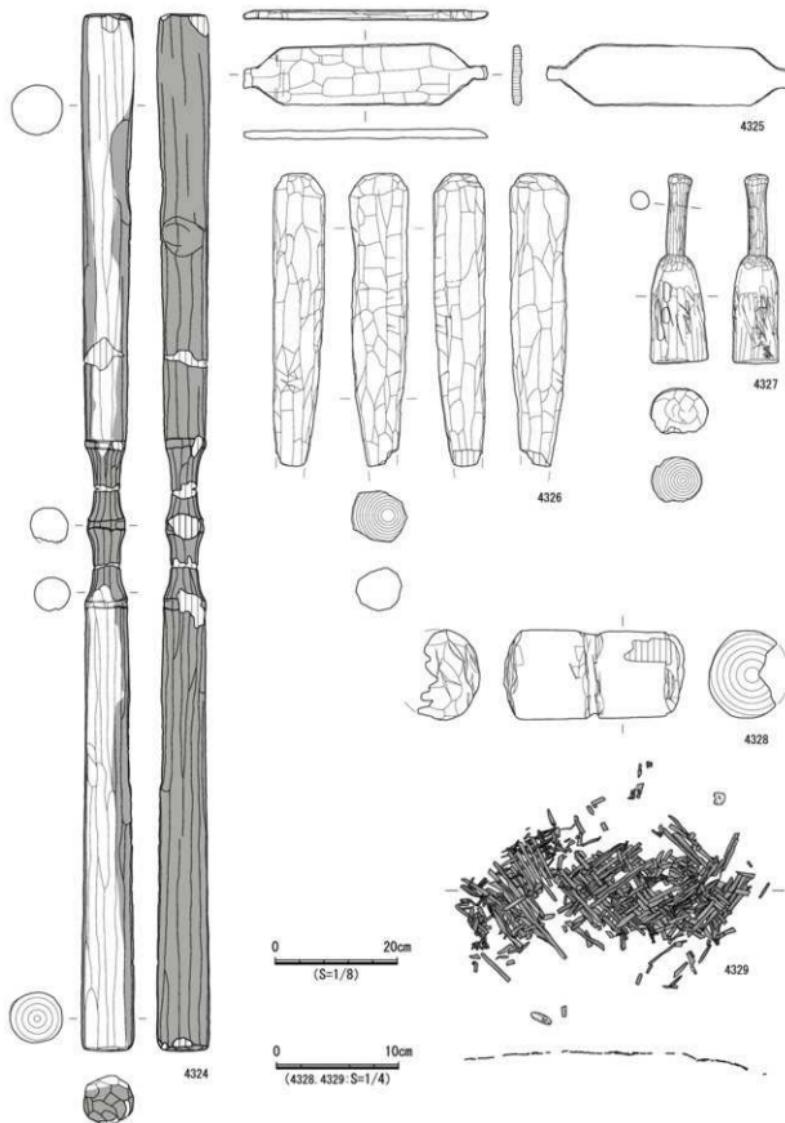


図 1426 NR002 遺物実測図 (40)

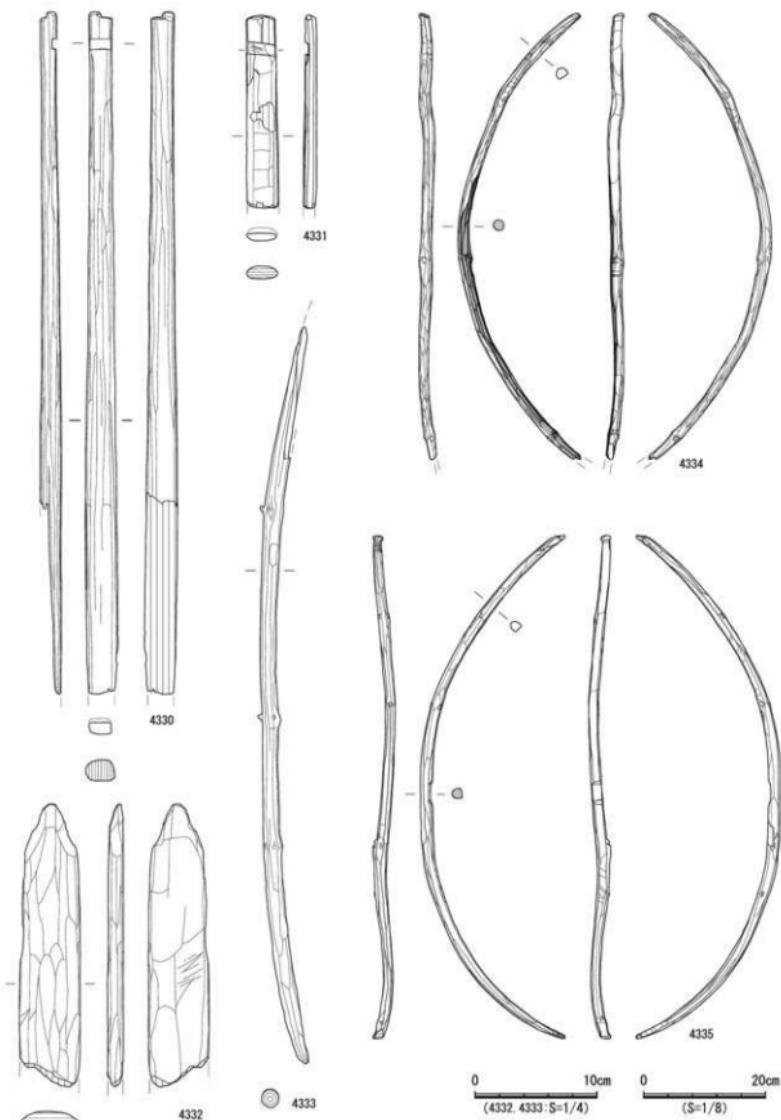


図 1427 NR002 遺物実測図 (41)

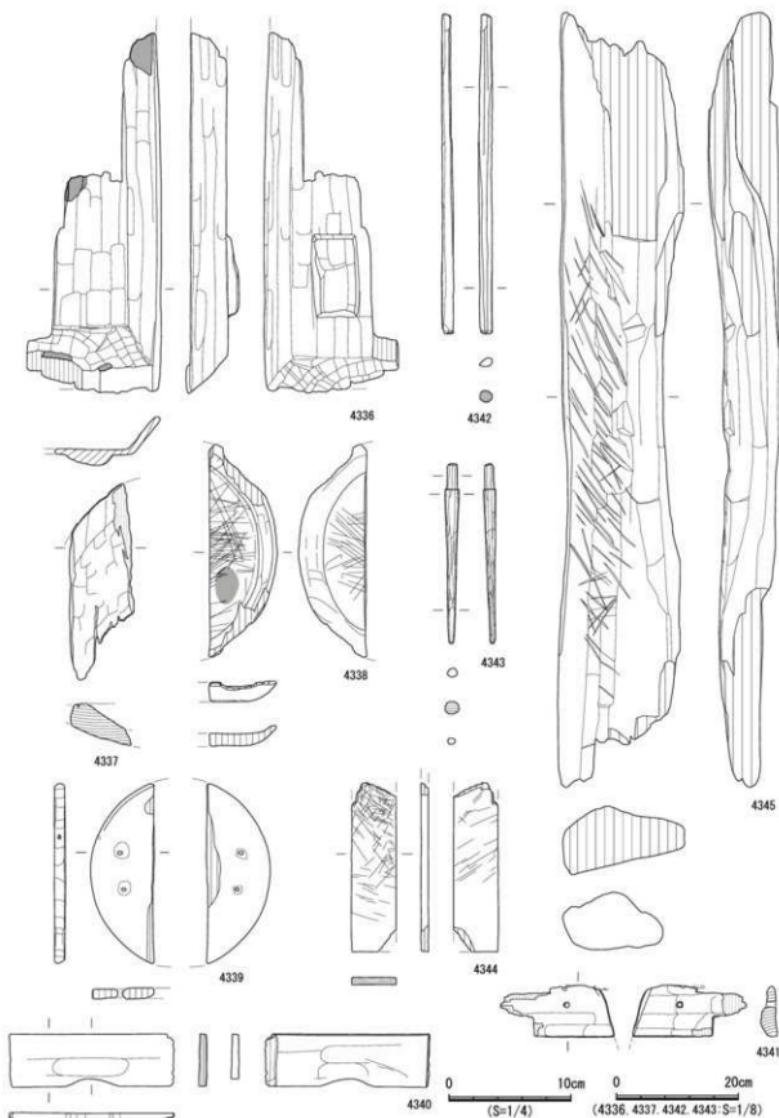


図 1428 NR002 遺物実測図 (42)

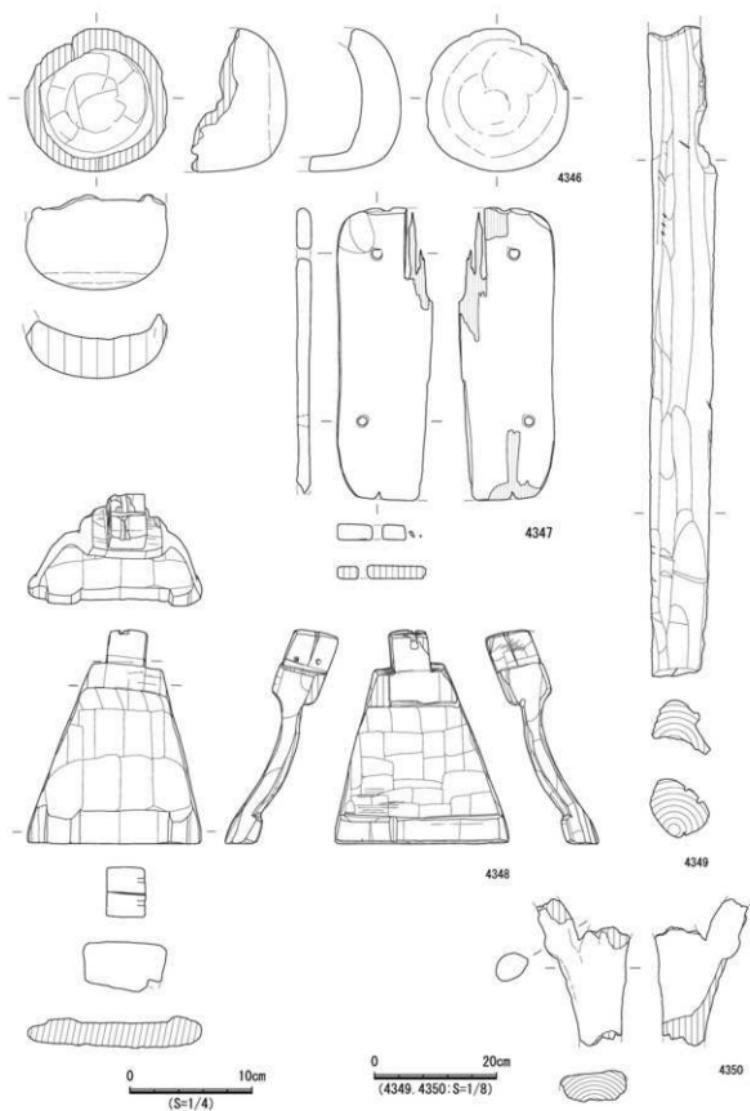


図 1429 NR002 遺物実測図 (43)

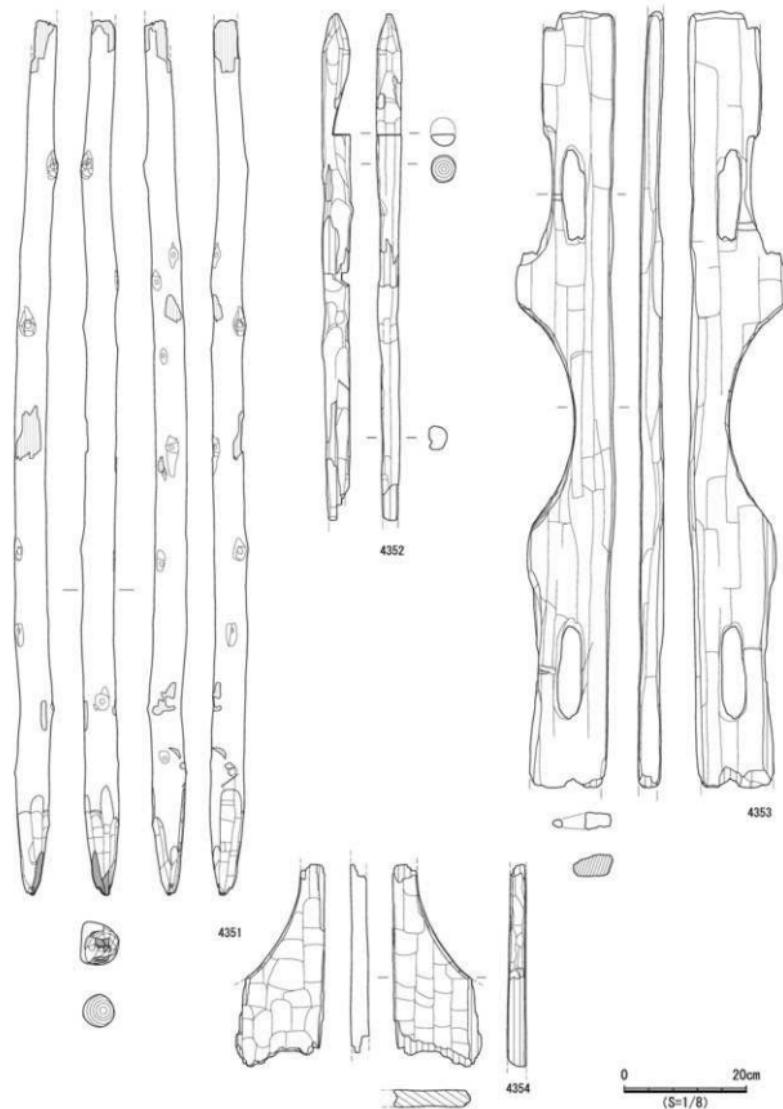


図 1430 NR002 遺物実測図 (44)

ある。4374は芯持ちの丸太材。一端を尖らし、部分的にわずかに樹皮が残る。下方に方形の欠き切りがある。4375～4379は建築部材と杭として転用した材である。4375は細い芯持材であり、広い範囲に樹皮が残っていることから、垂木材の転用かもしれない。4376は全体・丁寧な面取りが認められ、先端を尖らせる。4377は芯持材で、枝が払われている。4378は梁を落とし込むための欠き込み仕口のある柱の上端を杭として再利用している。4379は丸太の枝が丁寧に払われている。4382は芯持材で表面に縦方向の加工痕が明瞭に残る。柱材の両端を切断したものと考えられる。

**加工材・残材** 4383は厚手の板材で、上端に切断痕が残る。4384と4385は板材で、4385は側面が斜めに切断され、4384は右側面が緩やかに湾曲している。4387～4389は削り出しの棒材で、4388と4389は表面の加工が丁寧であることから竿の可能性もある。4390は厚みがあり、起耕・整地具の残材と考えられる。4391～4393は何らかの残材で、4391と4392には刃物痕が残り、4392は方形に溝が巡ることから、孔を穿つ前段階のものかもしれない。

**金属製品** 4394は盤で断面方形を呈する。基部が平坦で身部はやや湾曲し、刃部は上下面から斜めに形成され、端部はやや丸みを帯びる。

**時期** 繩文時代晩期からⅠ期にかけては一定量の水流があったと考えられる。その後は緩やかな流れか、止水に近い状態となって堆積が進行し、Ⅴ期～Ⅶ期にかけて多量の土器が廃棄されている。また、最上層では古代～中世にかけての遺物もわずかに出土していることから、古墳時代以降も窪地状であったと考えられる。

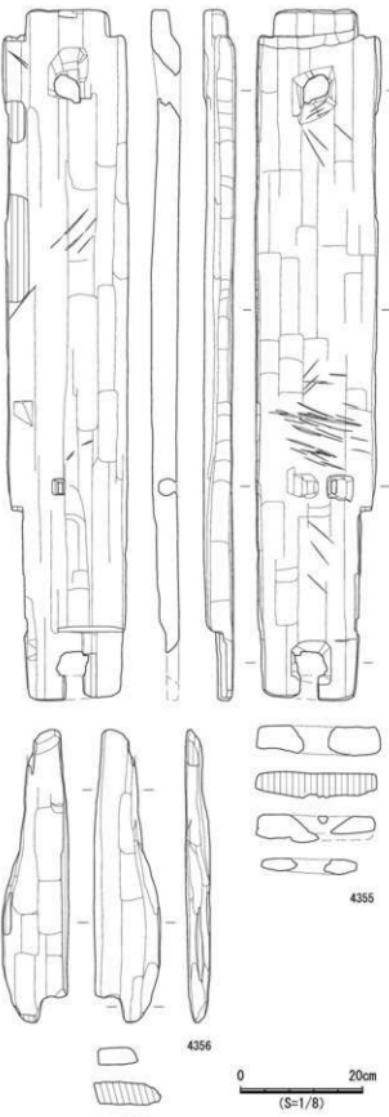


図 1431 NR002 遺物実測図 (45)

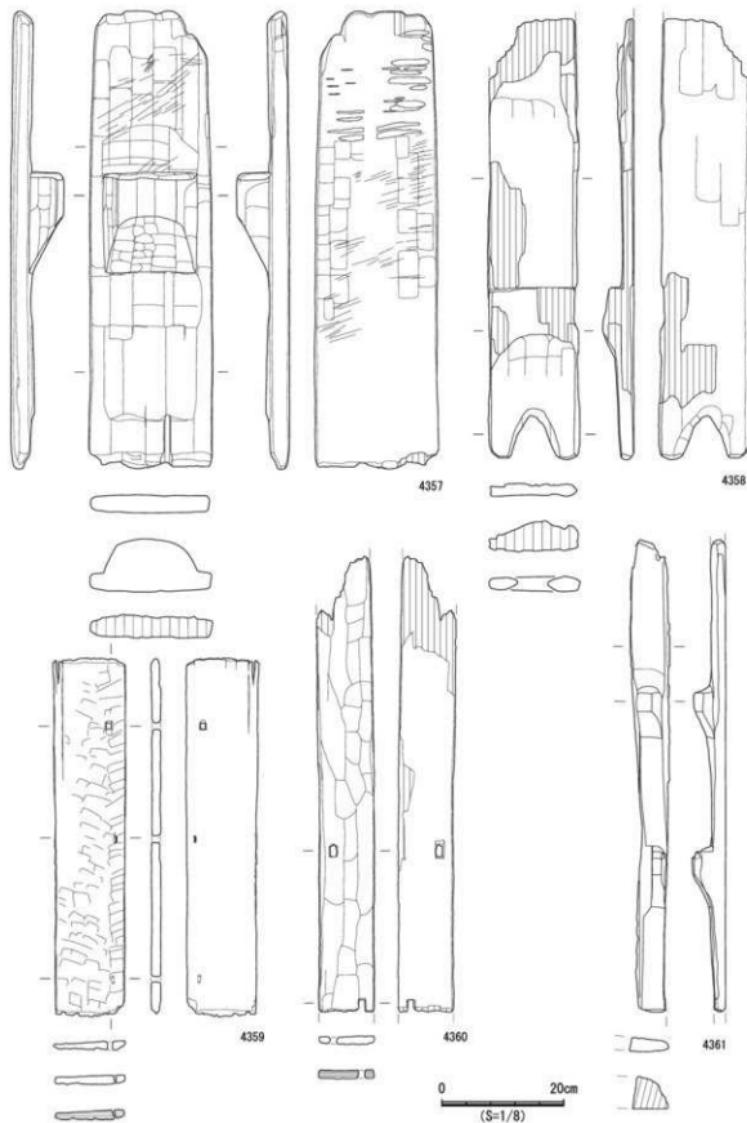


図 1432 NR002 遺物実測図 (46)

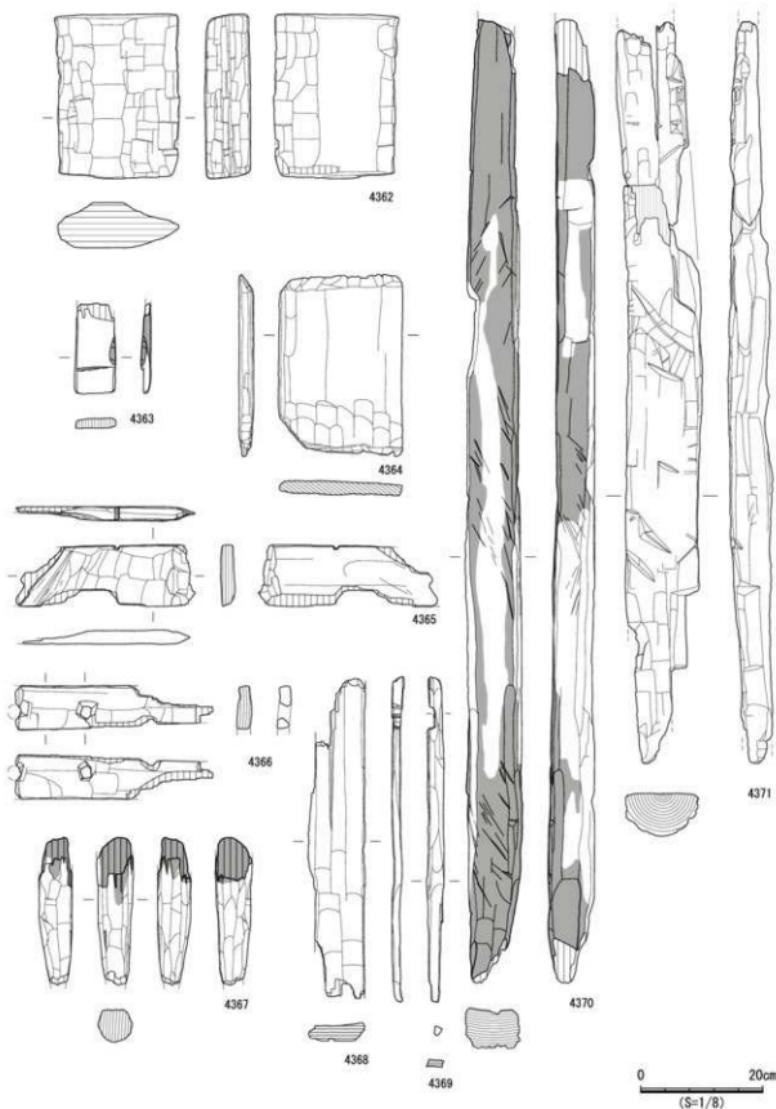


図 1433 NR002 遺物実測図 (47)

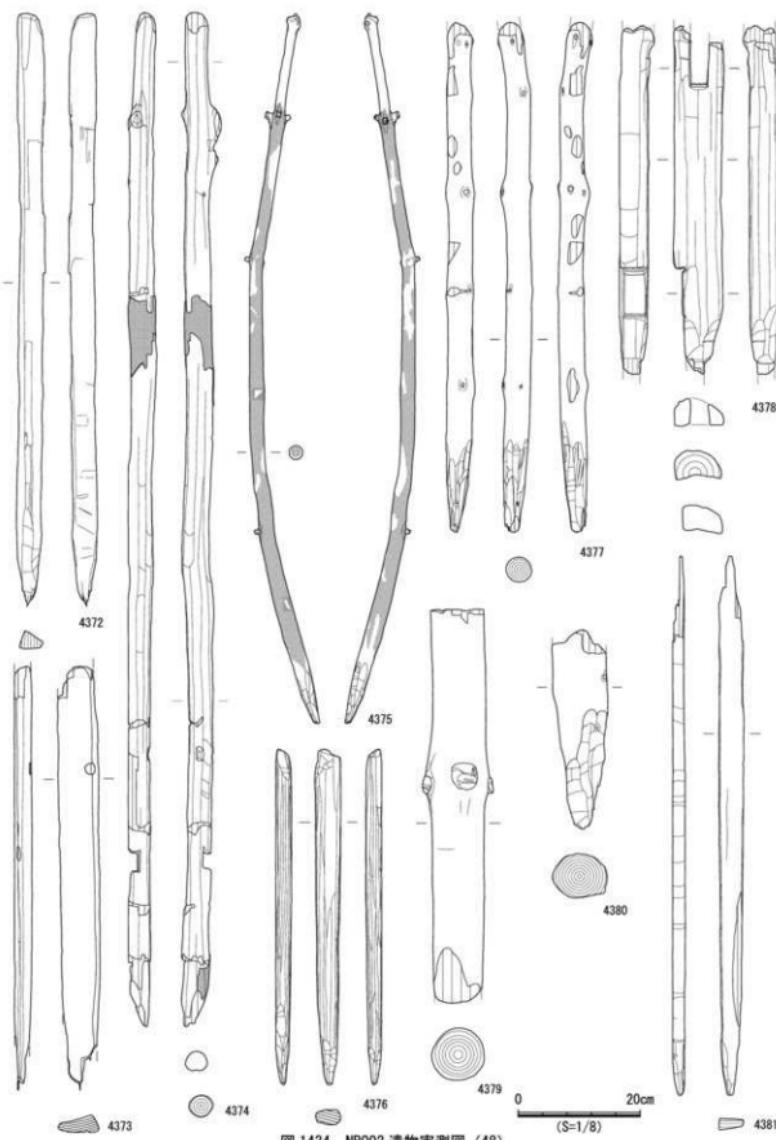


図 1434 NR002 遺物実測図 (48)

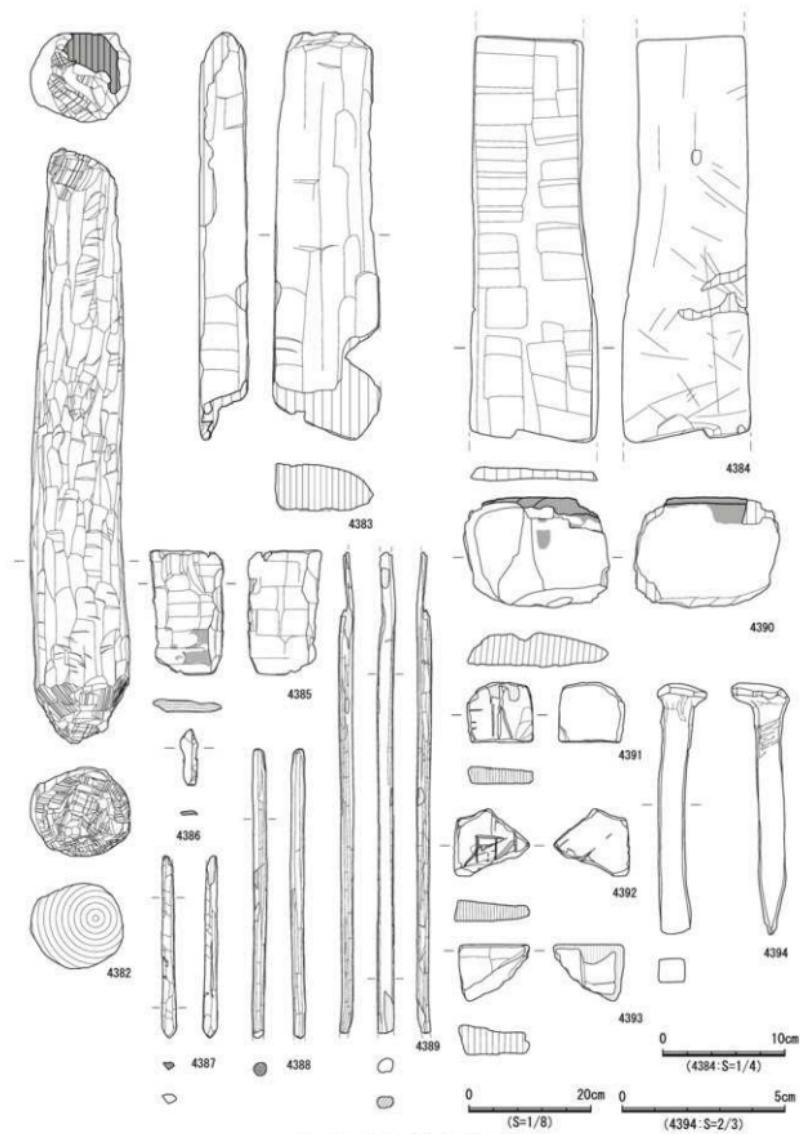


図 1435 NR002 遺物実測図 (49)

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第131集

荒尾南遺跡B地区II  
(第3分冊)

2015年3月13日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター  
岐阜市三田洞東1-26-1  
印 刷 株式会社もとすいんさつ